高松市埋蔵文化財調査報告書　第53集

都市計画道路福岡三谷線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊

# 木太中村遺跡

２００１年３月

高松市教育委員会

# はじめに

本報告書掲載の木太中村遺跡は，高松市のほぼ中央部，木太町に所在しますが，木太町は古くから重要な遺跡があることで知られる地域です。その歴史のはじまりは縄文時代草創期にさかのぼる石器が発見された大池遺跡に見ることができます。また，日本最古の荘園絵図で，重要文化財にも指定されている「弘福寺領讃岐國山田郡田図」にも描かれている地域であります。一方，江戸時代以前は海が深く入り込み，町の北半は海であったとも伝えられている地域でもあります。

本報告書は，都市計画道路福岡三谷線の建設に伴い，平成10・11年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものであり，「都市計画道路福岡三谷線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第一冊」として刊行いたします。発掘調査の結果，弥生時代の掘立柱建物跡や自然旧河道，古代～近世の建物・溝・土坑等の多数の遺構が検出されました。特に注目すべき遺構としては，弥生時代の掘立柱建物跡があげられます。この地域で弥生時代の集落が検出されたことは，当時の海岸線を知る手がかりとして重要な資料となり得るものです。

本報告書が，高松市の歴史の解明に学問的な貢献を果たすとともに，文化財に対する関心と理解のための一助となるように念じ，広く活用されることを願っています。

最後になりましたが，発掘調査及び平成11年７月25日に開催いたしました遺跡現地説明会に対しまして，格別のご理解とご尽力を賜りました木太連合自治会・木太地区文化協会・香川県農業協同組合木太支店等の関係者・関係機関に厚くお礼申し上げる次第であります。

2001年３月

高松市教育委員会

教育長　浮田　清市

# 例　　言

1．本書は，都市計画道路福岡三谷線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査地ならびに調査期間は，次のとおりである。

高松市木太町　　平成10年６月11日～10月５日
　　平成11年６月１日～８月４日

3．発掘調査および出土遺物について下記の関係諸機関ならびに方々から貴重なご教示，ご指導を得た。記して厚く謝意を表するものである。　（敬称略，順不同）

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
丹羽佑一（香川大学）

4．現地調査から遺物整理，本報告書に至るまで，下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する。
（敬称略，順不同）

坂口次郎　大島　誠　島　博幸　下山　純　山根伸介
島崎智久　山本修司　（以上，香川大学）
信吉純恵　増田ゆず　四方大輔　高瀬智充　（以上，徳島文理大学）

5．発掘調査および本報告書の作成にあたっては，高松市教育委員会が主体となり，文化部文化振興課文化財専門員　大嶋和則が担当し，末光甲正・中西克也（以上，讃岐文化遺産研究会）が補佐した。

6．本報告書の執筆は，目次に示したように第１章第１節・第２章を大嶋，第１章第２節，第３章，第４章を中西が行った。

7．本報告書の編集は，大嶋・中西が行った。

8．出土遺物ならび図画・写真類は，本市教育委員会において保管している。

9．本報告書における表記および記述に関する凡例は，以下のとおりである。

（1）図の縮尺は原則として次のとおりである。

遺構－調査区：１／2000　遺構配置図：１／200　掘立柱建物：１／80
土坑：１／40　溝：１／100，１／40　柱穴：１／40
井戸：１／40，１／80　附図：１／100
遺物－土器：１／８，１／４　石器：１／２　木製品：１／４
例外のものも含め，各々についてその縮尺値を明記する。

（２）本報告書で使用する遺構略号は次のとおりである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| ＳＡ　柵列 | ＳＢ　掘立柱建物 | ＳＤ　溝 | ＳＥ　井戸 |
| ＳＫ　土坑 | ＳＰ　柱穴 | ＳＲ　旧河道 | ＳＸ　性格不明 |

（３）遺構番号は調査時に設定した番号を廃棄し，整理段階で工区ごとに番号を付けた。

（４）遺物観察表は本文中に実測図とセットで掲載する。

（５）遺物観察表中の表記方法は次のとおりである。

１土器の法量の中で（　）を付けているのは残存値である。

２色調が内外面とも同じ場合には外面のみ表記する。

３土器胎土の粒土表記の基準

微砂：非常に細かい　細砂：０.５㎜以下　粗砂：０.５～１　細礫：１㎜以上

（６）遺物番号は遺構毎に付け，図版の遺物の数字は挿図番号と遺物番号を示している。

（７）本報告書で用いる高度値は海抜であり，方位は磁北を示す。

（８）本報告書の第２図「周辺遺跡分布地図」の作成にあたり，国土地理院発行１／25,000地形図「高松南部」を使用した。

# 目　　次


第１章　調査の経緯と経過……1
　第１節　調査の経緯……（大嶋和則）1
　第２節　調査の経過……（中西克也）1

第２章　地理的・歴史的環境……（大嶋和則）5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5

第３章　調査の概要……（中西克也）8
　第１節　調査区の位置……8
　第２節　遺構と遺物……8
　　1　1工区……8
　　1）近世……10
　　1　溝……10
　　2　井戸……29
　　3　土坑……33
　　4　柱穴……37
　　2）1工区包含層出土遺物……39
　　2　2工区……39
　　1）　近世……41
　　1　掘立柱建物跡……41
　　2　溝……44
　　3　井戸……52
　　4　土坑……53
　　5　柱穴……57
　　6　性格不明遺構……67
　　7　自然旧河道……69
　　2）2工区包含層出土遺物……73
　　3　3工区……73
　　1）弥生時代……74
　　1　土坑……74
　　2）近世……77
　　1　溝……77
　　2　井戸……78
　　3　土坑……82
　　4　柱穴……83
　　5　自然旧河道……86

4　4工区…… 89
1）弥生時代後期末～古墳時代初頭…… 91
1　土坑…… 91
2　自然旧河道…… 92
2）近世…… 99
1　掘立柱建物跡…… 99
2　溝…… 101
3　井戸…… 103
4　土坑…… 105
5　柱穴…… 108
6　自然旧河道…… 110
3）4工区包含層出土遺物…… 113
5　5工区…… 114
1）弥生時代…… 117
1　掘立柱建物跡…… 117
2　土坑…… 120
2）古墳時代…… 122
1　掘立柱建物跡…… 122
2　溝…… 124
3　柱穴…… 129
4　性格不明遺構…… 129
3）古代～中世…… 132
1　掘立柱建物跡…… 132
2　溝…… 138
3　柱穴…… 139
4　性格不明遺構…… 144
4）近世…… 146
1　掘立柱建物跡…… 146
2　柵列…… 148
3　溝…… 148
4　土坑…… 150
5　柱穴…… 158
5）5工区包含層出土遺物…… 159

第4章　おわりに　……（中西克也）　160

# 挿　図　目　次


第１図　調査区設定図…… 3
第２図　周辺遺跡分布図…… 7
第３図　１工区遺構配置図…… 9
第４図　ＳＤ1001・1002平・断面図…… 10
第５図　ＳＤ1001出土遺物（１）…… 11
第６図　ＳＤ1001出土遺物（２）…… 12
第７図　ＳＤ1001出土遺物（３）…… 13
第８図　ＳＤ1002出土遺物（１）…… 15
第９図　ＳＤ1002出土遺物（２）…… 16
第10図　ＳＤ1002出土遺物（３）…… 17
第11図　ＳＤ1002出土遺物（４）…… 18
第12図　ＳＤ1003平・断面図…… 20
第13図　ＳＤ1003出土遺物（１）…… 21
第14図　ＳＤ1003出土遺物（２）…… 23
第15図　ＳＤ1003出土遺物（３）…… 24
第16図　ＳＤ1003出土遺物（４）…… 26
第17図　ＳＤ1004断面図…… 27
第18図　ＳＤ1004出土遺物…… 27
第19図　ＳＤ1005出土遺物…… 27
第20図　ＳＤ1006断面図…… 27
第21図　ＳＤ1006出土遺物…… 27
第22図　ＳＤ1007断面図…… 28
第23図　ＳＤ1007出土遺物…… 28
第24図　ＳＤ1008断面図…… 28
第25図　ＳＤ1008出土遺物…… 28
第26図　ＳＥ1001平・断面図…… 29
第27図　ＳＥ1001出土遺物（１）…… 29
第28図　ＳＥ1001出土遺物（２）…… 30
第29図　ＳＥ1001出土遺物（３）…… 31
第30図　ＳＥ1002平・断面図…… 31
第31図　ＳＥ1003平・断面図…… 31
第32図　ＳＥ1002，1003出土遺物…… 32
第33図　ＳＫ1001平・断面図…… 33
第34図　ＳＫ1001出土遺物…… 33
第35図　ＳＫ1002平・断面図…… 33
第36図　ＳＫ1002出土遺物…… 33
第37図　ＳＫ1003平・断面図…… 34
第38図　ＳＫ1003出土遺物…… 34
第39図　ＳＫ1004平・断面図…… 35
第40図　ＳＫ1004出土遺物…… 35
第41図　１工区ＳＫ出土遺物…… 36
第42図　１工区ＳＰ平・断面図…… 37
第43図　１工区ＳＰ出土遺物…… 38
第44図　１工区包含層出土遺物…… 39
第45図　２工区遺構配置図…… 40
第46図　ＳＢ2001平・断面図…… 41
第47図　ＳＢ2001出土遺物…… 42
第48図　ＳＢ2002平・断面図…… 43
第49図　ＳＢ2002出土遺物…… 43
第50図　ＳＤ2001平・断面図…… 44
第51図　ＳＤ2001出土遺物（１）…… 45
第52図　ＳＤ2001出土遺物（２）…… 47
第53図　ＳＤ2001出土遺物（３）…… 48
第54図　ＳＤ2001出土遺物（４）…… 49
第55図　ＳＤ2001出土遺物（５）…… 50
第56図　ＳＤ2002・2003断面図…… 51
第57図　ＳＤ2003出土遺物…… 51
第58図　ＳＤ2005断面図…… 52
第59図　ＳＤ2005出土遺物…… 52
第60図　ＳＤ2006出土遺物…… 52
第61図　ＳＥ2001平・断面図…… 52
第62図　ＳＥ2003出土遺物…… 53
第63図　ＳＫ2001・2002平・断面図…… 53
第64図　ＳＫ2001出土遺物…… 54
第65図　ＳＫ2002出土遺物…… 55
第66図　ＳＫ2003～2006出土遺物…… 56
第67図　ＳＫ2007平・断面図…… 56
第68図　ＳＫ2008平・断面図…… 57
第69図　ＳＫ2008出土遺物…… 57
第70図　２工区ＳＰ平・断面図…… 58
第71図　ＳＰ2021出土遺物…… 59
第72図　ＳＰ2057平・断面図…… 59
第73図　ＳＰ2057出土遺物…… 59
第74図　ＳＰ2072出土遺物…… 59
第75図　ＳＰ2080出土遺物…… 60
第76図　ＳＰ2086出土遺物…… 60

第77図　ＳＰ2093出土遺物…… 60
第78図　ＳＰ2097出土遺物…… 60
第79図　ＳＰ2098出土遺物…… 60
第80図　ＳＰ2100出土遺物…… 60
第81図　ＳＰ2128出土遺物…… 61
第82図　ＳＰ2145出土遺物…… 61
第83図　ＳＰ2156出土遺物…… 61
第84図　ＳＰ2181・2182出土遺物…… 61
第85図　ＳＰ2193出土遺物…… 61
第86図　ＳＰ2205出土遺物…… 62
第87図　ＳＰ2219出土遺物…… 62
第88図　ＳＰ2228出土遺物…… 62
第89図　ＳＰ2220平・断面図…… 62
第90図　ＳＰ2220出土遺物…… 62
第91図　ＳＰ2236・2237出土遺物…… 63
第92図　ＳＰ2267出土遺物…… 63
第93図　ＳＰ2272平・断面図…… 63
第94図　ＳＰ2272出土遺物…… 63
第95図　ＳＰ2329出土遺物…… 63
第96図　ＳＰ2335平・断面図…… 64
第97図　ＳＰ2335出土遺物…… 64
第98図　ＳＰ2336出土遺物…… 64
第99図　ＳＰ2348出土遺物…… 64
第100図　ＳＰ2349出土遺物 …… 64
第101図　ＳＰ2355出土遺物 …… 64
第102図　ＳＰ2360出土遺物 …… 65
第103図　ＳＰ2366出土遺物 …… 65
第104図　ＳＰ2371出土遺物 …… 65
第105図　ＳＰ2373出土遺物 …… 65
第106図　ＳＰ2378平・断面図 …… 65
第107図　ＳＰ2378出土遺物 …… 65
第108図　ＳＰ2383出土遺物 …… 66
第109図　ＳＰ2391平・断面図 …… 66
第110図　ＳＰ2391出土遺物 …… 66
第111図　ＳＰ2402出土遺物 …… 66
第112図　ＳＰ2489出土遺物 …… 67
第113図　ＳＰ2491出土遺物 …… 67
第114図　ＳＸ2001平・断面図 …… 68
第115図　ＳＸ2001硯出土平・断面図 …… 68
第116図　ＳＸ2001出土遺物（１）…… 68
第117図　ＳＸ2001出土遺物（２）…… 69
第118図　ＳＲ2001出土遺物（１）…… 70
第119図　ＳＲ2001出土遺物（２）…… 71
第120図　ＳＲ2001出土遺物（３）…… 72
第121図　２工区包含層出土遺物 …… 73
第122図　３工区遺構配置図 …… 73
第123図　ＳＫ3001平・断面図 …… 74
第124図　ＳＫ3001出土遺物（１）…… 75
第125図　ＳＫ3001出土遺物（２）…… 76
第126図　ＳＤ3001平・断面図 …… 77
第127図　ＳＤ3001出土遺物 …… 77
第128図　ＳＤ3004出土遺物 …… 78
第129図　ＳＥ3001平・断面図 …… 78
第130図　ＳＥ3001出土遺物（１）…… 79
第131図　ＳＥ3001出土遺物（２）…… 80
第132図　ＳＥ3001出土遺物（３）…… 81
第133図　ＳＫ3002断面図 …… 82
第134図　ＳＫ3003平・断面図 …… 82
第135図　ＳＫ3003出土遺物 …… 82
第136図　ＳＫ3004平・断面図 …… 82
第137図　ＳＫ3005平・断面図 …… 83
第138図　ＳＫ3005出土遺物 …… 83
第139図　ＳＫ3006平・断面図 …… 83
第140図　ＳＫ3006出土遺物 …… 83
第141図　３工区ＳＰ平・断面図 …… 84
第142図　ＳＰ3033出土遺物 …… 85
第143図　３工区ＳＰ出土遺物 …… 85
第144図　ＳＲ3001出土遺物（１）……87
第145図　ＳＲ3001出土遺物（２）……88
第146図　４工区遺構配置図（１）……89
第147図　４工区遺構配置図（２）……90
第148図　ＳＫ4001平・断面図 …… 91
第149図　ＳＫ4001出土遺物 …… 91
第150図　ＳＲ4001断面図 …… 92
第151図　ＳＲ4001出土遺物（１）……93
第152図　ＳＲ4001出土遺物（２）……94
第153図　ＳＲ4001出土遺物（３）……95
第154図　ＳＲ4001出土遺物（４）……96
第155図　ＳＲ4001出土遺物（５）……97
第156図　ＳＲ4001出土遺物（６）……98

第157図　ＳＲ4001出土遺物（７）…… 99
第158図　ＳＢ4001平・断面図 …… 100
第159図　ＳＤ4001平・断面図 …… 101
第160図　ＳＤ4002平・断面図 …… 101
第161図　４工区ＳＤ出土遺物 …… 102
第162図　ＳＤ4008断面図 …… 103
第163図　ＳＤ4008出土遺物 …… 103
第164図　ＳＥ4001平・断面図 …… 103
第165図　ＳＥ4001出土遺物 …… 103
第166図　ＳＥ4002平・断面図 …… 104
第167図　ＳＥ4002出土遺物（１）…… 104
第168図　ＳＥ4002出土遺物（２）…… 105
第169図　ＳＫ4002・4003平・断面図 …… 105
第170図　ＳＫ4004平・断面図 …… 106
第171図　ＳＫ4004出土遺物 …… 106
第172図　ＳＫ4005平・断面図 …… 106
第173図　ＳＫ4005出土遺物 …… 106
第174図　ＳＫ4006平・断面図 …… 106
第175図　ＳＫ4007平・断面図 …… 107
第176図　ＳＫ4007出土遺物 …… 107
第177図　ＳＫ4008出土遺物 …… 107
第178図　ＳＫ4009平・断面図 …… 108
第179図　ＳＫ4009出土遺物 …… 108
第180図　４工区ＳＰ平・断面図 …… 109
第181図　ＳＰ4065出土遺物 …… 110
第182図　ＳＲ4002出土遺物（１）…… 111
第183図　ＳＲ4002出土遺物（２）…… 112
第184図　４工区包含層出土遺物 …… 114
第185図　５工区遺構配置図…… 115～116
第186図　ＳＢ5001平・断面図 …… 117
第187図　ＳＢ5001Ｐ１平・断面図 …… 117
第188図　ＳＢ5002平・断面図 …… 118
第189図　ＳＢ5002出土遺物 …… 118
第190図　ＳＢ5003平・断面図 …… 119
第191図　ＳＢ5003出土遺物 …… 119
第192図　ＳＫ5001平・断面図 …… 120
第193図　ＳＫ5001出土遺物（１）…… 121
第194図　ＳＫ5001出土遺物（２）…… 122
第195図　ＳＢ5004平・断面図 …… 122
第196図　ＳＢ5004出土遺物 …… 122
第197図　ＳＢ5005平・断面図 …… 123
第198図　ＳＢ5005出土遺物 …… 123
第199図　ＳＤ5001断面図 …… 124
第200図　ＳＤ5001出土遺物 …… 124
第201図　ＳＤ5002断面図 …… 125
第202図　ＳＤ5002出土遺物 …… 125
第203図　ＳＤ5003断面図 …… 125
第204図　ＳＤ5003出土遺物 …… 125
第205図　ＳＤ5004断面図 …… 125
第206図　ＳＤ5004出土遺物 …… 125
第207図　ＳＤ5005断面図 …… 126
第208図　ＳＤ5005出土遺物 …… 126
第209図　ＳＤ5006断面図 …… 126
第210図　ＳＤ5006出土遺物 …… 126
第211図　ＳＤ5007平・断面図 …… 127
第212図　ＳＤ5007出土遺物（１）…… 127
第213図　ＳＤ5007出土遺物（２）…… 128
第214図　ＳＤ5007断面図 …… 128
第215図　ＳＤ5007出土遺物（３）…… 128
第216図　ＳＤ5008断面図 …… 129
第217図　ＳＤ5008出土遺物 …… 129
第218図　ＳＰ5267出土遺物 …… 129
第219図　ＳＸ5001平・断面図 …… 130
第220図　ＳＸ5001出土遺物（１）…… 130
第221図　ＳＸ5001出土遺物（２）…… 131
第222図　ＳＸ5002平・断面図 …… 132
第223図　ＳＸ5002出土遺物 …… 132
第224図　ＳＢ5006平・断面図 …… 133
第225図　ＳＢ5006出土遺物 …… 134
第226図　ＳＢ5007平・断面図 …… 135
第227図　ＳＢ5007出土遺物 …… 136
第228図　ＳＢ5008平・断面図 …… 137
第229図　ＳＢ5008出土遺物 …… 137
第230図　ＳＢ5009平・断面図 …… 138
第231図　ＳＢ5009出土遺物 …… 138
第232図　ＳＤ5009断面図 …… 139
第233図　ＳＤ5009出土遺物 …… 139
第234図　５工区ＳＰ平・断面図 …… 140
第235図　５工区ＳＰ出土遺物 …… 140
第236図　ＳＰ5032出土遺物 …… 140

第237図　ＳＰ5041出土遺物 …… 140
第238図　ＳＰ5067出土遺物 …… 140
第239図　ＳＰ5072出土遺物 …… 141
第240図　ＳＰ5095出土遺物 …… 141
第241図　ＳＰ5105出土遺物 …… 141
第242図　ＳＰ5135出土遺物 …… 141
第243図　ＳＰ5146出土遺物 …… 141
第244図　ＳＰ5168出土遺物 …… 142
第245図　ＳＰ5187出土遺物 …… 142
第246図　ＳＰ5191出土遺物 …… 142
第247図　ＳＰ5193出土遺物 …… 142
第248図　ＳＰ5204出土遺物 …… 142
第249図　ＳＰ5220出土遺物 …… 143
第250図　ＳＰ5222出土遺物 …… 143
第251図　ＳＰ5243出土遺物 …… 143
第252図　ＳＰ5245出土遺物 …… 143
第253図　ＳＰ5276出土遺物 …… 143
第254図　ＳＸ5003平・断面図 …… 144
第255図　ＳＸ5003出土遺物（１）…… 144
第256図　ＳＸ5003出土遺物（２）…… 145
第257図　ＳＢ5010平・断面図 …… 146
第258図　ＳＢ5010出土遺物 …… 146
第259図　ＳＢ5011平・断面図 …… 147
第260図　ＳＡ5001平・断面図 …… 148
第261図　ＳＡ5001出土遺物 …… 148
第262図　ＳＤ5010出土遺物 …… 148
第263図　ＳＤ5011出土遺物 …… 148
第264図　ＳＤ5012断面図 …… 149
第265図　ＳＤ5012出土遺物 …… 149
第266図　ＳＫ5002～5005出土遺物 …… 150
第267図　ＳＫ5006平・断面図 …… 151
第268図　ＳＫ5006出土遺物 …… 151
第269図　ＳＫ5007平・断面図 …… 151
第270図　ＳＫ5007出土遺物 …… 151
第271図　ＳＫ5008平・断面図 …… 152
第272図　ＳＫ5008出土遺物 …… 152
第273図　ＳＫ5009平・断面図 …… 152
第274図　ＳＫ5009出土遺物 …… 152
第275図　ＳＫ5010平・断面図 …… 153
第276図　ＳＫ5010出土遺物（１）…… 153
第277図　ＳＫ5010出土遺物（２）…… 154
第278図　ＳＫ5010出土遺物（３）…… 155
第279図　ＳＫ5011平・断面図 …… 155
第280図　ＳＫ5011出土遺物 …… 156
第281図　ＳＫ5012平・断面図 …… 157
第282図　ＳＫ5012出土遺物 …… 157
第283図　ＳＫ5013平・断面図 …… 157
第284図　ＳＫ5013出土遺物 …… 157
第285図　ＳＰ5021出土遺物 …… 158
第286図　ＳＰ5057出土遺物 …… 158
第287図　ＳＰ5287平・断面図 …… 159
第288図　ＳＰ5287出土遺物 …… 159
第289図　５工区包含層出土遺物 …… 159

# 図　版　目　次


図版１－１　１工区空中写真
　　－２　２・３工区空中写真
　　－３　５工区空中写真
図版２－１　１工区完掘状況（南から）
　　－２　１工区完掘状況（北から）
図版３－１　２工区完掘状況（南から）
　　－２　３工区完掘状況（南から）
図版４－１　４工区（Ⅰ期）完掘状況
　　－２　４工区（Ⅱ期）完掘状況
図版５－１　５工区完掘状況（北から）
　　－２　５工区完掘状況（南から）
図版６－１　ＳＤ1001・1002
　　－２　ＳＤ1003（Ⅰ期）
　　－３　ＳＤ1003（Ⅱ期）
図版７－１　ＳＥ1001
　　－２　ＳＥ1002
　　－３　ＳＥ1003
図版８－１　ＳＫ1004
　　－２　ＳＰ1028
　　－３　ＳＥ2001
図版９－１　ＳＤ2001断面
　　－２　ＳＤ2001
　　－３　ピット群（ＳＢ2001）
図版10－１　ＳＫ2001・2002
　　－２　ＳＫ2008
　　－３　ＳＰ2057
図版11－１　ＳＰ2346
　　－２　ＳＫ3003
　　－３　ＳＫ3005
図版12－１　ＳＥ3001上面
　　－２　ＳＥ3001半裁状況
　　－３　ＳＥ3001完掘状況
図版13－１　ＳＫ3001完掘状況
　　－２　ＳＫ3001遺物出土状況
図版14－１　ＳＫ4001遺物出土状況
　　－２　ＳＲ4001遺物出土状況
　　－３　ＳＲ4001遺物出土状況
図版15－１　ＳＥ4002
　　－２　ＳＤ4002
　　－３　ピット群（ＳＢ4001）
図版16－１　ＳＢ5001
　　－２　ＳＢ5001　Ｐ－１
　　－３　ＳＢ5002
図版17－１　ＳＢ5004
　　－２　ＳＢ5005
　　－３　ＳＢ5006
図版18－１　ＳＢ5006　Ｐ－７
　　－２　ＳＢ5008
　　－３　ＳＫ5001
図版19－１　ＳＤ5001・5007
　　－２　ＳＤ5007遺物出土状況
　　－３　ＳＤ5007遺物出土状況
図版20－１　ＳＤ5004・5005
　　－２　ＳＤ5006
　　－３　ＳＤ5009
図版21－１　ＳＤ5012
　　－２　ＳＫ5009
　　－３　ＳＰ5196
図版22－１　ＳＸ5001遺物出土状況
　　－２　ＳＸ5001
　　－３　ＳＸ5003
図版23　出土遺物
図版24　出土遺物
図版25　出土遺物
図版26　出土遺物
図版27　出土遺物
図版28　出土遺物
図版29　出土遺物
図版30　出土遺物
図版31　出土遺物
図版32　出土遺物
図版33　出土遺物
図版34　出土遺物
図版35　出土遺物

図版36　出土遺物
図版37　出土遺物
図版38　出土遺物
図版39　出土遺物
図版40　出土遺物

# 附　図　目　次

附図１　木太中村遺跡１・２工区遺構図
附図２　木太中村遺跡３・４工区遺構図
附図３　木太中村遺跡５工区遺構図

# 第１章　調査の経緯と経過

## 第１節　調査の経緯

都市計画道路福岡三谷線は，市内南部から香川インテリジェントパーク，高松中央インターチェンジを経て，市街地へ抜ける重要なアクセス道路として計画された。既に，高松東道路から都市計画道路室町新田線区間は開通しており，多くの市民が利用している。平成10年度から高速道路高松自動車道の開通を目指して開通区間以北を福岡林線として，開通区間以南で香川インテリジェントパークまでを林２号線として整備工事が開始されることとなった。このうち福岡林線は国道11号から県道牟礼中新線までを北工区，県道長尾大内線から都市計画道路室町新田線までを南工区として着手することとなった。北工区と南工区の間の県道牟礼中新線～長尾大内線区間については，着手時期は未定である。

高松市教育委員会では，事業面積が広大なため，平成８年度から10年度にかけて事業予定地内の試掘調査を行った。このうち福岡林線北工区では埋蔵文化財が確認されなかったが，福岡林線南工区のほぼ全域，および林２号線の北半において埋蔵文化財を確認した。今回の調査の対象となった福岡林線南工区で検出された埋蔵文化財は，弥生時代から江戸時代にかけての集落遺跡で，面積は約4000㎡にのぼる。

試掘調査結果を受けて，高松市都市開発部都市計画課と協議した結果，道路工事は平成10年度に南半分，平成11年度に北半分を行うこととなっていたため，その着工以前に調査を行うことで合意した。即ち平成10年度上半期に南半約2,700㎡，平成11年度上半期に北半約1,300㎡の調査を行うこととなった。

## 第２節　調査の経過

### １　発掘調査の経過

木太中村遺跡は高松市木太町に所在する。

調査地は，主要地方道高松長尾大内線10号線と都市計画道路室町新田線に挟まれた位置にある。調査地中央には高松琴平電気鉄道の長尾線が斜めに走っており，林道駅は調査地から約20ｍ西側にある。

調査区の設定は，国土地理院国土座標には準拠しないで，現有道路・水路・路線による区画に沿って大きく５区に分けられる。その区画は南側より１工区から５工区と仮称した。発掘調査は，1998年６月11日～10月５日にかけて第１次調査が実施され，1999年６月１日～８月４日にかけて第２次調査が実施された。

第１次調査の対象となったのは１工区～４工区である。調査は，排土作業の都合により３工区から開始し，次に２工区，1工区，最後に４工区で実施された。３工区は６月11日～７月15日まで調査を実施し，近世の溝・土坑・柱穴・井戸・自然旧河道・弥生時代の土坑を検出した。２工区は７月９日～８月５日まで調査を実施し，近世の掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑・柱穴・自然旧河道等を検出した。１工区は７月29日～８月27日まで調査を実施し，近世の溝・土坑・井戸・柱穴を検出した。４工区は８月24日～10月５日まで調査を実施し，２面の遺構面を

確認した。遺構は，弥生時代の土坑・弥生時代～古墳時代の自然旧河道，近世の掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑・柱穴である。７月28日に２工区・３工区の航空写真測量を行い，10月３日に１工区・４工区の航空写真測量を行った。

第２次調査の対象となったのは５工区であり，約２ヶ月にわたって調査が実施された。弥生時代の掘立柱建物跡・土坑，古墳時代の掘立柱建物跡・溝，古代の溝，中世の掘立柱建物跡・溝・柱穴，近世の掘立柱建物跡・土坑等の多数の遺構が検出された。７月30日に航空写真測量を行った。

以下，調査日誌を掲げて調査の詳細について報告する。

## 調　査　日　誌　（抄）

1998年

６月

11～18日に３工区の遺構検出作業を行う。19～24日は雨のため調査は中止となる。25～30日は自然旧河道の掘り下げを行う。

７月

１日に自然旧河道の掘り下げを終了し，13日までに土坑・柱穴・溝の調査を終える。15日に弥生時代の土坑の調査を終了する。３工区と平行して９日から２工区の遺構検出作業を行う。

15日に２工区の遺構配置図を作成し，ＳＤ2001から調査を始める。17日から柱穴・土坑等の調査を始め，27日までに全ての遺構の掘り下げを終了する。28日に３工区・２工区の航空写真測量を行う。28日から１工区の遺構検出作業を行う。

８月

４日までに１工区の遺構検出を終了し，南東隅にあるＳＤ1001・1002から調査を開始し，６日に終了し，他の遺構の掘り下げを行う。７日～20日にかけてＳＤ1003・ＳＥ1001の調査を行う。ＳＤ1003からは土器と共に多量の瓦が出土する。24日までＳＥ1002・1003を調査する。25日～27日までＳＥ1001～1003の実測図を作成する。24日からは１工区と平行して４工区の遺構検出作業を行う。27日から４工区の掘り下げを始める。近世の自然旧河道（ＳＲ4002）と石組み井戸のＳＥ4002を最初に掘り下げ，随時他の遺構の掘り下げを行う。ＳＲ4002の河床より多数の土器・木製椀などが出土する。

９月

１日～３日に第１期検出面において確認された溝・土坑・柱穴の掘り下げを行い，完掘する。

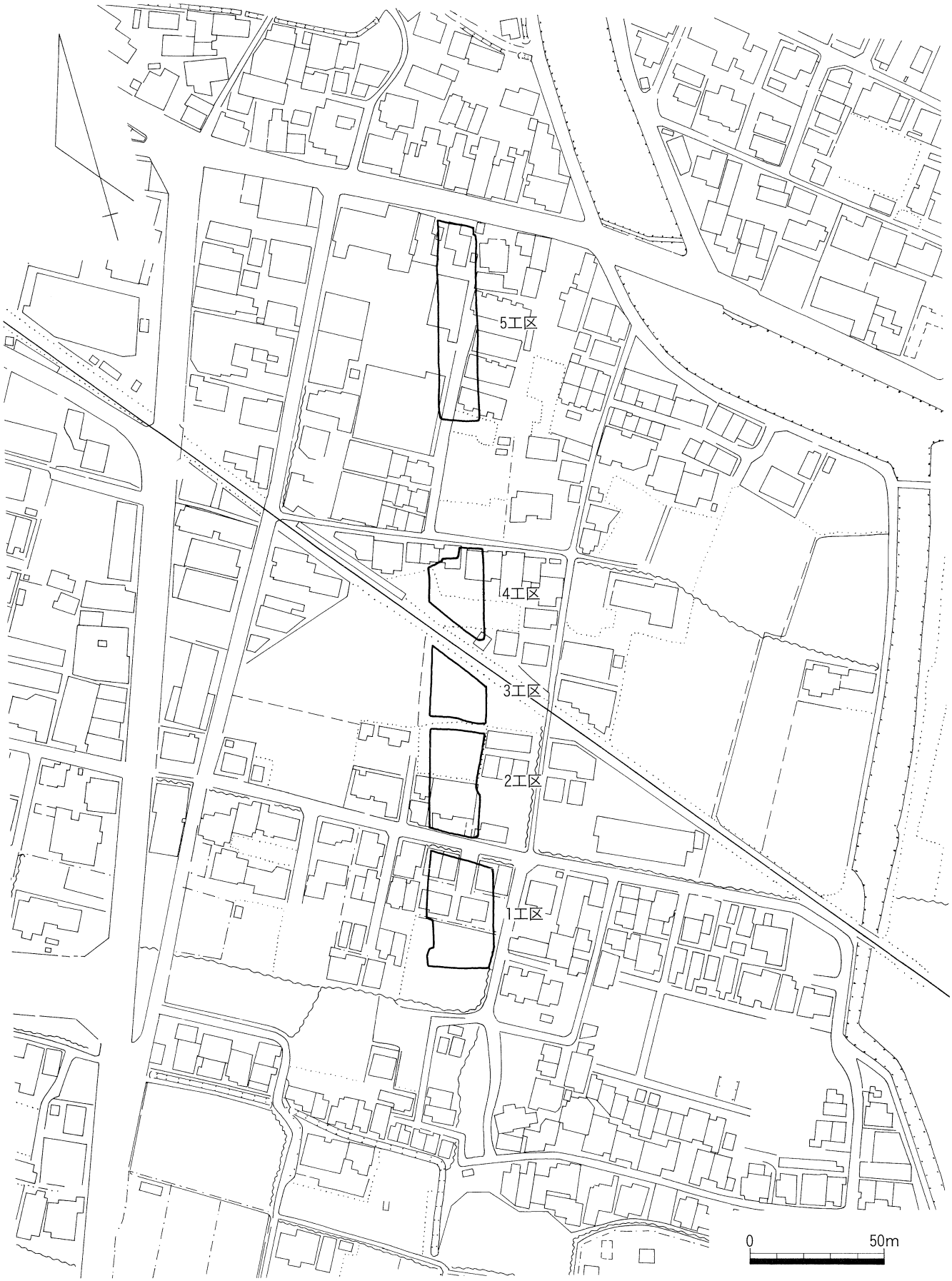
溝・土坑は土層図を作成し，根石を残存する柱穴は平・断面図を作成し，写真撮影を行う。

４日～８日に第１期検出面の遺構平面図を作成し，完掘状況の写真撮影を行う。

９日～17日にかけて第１期検出面の掘り下げを行う。掘り下げの範囲は調査区中央部であり，結果的にはＳＲ4001の掘り下げとなる。ＳＲ4001は，上面～中層にかけて多量の弥生土器・土師器・須恵器が出土する。また，ＳＫ4001の上層には数個の完形土器が出土する。21日～30日は台風接近により調査は中止となる。

10月

３日に１工区・４工区の航空写真測量を行う。５日に全ての第１次調査は終了する。




第１図　調査区設定図（Ｓ：１/2,000）

1999年

6月

1～11日に遺構検出作業を行い，掘立柱建物跡・溝・土坑・柱穴等の多数の遺構が調査区全域に分布するのを確認する。

14日から調査区北側に検出された遺構の調査を開始する。調査区中央より北側にかけては，遺構面が2面あることが判明したため，その部分の遺構の調査を行い，21日までに完掘する。22日～28日に第1期検出面に検出された遺構の平面図を作成する。29日・30日は雨のため調査は中止となる。

7月

1日に第1期検出面の遺構完掘状況の写真撮影を行う。5～13日まで第1期検出面を地山まで掘り下げ，第2期の遺構を検出する。同時に調査区中央から南側にかけての遺構の調査を行う。

7～9日はＳＢ5001・ＳＢ5002・ＳＢ5005の柱穴を半裁し，土層図を作成する。ＳＢ5003を検出する。調査区南端にあるＳＤ5012の調査を行う。また，ＳＢ5006を中心とする柱穴群の調査を行う。ＳＢ5003に接する位置で，完形の弥生土器が数点出土する土坑（ＳＫ5001）を検出する。

14日に第2期遺構の配置図を作成した後に，15日～23日にかけて遺構の調査を行う。ＳＢ5004の柱穴を半裁し，土層図を作成し完掘する。ＳＤ5007の西端において，須恵器・土師器が集中して出土し，写真撮影を行う。溝・柱穴・性格不明遺構・土坑を完掘する。

23日はＳＢ5001・ＳＢ5005の平面図を作成する。

25日は『聞いて・見て・触れる　ふるさとの歴史』講座が現地で開催され，約160名の参加者があった。

26日はＳＢ5003の平面図とＳＫ5001の遺物出土状況の実測図を作成し，土器の取り上げを始める。27日～29日は雨のため調査は中止となる。30日に航空写真測量を行い，その後に個々の遺構の写真撮影を行う。ＳＤ5007・ＳＫ5001・ＳＸ5001の遺物を取り上げる。

8月

2日～4日はＳＢ5004・ＳＢ5007の平面図を作成し，ＳＫ5001の完掘状態の平面図を作成する。4日に溝や土坑・柱穴に残っていた土層観察用のベルトを取り除き，第2次調査を終了する。

## 2　整理作業の経過

整理作業は，2年次に分けて実施した。第1次整理作業は，第1次調査終了後に出土遺物の水洗・注記のみを行う。第2次整理作業は，第2次調査終了後に行われた。1999年10月～12月まで第2次調査の出土遺物の水洗・注記を行い，2000年1月～4月は第1次調査出土の遺物を含めた全ての遺物の復元作業と遺物台帳の作成・実測する遺物の選定作業を行った。5月～10月中旬にかけて遺物の実測，10月中旬～11月にトレースを終えた。11月中旬に遺物の写真撮影を行う。12月中旬までに挿図を作成し，割り付けを終えた。12月中旬から2001年1月までに原稿の執筆を終えた。

# 第２章　地理的環境・歴史的環境

## 第１節　地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に，低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km，南北16kmの範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており，そのため平野周囲の山塊のように侵食解析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ），あるいは，平野内部に見られる由良山等の孤立丘（ビュート）となっており，高松平野の自然環境を特徴付けている。

高松平野は完新世に入ってから形成されたものである。讃岐山脈から流下し，瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ，本津川，春日川，新川などによって搬出された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は，17世紀に人工的に開削されたもので，それ以前には石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流する流路が存在していた。この旧流路は，現在では水田および市街地の地下に埋没してしまっているが，空中写真等から，林町から木太町へかけての分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており，発掘調査によってもその痕跡が確認されており，今回の調査地付近まで及んでいたことが知られている。

これら旧河道上に見られるため池は，年間1000mm前後と降水量の乏しい高松平野において農業用水確保のために不可欠なものである。さらに，木太町の南の林・多肥周辺では扇状地形末端部に当たることから，ため池に加え，出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで，両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。その出水による配水網は木太町南部にまで延びている。

一方，調査地の北側は，中世頃までは遠浅の海であったと言われている。調査地近世の干拓事業によってその景観は失われている。

## 第２節　歴史的環境

木太中村遺跡が所在する木太町周辺では，近年の大規模開発に伴う発掘調査によって多くの遺跡が調査され，少しずつではあるが遺跡の状況がわかってきた地域である。おおまかではあるが，各時代を追って遺跡の状況を見ていきたい。

高松平野で最古の遺跡は旧石器時代にさかのぼる。平野西南部の中間西井坪遺跡ではＡＴ火山灰層上層からナイフ形石器が出土している。このほか，香西南西打遺跡や雨山南遺跡，久米池南遺跡などの平野縁辺での出土が目立ち，木太町周辺の平野中央部では今のところ知られていない。

縄文時代では，大池遺跡で草創期と見られる有舌尖頭器２点の表採が報告されている。中期では，井手東Ｉ遺跡においてアカホヤ火山灰の堆積層が確認されており，高松平野の形成過程をうかがうことができる。晩期になると旧河道出土遺物であるが，林・坊城遺跡，居石遺跡等で土器や木製品の出土が知られている。

弥生時代になると遺跡数は飛躍的に増加する。前期の環濠集落として知られる天満・宮西遺跡，中期では浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡が見られる。後期では十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う天満・宮西遺跡があげられる。これら集落遺跡の他に，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，弘福寺領田図北地区比定内遺跡では小区画水田を検出している。今回報告する木太中村遺跡は標高約２ｍと低地であるが，弥生時代終末期の遺構が見られる。

古墳時代では，現在のところ周辺に前期古墳は確認されていないが，中期の円墳である白山神社古墳が知られている。盗掘を受けていたが，東西方向の竪穴式石室内には朱が塗られていた。標高２ｍという低地に立地するという点で特徴的である。周辺には大荒神古墳ほか，現在では消滅しているが周辺に10数基の塚が存在していたという。また，混入品ではあるが，神内城跡の調査において石製紡錘車が出土している。

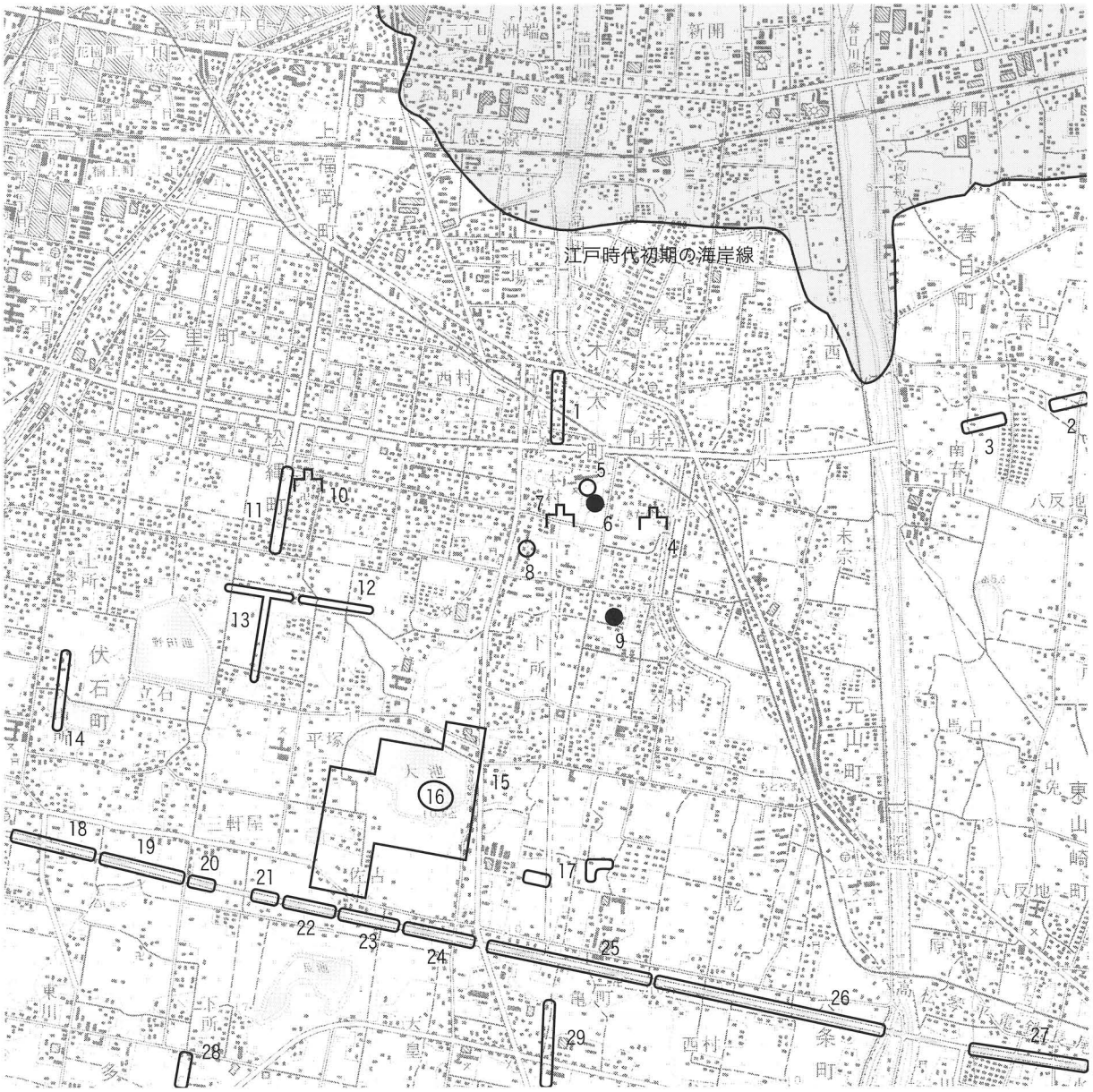
古代では条里遺構が注目される。中でも松縄下所遺跡は地表条里と同方向の道路状遺構を検出し，時期も７世紀代までさかのぼり得るなど，高松平野の条里施行に関わる可能性がある重要な遺跡である。また，日本最古の荘園田図として名高い「弘福寺領讃岐国山田郡田図」の北地区比定地が大池周辺に存在する。やや位置的に外れるが，この田図と同時期の井戸が発見された遺跡として木太本村Ⅱ遺跡があげられる。

中世では，城館が多数知られている。調査区の南側には神内氏の神内城が存在する。木太南小学校の校庭が比定地であり，調査の結果15～16世紀の遺物を包含する幅2.6ｍの溝が確認されている。神内城の東側，白山神社古墳を挟んで土塁状の遺構が残る真鍋氏の向城が知られている。神内氏は十河氏方，真鍋氏は香西氏方の部将で，数百メートルしか離れていないところに城を築いていることが特徴的である。さらに西へ目を転じれば，松縄城も存在している。また，キモンドー遺跡においては，佐藤氏の佐藤城の堀を検出している。

近世では，東山崎・水田遺跡，川南・東遺跡，川南・西遺跡において，春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡が検出されている。また，近世は大規模な土木工事の時代でもあった。特に西嶋八兵衛による香東川の付け替えとこれに関連して木太町周辺の干拓と新田開発が注目できる。後に松平頼重によりさらに北側の干拓が行われ，ほぼ現在の海岸線となった。しかしながら低地であることから，1710年，1722年，1866年の大風雨において春日川や新川の決壊が起こり，多大な被害が記録されている。

参考文献

秋山　忠　1982　『古城跡を訪ねて』　高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会　1992　『讃岐国弘福寺領の調査』
香川県教育委員会　1992～96　『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第１～６冊』
高松市教育委員会　1993～95　『一般国道高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１～７冊』
濱田重人　1993　「高松市木太町大池遺跡表採の有舌尖頭器」『香川考古　第２号』香川考古刊行会
香川考古刊行会　1994　『香川考古　第３号　特集：香川の中期古墳』
高松市教育委員会　1996　『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』
香川県教育委員会　1998　『宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　木太本村Ⅱ遺跡』
高松市教育委員会　1998～99　『大田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１～２冊』
高松市教育委員会　1999～2000　『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書　第１～２冊』




| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 木太中村遺跡 | 11 | 天満・宮西遺跡 | 21 | 井手東Ⅰ遺跡 |
| 2 | 川南・東遺跡 | 12 | 境目・下西原遺跡 | 22 | 浴・長池Ⅱ遺跡 |
| 3 | 川南・西遺跡 | 13 | 松縄下所遺跡 | 23 | 浴・長池遺跡 |
| 4 | 向城跡 | 14 | キモンドー遺跡 | 24 | 浴・松ノ木遺跡 |
| 5 | 木太本村遺跡 | 15 | 弘福寺領山田郡田図比定地北地区 | 25 | 林・坊城遺跡 |
| 6 | 白山神社古墳 | 16 | 大池遺跡 | 26 | 六条・上所遺跡 |
| 7 | 神内城跡 | 17 | 林・浴遺跡 | 27 | 東山崎・水田遺跡 |
| 8 | 木太本村Ⅱ遺跡 | 18 | 蛙股遺跡 | 28 | 凹原遺跡 |
| 9 | 大荒神古墳 | 19 | 居石遺跡 | 29 | 宗高・坊城遺跡 |
| 10 | 松縄城跡 | 20 | 井手東Ⅱ遺跡 | | |

第２図　周辺遺跡分布図（Ｓ：１/25,000）

# 第３章　調査の概要

## 第１節　調査区の位置

本遺跡は，道路建設に伴う発掘調査であるため南北方向に細長く設定される。調査地は第１章第２節で前述したように東西方向の現有道路・水路・線路に区切られており，１工区～５工区の調査区に分かれる。

調査地は高松琴平電気鉄道の長尾線林道駅の東側に位置し，市街地の中にある。調査以前の状況は，１工区北側・２工区南端・４工区北端・５工区に個人住宅と倉庫が建っており，それ以外の部分は水田であった。特に５工区は倉庫の基礎とコンクリート水路が地山より深く掘り込まれており，遺構がかなり壊されていた。調査地全体としては，地表面のレベルは南側から北側に向かって緩やかに低くなっている。１工区南端の標高は2.40m，５工区北端の標高は2.32mである。

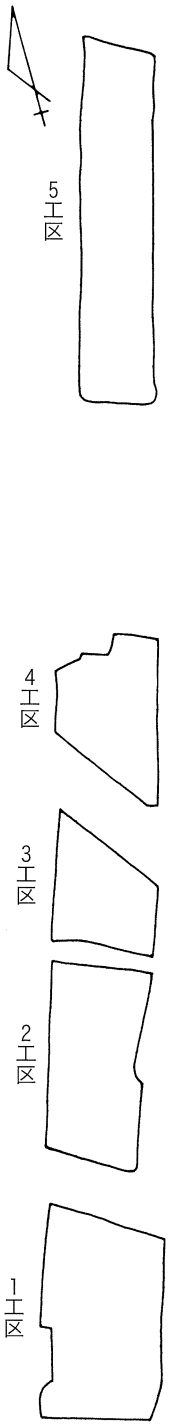
１工区は，本遺跡の南端に位置する調査区であり，都市計画道路室町新田線と接する。調査区の南部は水田であるが，北部は個人住宅が建っており，部分的に撹乱が遺構面まで掘り込まれていた。

２工区は，１工区の北側に位置する調査区であり，南側は現有道路，北側は現有水路が東西方向に延びている。調査区南部には建物が建っており，北部は水田であった。調査区の東側には個人住宅があり，車の進入道を確保するために調査区の幅が約２m狭く，東壁が屈曲する。

３工区は，本遺跡のほぼ中央に位置する。調査区の南側は現有水路，北側は線路に区切られる。現況は１枚の水田である。

４工区は，本遺跡のほぼ中央に位置する。調査区の南側は線路，北側は道路に区切られる。調査区北端には個人住宅，南側は水田であった。

５工区は，本遺跡の北端に位置する調査区である。調査区の北端は現有道路と接する。４工区と５工区の間は約45m離れており，この部分は試掘調査において遺構が検出されなかったので調査区外となる。

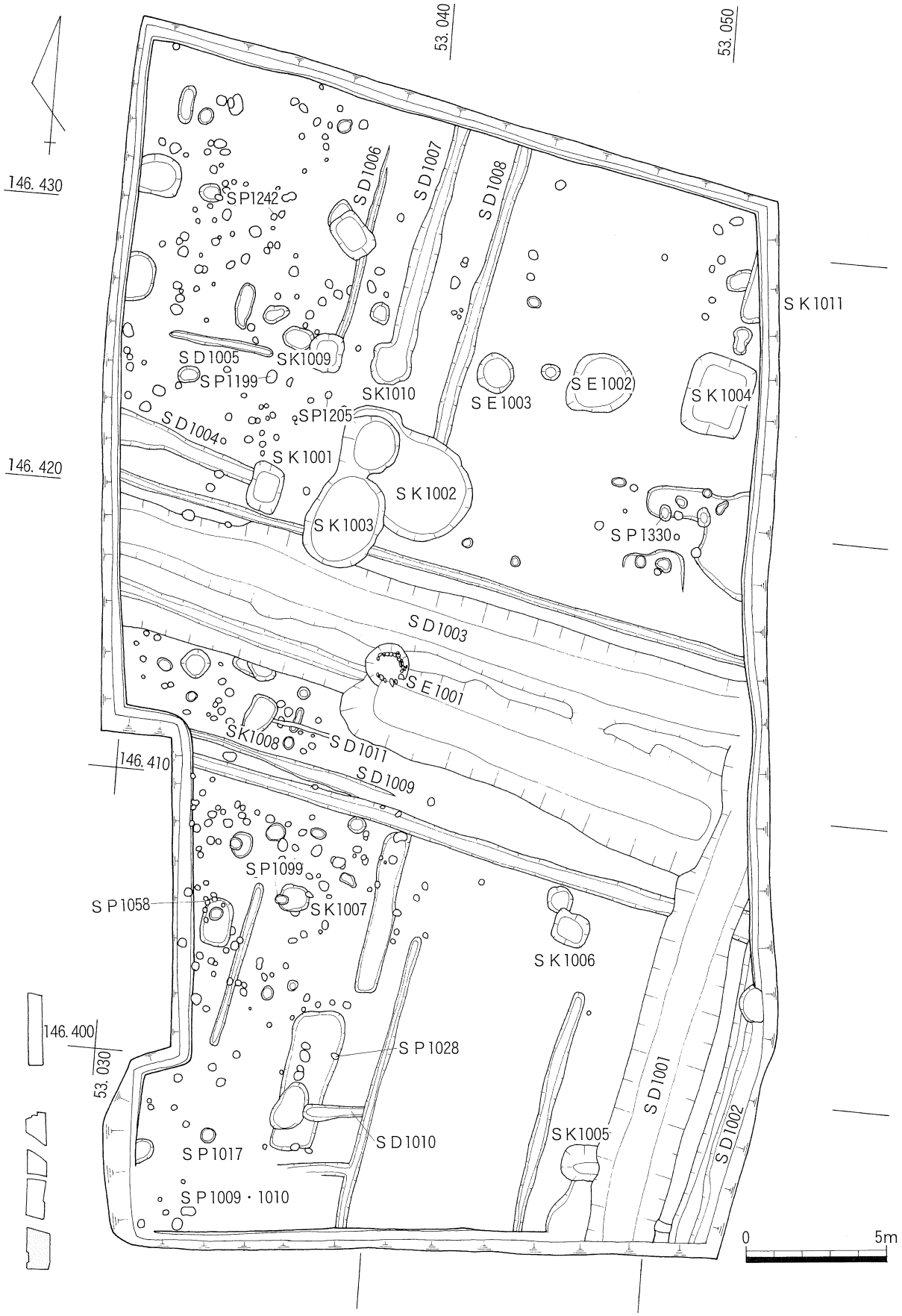



## 第２節　遺構と遺物

### １　１工区

１工区は本遺跡の南端に位置する。南北方向の全長は約43m，幅は約25mである。調査区中央の南北軸座標値はX＝146.420，東西軸座標値はY＝53.040である。

土層の堆積状態は，北部では住宅による撹乱が著しいが，南部はほぼ水平堆積をなし，上層より現水田・近世条里型水田層が見られる。




第３図　１工区遺構配置図（S：1 /200）

1）近世

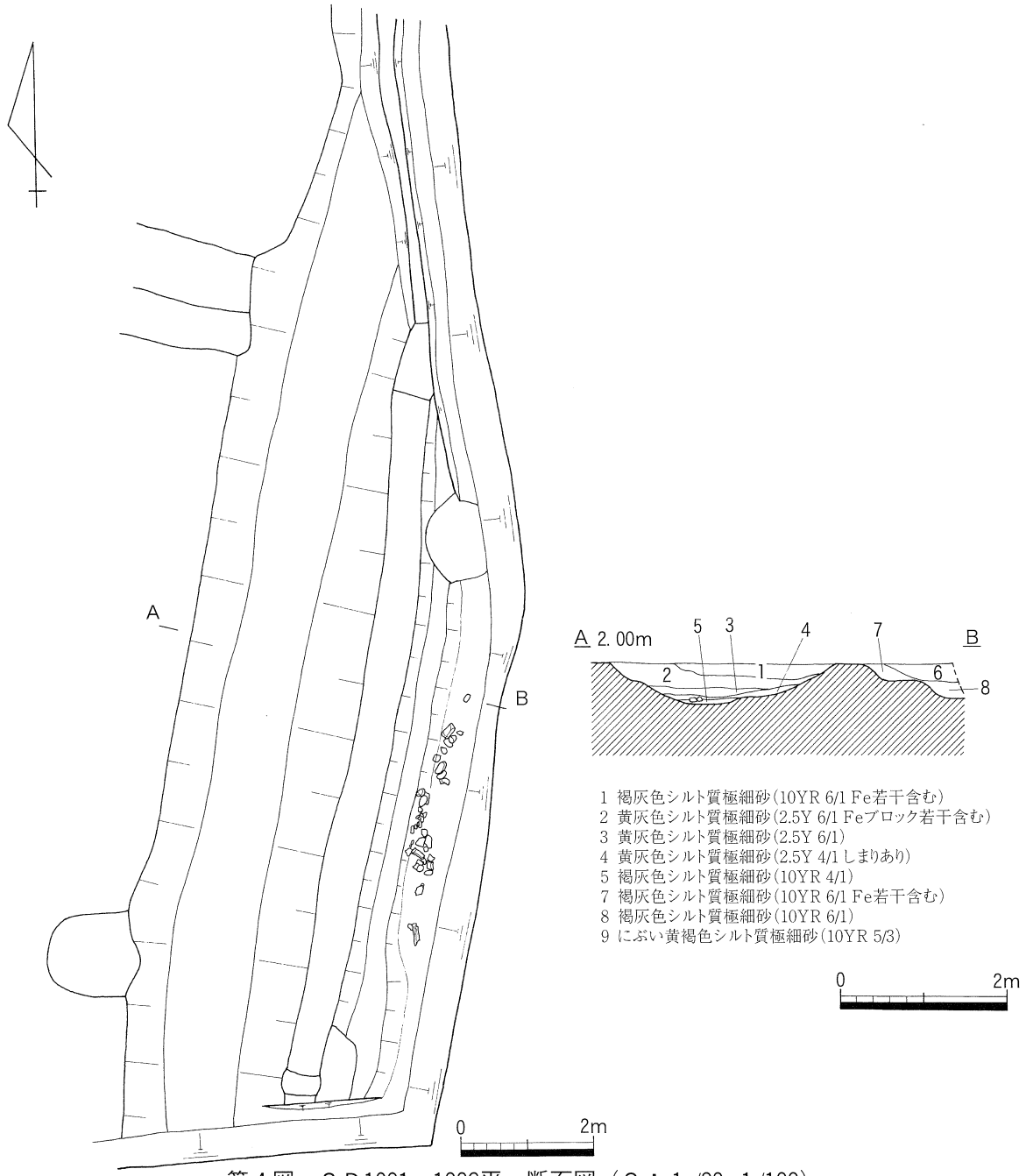
1　溝

ＳＤ1001（第４～７図）

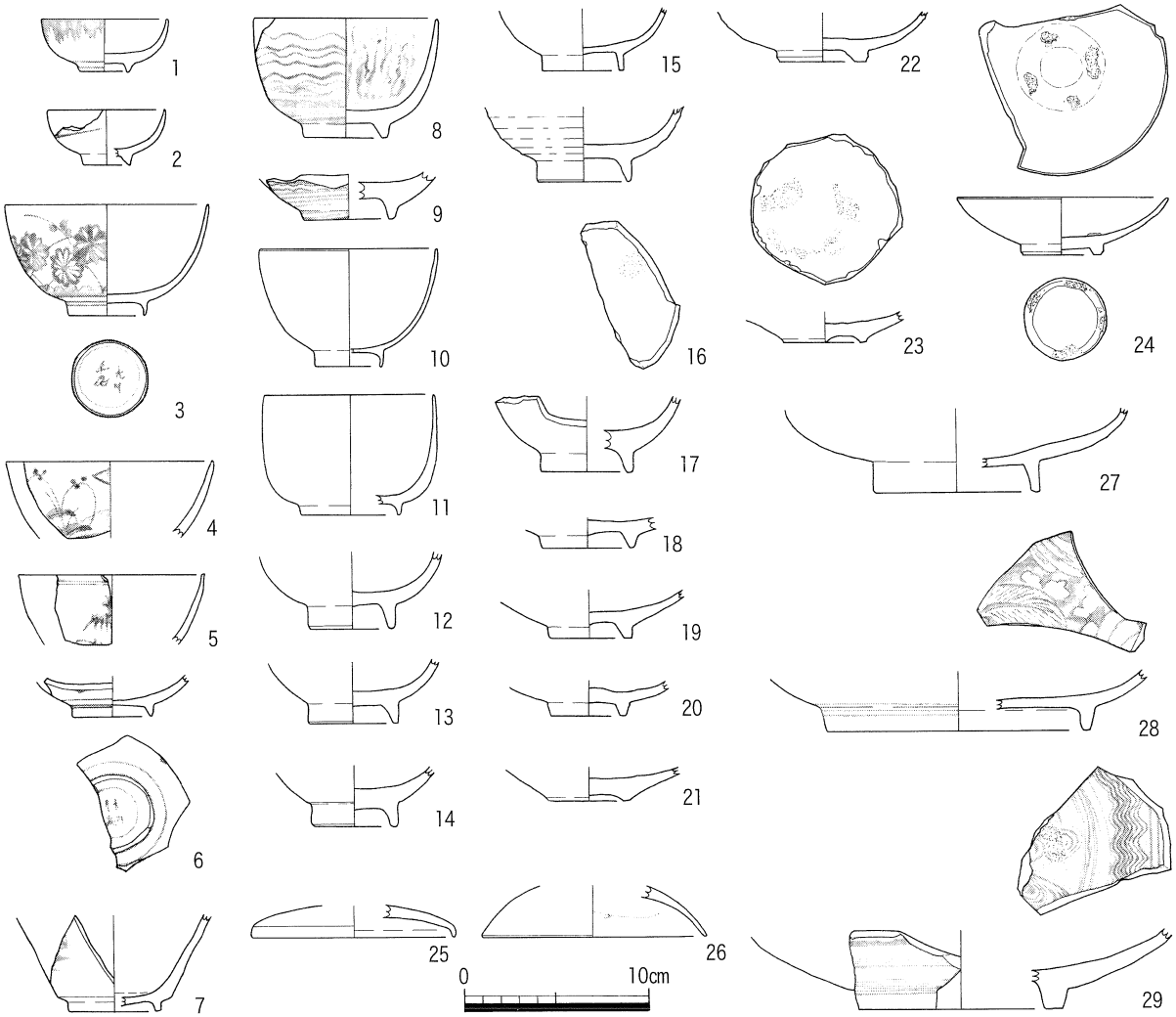
調査区南東隅において検出された溝であり，ＳＤ1002の西側に併走する。溝の北端ではＳＤ1003を切った状態である。

検出面のレベルは標高1.80mである。溝の方向はＮ－12°－Ｅである。検出できた溝の全長は約17.5m，幅は約2.7m，深さは0.45mを測る。掘り込みはゆるやかであり，断面形態は船底形を呈する。底面のレベルは平坦である。埋土はレンズ状堆積を示し，５層に分層できる。最上の第１層は褐灰色シルト質極細砂，第２～４層は黄灰色シルト質極細砂，最下の第５層は褐灰色シルト質極細砂であり挙大の石を若干含む。

この溝は検出された位置から判断して，条里地割の坪界線の溝であると考えられる。

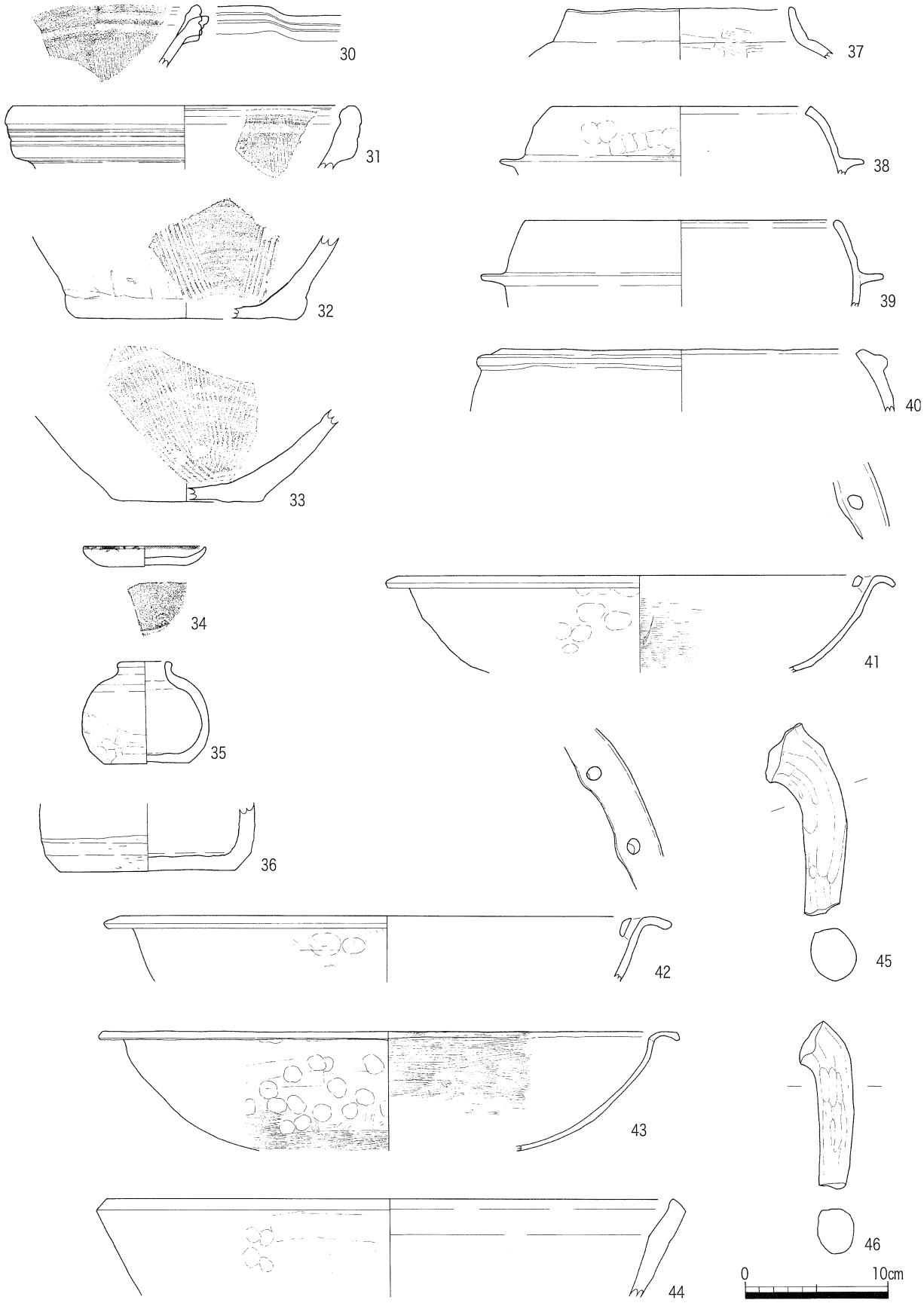



第４図　ＳＤ1001・1002平・断面図（Ｓ：１/80，１/100）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 染付　盃 | 6.8 | 2.6 | 2.85 | 内外面施釉　外面に雨降り文　肥前系 | 灰白7.5Y8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 2 | 磁器　盃 | 6.4 | 2.6 | 3.0 | 内外面施釉　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 3 | 染付　碗 | 11.0 | 4.2 | 6.0 | くわらんか碗 外面草花文 高台内「大明年製」肥前系 | 紺色 | 灰白N8/ | 精良 |
| 4 | 染付　碗 | 11.2 | | (4.2) | くわらんか碗　外面草花文　肥前系 | 青色 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 5 | 染付　碗 | 10.0 | | (3.8) | 口縁部は若干外反　外面草花文　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 6 | 磁器　碗 | | 4.2 | (2.25) | 内外面施釉　高台内「大明年製」　肥前系 | 灰白7.5Y8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 7 | 磁器　碗 | | 4.9 | (5.25) | 底部無釉　内外面貫入　肥前系 | 灰白2.5Y8/1 | 灰白2.5Y8/1 | 精良 |
| 8 | 磁器　碗 | 10.0 | 4.4 | 6.5 | 内外面施釉　刷毛目文 | 暗オリーブ灰2.5G4/1 | 灰N5/ | 精良 |
| 9 | 磁器　碗 | | 4.8 | (2.45) | 内外面施釉　外面は刷毛目文 | 灰白10YR8/1 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 精良 |
| 10 | 白磁　碗 | 9.6 | 3.8 | 6.3 | 内外面施釉 | 透明 | 灰白N8/ | 精良 |
| 11 | 磁器　碗 | 9.5 | 5.4 | 6.5 | 内外面施釉 | 浅黄2.5Y7/4 | 灰白2.5Y8/2 | 精良 |
| 12 | 磁器　碗 | | 4.4 | (4.2) | 内外面施釉 | 透明 | 淡黄2.5Y7/3 | 精良 |
| 13 | 磁器　碗 | | 5.0 | (3.4) | 内外面施釉 | 透明 | 淡黄2.5Y8/3 | 精良 |
| 14 | 磁器　碗 | | 4.4 | (3.3) | 内外面施釉 | 透明 | 浅黄橙10YR8/3 | 精良 |
| 15 | 磁器　碗 | | 4.4 | (3.4) | 内外面施釉 | 透明 | 灰白2.5Y8/2 | 精良 |
| 16 | 磁器　碗 | | 4.8 | (4.0) | 内外面施釉　外面ロクロ痕 | 透明 | 鈍い黄橙10YR6/3 | 精良 |
| 17 | 磁器　碗 | | 4.8 | (4.9) | 内外面施釉　見込み砂目 | 淡黄2.5Y8/4 | 灰白2.5Y8/2 | 精良 |
| 18 | 磁器　皿 | | 5.0 | (1.6) | 内外面施釉　見込み蛇の目釉ハギ　鉄銹　肥前系 | 淡水色 | 灰白N8/ | 精良 |
| 19 | 磁器　皿 | | 4.3 | (2.6) | 内外面施釉　蛇の目釉ハギ　瀬戸系 | 青灰5B6/1 | 灰白N8/ | 精良 |
| 20 | 磁器　皿 | | 4.0 | (1.9) | 内外面施釉　蛇の目釉ハギ　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白N8/ | 精良 |
| 21 | 磁器　皿 | | 4.4 | (1.8) | 外面無釉　蛇の目釉ハギ　瀬戸系 | 灰オリーブ7.5Y5/2 | 灰褐7.5YR5/2 | 精良 |
| 22 | 磁器　皿 | | 4.6 | (2.7) | 高台付近は無釉 ロクロ痕明瞭 蛇の目釉ハギ 瀬戸系 | 灰黄2.5Y7/2 | 灰白2.5Y8/1 | 精良 |
| 23 | 磁器　皿 | | 4.5 | (1.65) | 内外面施釉　見込み砂目3ヶ所 | 灰白N8/ | 灰褐5YR6/2 | 精良 |
| 24 | 磁器　皿 | 11.4 | 4.2 | 3.1 | 内外面施釉　見込み蛇の目釉ハギ・砂目　畳付砂目 | 灰オリーブ5Y6/2 | 灰白10YR7/1 | 精良 |
| 25 | 磁器　蓋 | 11.0 | | (1.7) | 内外面施釉 | 透明 | 灰白2.5Y7/1 | 精良 |
| 26 | 染付　蓋 | 12.0 | | (2.75) | 内外面施釉　染付ー淡青 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 27 | 染付　大皿 | | 8.7 | (4.55) | 高台底部は無釉　ロクロ痕 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 28 | 染付　大皿 | | 14.2 | (3.3) | 内外面施釉　染付ー草花文・青色 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 29 | 染付　大皿 | | 11.0 | (4.3) | 高台無釉　内外面は刷毛目文　見込みに砂目 | 明緑灰7.5GY8/1 | 鈍い橙5YR6/4 | 精良 |

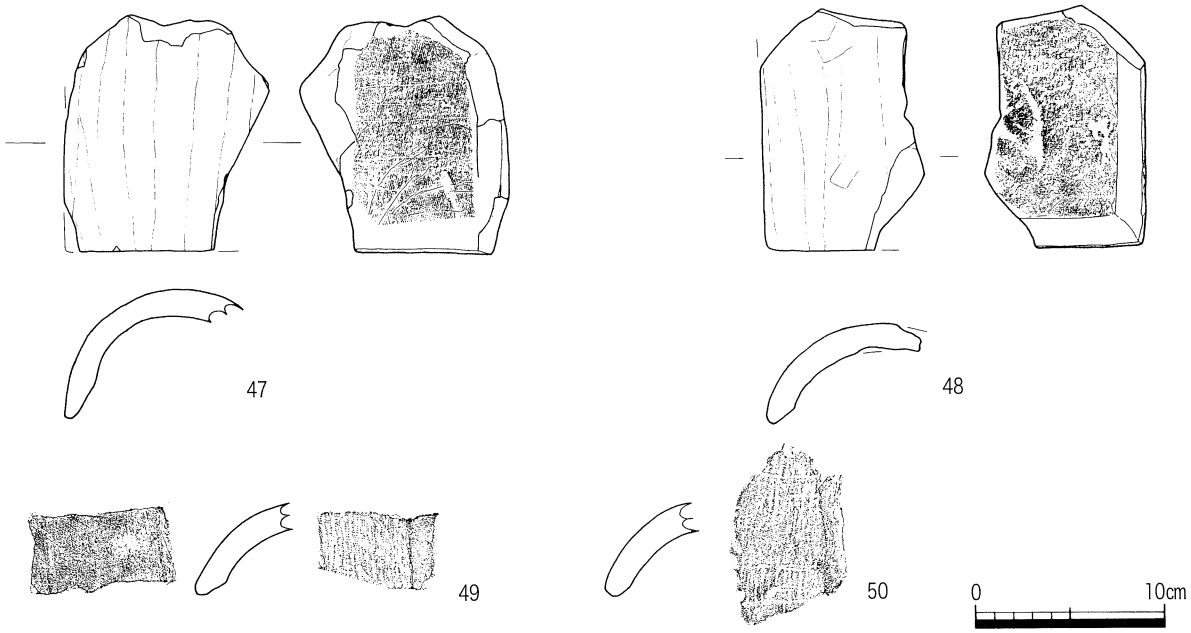
第５図　ＳＤ1001出土遺物（１）（Ｓ：１／４）




第６図　ＳＤ1001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

（第６図）

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 30 | 備前焼　擂鉢 | | | (4.4) | 内外面回転ナデ　内面卸目 | 明赤褐2.5YR5/6 | 鈍い橙2.5YR6/4 | 密 |
| 31 | 備前焼　擂鉢 | 24.0 | | (4.5) | 内外面回転ナデ　内面卸目 | 灰赤7.5YR5/2 | 灰赤7.5YR5/2 | 密 |
| 32 | 陶器　擂鉢 | | 15.4 | (6.0) | 胴外面ナデ　底部指ナデ　内面卸目 | 鈍い黄橙10YR7/3 | | 密 |
| 33 | 陶器　擂鉢 | | 9.4 | (6.7) | 外面回転ナデの後篦ナデ　底部未調整　内面卸目 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 鈍い褐7.5YR5/3 | 密 |
| 34 | 土師質土器灯明皿 | 8.7 | | 1.4 | 外面回転ナデ　底部回転糸切り　内面回転ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 淡橙5YR8/4 | 細砂 |
| 35 | 油壷 | 3.4 | 6.0 | 7.1 | 外面上部回転ナデ　下部篦削り　底部篦ナデ | 赤褐10YR4/3 | 明赤灰10YR4/1 | 密 |
| 36 | 備前焼　壷 | | 12.3 | (4.8) | 外面ナデ　底部回転篦削り　内面回転ナデ | 赤褐10YR5/4 | 橙2.5YR6/6 | 密 |
| 37 | 土師質土器　釜 | 15.8 | | (3.6) | 外面ナデ・刷毛目　内面指押え | 鈍い黄橙10YR7/2 | 褐灰10YR5/1 | 密 |
| 38 | 須恵質土器　釜 | 18.3 | | (4.8) | 外面回転ナデ・ナデ　指押えの後にナデ　内面篦ナデ | 灰白2.5Y7/1 | | 密 |
| 39 | 須恵質土器　釜 | 22.0 | | (6.1) | 外面ナデ・篦ナデ・回転ナデ　内面篦ナデ | 黒10YR2/1 | 褐灰10YR6/1 | 細砂 |
| 40 | 土師質土器　羽釜 | 25.6 | | (4.4) | 調整不明 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 灰白10YR8/2 | 細砂 |
| 41 | 土師質土器　焙烙 | 34.2 | | (6.8) | 口縁回転ナデ　体部外面指押え　内面刷毛目 | 黒褐2.5Y3/1 | | 細砂 |
| 42 | 土師質土器　焙烙 | 38.0 | | (4.5) | 口縁内面横ナデ　外面指押えの後に刷毛目 | 褐灰7.5YR4/1 | 灰白2.5Y7/1 | 細砂 |
| 43 | 土師質土器　焙烙 | 40.6 | | (8.4) | 外面上部指押え　下部刷毛目　内面刷毛目 | 黄灰2.5Y5/1 | 黄灰2.5Y6/1 | 微砂 |
| 44 | 土師質土器　土鍋 | 40.0 | | (6.8) | 外面ナデ・指押え　内面篦ナデ | 鈍い橙7.5YR7/3 | 明褐灰7.5YR7/2 | 細～粗砂 |
| 45 | 土師質土器　羽釜 | | | | 脚部篦ナデ | 灰白10YR8/2 | | 細～粗砂 |
| 46 | 土師質土器　羽釜 | | | | 脚部篦ナデ | 褐灰5YR5/2 | | 細～粗砂 |




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 47 | 丸瓦 | | | | 外面篦ナデ　内面ゴザ目 | 灰N4/ | 暗灰N3/ | 密 |
| 48 | 丸瓦 | | | | 外面篦ナデ　内面ゴザ目 | 灰N6/ | | 密 |
| 49 | 丸瓦 | | | | 外面篦ナデ　内面布目 | 灰N4/ | | 密 |
| 50 | 丸瓦 | | | | 外面篦ナデ　内面布目 | 暗灰N3/ | | 密 |

第７図　ＳＤ1001出土遺物（３）（Ｓ：１／４）

遺物は染付盃（１・２），同碗（３～９），白磁碗（10・11），磁器碗（12～17），同皿（18～24），同蓋（25・26），染付大皿（28・29），陶器擂鉢（30～33），同油壺（35），同壺（36），土師質土器灯明皿（34），同茶釜（37），同羽釜（40・45・46），同焙烙（41～43），同土鍋（44），須恵質土器茶釜（38・39），丸瓦（47～50）である。

１・２は肥前系の盃で，１は外面に大分簡素化された雨降り文が描かれることから18世紀前半のものである。３～６は肥前系の碗であり，外面に草花文の染付が描かれ，３と６の高台に「大明年製」の銘がある。18世紀前半のものである。８・９は刷毛目文で17世紀末のものである。17は見込みに砂目がある。18～24は見込みに蛇の目釉ハギが見られることから17世紀前半～中葉のものである。

27は高い高台の皿であり，高台以下は無釉である。28は内面に草花文が描かれており，18世紀後半のものである。29は幅の広い高台を有し，体部内外面に刷毛目文が描かれ，見込みに砂目が残存する。30・31は備前焼擂鉢で，口縁部が拡張し外面に凹線を持ち，内面全面に卸目が施され，18世紀のものである。30はわずかな片口になっている。32は外面にヘラ削りが施されることから堺焼の擂鉢であり，7本単位の卸目が放射状に施される。33は6本単位の卸目が施される。

34の底部は回転糸切りが見られ，口縁部内外面に煤が付着する。

35は口縁部が小さく，丈が低く横に広がる形をなす。胴部外面下半は横方向のヘラ削りが施され，底面はヘラナデが施される。胴部に黒班がある。

36は備前焼であり，外面と底面は回転ヘラ削りが施される。

37・39の外面は黒色処理が施され，38・39は鍔以下に煤が付着する。

40は内傾する胴部からそのまま口縁部に至る。

41～43は同形態の焙烙であり，41・42は内耳と孔が残存する。調整は胴部外面に指押えと刷毛目，41・43の内面に刷毛目，42はナデが施される。外面に多量の煤や吹きこぼれが付着し，18世紀のものである。

47～50は外面ヘラナデが施され，47・48の内面はゴザ目，49・50は布目が見られる。

ＳＤ1002（第４・８～11図）

調査区南東隅においてＳＤ1001の東側に検出された溝であり，溝の東岸は調査区域外になっている。

検出面のレベルは標高1.80ｍである。溝の方向はＳＤ1001と同一でＮ－12°－Ｅを示す。検出できた溝の全長は約10.8ｍ，深さは0.40ｍを測る。幅は前述したように調査区域外のため不明である。西側の掘り込みは段を有する。底面のレベルは平坦であり，拳～人頭大の礫が集中している部分が検出された。埋土は３層であり，堆積状態から判断すると，最深部が埋没した後に上部が埋没したと考えられ，埋没に若干の時期差がある。

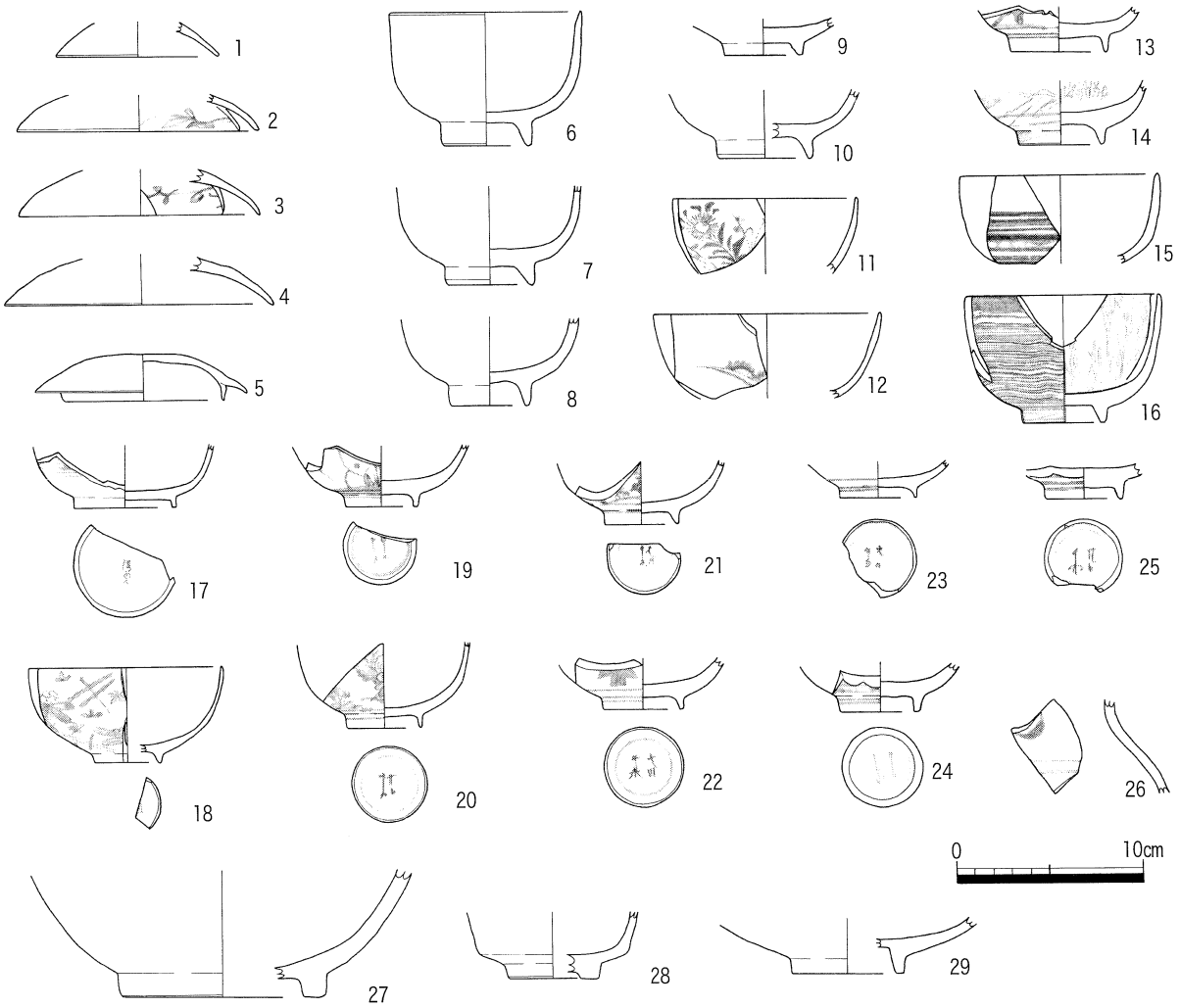
この溝はＳＤ1001と同一方向に流れ，遺物の時期も同一であり，18世紀頃の条里地割の坪界線に関係する溝であると考えられる。

遺物は，磁器蓋（１～４），陶器蓋（５），陶器碗（６～８・10），染付碗（11～25），同銚子（26），磁器鉢（27），青磁碗（28），磁器皿（９・29～34），陶器塩壺（35・36），陶器擂鉢（37～41），土師質土器茶釜（42～44），同焙烙（45），須恵質土器甕（46），瓦製円盤（47～52），丸瓦（53），軒平瓦（54），木製品（55～78）である。

１は京焼風蓋であり，天井部内面に蛇の目釉ハギがある。２・３は肥前系蓋であり，内面にくずれた唐草文が描かれ，18世紀のものである。４は白磁器で天井部内面に蛇の目釉ハギが見られる。

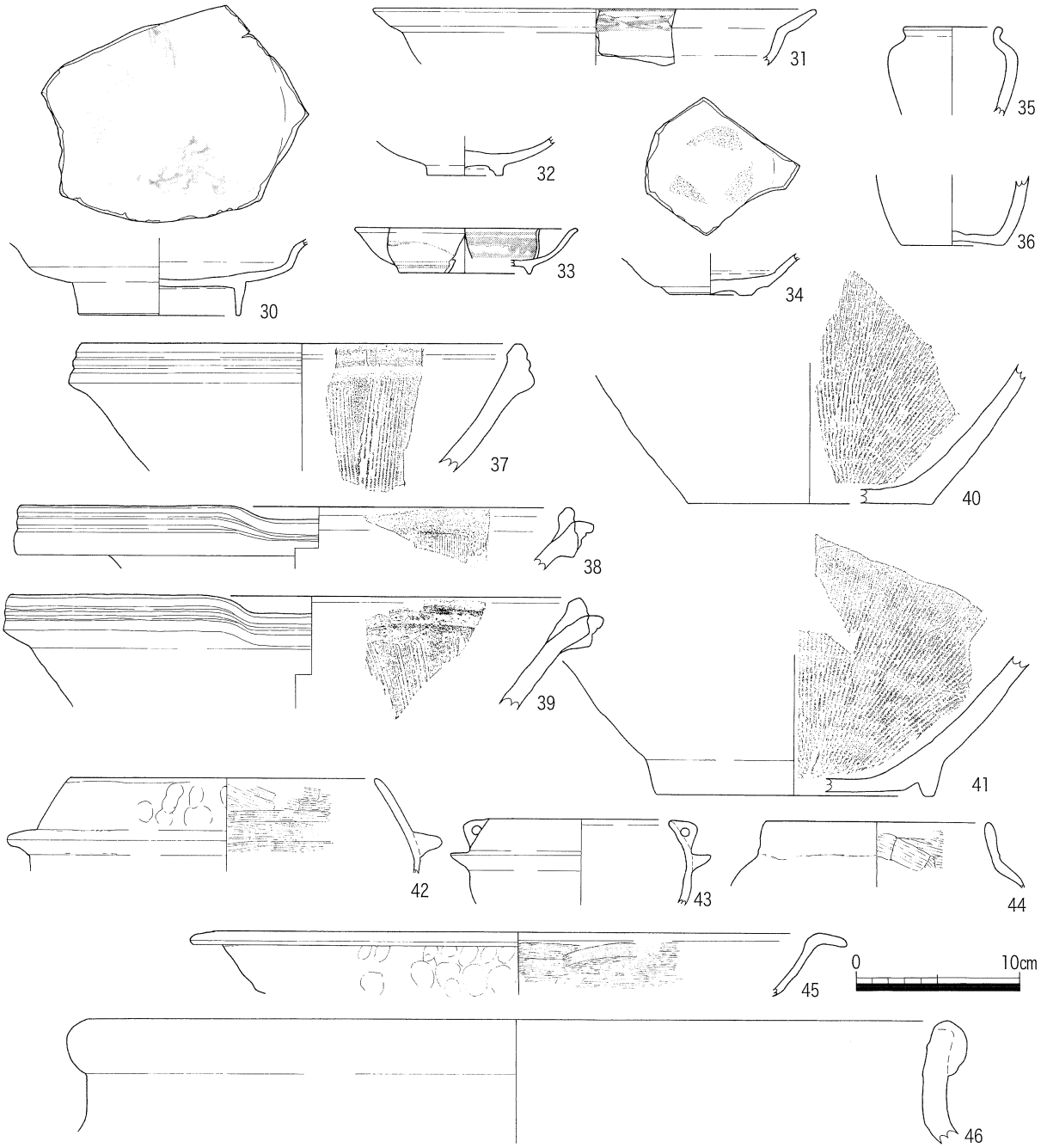
６～８・10はほぼ垂直に立ち上がる体部で畳付は無釉である。11は外面に草花文の染付があり，12・13は肥前系碗で18世紀のものである。14・16は肥前系碗で内外面に刷毛目文が施される。17は高台付近が無釉で，高台に「清水」の刻印が見られる。18は瀬戸系碗で外面に草花文の染付，高台に「渦福」の銘がある。19～25は肥前系碗で高台にくずれた「大明年製」の銘がある。18世紀後半のものである。

26は外面施釉の徳利の肩部付近である。外面に染付がある。



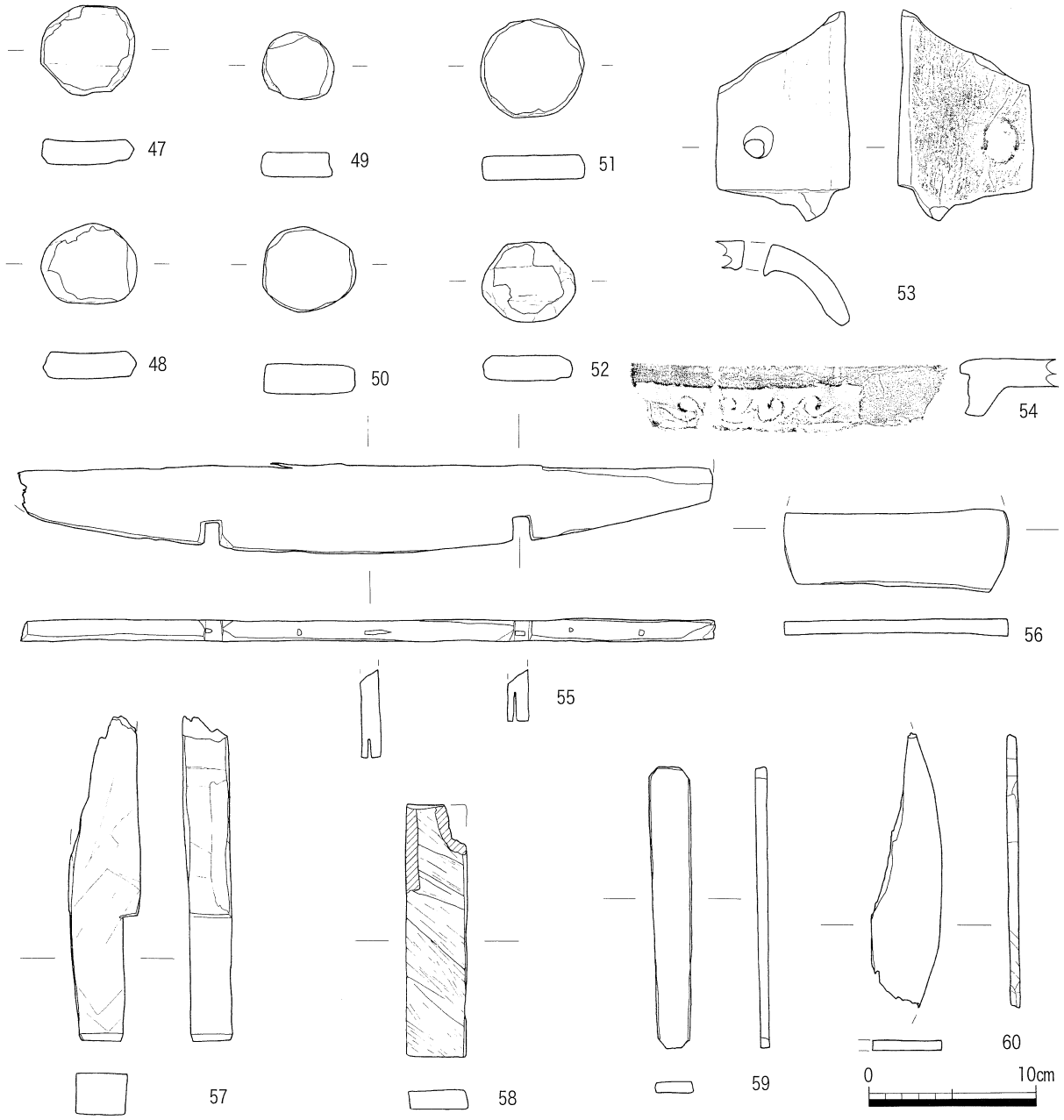

| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外（釉） | 内（素地） | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 磁器　蓋 | 9.0 | | (1.9) | 内外面施釉　見込みに蛇の目釉ハギ　京焼風 | 灰白7.5YR8/1 | 灰白10YR8/1 | 密 |
| 2 | 磁器　蓋 | 13.0 | | (2.0) | 内外面施釉　内面草花文　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 3 | 磁器　蓋 | 13.0 | | (2.5) | 内外面施釉　内面草花文　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 4 | 磁器　蓋 | 14.6 | | (2.7) | 内外面施釉　見込み蛇の目釉ハギ | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白10YR8/1 | 密 |
| 5 | 陶器　蓋 | 11.6 | 3.6 | 2.5 | 天井部回転篦ナデ | 灰褐7.5YR4/2 | 灰褐7.5YR4/2 | 密 |
| 6 | 磁器　碗 | 10.2 | 4.6 | 7.25 | 内外面施釉　畳付無釉 | 透明 | 浅黄2.5Y7/3 | 密 |
| 7 | 磁器　碗 | | 4.6 | (5.3) | 内外面施釉　畳付無釉 | 透明 | 鈍い黄橙10Y6/3 | 密 |
| 8 | 磁器　碗 | | 4.2 | (4.7) | 内外面施釉　畳付無釉 | 透明 | 浅黄5Y8/3 | 密 |
| 9 | 磁器　皿 | | 4.2 | (2.0) | 内外面施釉　見込み蛇の目釉ハギ　高台付近無釉 | 灰白2.5Y8/1 | 灰白2.5Y8/2 | 精良 |
| 10 | 磁器　碗 | | 5.0 | (3.7) | 内外面施釉　畳付無釉 | 透明 | 鈍い黄橙10YR6/4 | 密 |
| 11 | 染付　碗 | 10.0 | | (4.1) | 内外面施釉　外面草花文　肥前系 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 12 | 染付　碗 | 12.4 | | (4.6) | 内外面施釉　外面草花文　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 13 | 染付　碗 | | 5.2 | (2.45) | 内外面施釉　全面貫入　肥前系 | 透明 | 明緑灰7.5GY8/1 | 精密 |
| 14 | 染付　碗 | | 4.4 | (3.5) | 内外面施釉　内外面刷毛目文　肥前系 | 灰褐7.5YR4/2 | 鈍い赤橙10YR6/3 | 密 |
| 15 | 染付　碗 | 10.6 | | (4.8) | 内外面施釉　全面貫入 | 透明 | 灰白2.5Y7/1 | 密 |
| 16 | 染付　碗 | 10.4 | 4.4 | 6.9 | 内外面施釉　内外面刷毛目文　肥前系 | 灰褐7.5YR4/2 | 鈍い赤橙10YR6/3 | 密 |
| 17 | 染付　碗 | | 5.6 | (3.4) | 内外面施釉　高台「清水」の刻印 | 淡黄7.5Y8/3 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |
| 18 | 染付　碗 | 10.6 | 3.6 | 5.2 | 内外面施釉　外面草花文　高台「渦福」　瀬戸系 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |
| 19 | 染付　碗 | | 3.9 | (3.3) | 内外面施釉　外面草花文　高台「大明年製」　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 20 | 染付　碗 | | 4.0 | (4.6) | 内外面施釉　外面草花文　高台「大明年製」　肥前系 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 21 | 染付　碗 | | 3.9 | (3.4) | 内外面施釉　外面草花文　高台「大明年製」　肥前系 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 22 | 染付　碗 | | 4.0 | (2.8) | 内外面施釉　外面草花文　高台「大明年製」　肥前系 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 23 | 染付　碗 | | 4.2 | (2.0) | 内外面施釉　外面草花文　高台「大明年製」　肥前系 | 透明 | 灰白N8/ | 密 |
| 24 | 染付　碗 | | 4.0 | (2.7) | 内外面施釉　畳付砂目　高台に銘　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 25 | 染付　碗 | | 4.4 | (1.9) | 内外面施釉　高台「大明年製」　肥前系 | 透明 | 明緑灰7.5GY8/1 | 精良 |
| 26 | 染付　徳利 | | | (5.05) | 内外面施釉　外面に草花文　内面に釉が流れる | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 27 | 磁器　鉢 | | 11.2 | (6.9) | 内外面施釉　体部下半無釉 | 灰7.5Y5/1 | 灰白10YR8/1 | 密 |
| 28 | 青磁　碗 | | 4.8 | (3.6) | 内外面施釉　蛇の目高台 | 灰10Y6/1 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 密 |
| 29 | 磁器　皿 | | 6.0 | (3.0) | 内外面施釉　見込み蛇の目釉ハギ　畳付砂目 | 鈍い黄橙10YR5/3 | 灰白2.5Y8/2 | 密 |

第８図　ＳＤ1002出土遺物（１）（Ｓ：１／４）



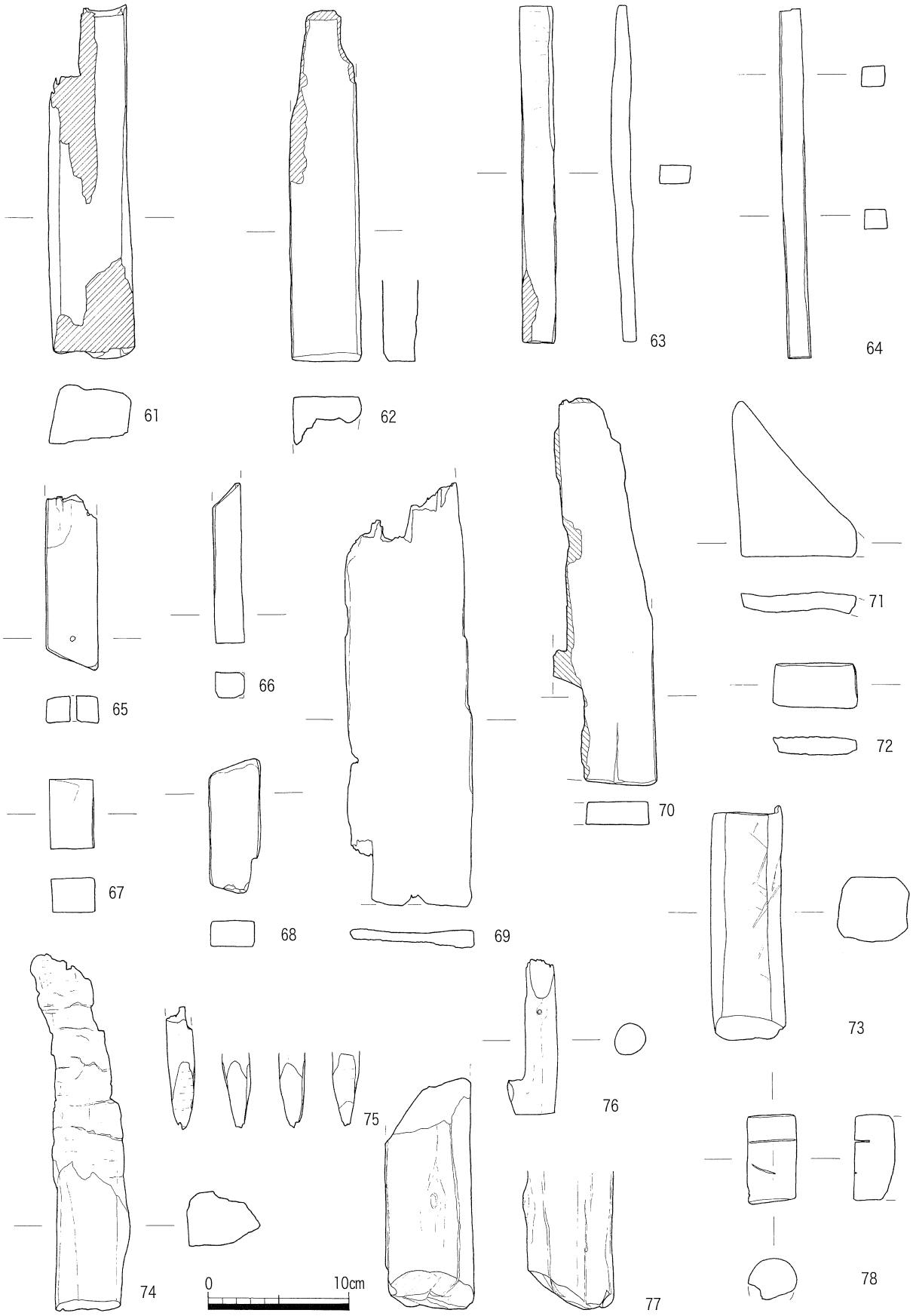

| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外（釉） | 内（素地） | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 30 | 磁器　皿 | | 10.0 | 4.8 | 内外面施釉　高台脇以下無釉 | 浅黄5Y7/3 | 灰白5Y8/1 | 密 |
| 31 | 磁器　皿 | 27.0 | | (3.5) | 内外面施釉　内面波文様 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 32 | 磁器　皿 | | 4.6 | (2.4) | 内外面施釉　見込みに蛇の目ハギ　高台脇以下無釉 | 灰黄2.5Y7/2 | 灰白10YR7/1 | 密 |
| 33 | 磁器　皿 | 13.4 | 8.0 | 2.8 | 内外面施釉　内面波文様　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 34 | 磁器　皿 | | 5.0 | (2.6) | 内外面施釉　見込みに砂目　高台脇以下無釉 | 灰褐5YR6/2 | 鈍い橙5YR6/4 | 密 |
| 35 | 陶器　塩壷 | 5.4 | | (5.5) | 内外面回転ナデ　備前系 | 灰褐7.5YR6/2 | 赤橙10R6/6 | 密 |
| 36 | 陶器　塩壷 | | 6.0 | 4.4 | 内外面回転ナデ | 橙2.5YR6/6 | 明赤褐2.5YR5/6 | 密　細砂を含む |
| 37 | 陶器　擂鉢 | 27.0 | | (7.95) | 内外面回転ナデ　卸目　備前系 | 鈍い橙2.5YR6/4 | | 密 |
| 38 | 陶器　擂鉢 | 34.0 | | (3.8) | 内外面回転ナデ　卸目　備前系 | 極暗赤褐2.5YR2/2 | | 密 |
| 39 | 陶器　擂鉢 | 34.9 | | (6.9) | 内外面回転ナデ　卸目　備前系 | 淡赤橙2.5YR7/4 | | 密 |
| 40 | 陶器　擂鉢 | | 15.0 | (8.7) | 胴部下半回転ナデの後にナデ　底部未調整 | 鈍い橙5YR7/4 | 赤橙10R6/6 | 密 |
| 41 | 陶器　擂鉢 | | 17.0 | (8.7) | 内外面回転ナデ　底部回転篦削り後にナデ | 赤褐10R5/4 | 鈍い橙2.5YR6/3 | 密 |
| 42 | 土師質土器　釜 | 19.0 | | (5.8) | 口辺部指押え後にナデ　内面刷毛目 | 褐灰10YR5/1 | 褐灰10YR4/1 | 長石・石英 |
| 43 | 土師質土器　釜 | 11.2 | | (5.3) | 体部外面指押え　口辺部・内面篦ナデ | 褐灰10YR4/1 | 灰白10YR7/1 | 長石 |
| 44 | 土師質土器　釜 | 13.8 | | (4.0) | 口辺部外面篦ナデ　内面刷毛目・ナデ | 灰N5/ | 黄灰2.5Y6/1 | 密 |
| 45 | 土師質土器　焙烙 | 40.6 | | (3.9) | 口縁部横ナデ　体部外面指押え　内面刷毛目 | 褐灰10YR5/1 | 灰白10YR7/1 | 長石 |
| 46 | 須恵質土器　壷 | 53.0 | | (7.6) | 内外面回転ナデ　備前系 | 赤灰10R5/1 | 鈍い赤褐2.5YR5/3 | 密 |

第９図　ＳＤ1002出土遺物（２）（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 47 | 円盤 | (径) 5.4 | | 1.3 | | 瓦 | |
| 48 | 円盤 | 5.0×5.5 | | 1.5 | | 瓦 | |
| 49 | 円盤 | 4.0×4.3 | | 1.5 | | 瓦 | |
| 50 | 円盤 | 5.0×5.5 | | 1.8 | | 瓦 | |
| 51 | 円盤 | 5.9×6.1 | | 1.5 | | 瓦 | |
| 52 | 円盤 | 4.9×5.5 | | 1.5 | | 瓦 | |
| 53 | 丸瓦 | | | | | | 凸面ヘラナデ　凹面ゴザ目 |
| 54 | 軒平瓦 | | | | | | 瓦当部に唐草文 |
| 55 | 加工板 | (42.0) | (5.2) | 1.3 | | | 柾目　側面に抉り2ヶ所　釘穴 |
| 56 | 桶（底板） | (径) 13.5 | | 0.8～1.0 | | | 柾目 |
| 57 | 加工材 | (19.7) | 4.2 | 2.6 | | | 端面を切断　側面に加工 |
| 58 | 加工材 | 15.3 | 3.7 | 1.2 | | | 柾目　明瞭な加工 |
| 59 | 加工板 | 12.0 | 2.5 | 0.7 | | | 柾目　両端を面取り |
| 60 | 桶（底板） | (16.6) | (4.1) | 0.6 | | | 柾目 |

第10図　ＳＤ1002出土遺物（３）（Ｓ：１／４）




第11図　ＳＤ1002出土遺物（４）（Ｓ：１／４）

（第11図）

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 61 | 加工材 | 25.0 | 5.7 | 4.2 | | | 両端を切断 |
| 62 | 加工材 | (24.6) | 4.8 | (3.4) | | | 端部を切断　側面加工 |
| 63 | 加工材 | 23.8 | 2.2 | 1.3 | | | 端部を切断　側面加工 |
| 64 | 加工材 | 24.5 | 1.6 | 1.6 | | | 端部を切断　側面加工 |
| 65 | 加工材 | (12.2) | 3.6 | 1.8 | | | 端部を切断　側面加工　孔を有す　板目 |
| 66 | 加工材 | (11.3) | 2.1 | 1.8 | | | 端部を切断　側面加工　黒漆 |
| 67 | 加工材 | 5.0 | 3.1 | 2.4 | | | 端部を切断　側面加工 |
| 68 | 加工材 | 9.4 | 3.6 | 1.8 | | | 端部を切断　側面加工 |
| 69 | 加工板 | (29.8) | (8.7) | 0.7～1.3 | | | 柾目 |
| 70 | 加工板 | (27.2) | (6.0) | 1.6 | | | 柾目 |
| 71 | 加工板 | 5.9 | 8.0 | 1.1 | | | 両端を切断　柾目 |
| 72 | 加工板 | 3.1 | 5.9 | 1.3 | | | 両端を切断　柾目 |
| 73 | 加工材 | 16.6 | 4.5 | 4.5 | | | 丸木の両端を切断し,1側面のみ加工 |
| 74 | 加工材 | (25.0) | 5.2 | 3.9 | | | 端部を切断,側面加工　焼いている |
| 75 | 加工材 | (8.5) | (径) 1.8 | | | | 4方向から加工 |
| 76 | 加工材 | (10.9) | (径) 2.7 | | | | 端部を切断,枝払い |
| 77 | 加工材 | (16.1) | (径) 6.0 | | | | 先端を2方向から加工 |
| 78 | 加工材 | 6.3 | 3.4 | | | | 丸木の両端を切断 |

27の体部下半は無釉で，高台は方形の断面を呈す。28は蛇の目高台で17世紀中葉のものである。

28は蛇の目高台の湯飲み茶碗であり，外面は青磁である。

29・32は見込みに蛇の目釉ハギが見られ，29は高台に砂目跡が残る。30・31は外反する口縁部をもつ中皿で，31は内面に波文様が見られる。33は肥前系小皿で内面に墨弾きによる波文様が見られ，18世紀前半のものである。34は蛇の目高台で，見込みと畳付に砂目が3ヶ所見られる。

35は肩を張った胴部で備前焼である。36は内外面に回転ナデが施される。

37～39は備前焼擂鉢で，口縁部は上下に拡張し外面に2条の凹線を持ち，全面に卸目が施される。38・39は片口である。18世紀後半のものである。40・41は擂鉢の底部で全面に卸目が施される。40は未調整の平底，41は高台を有する。

42は内面に刷毛目を施し鍔以下に煤が付着する。43は耳を有し，内外面にヘラナデが施される。鍔以下に煤が付着する。44の内面は刷毛目が施される。

45は外面指押え，内面に刷毛目が施され，鍔以下に多量の煤が付着する。

47～52は平瓦を割って円盤状に成形している。

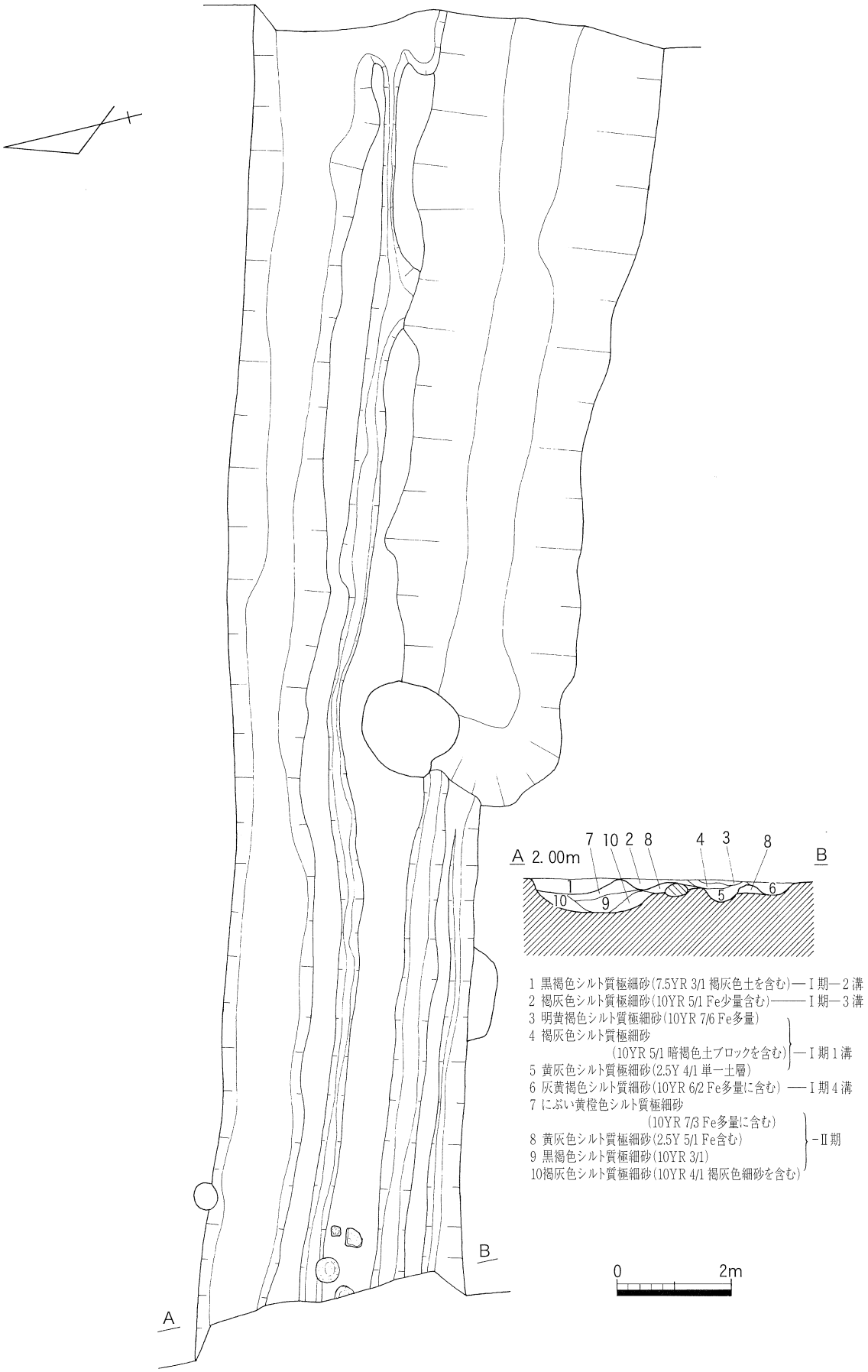
53は孔を有する丸瓦であり，凸面はヘラナデ，凹面はゴザ目が残る。54は内区に唐草文のある軒平瓦である。

55は抉りが2ヶ所あり，側面に小さな釘穴が残る。55・60は桶の底板で，60の側面に加工痕が見られる。35は5面とも加工した断面長方形の加工材であり，側面に抉りがある。断面は切断し，面取りされている。59は木簡状の形を呈し，両端を面取りしている。

61～68は両端を切断し側面を加工した加工材である。62は端面を面取りしている。55は1個の孔を有する。66は2面に黒漆が塗られている。

69～72は板材である。73は4面を面取りする。74は端面を切断しており，上部が焼けている。

75～77は加工された丸木であり，75は4方向から明瞭に加工が施されている。76は下端を切断し，上端を加工しており，枝払いの加工も行われている。77は先端を2方向から明瞭に加工されているが，先端部は未加工である。78は両端を切断し，側面に切断途中痕がある。

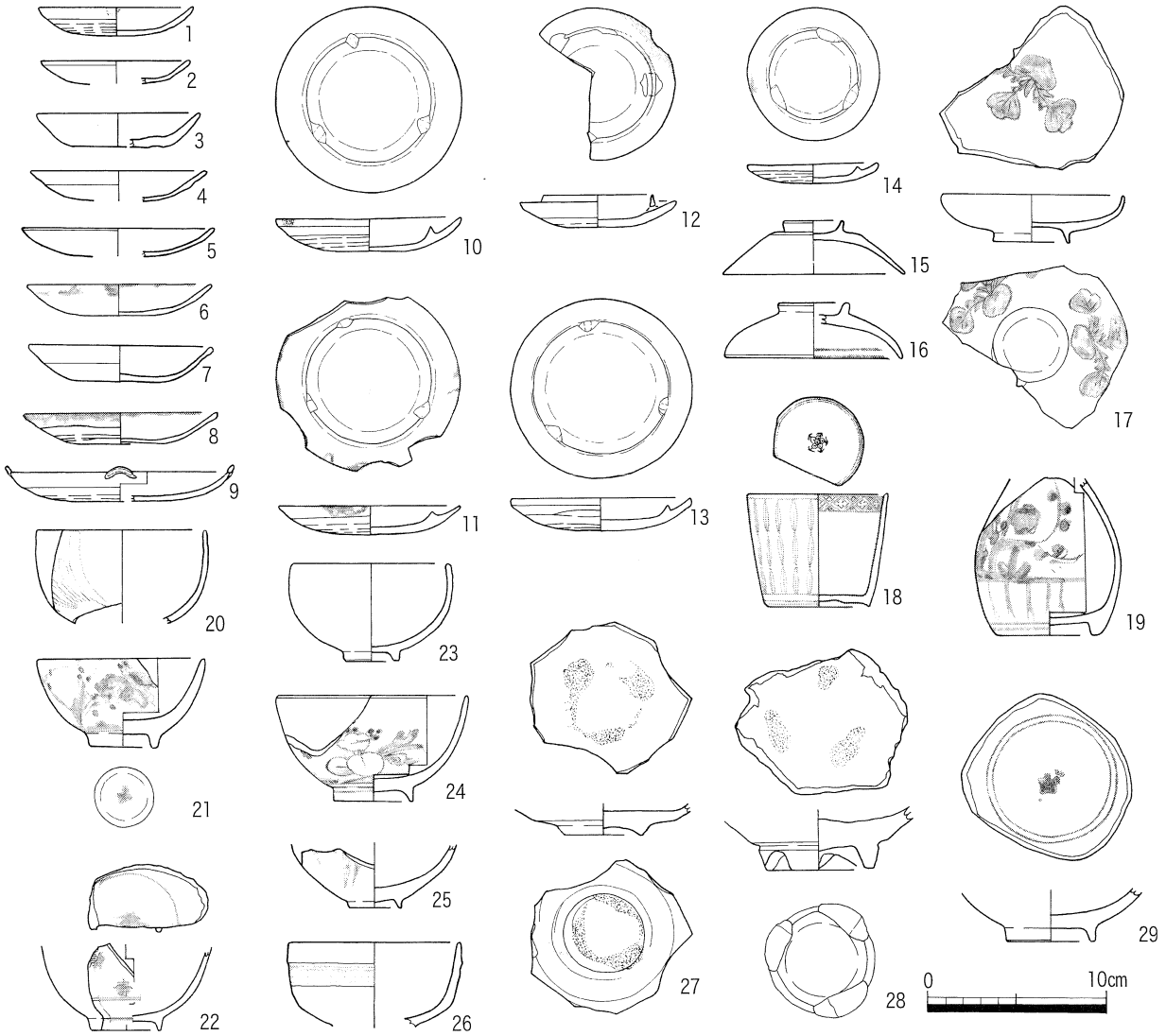



第12図　ＳＤ1003平・断面図（Ｓ：１/100）

ＳＤ1003　（第12～16図）

調査区中央において検出された東西方向に延びる溝であり，東端はＳＤ1001に切られ，ＳＥ1001・ＳＫ1003に切られる。

検出面のレベルは標高1.85mである。溝の方向はW－８°－Nを示す。検出できた溝の全長は23.5m，幅は約4.5mを測る。検出面からの深さは最深部で0.50mである。埋土の堆積状態からこの溝はほとんど時間差のない２時期に分れて埋没したと考えられる。第Ⅰ期は第12図で図化したように４本の溝に分けられる。溝の規模は南側の３本は細いが，北側の溝は幅1.5m，深さ0.25mを測る。第２期は附図１に図化しており，溝の断面は底面に段を持ち北側が深くなっている。底面のレベルはほぼ平坦である。西側において直径0.30～0.40mの石が４個出土した。この溝の中央に検出されたＳＥ1001の東側は，検出全長13.6m，幅３～４mを測る落ち込みが検出された。底面の幅は約１m，深さは0.70mを測り，溝の最深部より深くなっている。断面はU字形を呈する。東側は底面が若干上がっており，溝状のものでないと考えられる。溝の底面を見ると最深部からこの落ち込みに水が流れ込むようになっており，一種の貯水池の機能を持つ遺構であると考えられる。




第13図　ＳＤ1003出土遺物（１）（Ｓ：１／４）

（第13図）

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 灯明皿 | 8.6 | 2.1 | 1.6 | 体部外面回転篦削り　口縁煤付着 | 鈍い橙5YR6/4 | 鈍い赤褐2.5YR5/4 | 密 |
| 2 | 灯明皿 | 8.4 | 5.4 | 1.3 | 体部外面ナデ　底面回転篦切り | 鈍い赤橙10R6/4 | 赤褐10R5/3 | 微砂 |
| 3 | 土師質土器小皿 | 9.2 | 6.0 | 1.9 | 底面回転糸切り後に周辺部ナデ | 灰白10YR8/1 | 灰白7.5YR8/2 | 密 |
| 4 | 灯明皿 | 9.8 | | (1.7) | 体部外面ナデ | 橙2.5YR6/6 | 明赤褐2.5YR5/6 | 密 |
| 5 | 灯明皿 | 10.8 | | (1.6) | 体部外面回転篦削り | 鈍い橙2.5YR6/4 | 灰赤2.5YR4/2 | 密 |
| 6 | 灯明皿 | 10.4 | 4.0 | 1.7 | 体部外面回転篦削り　底面回転糸切り | 鈍い黄褐10YR5/3 | 褐10YR4/4 | 密 |
| 7 | 灯明皿 | 10.4 | 5.2 | 2.0 | 体部外面回転篦削り　底面回転糸切り | 橙5YR7/6 | 赤10R5/6 | 密 |
| 8 | 灯明皿 | 10.8 | 4.4 | 1.7 | 体部外面回転篦削り　底面回転糸切り | 橙5YR7/6 | 赤橙10R6/6 | 密 |
| 9 | 灯明皿 | 12.0 | 4.4 | 1.6 | 体部外面回転篦削り　底面回転糸切り | 赤灰2.5YR5/1 | 灰赤2.5YR4/2 | 密 |
| 10 | 灯明皿 | 10.4 | 4.1 | (2.0) | 体部外面回転篦削り　底面回転糸切り | 赤褐2.5YR4/6 | | 密 |
| 11 | 灯明皿 | 10.1 | | 1.6 | 体部外面回転篦削り　底面回転糸切り | 赤褐10R5/4 | | 密 |
| 12 | 灯明皿 | 8.6 | 3.6 | 1.8 | 底面回転糸切り後周辺回転篦削り | 鈍い赤褐2.5YR5/4 | | 密 |
| 13 | 灯明皿 | 10.0 | | 1.8 | 体部底面回転篦削り | 赤10R5/6 | | 密 |
| 14 | 灯明皿 | 7.4 | | 1.1 | 内外面施釉　底面回転糸切り | 鈍い赤褐2.5YR4/4 | | 密 |
| 15 | 磁器　蓋 | 10.1 | 3.4 | 3.0 | 内外面施釉 | 灰白10Y8/1 | | 微砂 |
| 16 | 磁器　蓋 | 10.0 | 3.8 | (3.1) | 内外面施釉　口縁部内面に直線文 | 透明 | 灰白7.5Y7/1 | 密 |
| 17 | 磁器　蓋 | 10.0 | 4.2 | 2.1 | 内外面施釉　内外面に蕪の染付　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 18 | 磁器　猪口 | 8.0 | 5.8 | 6.3 | 内外面施釉　蛇の目凹形高台　肥前系 | 明緑灰5B7/1 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |
| 19 | 磁器　銚子 | | 5.3 | (8.8) | 外面施釉　草花文の染付 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |
| 20 | 磁器　碗 | 9.4 | | (5.2) | 内外面施釉 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |
| 21 | 磁器　碗 | 9.4 | 3.7 | 5.0 | 内外面施釉　外面に草花文　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白N8/ | 密 |
| 22 | 磁器　碗 | | 3.9 | (4.8) | 内外面施釉　外面「寿」見込み昆虫文様　肥前系 | 明青灰5B7/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 23 | 磁器　碗 | 8.8 | 3.0 | 5.5 | 内外面施釉　高台無釉 | 透明 | 灰白7.5YR8/2 | 微砂 |
| 24 | 磁器　碗 | 10.6 | 4.4 | 5.9 | 内外面施釉　外面に草花文　肥前系 | 明青灰5BG7/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 25 | 磁器　碗 | | 3.0 | (3.6) | 内外面施釉　高台脇以下無釉　京焼風 | 透明 | 灰白5Y7/2 | 密 |
| 26 | 磁器　碗 | 9.8 | | (4.8) | 内外面施釉 | 黒褐10YR3/2 | 灰白5Y8/1 | 密 |
| 27 | 磁器　皿 | | 4.4 | (1.7) | 見込みと高台に砂目 | 鈍い橙2.5YR6/4 | 鈍い橙2.5YR6/4 | 密 |
| 28 | 磁器　皿 | | 6.0 | (3.4) | 見込みに砂目　切高台 | 赤褐10R5/4 | 赤褐10R5/4 | 微砂 |
| 29 | 磁器　碗 | | 4.8 | (2.9) | 見込みに崩れた五弁花文　高台に渦福 | 明オリーブ灰5GY7/1 | 灰白N8/ | 密 |

遺物は，灯明皿（1・2・4～14），土師質土器小皿（3），磁器蓋（15～17），同猪口（18），同銚子（19），同碗（20～26・29・30），磁器皿（27・28・31～34），同鉢（35），陶器土瓶（36・37），磁器壺（38），同盃（39），同蓋（40），須恵質土器壺（41），磁器火入（42～44），磁器花生（45），土師質土器擂鉢（46），陶器擂鉢（47～50），土師質土器土鍋（51），軒丸瓦（52・53），下駄（54），桶（55），加工板（56～59），加工材（60・61）である。

1・2・4～9の灯明皿は器高が低く，薄い器厚である。1の体部外面・底面は回転ヘラ削りが施され，口縁部に煤が付着する。2の底面は回転ヘラ切りであり，周縁にヘラ削りが施される。4の外面はナデである。5の体部外面・底面は回転ヘラ削りが施される。6～9の体部外面は回転ヘラ削り，底面中央は回転糸切り，周縁は回転ヘラ削りが施される。6・8の口縁部に煤が付着する。9は口縁部外面に4個の小さな耳が付く。

10～14は内面に3ヶ所の抉りのある凸帯を有する灯明皿である。10の体部外面は回転ヘラ削り，底面中央は回転糸切り，周縁は切り離し後に回転ヘラ削りが施される。口縁部に1ヶ所煤が付着する。11の体部外面は回転ヘラ削り，底面中央は回転ヘラ切り，周縁は切り離し後に回転ヘラ削りが施される。口縁部内外面に煤が付着する。12は内面に抉りでなく孔を有する。体部外面は回転ヘラ削り，底部中央は回転糸切り，周縁は切り離し後に回転ヘラ削りを施す。口縁部内面に煤が1ヶ所付着する。13の体部外面・底面は回転ヘラ削りが施される。14の外面は回転ヘラ削り，底部中央は回転糸切り，周縁は切り離し後に回転ヘラ削りが施される。

3は器高の低い杯であり，底面は回転糸切り後に周縁にナデが施される。

15は直線状に延びる体部と高い高台の蓋である。16は内湾する体部の蓋であり，口縁部内面に2本の直線文が描かれる。17は肥前系蓋で，内外面に蕪が描かれている。18世紀末～19世紀初めのものである。

18は肥前系猪口であり，蛇の目凹形高台を呈し見込みにコンニャク印判による五弁花文がある。口縁部内面に四方欅文，外面に梵字文のくずし文様が描かれる。18世紀後半～19世紀初め

のものである。17は肥前系蓋で，内外面に蕪が描かれている。

19は外面に草花文の染付の銚子である。

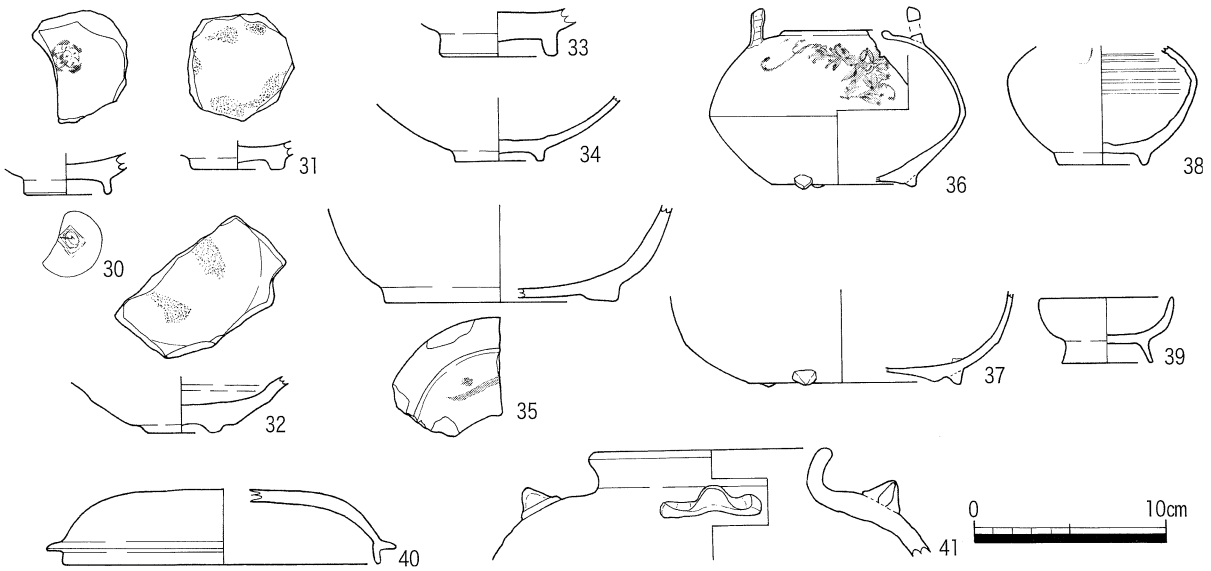
21・24は肥前系碗で外面に草花文を描き，21の高台にコンニャク印判がある。22は肥前系碗で広東碗風である。外面に「寿」，見込みに昆虫文様が描かれ，18世紀後半のものである。25は京焼風碗である。

26の体部は直立し，そのまま口縁部に至る。内面と口縁部外面には灰白色の釉，体部外面には黒褐色の釉がかかっている。

27は見込みと高台に砂目が付着し，ちりめん高台様になっている。28は抉りのある切高台であり，見込みに砂目が付着する。31は蛇の目高台で見込みに砂目が付着する。32はちりめん高台風になっており，見込みに砂目が付着する。34は見込みに蛇の目釉ハギがあり，高台脇以下が無釉である。

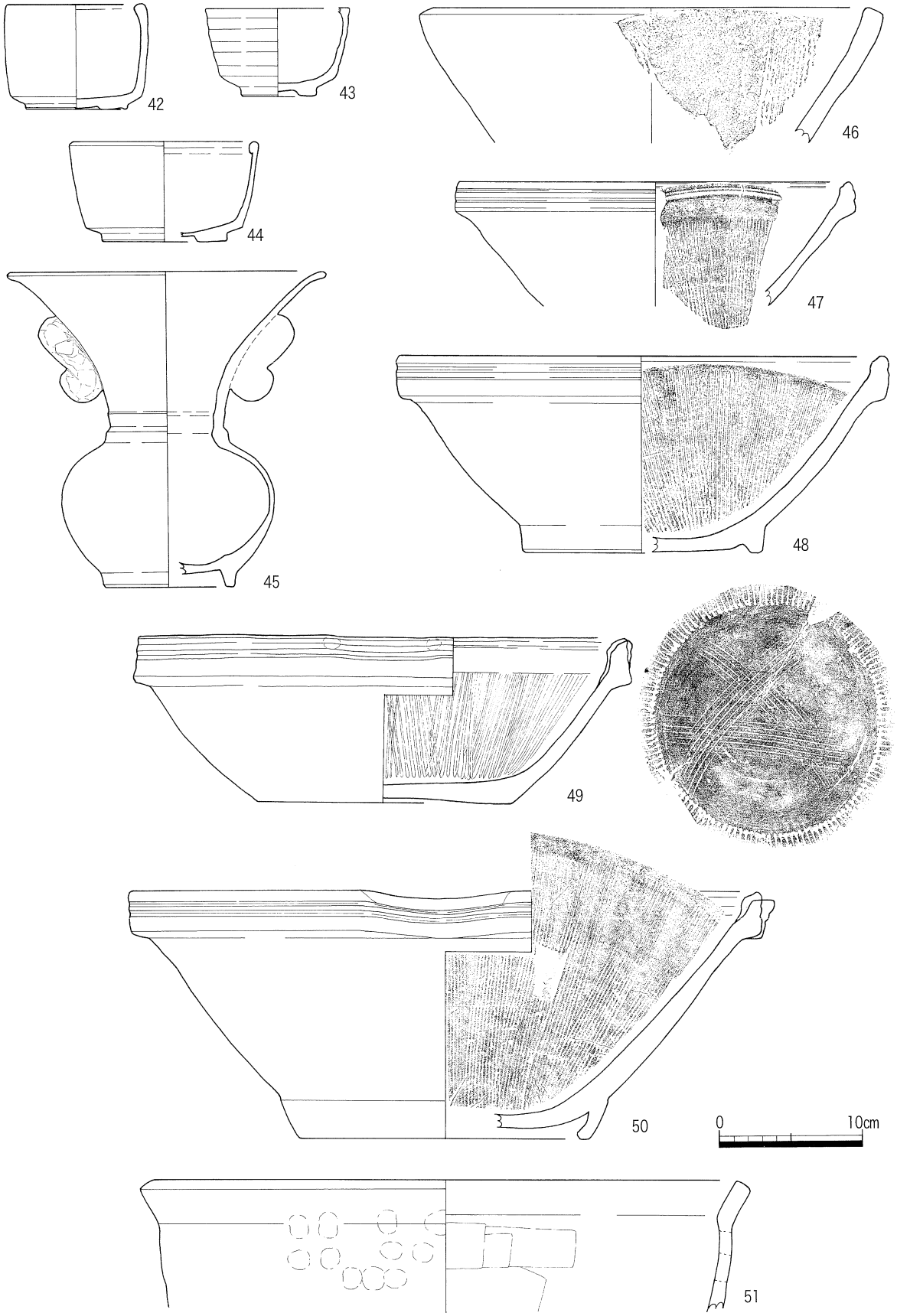
29は見込みに非常にくずれた五弁花文，高台に二重方形枠内の「渦福」が見られる。30は肥前系碗であり，見込みにコンニャク印判による五弁花文，高台に二重方形枠内の「渦福」が見られる。見込みにハリ支えが残存する。

35は蛇の目高台であり，高台脇以下が無釉である。高台に墨書が見られる。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 30 | 磁器　碗 | | 4.4 | (2.2) | 内外面施釉　見込みに五弁花文 高台に渦福 肥前系 | 明緑灰7.5GY7/1 | 灰白N8/ | 精良 |
| 31 | 磁器　皿 | | 4.8 | (1.45) | 内面施釉　蛇の目高台　見込みに砂目 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 灰白10YR8/2 | 密 |
| 32 | 磁器　皿 | | 4.2 | (3.0) | 内面施釉　見込み･高台に砂目 | 灰黄2.5Y6/2 | 鈍い褐7.5YR6/3 | 密 |
| 33 | 磁器　皿 | | 5.8 | (2.4) | 内外面施釉　底面に回転篦削り | 明オリーブ灰5GY7/1 | 灰白N8/ | 密 |
| 34 | 磁器　皿 | | 4.6 | (3.3) | 内外面施釉　蛇の目釉ハギ 高台脇以下無釉 | 灰白5Y7/2 | 灰白N8/ | 密 |
| 35 | 磁器　鉢 | | 12.2 | (5.1) | 内外面施釉　蛇の目高台　高台に墨書 | 灰白5Y7/2 | 灰白2.5Y8/2 | 密 |
| 36 | 陶器　土瓶 | 5.0 | 7.0 | 8.4 | 注口を欠損　内外面施釉　外面に草花文 | 淡水色紺 | 灰白5Y8/ | 密 |
| 37 | 陶器　土瓶 | | 12.2 | (4.9) | 外面上半施釉　底部回転篦削り　外面篦削り後にナデ | 明オリーブ灰5GY7/1 | 灰黄2.5Y7/2 | 密 |
| 38 | 磁器　壷 | | 4.6 | 6.3 | 内外面施釉 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白2.5Y8/1 | 微砂 |
| 39 | 磁器　盃 | 7.0 | 4.6 | 3.5 | 内外面施釉　高台無釉 | 灰白7.5Y8/2 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |
| 40 | 磁器　壷 | 16.8 | | (4.0) | 内外面施釉　内外面回転ナデ | 灰白10Y8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 微砂 |
| 41 | 須恵質土器壷 | 12.8 | | (5.8) | 内外面回転ナデ　耳付着 | 灰白N7/ | 黄灰2.5Y6/1 | 密 |

第14図　ＳＤ1003出土遺物（２）（Ｓ：１／４）




第15図　ＳＤ1003出土遺物（３）（Ｓ：１／４）

（第15図）

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 42 | 磁器　火入 | 9.6 | 7.0 | 6.3 | 外面施釉　蛇の目凹形高台 | 明緑灰10GY7/1 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |
| 43 | 磁器　火入 | 9.8 | 5.2 | 6.1 | 外面施釉　蛇の目高台 | 明緑灰7.5GY7/1 | 灰白N7/ | 密 |
| 44 | 磁器　火入 | 13.2 | 8.6 | 6.95 | 外面施釉　蛇の目高台 | 褐10YR4/6 | 浅黄橙10YR8/3 | 密 |
| 45 | 磁器　花生 | 22.0 | 8.6 | 21.7 | | 暗赤褐2.5Y3/4 | 暗赤褐5YR3/4 | 密 |
| 46 | 土師質土器擂鉢 | 32.0 | | (9.4) | 外面磨滅　内面ナデ　卸目 | 灰白7.5YR8/2 | 灰白2.5Y8/2 | 密 |
| 47 | 陶器　擂鉢 | 27.0 | | (8.6) | 体部外面回転ナデ　内面卸目 | 灰褐5YR6/2 | 鈍い赤褐5YR5/3 | 密 |
| 48 | 陶器　擂鉢 | 33.4 | 16.0 | 13.7 | 体部外面回転ナデ　内面卸目 | 赤褐10R4/3 | 赤褐10R5/3 | 密 |
| 49 | 陶器　擂鉢 | 34.5 | 17.5 | 11.6 | 体部外面回転ナデ　内面卸目　明石焼 | 褐灰7.5YR5/2 | 褐灰7.5YR5/1 | 密 |
| 50 | 陶器　擂鉢 | 43.2 | 20.0 | 17.2 | 体部外面回転ナデ　内面卸目　底部赤彩 | 橙2.5YR6/6 | | 密 |
| 51 | 土師質土器土鍋 | 40.0 | | (9.1) | 体部外面指押え後にナデ　内面板ナデ | 灰白2.5Y8/2 | 灰白2.5Y6/1 | 密 |

36は算盤玉形の体部で，底部に小さな円錐状の脚が３ヶ所に付いている。注口は欠損するが前後に弦用の耳が付く。体部上半に草花文の染付が描かれている。18世紀後半のものである。37は底部に小さな円錐状の脚が３ヶ所に付いており，底部は回転ヘラ削りが施される。内面に「ハリ支え」が残存する。

38は肩部の張った胴部を呈し，内面にロクロ痕が明瞭に残る。畳付は無釉で砂目が付着する。外面に淡青色の染付が描かれる。

39は内湾する体部に細長い高台を持つ。

40は直径16.8cmを測る壺の蓋であり，器高は低い。口縁部のみが無釉である。

41は短く外反する口縁部をもつ壺であり，肩部に４ヶ所の耳を有する。17世紀後半のものである。

42～44は外面を施釉し，内面は露胎である。43は口縁部の上端が水平であり，ロクロ痕を明瞭に残しており，17世紀後半のものである。42・44は口縁部のシャープさがなくなり口縁端部が玉縁状になっている特徴から18世紀前半のものである。

45は球形の胴部に大きく外反する口縁部の花生であり，耳を２個有する。

46は６本単位の卸目を放射状に施される。

47・48・50は備前焼である。49・50はわずかな片口を有する。口縁部は上下に拡張し，外面に２条の凹線を有し，内面全面に９本前後単位の卸目が施される。50は貼り付け高台である。49の内面にいわゆる「ウールマーク」状の卸目が見られることと高台がないことから18世紀後半以降の明石焼である。

51は口縁部が若干外反し，胴部外面に指押え，内面に，ヘラナデが施される。

52・53は道具瓦の軒丸瓦である。

54は一本作りの庭下駄であり，左半分と後部を欠損する。

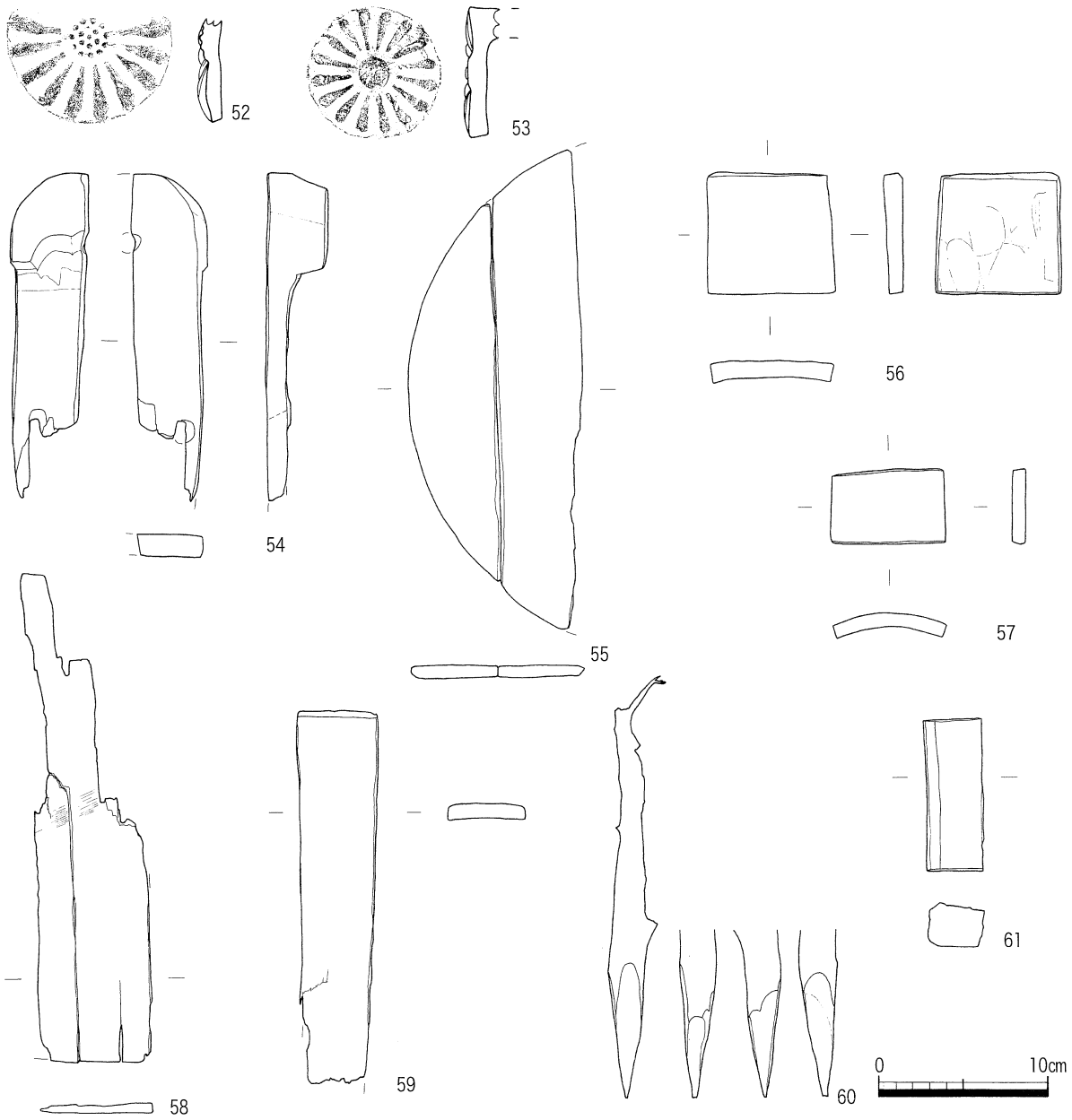
55は桶の底板である。

56・57は湾曲する板材であり，４面の側面を切断している。湾曲する内側の面に加工痕が明瞭に残る。

58・59は加工板であり，59は桶材である。

60は先端部を４方向から明瞭に加工して尖らした杭である。

61は丸木の両端を切断した後に断面長方形に面取りしている。




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 52 | 軒丸瓦 | | | 1.4 | | | 道具瓦 |
| 53 | 軒丸瓦 | | | 1.9 | | | 道具瓦 |
| 54 | 庭下駄 | 19.3 | 4.0 | 1.2 | | 木 | 柾目 |
| 55 | 桶（底板） | （径）28.2 | | 0.6～0.8 | | 木 | 柾目 |
| 56 | 加工板 | 7.2 | 7.6 | 1.0 | | 木 | 内面に加工痕が残る　板目 |
| 57 | 加工板 | 4.4 | 6.8 | 0.8 | | 木 | 柾目 |
| 58 | 加工板 | 29.0 | 6.8 | 0.6 | | 木 | 柾目 |
| 59 | 加工板 | 22.0 | 4.8 | 0.9 | | 木 | 柾目　桶材 |
| 60 | 加工材 | 24.7 | （径）2.2 | | | 木 | 先端を4方向から加工 |
| 61 | 加工材 | 9.0 | 3.3 | 2.6 | | 木 | 丸木を加工して四角形に面取る　両端を切断する |

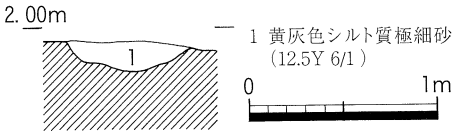
第16図　ＳＤ1003出土遺物（４）（Ｓ：１／４）

ＳＤ1004　（第17・18図）

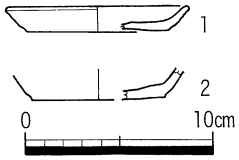
調査区中央の西端において検出された東西方向の溝であり，ＳＫ1003の西側に位置する。

確認面のレベルは標高1.95mである。検出できた溝の全長は約5.0m，幅は0.60～1.25m，深さは10cmを測る。断面は浅いＵ字形を呈する。溝の東端は方形の土坑につながっている。土坑は長軸1.70m，短軸1.10m，深さ0.42mを測る。溝の底面のレベルは西方向にゆるやかに低くなっている。埋土は黄灰色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は，土師質土器小皿（１），同杯（２）である。




第17図　ＳＤ1004断面図
（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質小皿 | 9.4 | 7.4 | 1.3 | 内外面回転ナデ　底面切り離し後にナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 2 | 土師質杯 | | 7.0 | (1.6) | 内外面回転ナデ　底面回転篦削り | 橙5YR6/6 | 灰白7.5YR8/1 | 細砂 |

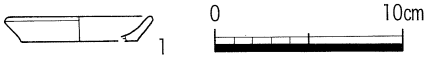
第18図　ＳＤ1004出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ1005　（第19図）

調査区北西側において検出された東西方向の溝であり，ＳＫ5011・5012の西側に位置する。

確認面のレベルは標高1.95mである。検出できた溝の全長は3.70m，幅は0.30m，深さは５cmを測る。断面は深いＵ字形を呈する。底面のレベルは平坦である。埋土は黄灰色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は，土師質土器小皿（１）である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 7.4 | 6.0 | 1.3 | 内外面回転ナデ　底面ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微砂 |

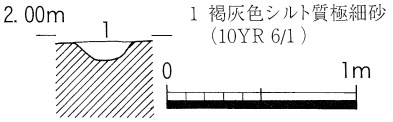
第19図　ＳＤ1005出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ1006　（第20・21図）

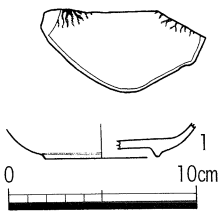
調査区北西側において検出された溝であり，ＳＫ5012・5016に切られている。ＳＤ5007・5008とほぼ平行する。

確認面のレベルは標高1.98mである。溝の方向はＮ－10°－Ｅである。検出できた溝の全長は約7.00m，幅は0.30m，深さ９cmを測る。溝の断面はＵ字形を呈する。溝の北側は延長していたと思われるが，後世の削平により消滅している。溝の南端はＳＫ5012につながっている。溝底面のレベルは南方向にゆるやかに低くなっている。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は磁器皿（１），若干の磁器片である。１は内外面に施釉し，畳付のみ無釉である。見込みに青色の染付が描かれる。19世紀前半のものである。




第20図　ＳＤ1006断面図
（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　皿 | | 6.0 | (1.8) | 内外面施釉 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |

第21図　ＳＤ1006出土遺物（Ｓ：１/４）

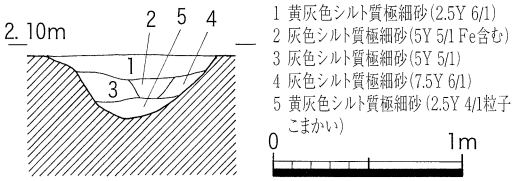
ＳＤ1007　（第22・23図）

調査区北側において検出された溝であり，ＳＤ5006とＳＤ5008の中間に位置する。

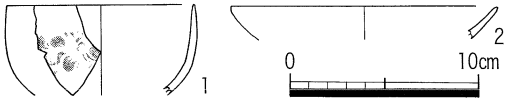
確認面のレベルは標高1.95mである。溝の方向はＮ－10°－Ｅである。検出できた溝の全長は約8.00m，幅は0.50～0.90m，深さは0.30mを測る。断面はＵ字形を呈し，底面のレベルは北方向にゆるやかに低くなる。溝の南端はＳＫ5013につながっている。埋土は５層に細分できる。

遺物は磁器碗（１），同皿（２），磁器片である。

１は型紙摺であり，全面に貫入が見られる。２は内外面施釉の皿である。




第22図　ＳＤ1007断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 10.0 | | (4.75) | 内外面施釉　型紙摺 | 明オリーブ灰5GY7/1 | 灰白2.5Y8/1 | 密 |
| 2 | 磁器　皿 | 14.0 | | (1.8) | 内外面施釉 | 透明 | 灰白10Y8/1 | 密 |

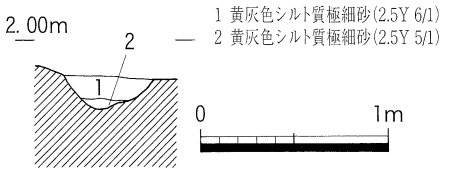
第23図　ＳＤ1007出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ1008　（第24・25図）

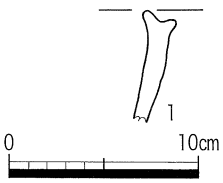
調査区北側において検出された溝であり，ＳＤ5007の東側に位置し，ＳＫ1002に切られる。

確認面のレベルは標高1.85mである。溝の方向はＮ－10°－Ｅである。検出できた溝の全長は10.8m，幅0.50～0.60m，深さ0.20mを測る。断面はＵ字形を呈す。底面のレベルは北方向にゆるやかに低くなる。埋土は２層に分けられるが，差異はほとんどない

遺物は，土師質土器羽釜（１），磁器片である。１は外面に煤が付着している。




第24図　ＳＤ1008断面図（Ｓ：1/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器羽釜 | 32.0 | | (5.9) | 内面ナデ　外面指押え後にナデ　煤 | 灰褐7.5YR6/2 | 灰白10YR8/2 | 粗砂 |

第25図　ＳＤ1008出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ1009

調査区中央において検出された溝であり，溝の方向はＷ－８°－ＮでＳＤ1003に平行する。検出長約7.70m，幅0.20～0.65m，深さ４cmを測る。溝の断面はＵ字形を呈する。埋土は黄灰色シルト質極細砂の単一層である。遺物は数点の磁器片のみである。

ＳＤ1010

調査区南側において検出された溝であり，方向は東西である。検出長は約2.20m，幅0.40m～0.60m深さ10cmを測る。確認面のレベルは標高1.83mである。溝の断面はＵ字形を呈する。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。遺物は数点の磁器片のみである。

ＳＤ1011

調査区中央において検出された溝であり，ＳＤ1003と平行する。検出長は約3.10m，幅0.15m，深さ６cmを測る。埋土は黄灰色シルト質極細砂である。遺物は出土しなかった。

2　井戸

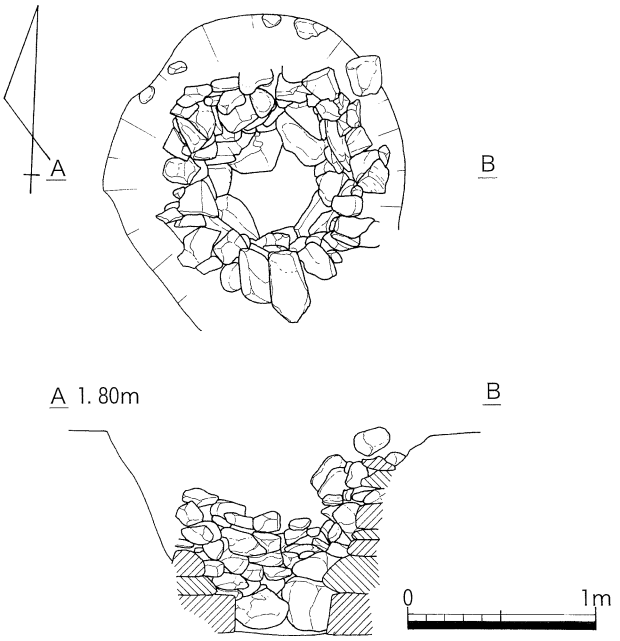
ＳＥ1001　（第26～29図）

調査区中央において検出された井戸であり，ＳＤ1003を切っている。

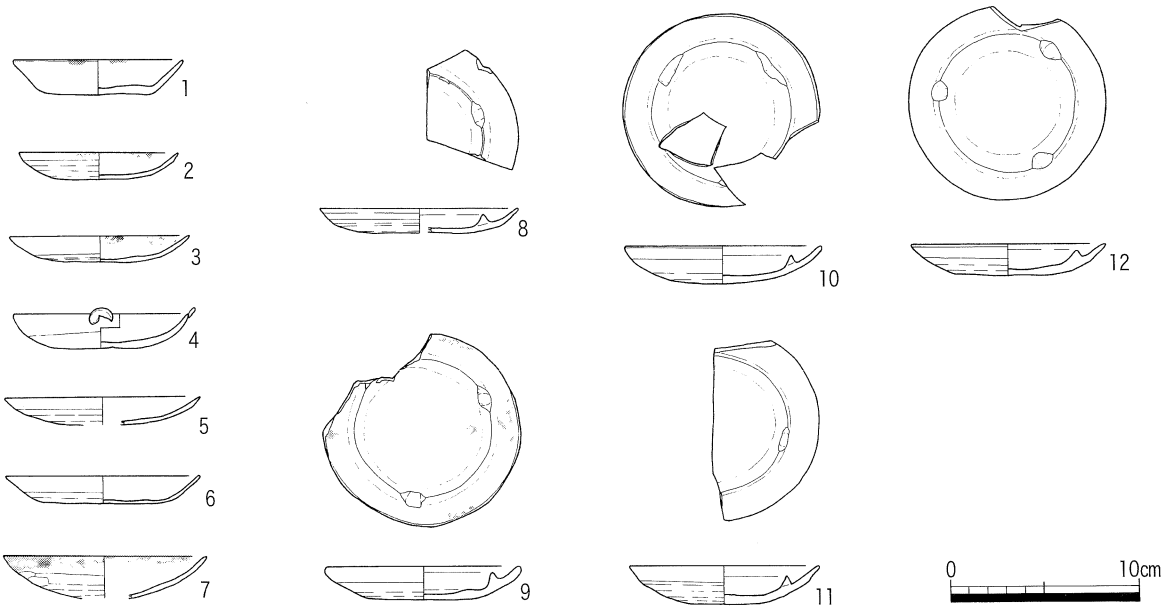
検出面のレベルは標高1.80mである。掘り方の規模は直径1.60mを測り，河原石を円形に積み上げて側壁としている。底面までの深さは1.10m，直径は0.40mである。

河原石は下方になるにしたがい規模の大きな石を積んでおり，側壁は上方に広がっている。井戸の底面は砂礫層を掘り込んでおり，調査時にも湧水があった。

遺物は，灯明皿（１～12），磁器碗（13～18），同皿（19～20），陶器擂鉢（22～23），土師質土器擂鉢（24），同焙烙（25），軒平瓦（26），加工材（27），加工板（28～30）である。




第26図　ＳＥ1001平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 灯明皿 | 9.0 | 4.9 | 1.9 | 内外面回転ナデ　底面　回転切り後にナデ　煤付着 | 灰白2.5Y8/2 | 灰白2.5Y8/1 | 密 |
| 2 | 灯明皿 | 8.6 | 3.2 | 1.4 | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り　煤付着 | 鈍い橙5YR7/3 | 鈍い赤褐2.5YR5/3 | 密 |
| 3 | 灯明皿 | 9.6 | | 1.4 | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り　煤付着 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 鈍い褐7.5YR6/3 | 密 |
| 4 | 灯明皿 | 9.4 | 4.0 | 1.9 | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り　耳 | 鈍い赤橙10R6/4 | 鈍い赤褐2.5YR5/4 | 密 |
| 5 | 灯明皿 | 5.3 | | (1.5) | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り | 鈍い赤褐10R6/3 | | 密 |
| 6 | 灯明皿 | 10.4 | 5.0 | 1.45 | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り | 褐灰5YR6/1 | 灰褐5YR5/2 | 密 |
| 7 | 灯明皿 | 10.8 | | (2.3) | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り　煤付着 | 鈍い橙2.5YR6/3 | 赤褐10R5/3 | 密 |
| 8 | 灯明皿 | 10.6 | | (1.3) | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り | 灰5Y5/1 | 褐灰10YR5/1 | 密 |
| 9 | 灯明皿 | 10.6 | 5.4 | 1.8 | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り　煤付着 | 鈍い赤7.5R4/4 | | 密 |
| 10 | 灯明皿 | 10.4 | 2.0 | 2.0 | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り　煤付着 | 鈍い橙2.5Y6/3 | 鈍い橙2.5Y6/4 | 密 |
| 11 | 灯明皿 | 10.0 | 3.6 | 2.0 | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り　煤若干 | 鈍い赤橙10R6/3 | 赤褐10R5/4 | 密 |
| 12 | 灯明皿 | 10.3 | 4.4 | 1.6 | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り　煤付着 | 赤褐10R5/4 | | 密 |

第27図　ＳＥ1001出土遺物（１）（Ｓ：１/４）

1は土師質土器であり，形態的には杯であるが口縁部内外の3ヶ所に煤が付着しているため灯明皿とした。底面は回転糸切り後にナデが施される。2～7は器高が低く器厚の薄いタイプの灯明皿である。内外面とも回転ナデ，体部外面は回転ヘラ削りが施される。4の口縁部外面に小さな耳が付く。8～12は内面に3ヶ所の抉りのある凸帯を有するタイプの灯明皿であり，調整は前者と同様である。口縁部に煤が付いている。

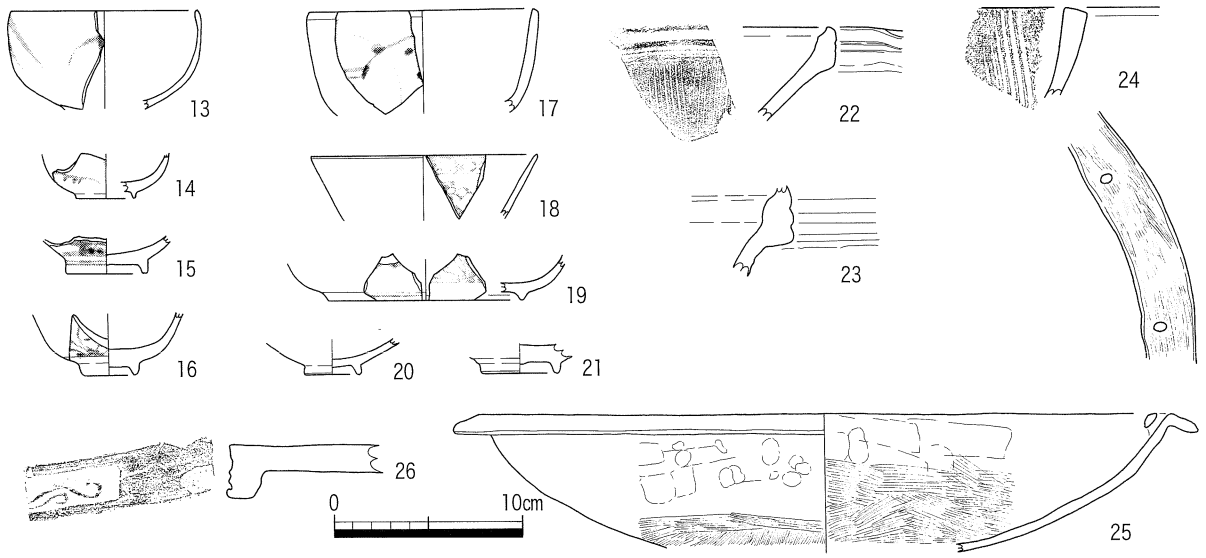
13は薄手で丸形の碗であり，外面に朱色，緑色の染付が描かれ，高台付近は無釉である。18世紀のものである。14は肥前系碗であり，小さな高台である。外面にくずれた唐草文が描かれる。15・16は肥前系碗であり，外面に草花文を描く。17は厚手のくわらんか碗であり，外面に染付がある。18世紀末のものである。18は直線的に広がる体部の肥前系碗である。口縁部内面に四方欅文を巡らし，その下に草花文が描かれている。18世紀後半のものである。

19は肥前系皿であり，高台の径は大きい。内外面に草花文が描かれている。20は高台脇以下に釉がかかっていない。

22・23は口縁部が上下に拡張し，外面に2上の凹線を有することから18世紀後半のものである。卸目は全面に施される。24は6本単位の卸目である。

25は口縁部外面ヨコナデ，内面刷毛目，体部外面指押え，刷毛目，内面ヘラナデ，刷毛目が施される。外面に煤，煮こぼれが多量に付着する。

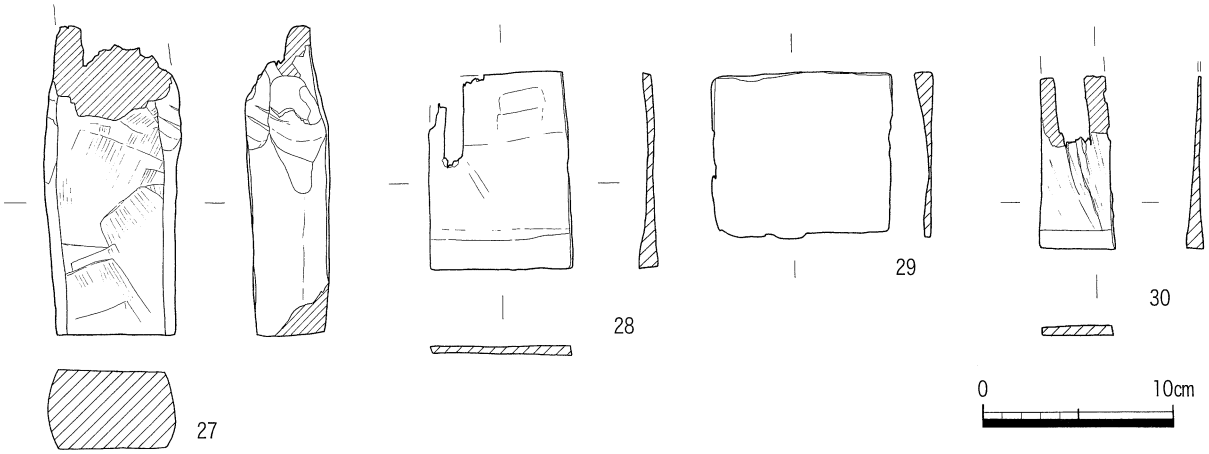
27は丸木を2面加工し断面長方形にした加工材であり，平坦面に明瞭な加工痕が残り，側面には枝払い痕が残る。28～30は1方の端部を厚くしている板材である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外（釉） | 内（素地） | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 磁器　碗 | 9.8 | | (5.2) | 内外面施釉　外面に朱色・緑色の染付 | 灰白5Y8/2 | 灰白2.5Y8/2 | 密 |
| 14 | 磁器　碗 | | 3.0 | (2.4) | 内外面施釉　外面に染付　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白N8/ | 精良 |
| 15 | 磁器　碗 | | 4.1 | (2.0) | 内外面施釉　外面草花文　貫入　肥前系 | 灰白10Y8/1 | 灰白2.5Y8/1 | 精良 |
| 16 | 磁器　碗 | | 2.6 | (3.3) | 内外面施釉　外面草花文　肥前系 | 灰白7.5Y7/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 17 | 磁器　碗 | 12.0 | | (5.4) | 内外面施釉　外面に染付 | 灰オリーブ7.5Y6/2 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 密 |
| 18 | 磁器　碗 | 12.0 | | (3.4) | 内外面施釉　内面四方欅文　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白N8/ | 精良 |
| 19 | 磁器　皿 | | 10.4 | (2.5) | 内外面施釉　内外面草花文　肥前系 | 透明 | 灰白N8/ | 精良 |
| 20 | 磁器　皿 | | 3.0 | (1.85) | 内外面施釉　高台脇以下無釉　肥前系 | 透明 | 灰白10YR8/2 | 密 |
| 21 | 磁器　皿 | | 4.2 | (1.6) | 内外面施釉 | 明緑灰10G7/1 | 灰白N8/ | 密 |
| 22 | 陶器　擂鉢 | | | (5.0) | 内外面ナデ　卸目　片口 | 鈍い橙5YR7/3 | 橙2.5YR7/6 | 密 |
| 23 | 陶器　擂鉢 | | | (4.8) | 内外面ナデ　卸目 | 淡赤橙2.5YR7/3 | 灰黄褐10YR5/2 | 密 |
| 24 | 土師質土器擂鉢 | | | (4.8) | 内外面ナデ　卸目 | 鈍い橙7.5YR7/3 | | 細～粗砂 |
| 25 | 土師質土器焙烙 | 36.6 | | (7.4) | 体部外面指押え・刷毛目　内面篦ナデ・刷毛目 | 灰黄褐10YR5/2 | | 微～細砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 26 | 軒平瓦 | | | | | | 唐草文 |

第28図　ＳＥ1001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 27 | 加工材 | (16.4) | 7.1 | 4.2 | | | 丸木を切断し,2面加工する |
| 28 | 加工板 | 10.4 | 7.5 | 0.3～1.0 | | | 片端が厚くなっている　柾目 |
| 29 | 加工板 | 8.7 | 9.5 | 0.1～1.0 | | | 片端が厚くなっている　柾目 |
| 30 | 加工板 | (9.15) | 3.4～4.0 | 0.2～0.9 | | | 片端が厚くなっている　柾目 |

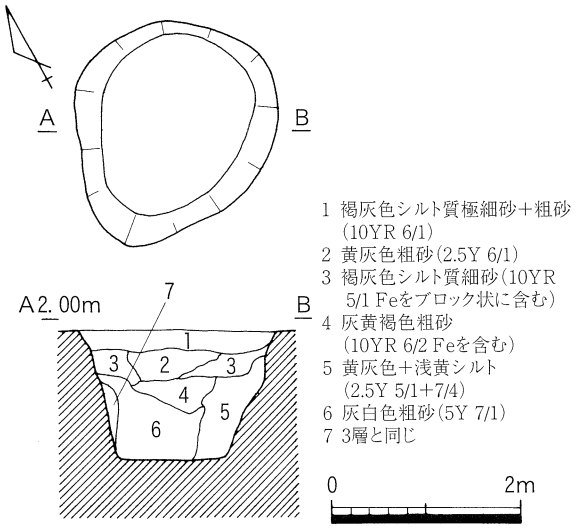
第29図　ＳＥ1001出土遺物（３）（Ｓ：１／４）

ＳＥ1002　（第30・32・41図）

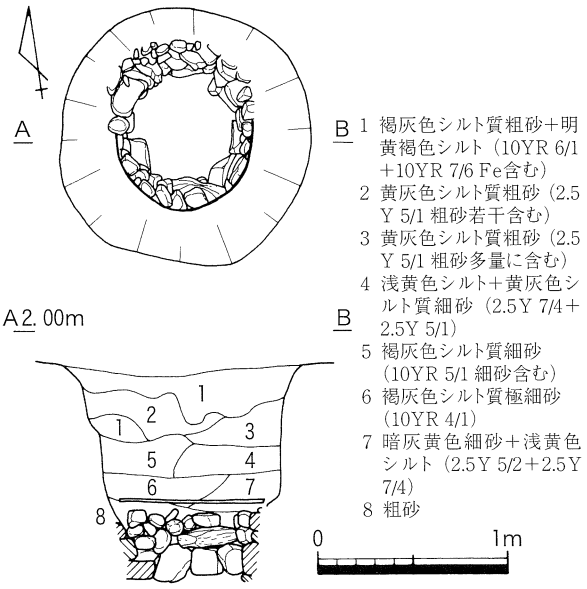
調査区北側において単独で検出された素掘りの井戸である。

検出面のレベルは標高1.90mである。井戸の平面形は南西側にやや膨れた不整な楕円形を呈し，長軸2.50m，短軸2.15mを測る。底面の深さは検出面から約1.40mである。底面の平面形は上場と同様に不整な楕円形を呈し，長軸2.00m，短軸1.60mを測る。底面は平坦である。井戸は砂層を掘り込んだ素掘りであり，側壁は非常にくずれやすくなっている。埋土は７層に細分されるが，その堆積状態は不自然であり人為的に埋め戻されたと考えられる。他の井戸は河原石を積んで側壁としているのに対し，この井戸には河原石がなく素掘りである事と堆積状態から，この井戸は何らかの理由により作成途中で廃棄されたと考えられる。

遺物は数点の陶磁器片と加工板（１～３），丸瓦（第41図12）である。




第30図　ＳＥ1002平・断面図（Ｓ：１/80）




第31図　ＳＥ1003平・断面図（Ｓ：１/40）

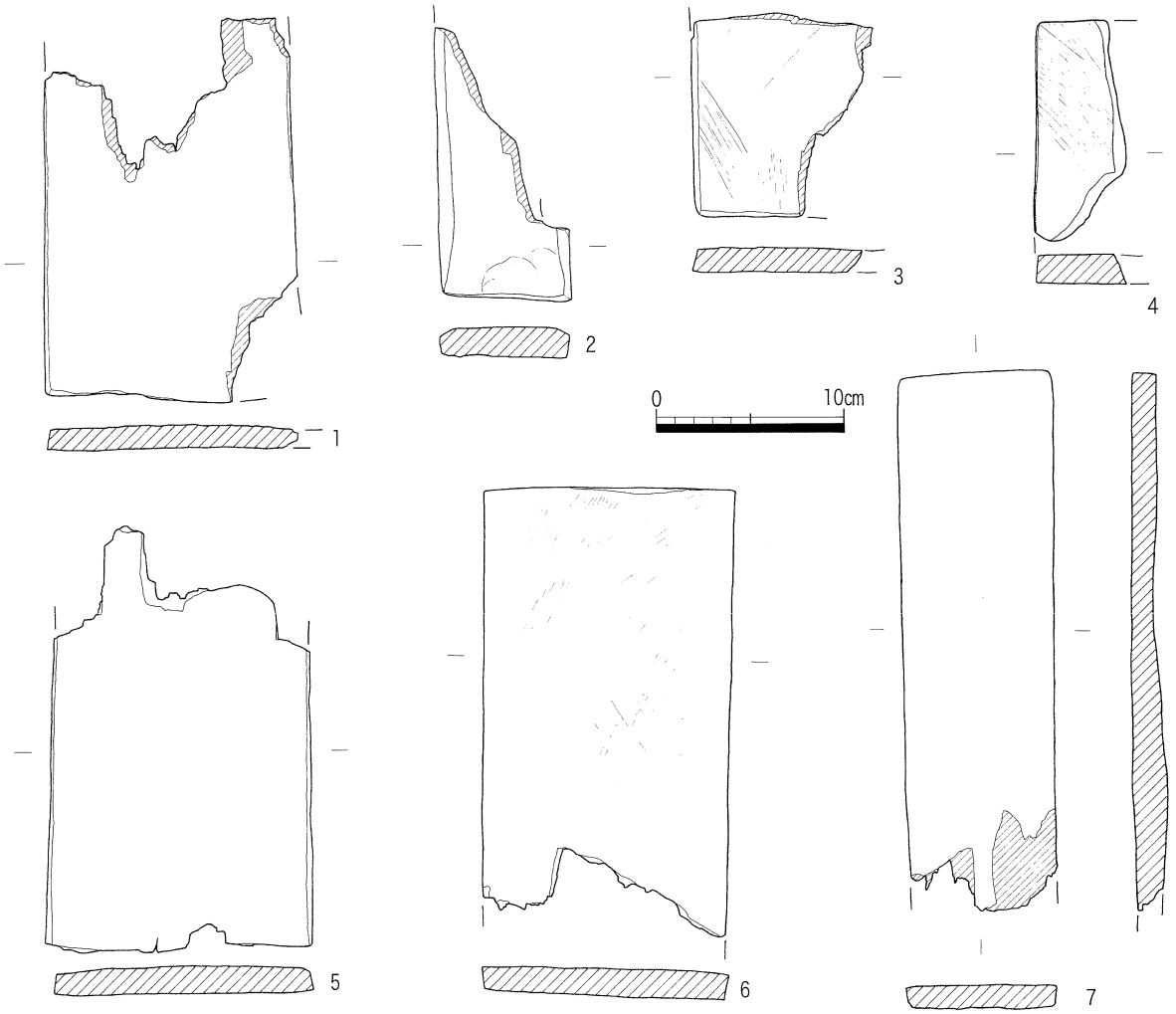
ＳＥ1003　（第31・32図）

調査区の北東において検出された井戸であり，ＳＥ1002の西側に位置する。

検出面のレベルは標高1.85mである。掘り込みの上場の平面形は円形を呈し，直径は1.30mを測る。検出面から底面までの深さは約1.15mである。底面の直径は0.50mである。底面から上へ0.40mまでには，河原石を３段積み上げた側壁が残存する。河原石は最下位に大きな石を使用し，上位はやや小さめな石を不規則に積み上げている。河原石による側壁の直上には，木製の井戸枠の箍である竹が残存する。埋土は８層に分層され，その堆積状態は人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。河原石の間からは湧水が調査時にも出ていた。

この井戸は，くずれにくいシルト層の部分に素掘りと木製の井戸枠，その下位の砂礫層部分には河原石の側壁という３構造になっている。

遺物は，数点の陶磁器片と加工板（４～７）であるが，図化できた陶磁器はない。４～７は完全な形を残すものはないが，井戸枠の板である。




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 加工板 | (20.4) | 13.4 | 1.2 | | | 上位は節がある　内外面に加工痕　柾目 |
| 2 | 加工板 | (14.6) | 6.9 | 1.6 | | | 板目 |
| 3 | 加工板 | 10.9 | 9.6 | 1.3 | | | 鋭角な加工　柾目 |
| 4 | 加工板 | 11.7 | 4.7 | 1.6 | | | 柾目 |
| 5 | 加工板 | 22.6 | 14.2 | 1.4 | | | 柾目 |
| 6 | 加工板 | 28.8 | 13.1 | 1.5 | | | 表裏面に加工痕　板目 |
| 7 | 加工板 | 28.8 | 8.1 | 1.1～1.8 | | | 全面を加工，節部分は丁寧な加工　柾目 |

第32図　ＳＥ1002，1003出土遺物（Ｓ：１／４）

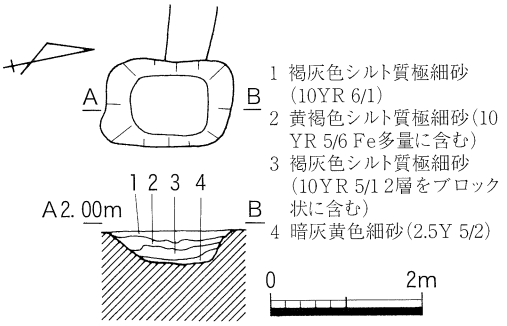
3　土坑

ＳＫ1001　（第33・34図）

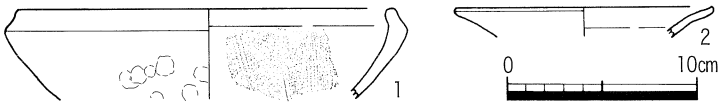
調査区中央の西寄りにおいて検出された土坑であり，ＳＤ1004を切っている。

検出面のレベルは標高1.90mである。平面形は隅丸長方形を呈し，長辺は約1.70m，短辺は約1.10m，深さ約0.40mを測る。底面は平坦である。埋土は４層に分層でき，レンズ状堆積である。

遺物は土師質土器擂鉢（１），磁器皿（２），数点の磁器片である。１は卸目を放射状に施した擂鉢である。２の体部外面は釉がかかっていない。




第33図　ＳＫ1001平・断面図（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師質土器擂鉢 | 20.0 | | (4.8) | 口縁部外面横ナデ　体部外面指押えナデ　卸目 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 鈍い黄橙10YR7/4 | 粗砂 |
| 2 | 磁器　皿 | 13.4 | | (1.6) | 内外面回転ナデ　内面と口縁部は施釉 | 灰オリーブ5Y5/2 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 密 |

第34図　ＳＫ1001出土遺物（Ｓ：１／４）

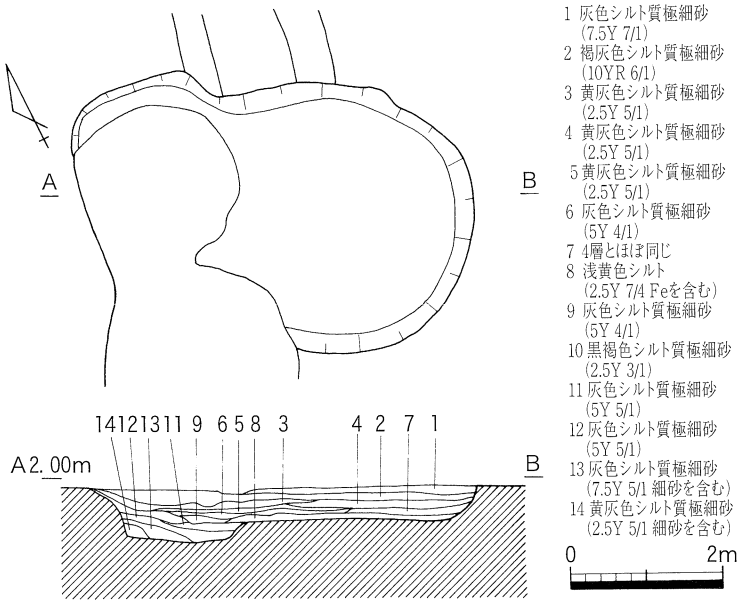
ＳＫ1002　（第35・36図）

調査区中央において検出された土坑であり，ＳＤ1008・ＳＫ1003を切った状態である。

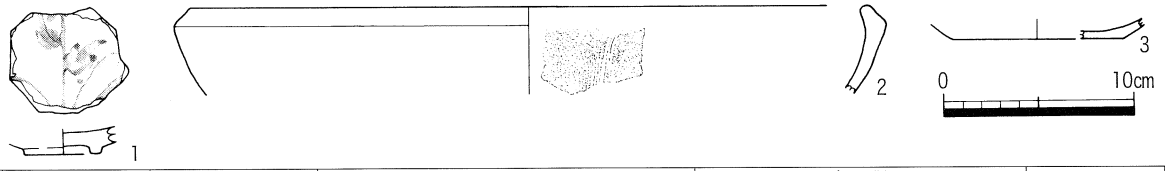
検出面のレベルは標高1.90m前後である。平面形は長軸を東西方向に有する不整な楕円形を呈し，長軸約5.50m，短軸約3.60m，深さ0.43mを測る。掘り込みは急傾斜である。底面はほぼ平坦である。埋土は11層に分層され，レンズ状堆積をなしている。各土層の厚さは非常に薄い。

遺物は，磁器皿（１），土師質土器擂鉢（２），同杯（３），その他の陶磁器片である。

１は蛇の目高台で内面に草花文が描かれている。18世紀後半のものである。２は卸目を放射状に施す。３は平底の杯である。




第35図　ＳＫ1002平・断面図（Ｓ：１/100）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　皿 | | 3.9 | (1.4) | 内外面回転ナデ　内面施釉　蛇の目高台　草花文 | 灰オリーブ5Y5/2 | 灰黄褐10YR6/2 | 密 |
| 2 | 土師質土器擂鉢 | 38.0 | | (4.8) | 外面ナデ　内面回転ナデ　卸目 | 黄灰2.5Y7/2 | 灰黄褐10YR6/2 | 細礫 |
| 3 | 土師質土器杯 | | 9.0 | (1.05) | 内外面磨滅のため調整は不明 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 浅黄橙7.5YR8/4 | 微砂 |

第36図　ＳＫ1002出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＫ1003　（第37・38図）

調査区中央でＳＫ1002に切られた状態で検出された土坑であり，ＳＤ1003を切っている。

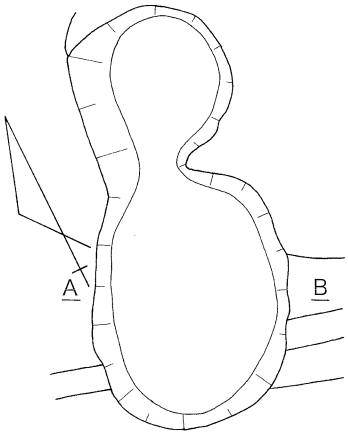
検出面のレベルは標高1.90ｍである。平面はくびれの入った楕円形を呈し，2基の円形土坑がつながっている可能性もある。南北方向の長軸は5.60ｍ，短軸は約2.60ｍ，深さ0.75ｍを測る。北側の短軸は2.00ｍである。南側の底面は北側より約４㎝低くなっているが，それぞれの底面はほぼ平坦である。掘り込みはほぼ垂直である。埋土は13層に分層され，自然堆積であるレンズ状堆積をなしている。

遺物は，須恵質土器擂鉢（１），土師質土器羽釜（２・３・５・６），同土鍋（４），加工材（７），その他の陶磁器片である。

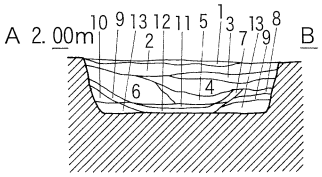
１は４本単位の卸目を放射状に施した擂鉢で内面に刷毛目，底面にはヘラ削りが施される。

２は口縁部が拡張し，3は口縁部外面に拡張する。５・６はていねいなヘラナデを施す脚部である。４は口縁部がわずかに屈曲する。

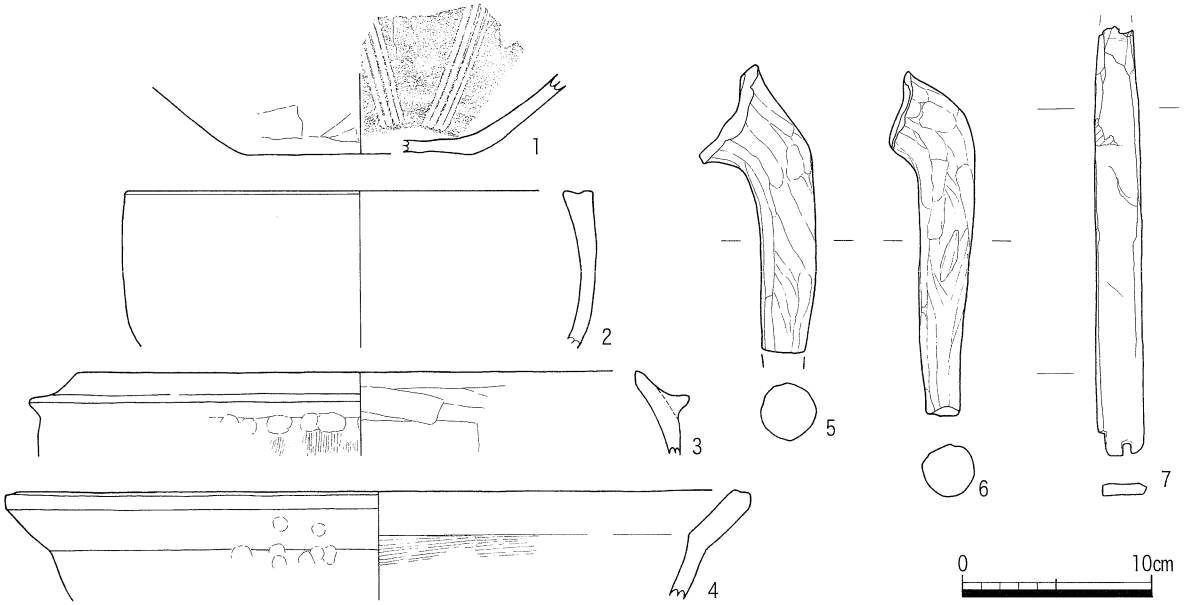
７は端面に抉りを有する加工材である。




1 黄灰色シルト質細砂（2.5Y 6/1）
2 黄灰色シルト質細砂＋明黄褐色シルト質細砂（2.5Y 6/2 10YR 6/6 Fe多量）
3 黄灰色シルト質極細砂（2.5Y 5/1地山ブロックFe少量）
4 黄灰色シルト質極細砂（2.5Y 5/1地山ブロックFe多量）
5 褐灰色＋褐灰色シルト質極細砂（10YR 5/1＋10YR 3/1）
6 4層とほぼ同じ
7 灰黄色シルト質極細砂（2.5Y 7/2）
8 にぶい黄橙色シルト質極細砂（10YR 6/3 Fe少量）
9 黄灰色シルト質極細砂（2.5Y 4/1 Fe少量）
10 浅黄色シルト質極細砂＋灰白細砂（2.5Y 7/3+7/1）
11 灰オリーブ色細砂（5Y 6/2）
12 灰色シルト質極細砂（5Y 5/1）
13 暗灰黄色シルト質極細砂（2.5Y 5/2細砂を含む）



第37図　ＳＫ1003平・断面図（Ｓ：１/100）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵質土器擂鉢 | | 12.0 | (4.2) | 外面ナデ，篦ナデ　内面刷毛目，ナデ　底面篦削り | 灰白N7/ | | 微～細砂 |
| 2 | 土師質土器羽釜 | 21.4 | | (8.4) | 外面指押え後にナデ　内面板ナデ | 灰白10YR7/1 | 灰白10YR8/1 | 細礫 |
| 3 | 土師質土器羽釜 | 29.6 | | (4.5) | 口縁部横ナデ　外面指押え後に刷毛目　内面篦ナデ | 鈍い黄橙10YR6/3 | 黒褐10YR3/1 | 細礫 |
| 4 | 土師質土器土鍋 | 39.4 | | (5.8) | 外面指押え，ナデ　内面板ナデ，刷毛目 | 黒褐5YR3/1 | 灰白7.5YR8/2 | 粗砂～細礫 |
| 5 | 土師質土器羽釜 | | | | 篦ナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 6 | 土師質土器羽釜 | | | | 篦ナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 粗砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 加工材 | (22.9) | 2.4 | 0.8 | | | 全面に加工痕　端部に抉り　板目 |

第38図　ＳＫ1003出土遺物（Ｓ：１/４）

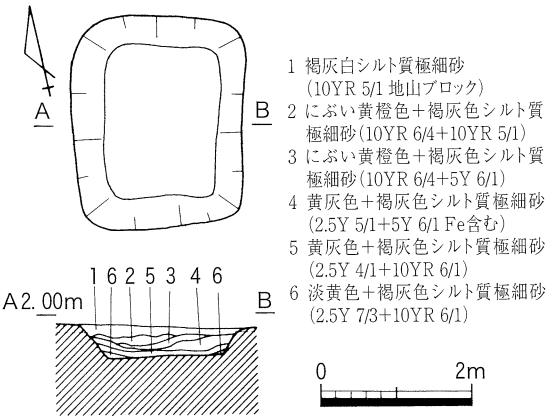
ＳＫ1004　（第39・40図）

調査区北東側で検出された長方形の土坑である。

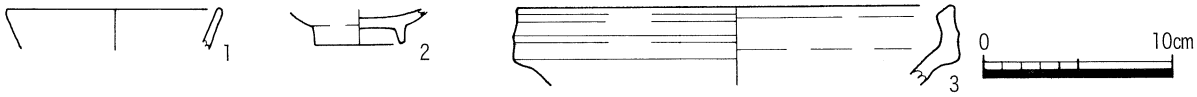
検出面のレベルは1.90m前後である。南北の長辺は約2.80m，短辺は2.30m，深さは約0.50mを測る。掘り込みはややゆるやかであり，断面は逆台形を呈する。底面は平坦である。埋土は６層に分層され，レンズ状堆積である。

遺物は，土師質土器杯（１），磁器碗（２），陶器擂鉢（３），その他の陶磁器片である。

２は両面施釉，３は備前焼で18世紀のものである。




第39図　ＳＫ1004平・断面図（Ｓ：１/100）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師質土器杯 | 11.4 | | (2.2) | 内外面回転ナデ | 灰白10YR8/1 | | 細砂 |
| 2 | 磁器　碗 | | 4.6 | (1.9) | 畳付きのみ無釉 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 3 | 陶器　擂鉢 | 23.0 | | (4.3) | 内外面回転ナデ　備前焼 | 灰白N7/ | 褐灰10YR5/1 | 微砂 |

第40図　ＳＫ1004出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ1005　（第41図）

調査区南東隅でＳＤ1001に切られた状態で検出された土坑である。検出面のレベルは標高1.82mである。平面形は楕円形を呈し，短軸は約1.30m，深さは0.32mを測る。掘り込みはゆるやかである。遺物は土師質土器羽釜（９），数点の磁器片である。

ＳＫ1006　（第41図）

調査区中央やや南寄りにおいて検出された土坑であり，円形と方形の土坑が重なっている。

確認面のレベルは標高1.82mである。円形土坑は直径0.90m，深さ0.30m，方形土坑は長辺1.30m，短軸1.12m，深さ0.42mを測る。遺物は土師質土器羽釜（11），数点の磁器片である。

ＳＫ1007　（第41図）

調査区中央の西寄りで検出された土坑であり，検出面のレベルは標高1.85mである。平面形は不整な円形を呈し，直径約0.95m，深さ10cmを測る。遺物は土師質土器小皿（１），磁器碗（６）である。６は体部中央から直立し口縁部に至る。口縁部は玉縁状になる。

ＳＫ1008　（第41図）

調査区中央の西寄りで検出された土坑であり，検出面のレベルは標高1.85mである。平面形は隅丸長方形を呈し，長辺1.45m，短辺0.92m，深さ４cmを測る。遺物は軒丸瓦（13）である。

ＳＫ1009　（第41図）

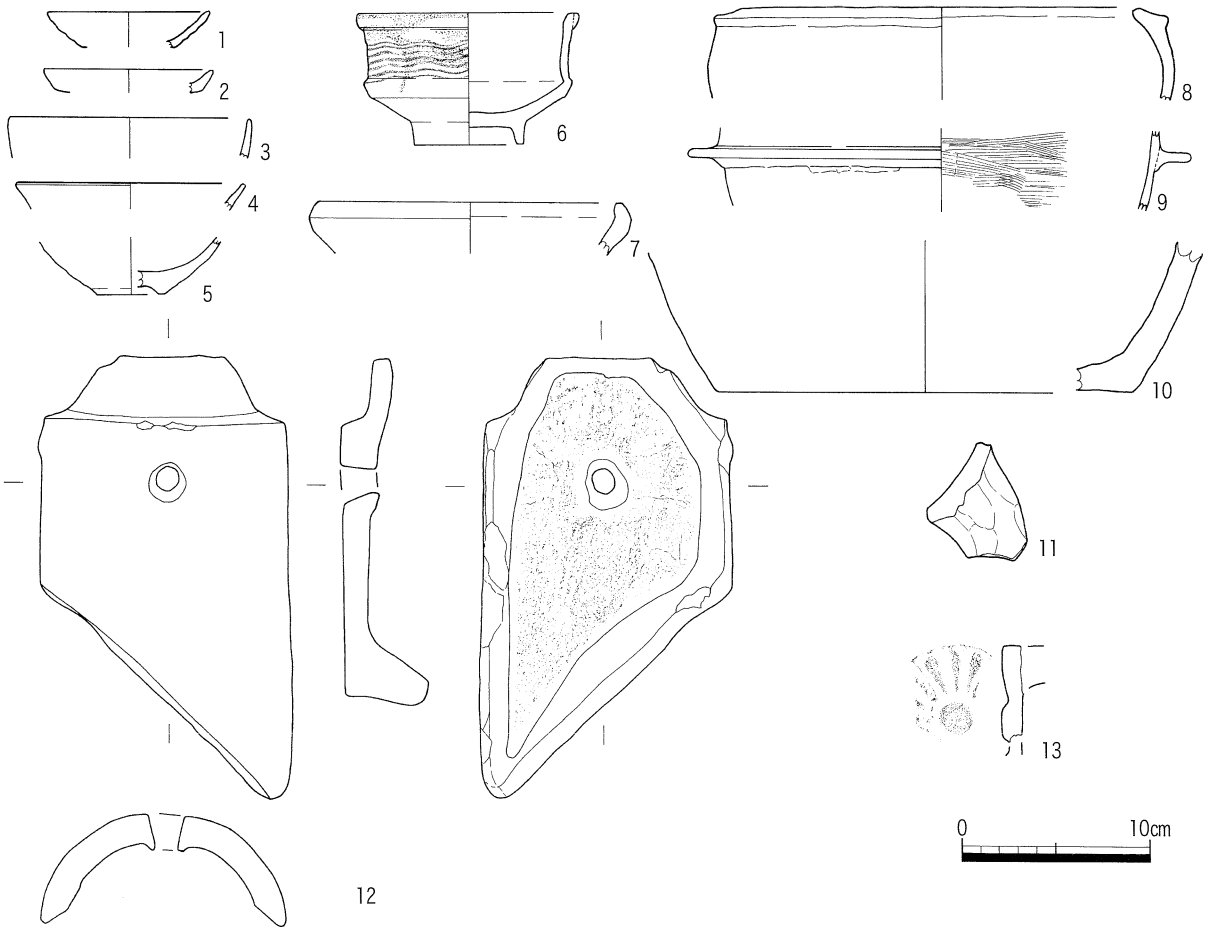
調査区北西側で検出された土坑で，検出面は標高1.95mである。平面形は不整な円形を呈し，直径1.10×0.80m，深さ0.11mを測る。遺物は土師質土器土鍋（７）である。

ＳＫ1010　（第41図）

調査区北側で検出された土坑であり，検出面のレベルは標高1.93mである。平面形は不整な円形を呈し，直径は約1.50m，深さは0.16mを測る。ＳＤ1007とつながっている。遺物は土師質土器杯（４），陶器鉢（５），同甕（10），土師質土器羽釜（８）である。

ＳＫ1011　（第41図）

調査区北東隅で検出された土坑である。大半は調査区外に延びるため平面形，規模は不明であるが，直角に曲がるコーナーから方形の土坑と思われる。検出面のレベルは標高1.86mである。遺物は土師質小皿（２），磁器碗（３）である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.6 | 5.0 | (1.9) | 内外面回転ナデ | 灰白2.5Y8/1 | 灰白10YR8/1 | 細砂 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 9.0 | 7.2 | (1.3) | 内外面回転ナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 3 | 磁器　碗 | 12.8 | | (2.2) | 内外面施釉 | 灰白10Y8/1 | 灰白7.5Y7/1 | 密 |
| 4 | 土師質土器杯 | 12.0 | | (1.4) | 内外面回転ナデ | 灰白10YR8/1 | 灰白10YR8/2 | 密 |
| 5 | 陶器　鉢 | | 3.6 | (3.0) | 内外面回転ナデ　体部以下無釉 | 暗オリーブ5Y4/3 | 鈍い赤褐5YR5/3 | 密 |
| 6 | 陶器　鉢 | 11.6 | 5.8 | 6.95 | 内面と体部下半無釉　外面に波状文 | 透明 | 鈍い橙5YR6/4 | 密 |
| 7 | 土師質土器土鍋 | 16.0 | | (2.8) | 口縁部横ナデ　体部ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 細砂 |
| 8 | 土師質土器羽釜 | 21.0 | | (4.9) | 口縁部横ナデ　体部ナデ　煤付着 | 灰白10YR8/1 | 灰白10YR8/2 | 細砂 |
| 9 | 土師質土器羽釜 | | | (4.2) | 外面横ナデ・ナデ　内面刷毛目　煤付着 | 褐灰10YR4/1 | 灰黄褐10YR6/2 | 細砂 |
| 10 | 陶器　甕 | | 22.0 | (8.05) | 外面篦ナデ　内面回転ナデ後に一部指ナデ　備前焼 | 暗赤褐5YR3/4 | 暗赤褐5YR3/2 | 細砂 |
| 11 | 土師質土器羽釜 | | | | 篦ナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | | |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12 | 丸瓦 | 23.3 | 13.2 | 1.3 | | | 凸面ナデ　凹面ゴザ目 |
| 13 | 軒丸瓦 | | | | | | |

第41図　１工区ＳＫ出土遺物（Ｓ：１／４）

4　柱穴

ＳＰ1003　（第43図－１）

調査区中央南寄りの柱穴で，直径0.22m，深さ0.22mを測る。遺物は磁器碗（１）である。

ＳＰ1009・1010　（第42図）

調査区南西隅においてつながって検出された柱穴で，直径0.25mを測る。ＳＰ1009の深さは0.22mで，底面に根石を残存する。ＳＰ1010の深さは0.25mで，底面が若干西側にオーバーハングする。

ＳＰ1017　（第42・43図－２）

調査区南西隅の円形の柱穴で，直径0.50m，深さ0.24mを測る。底面に根石が残存する。遺物は弥生土器製塩土器（２）であり，混入と考えられる。

ＳＰ1028　（第42図）

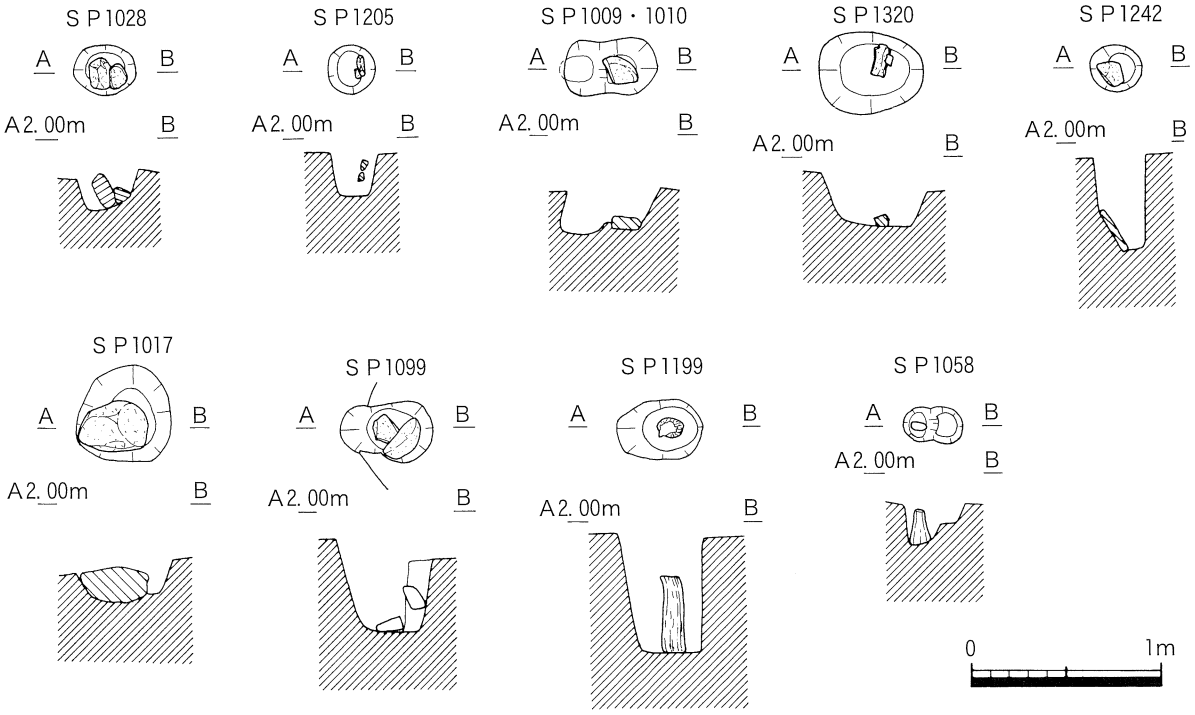
調査区南西側の柱穴で，直径0.28×0.34m，深さ0.20mを測る。底面に根石が残存する。

ＳＰ1035　（第43図－３）　ＳＰ1037　（第43図－４～６）　ＳＰ1039（第43図－７・８）

調査区中央西側の柱穴で，ＳＰ1035は直径0.40m，深さ0.27mを測る。遺物は土師質杯（３）である。ＳＰ1037は直径0.50m，深さ0.45mを測る。遺物は土師質土器杯（４～６）である。ＳＰ1039は直径0.30m，深さ0.33mを測る。遺物は土師質土器杯（７・８）である。

ＳＰ1058　（第42図）

調査区中央西側の柱穴で，直径0.20×0.32m，深さ0.22mを測る。底面に柱材が直立する。




第42図　１工区ＳＰ平・断面図（Ｓ：１／４）

ＳＰ1066　ＳＰ1077　（第43図－９～11）

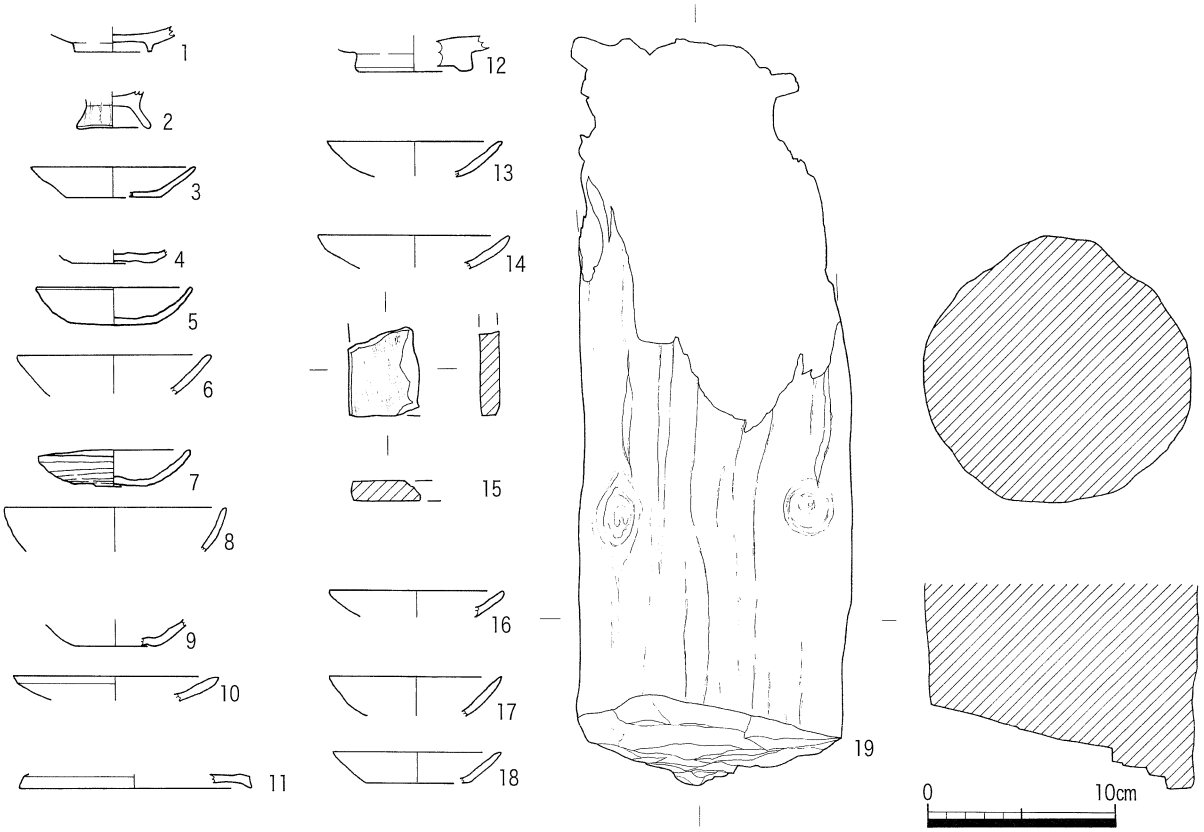
調査区中央西側の柱穴で，ＳＰ1066は直径0.20m，深さ0.38mを測る。遺物は土師質杯（９），同小皿（10）である。ＳＰ1077は直径0.30m，深さ0.18m。遺物は須恵質土器蓋（11）である。

ＳＰ1099　（第42図）

調査区中央西側の柱穴で，直径0.32×0.50m，深さ0.50mを測る。底面に根石が残存する。

ＳＰ1088　ＳＰ1146　ＳＰ1154　ＳＰ1156　（第43図－12～16）

調査区中央西側の柱穴で，ＳＰ1088は直径0.40m，深さ0.21mを測る。遺物は磁器皿（12）である。ＳＰ1146は直径0.20m，深さ0.30mを測り，遺物は土師質土器小皿（13）である。Ｓ




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | | 4.0 | (1.3) | 回転ナデ | 灰白5Y8/2 | 灰白2.5Y8/2 | 密 |
| 2 | 弥生土器製塩土器 | | 3.8 | (1.9) | 外面篦削り　内面ナデ | 淡赤橙2.5YR7/4 | 鈍い橙2.5YR6/4 | 細～粗砂 |
| 3 | 土師質土器杯 | 8.8 | 5.0 | 1.6 | 回転ナデ　底面ナデ | 淡橙5YR8/4 | 淡橙5YR8/4 | 細砂 |
| 4 | 土師質土器杯 | | 7.4 | (0.65) | 底面回転篦切り後に　中央静止篦削り　周辺回転篦削り | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 5 | 土師質土器杯 | 8.2 | 4.6 | 2.0 | 回転ナデ　内面指ナデ　底面篦削り | 灰白10YR8/1 | 灰白10YR8/2 | 細砂 |
| 6 | 土師質土器杯 | 10.4 | | (2.1) | 磨滅 | 橙2.5YR7/6 | 褐7.5YR6/1 | 細砂 |
| 7 | 土師質土器杯 | 8.1 | 4.4 | 1.9 | 内外面回転ナデ　体部外面回転篦削り | 灰白10YR8/2 | | 細砂 |
| 8 | 土師質土器杯 | 11.8 | | (2.4) | 内外面回転ナデ | 灰白7.5YR8/2 | | 細砂 |
| 9 | 土師質土器杯 | | 4.2 | (1.4) | 内外面回転ナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 10 | 土師質土器小皿 | 11.0 | | (1.3) | 内外面回転ナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 11 | 須恵質土器蓋 | 12.4 | | (0.75) | 内外面回転ナデ | 灰5Y6/1 | 灰白N7/ | 密 |
| 12 | 磁器　皿 | | 5.8 | (1.9) | 内外面回転ナデ　蛇の目高台　内外面施釉 | 灰オリーブ5Y6/2 | 灰白オリーブ7.5Y7/1 | |
| 13 | 土師質土器小皿 | 9.2 | | (1.9) | 内外面回転ナデ | 灰白7.5YR8/2 | | 微砂 |
| 14 | 土師質土器小皿 | 10.0 | | (1.8) | 内外面回転ナデ | 淡橙5YR8/4 | 灰白7.5YR8/2 | 微砂 |
| 16 | 土師質土器小皿 | 9.2 | | (1.5) | 内外面回転ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 淡橙5YR8/4 | 微砂 |
| 17 | 土師質土器杯 | 9.0 | 5.4 | (2.1) | 内外面回転ナデ | 淡橙5YR8/3 | | 微砂 |
| 18 | 土師質土器小皿 | 8.8 | 7.6 | 1.7 | 内外面回転ナデ | 橙5YR7/6 | | 微砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 砥石 | 4.7 | 3.6 | 1.1 | | 砂岩 | |
| 19 | 柱材 | (40.0) | 14.2 | | | | 先端は直角方向より加工　枝払い |

第43図　１工区ＳＰ出土遺物（Ｓ：１／４）

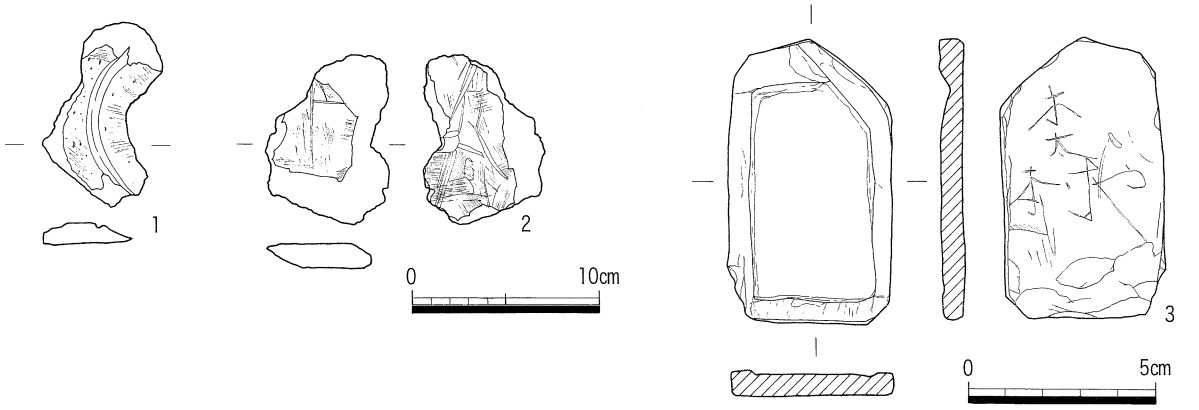
Ｐ1154は直径0.30m，深さ0.13mを測り，遺物は土師質土器小皿（14）と砥石（15）である。ＳＰ1156は直径0.24m，深さ0.14mを測り，遺物は土師質土器小皿（16）である。

ＳＰ1199　（第42・43図－19）
調査区北西側の柱穴で，直径0.32×0.45m，深さ0.62mを測る。柱材（19）が直立する。

ＳＰ1205　ＳＰ1221　ＳＰ1242　（第42・43図－17・18）
調査区北西側の柱穴で，ＳＰ1205は直径0.25m，深さ0.23mを測り，埋土に石を有する。ＳＰ1221は直径0.33m，深さ0.23mを測り，遺物は土師質土器杯（17・18）である。ＳＰ1242は直径0.24m，深さ0.54mを測り，底面に根石を有する。

ＳＰ1320　（第42図）
調査区北東側の柱穴で，直径0.45×0.55m，深さ0.24mを測る。

2）１工区包含層出土遺物　（第44図）
１工区の包含層から出土した遺物は，陶磁器・瓦等も含まれるが，図化したのは硯（１～３）のみである。３は1997年に実施した試掘調査のトレンチで出土した硯であり，裏面に「木太村」の線刻がある。



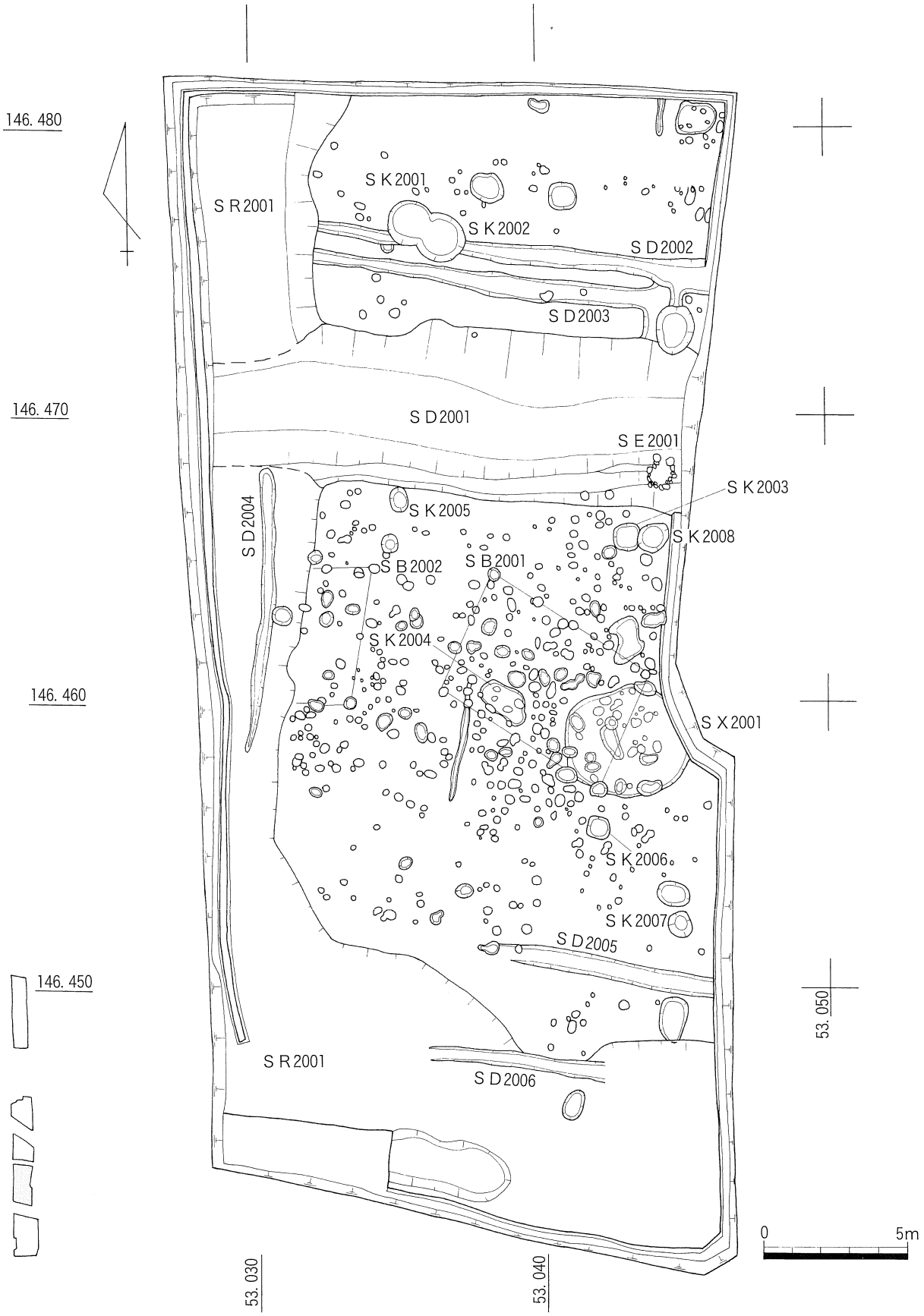

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 硯 | (9.8) | (5.5) | 1.2 | 61.2 | 粘板岩 | |
| 2 | 硯 | (9.0) | (6.5) | 1.3 | 82.7 | 粘板岩 | 表裏面を使用する |
| 3 | 硯 | 7.5 | 4.4 | 0.5 | 35.8 | 砂岩 | 裏面に「木太村」の線刻 |

第44図　１工区包含層出土遺物（Ｓ：1/2，1/4）

## 2　２工区

２工区は１工区の北側に位置する調査区であり，南北方向の全長は約41.5m，幅は約20mを測る。調査区の南側には現有道路，北側は水路となっている。調査区中央の南北軸座標値はＸ＝146.460，東西軸座標値はＹ＝53.040である。

土層の堆積状態はほぼ水平堆積をなし，上層より現水田耕作土・４面の近世条里型水田が全域に見られる。調査区南側には建物の基礎等の撹乱が多数あったが，遺構検出面まで達していない。遺構は全域にわたって検出された。




第45図　２工区遺構配置図（Ｓ：１/200）

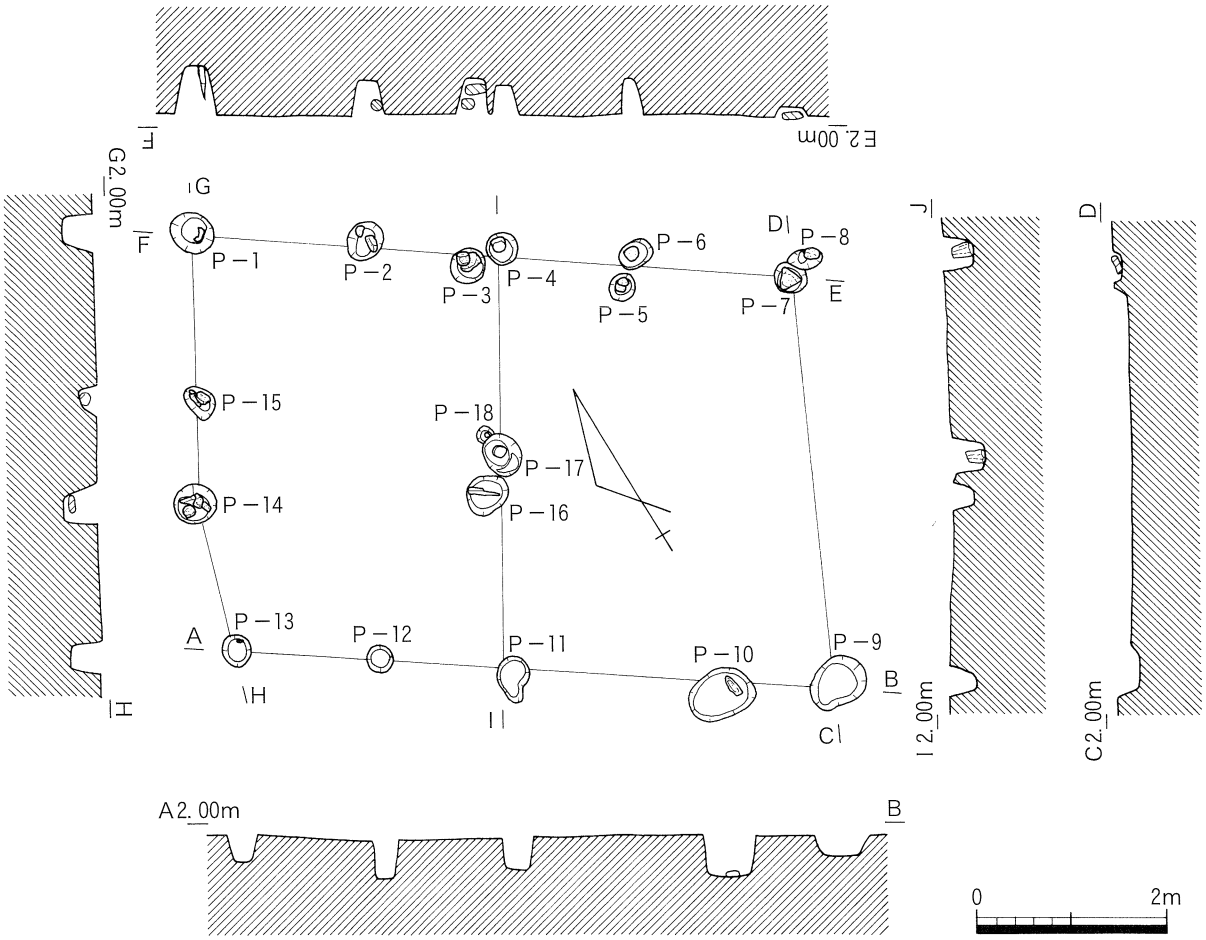
1）近世

1　掘立柱建物跡　（第46・47図）

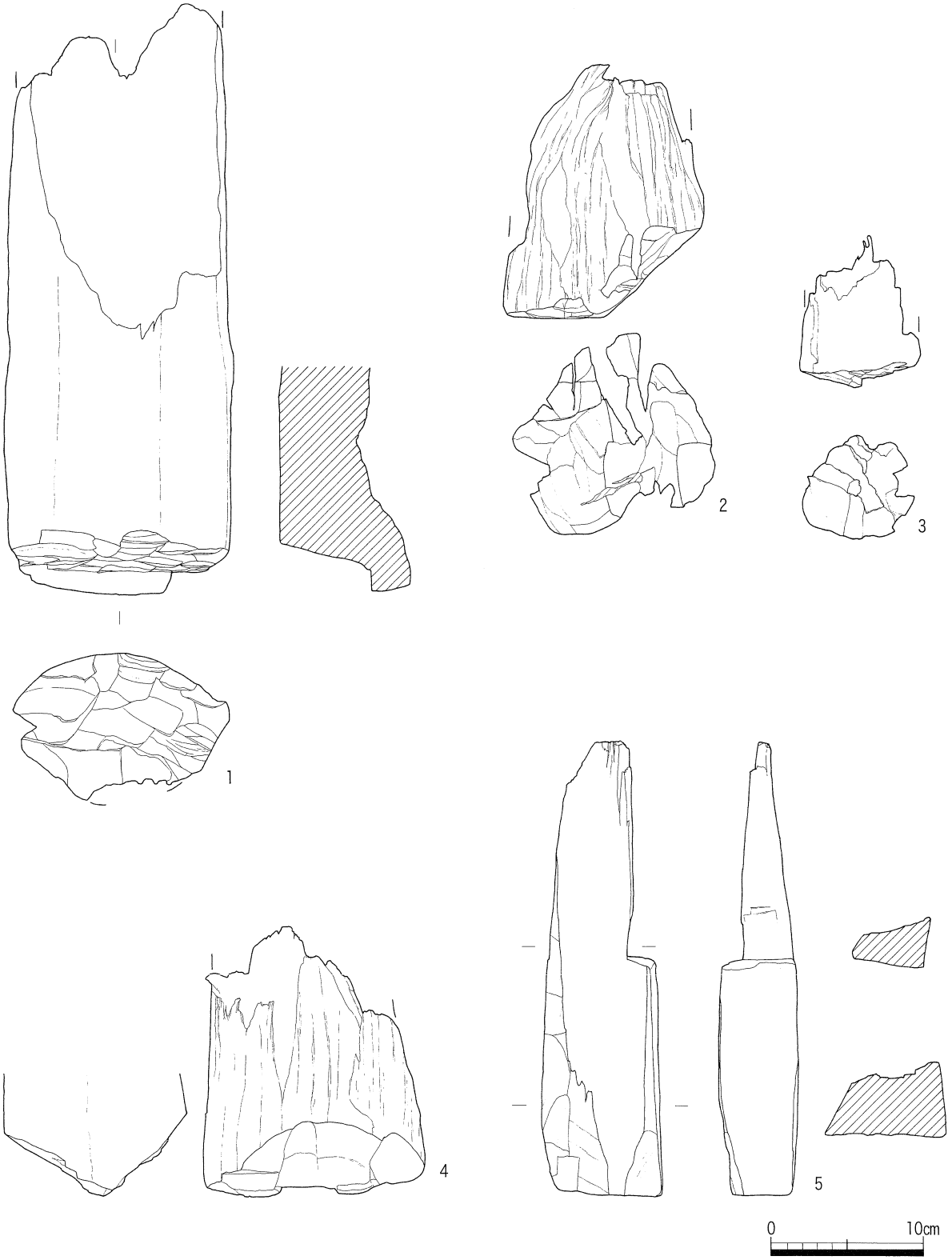
調査区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。柱穴が多数検出された柱穴群の中で柱材・根石を残存する柱穴により構成され，整理作業の段階で確認された。他の柱穴，ＳＸ2001と重複するが，切り合い関係は不明である。

検出面のレベルは標高1.85m前後である。桁行は４間で6.80mを測り，梁間は３間で2.80mを測る。東列側柱を欠くが，隅柱と側柱の柱穴の総数は18本を数える。中央部に３本の束柱がある。建物の主軸方位はＥ－30°－Ｓである。桁行の柱穴間の距離は芯芯で1.40～1.80mを測り，梁行の柱穴間の距離は芯芯で1.10～1.80mを測る。柱穴の平面形は円形・楕円形を呈し，直径0.30～0.70mを測る。柱穴の深さは0.20～0.50mである。柱穴の埋土は灰白色シルト質極細砂が主体を占める。北列側柱のＰ－３・４とＰ－５・６とＰ－７・８と束柱のＰ－16・17は２本の柱穴が接近して掘り込まれており，建て替えが行われたと考えられる。Ｐ－１・４・10・17は柱材の一部が直立しており，Ｐ－２・３・５・６・７・８・10・13・14・15には根石・詰石が残存している。

遺物は，数点の土師質土器小皿片，陶磁器片，柱材（１～４），加工材（５）が出土したが土器は破片のみであり図化できるものはなかった。１はＰ－１，２はＰ－17，３はＰ－10，４はＰ－４出土の柱材で，５はＰ－10出土の加工材である。




第46図　ＳＢ2001平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 柱材 | (39.2) | 14.8 | 9.6 | | | 先端加工 |
| 2 | 柱材 | (16.6) | 13.4 | | | | 先端を2方向から加工 |
| 3 | 柱材 | (10.0) | 6.9×7.3 | | | | 先端を直角方向から加工 |
| 4 | 柱材 | (17.9) | 14.6×12.1 | | | | 先端を2方向から加工 |
| 5 | 加工材 | (35.0) | 8.0 | 5.0 | | | 端部切断　側面に抉り |

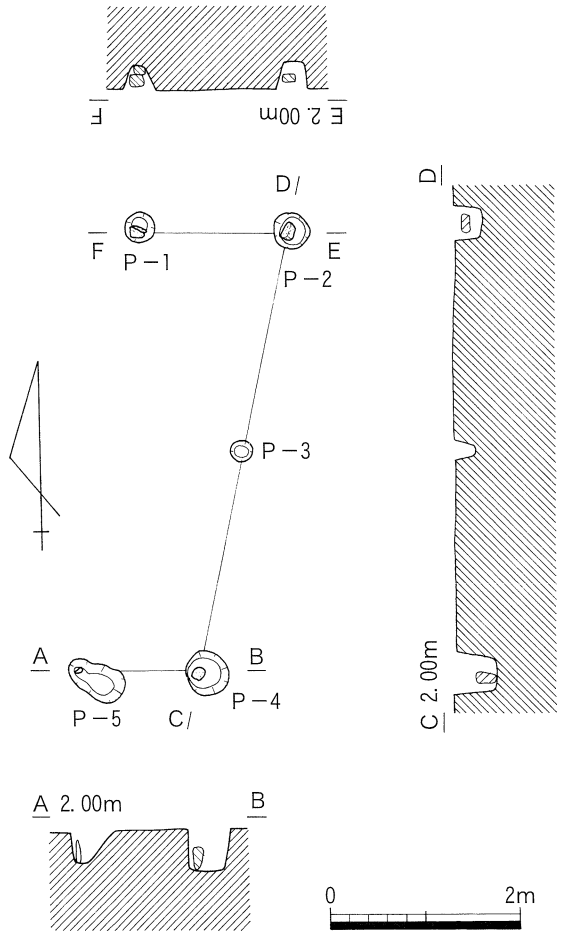
第47図　ＳＢ2001出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＢ2002　（第48・49図）

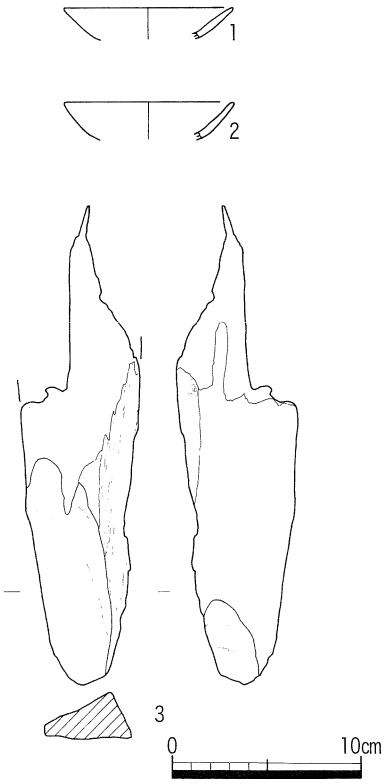
調査区中央西側において検出された掘立柱建物跡である。ＳＢ2001と同様に柱材・詰石を有する柱穴で構成された建物であり，整理段階で確認された。

検出面のレベルは標高1.80～1.90mである。西側はＳＲ2001に切られているため，規模・方位は不明である。東西方向は１間のみであり，2.00mを測る。南北方向は２間であり，5.15mを測る。東西方向の柱穴の距離は芯芯で1.65m，南北の柱穴の距離は芯芯で2.40mを測る。柱穴の平面形は，Ｐ－１～４が円形，Ｐ－５が楕円形を呈する。Ｐ－１～４の直径は0.25～0.45mを測り，Ｐ－５は長軸0.60m，短軸0.35mを測る。柱穴の埋土は灰白色シルト質極細砂が主体を占める。Ｐ－１・２・４は埋土中に詰石が検出され，Ｐ－５の西隅には柱材の一部が直立した状態で検出された。

遺物は，土師質土器小皿（１・２），柱材（３），その他の磁器片である。１はＰ－１，２はＰ－４より出土した土師質土器小皿である。３はＰ－５より出土した柱材で，先端部を２方向から加工している。




第48図　ＳＢ2002平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 9 | | (1.6) | 内外面回転ナデ | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 9 | | (2) | 内外面回転ナデ | 淡橙5YR8/3 | | 微砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 柱材 | (25.4) | (6.1) | 4.3 | | | ミカン割り　先端部は2方向から加工 |

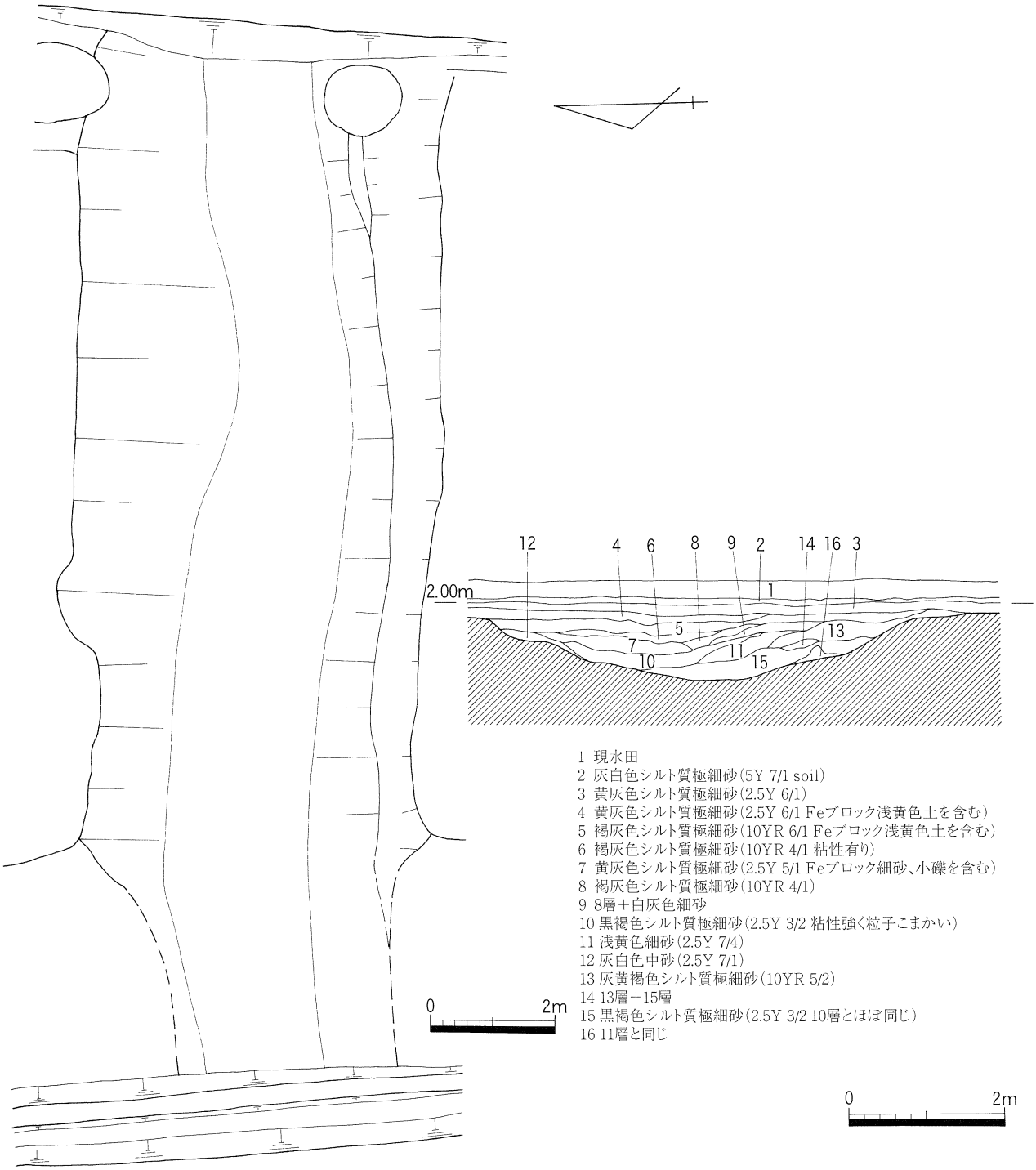
第49図　ＳＢ2002出土遺物（Ｓ：１/４）

2　溝

ＳＤ2001　（第50～55図）

調査区中央よりやや北側において検出された溝であり，西端は南北方向に流れるＳＲ2001に切られる状態で検出される。

検出面のレベルは標高1.90m前後である。溝の方位は東西方向をなしＮ－90°－Ｅである。検出した溝の全長は約16.4m，幅は約6.00mを測り，検出面から最深部までの深さは0.82mを



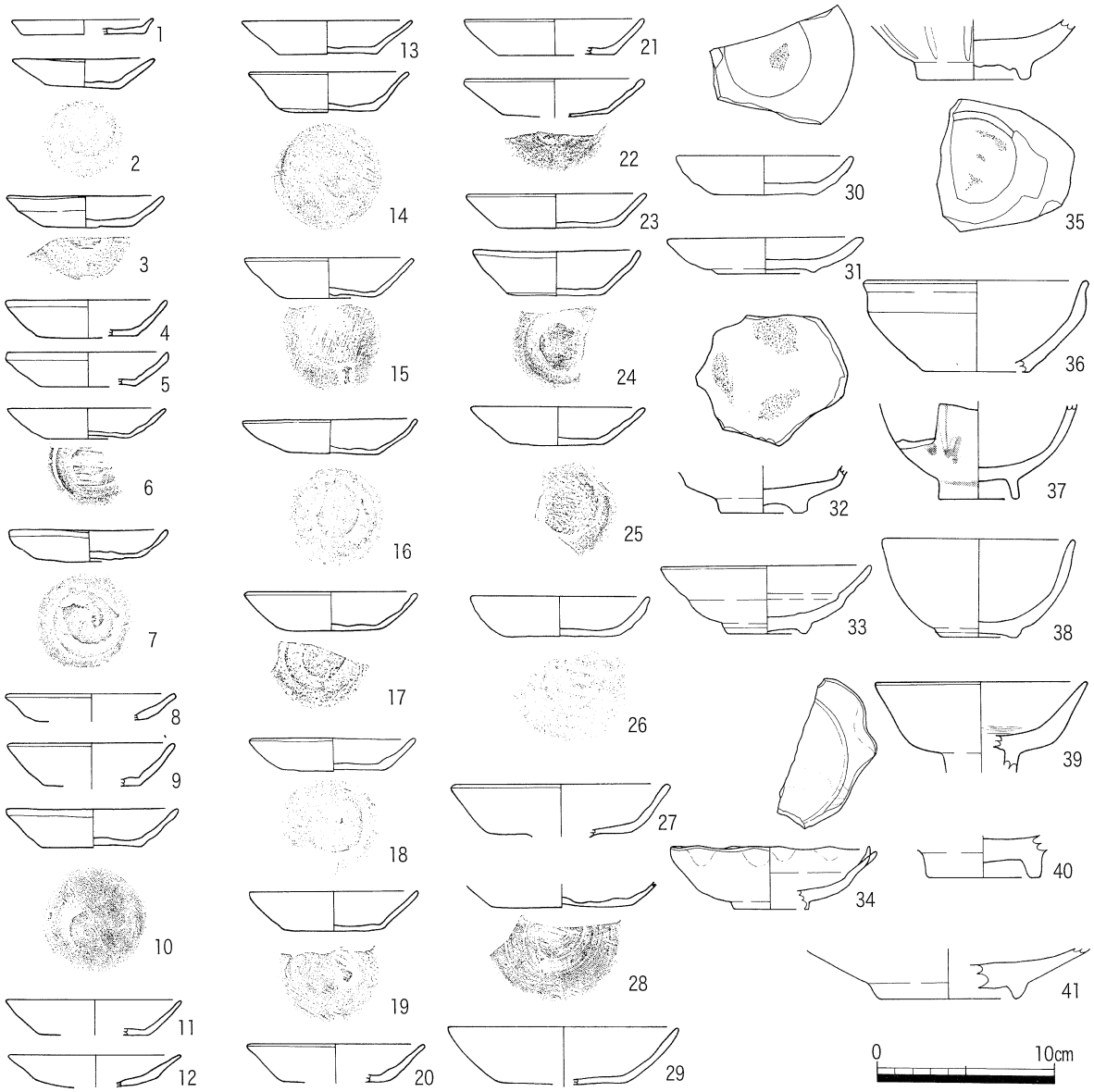

第50図　ＳＤ2001平・断面図（Ｓ：１/80，１/100）

測る。底面のレベルは比高差約0.20mで東方向に低くなっている。掘り込みはゆるやかであり南側の掘り込みは段を有する。溝の西端はＳＲ2001に切られているため，掘り込みはほとんどないが，底面と思われる若干の落ち込みが残存している。埋土は12層に分層でき，レンズ状堆積をなしている。埋土の中位より以下には細～中砂が多量に含まれる。

この溝は，規模・位置から18世紀の条里地割に基づく坪界線の溝であると考えられる。

遺物は，土師質土器小皿（１），同杯（２～29），磁器皿（30～33・40・41），同碗（37・38），同小鉢（34），同鉢（35・36），瓦質土器椀（39），陶器擂鉢（42），瓦質土器擂鉢（43・44），陶器甕（45），土師質土器壺（46・47），土師質土器土鍋（48・52～55），同羽釜（49～51・56・57），須恵質土器壺（58），陶器壺（59），須恵器壺（60），同甕（61），硯（63・64），不明土器（62），木製容器（65・66），木製碗（67・68），加工板（70～75），加工木（76）がある。

１は器高の低い小皿で，底面は回転ヘラ切り後にナデが施される。




第51図　ＳＤ2001出土遺物（１）（Ｓ：１／４）

（第51図）

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.0 | 6.8 | 1.8 | 底面回転篦切り後にナデ | 灰白2.5Y8/1 | | 細砂 |
| 2 | 土師質土器杯 | 8.1 | 4.4 | 1.8 | 底面回転篦切り後にナデ | 灰白10YR8/1 | | 細砂 |
| 3 | 土師質土器杯 | 9.0 | 5.0 | (1.8) | 底面回転篦切り後に静止篦削り，篦ナデ | 灰白2.5Y8/1 | 灰白2.5Y8/2 | 微砂 |
| 4 | 土師質土器杯 | 9.2 | 5.8 | 2.1 | 回転ナデ　底面ナデ | 灰白10YR8/1 | 灰白10YR8/2 | 微砂 |
| 5 | 土師質土器杯 | 9.2 | 5.4 | 2.0 | 回転ナデ　底面ナデ | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 6 | 土師質土器杯 | 9.0 | 4.6 | 2.3 | 底面回転篦切り後に中央静止篦削り，周辺回転篦削り | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 7 | 土師質土器杯 | 8.9 | 5.9 | 1.8 | 回転ナデ　回転篦切り | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 細砂 |
| 8 | 土師質土器杯 | 9.4 | 6.4 | (1.5) | 回転ナデ　底面ナデ | 灰白10YR8/2 | 浅黄橙7.5YR8/4 | 細砂 |
| 9 | 土師質土器杯 | 9.4 | 5.6 | 2.5 | 回転ナデ　回転篦切り | 鈍い黄橙10YR7/2 | | 微砂 |
| 10 | 土師質土器杯 | 9.8 | 5.6 | 2.2 | 回転ナデ　回転篦切り後篦ナデ | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 11 | 土師質土器杯 | 10.0 | 6.2 | (2.0) | 回転ナデ　底面ナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | | 細砂 |
| 12 | 土師質土器杯 | 9.8 | 4.2 | (1.8) | 回転ナデ　静止篦削り後にナデ | 灰白10YR8/2 | 灰白10YR8/1 | 粗砂 |
| 13 | 土師質土器杯 | 9.8 | 5.7 | 1.9 | 回転篦切り後に中央静止篦削り，周辺篦ナデ | 褐灰7.5YR5/1 | 灰白7.5YR8/2 | 細砂 |
| 14 | 土師質土器杯 | 9.2 | 5.4 | 2.3 | 回転篦切り後に篦ナデ，静止篦削り | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 微砂～細砂 |
| 15 | 土師質土器杯 | 9.8 | 5.7 | 2.25 | 中央静止篦削り，周辺回転篦削り | 灰白10YR8/1 | | 微砂 |
| 16 | 土師質土器杯 | 10.1 | 5.4 | 2.0 | 回転篦切り後に中央静止篦削り，周辺ナデ | 鈍い黄橙10YR7/2 | | 微砂 |
| 17 | 土師質土器杯 | 9.8 | 6.0 | 2.2 | 回転篦切り後に中央静止篦削り，周辺回転篦削り | 鈍い橙5YR7/4 | | 微砂 |
| 18 | 土師質土器杯 | 9.6 | 5.5 | 1.9 | 回転ナデ　底面回転篦削り | 灰黄2.5Y7/2 | | 微砂 |
| 19 | 土師質土器杯 | 9.6 | 5.4 | 2.3 | 回転篦切り後に篦ナデ，静止篦削り | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 20 | 土師質土器杯 | 10.2 | 7.2 | 2.2 | 回転ナデ　底面ナデ | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 細砂 |
| 21 | 土師質土器杯 | 10.2 | 6.6 | 2.0 | 回転ナデ　底面ナデ | 鈍い黄橙10YR7/2 | | 微砂 |
| 22 | 土師質土器杯 | 10.2 | 6.0 | 2.15 | 回転ナデ　底面回転篦削り | 灰白7.5YR8/2 | | 微砂 |
| 23 | 土師質土器杯 | 10.2 | 6.8 | 1.9 | 回転篦切り後に回転篦ナデ，静止篦削り | 褐灰10YR6/1 | | 微砂 |
| 24 | 土師質土器杯 | 9.6 | 5.6 | 2.6 | 回転篦切り後に中央静止篦削り，周辺篦ナデ | 灰白10YR8/2 | | 細砂 |
| 25 | 土師質土器杯 | 10.0 | 5.4 | 2.3 | 回転篦切り後に中央静止篦削り，周辺篦ナデ | 灰白7.5YR8/2 | | 微砂 |
| 26 | 土師質土器杯 | 10.2 | 6.4 | 2.2 | 回転篦切り後に中央静止篦削り，周辺篦ナデ | 浅黄橙7.5YR8/6 | | 微～細砂 |
| 27 | 土師質土器杯 | 12.4 | 8.4 | (3.0) | 回転ナデ　底面篦ナデ | 灰白2.5Y7/1 | | 細砂 |
| 28 | 土師質土器杯 | | 8.2 | (1.4) | 中央静止篦削り，周辺回転篦削り | 灰黄2.5Y7/2 | | 微砂 |
| 29 | 土師質土器杯 | 13.2 | 7.0 | 3.3 | 回転篦切り後にナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 30 | 磁器　皿 | 10.0 | 5.6 | 2.2 | 見込み無釉　砂目 | 浅黄5Y7/3 | 灰白7.5YR8/2 | 微砂 |
| 31 | 磁器　皿 | 11.2 | 6.3 | 2.0 | 内外面施釉 | 浅黄5Y7/3 | 灰白2.5Y8/1 | 密 |
| 32 | 磁器　皿 | | 4.6 | (2.6) | 内外面施釉　蛇の目高台　見込みに砂目 | 灰オリーブ5Y6/2 | 鈍黄橙10YR7/3 | 密 |
| 33 | 磁器　皿 | 11.6 | 4.4 | 3.9 | 内外面施釉 | 透明 | 褐灰10YR6/1 | 密 |
| 34 | 磁器　鉢 | 11.4 | 4.4 | 3.5 | 輪花鉢　内外面施釉 | 灰オリーブ5Y6/2 | 灰黄2.5Y7/2 | 密 |
| 35 | 磁器　鉢 | | 6.0 | (3.4) | 緑釉　高台内に砂目 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白N8/ | 密 |
| 36 | 磁器　鉢 | 12.4 | 6.0 | 5.2 | 内外面施釉 | 鈍黄褐2.5YR4/4 | 灰白2.5YR8/2 | 密 |
| 37 | 磁器　碗 | | 4.6 | (5.5) | 内外面施釉　外面に染付　高台内に砂目 | 明緑灰10G7/1 | 灰白N8/ | 密 |
| 38 | 磁器　碗 | 10.6 | 4.4 | 5.6 | 内外面施釉 | 灰白5Y7/2 | 浅黄橙10YR8/3 | 密 |
| 39 | 瓦質土器　碗 | 11.8 | | (5.2) | 回転ナデ　内面板ナデ | 暗灰N3/ | | 密 |
| 40 | 磁器　皿 | | 6.2 | (2.4) | 緑釉 | 明緑灰7.5GY7/1 | 灰白N8/ | 密 |
| 41 | 磁器　皿 | | 7.6 | (2.9) | 内外面施釉 | 灰オリーブ7.5Y4/2 | 鈍橙5YR6/4 | 密 |

2～29の杯は内外面とも回転ナデが施され，6・12・15を除き平底である。底面の調整は切り離しのみの土器と切り離し後に調整する土器がある。後者には数種類の調整方法が見られる。2は回転ヘラ切り後にナデが施される。3は回転ヘラ切り後に静止ヘラ削り，さらにヘラナデが施される。4は切り離し後にナデが施される。5はナデが施される。6は回転ヘラ切り後に中央部を静止ヘラ削り，周縁部を回転ヘラ削りが施される。7は回転ヘラ切りである。8はナデが施される。9は回転ヘラ切りであり，体部は回転ナデの後に一部ナデが施される。10は回転ヘラ切り後にナデが施され，底部内面に回転ナデの後にナデが施される。11は切り離し後にナデが施される。12は静止ヘラ削り後にナデが施される。13は回転糸切り後に中央部を静止ヘラ削り，周縁部にヘラナデが施される。14は回転ヘラ切り後にヘラナデ，一部静止ヘラ削りが施される。15は切り離した後に中央部を静止ヘラ削り，周縁部に回転ヘラ削りが施される。16は回転ヘラ切り後に中央部を静止ヘラ削り，周縁部にナデが施される。底部内面はナデが施される。17は回転ヘラ切り後に中央部を静止ヘラ削り，周縁部に回転ヘラ削りが施される。底部内面は指ナデが施される。18は回転ヘラ削り，底部内面は回転ナデ後に指ナデが施される。19は回転ヘラ切り後に静止ヘラ削り・ヘラナデが施される。20・21はナデが施される。22は切り離し後に回転ヘラ削りが施される。23は回転ヘラ切り後に回転ヘラナデ・静止ヘラ削りが施され，外面に煤が付着する。24・25は回転ヘラ切り後に中央部を静止ヘラ削り，周縁部にヘラナデが施される。底部内面はナデ・指ナデが施される。26は回転ヘラ切り後に中央部を静止ヘラ削り，周縁部にナデが施される。27は切り離し後に回転・静止ヘラナデを施す。28は切り離し

後に中央部を静止ヘラ削り，周縁部に回転ヘラ削りが施される。29は回転ヘラ切り後にナデ，底部内面は回転ナデ後に指ナデが施される。

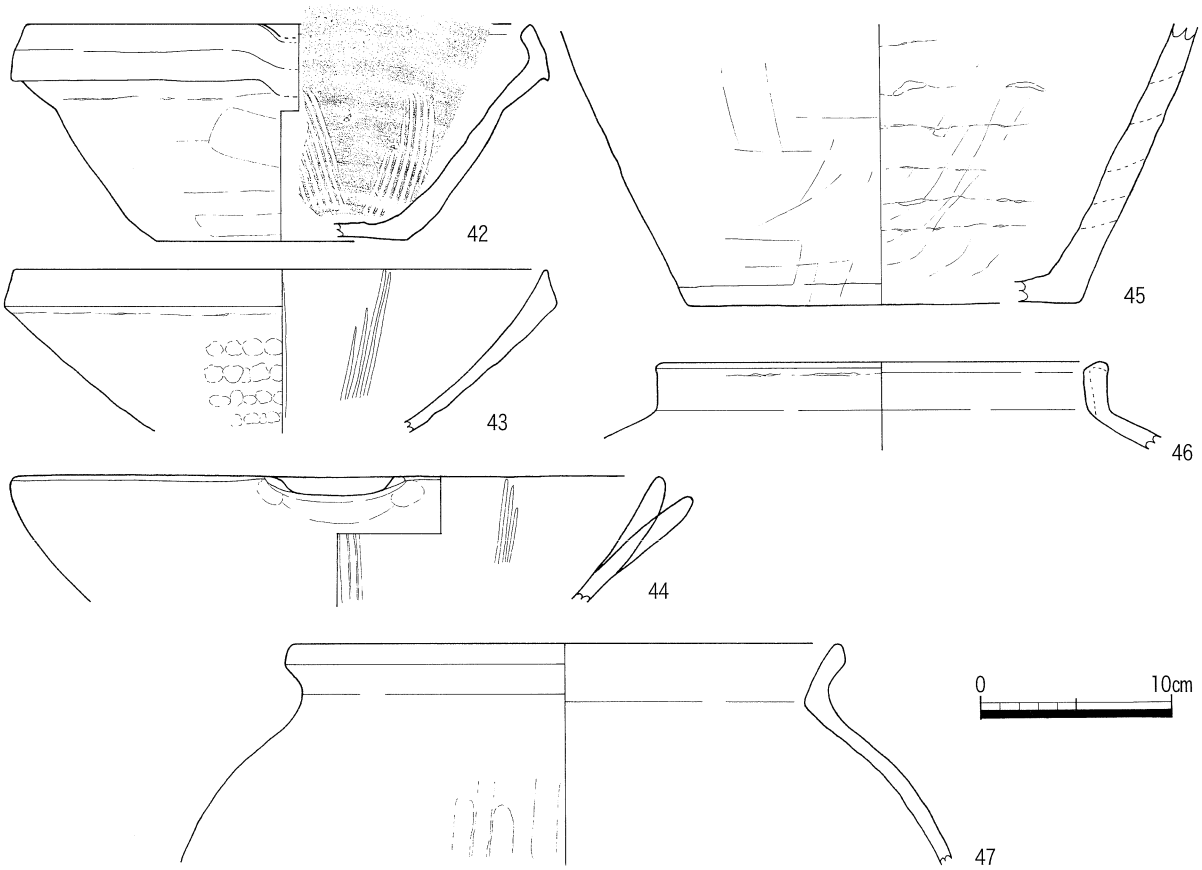
30は見込みに釉がかかっておらず，砂目がある。非常に低い高台が付く。18世紀のものである。31はわずかな高台を持ち，32は蛇の目高台であり，見込みに砂目が残存する。高台脇以下が無釉である。33は体部に段を有する。高台脇以下が無釉である。

34は小型の輪花鉢であり，高台脇以下が無釉である。内面に染付が描かれる。35は緑釉であり，高台内に砂目が残る。外面は片刃彫りが施される。36は口縁部が若干外反する鉢である。体部下半以下は無釉である。

38は肥前系碗で，器肉の厚いくわらんか碗である。高台脇以下は無釉である。37は肥前系碗で，高台内側に砂目が残存し，体部外面に染付が描かれる。37・38は18世紀後半のものである。

39は瓦質土器の碗であり，内外面回転ナデ，見込みに板ナデが施される。

42は明石焼擂鉢であり，口縁部は上下に拡張し，片口を有する。７本単位の卸目が放射状に施される。18世紀後半以降のものである。43は口縁部外面が拡張し，４本単位の卸目が施され



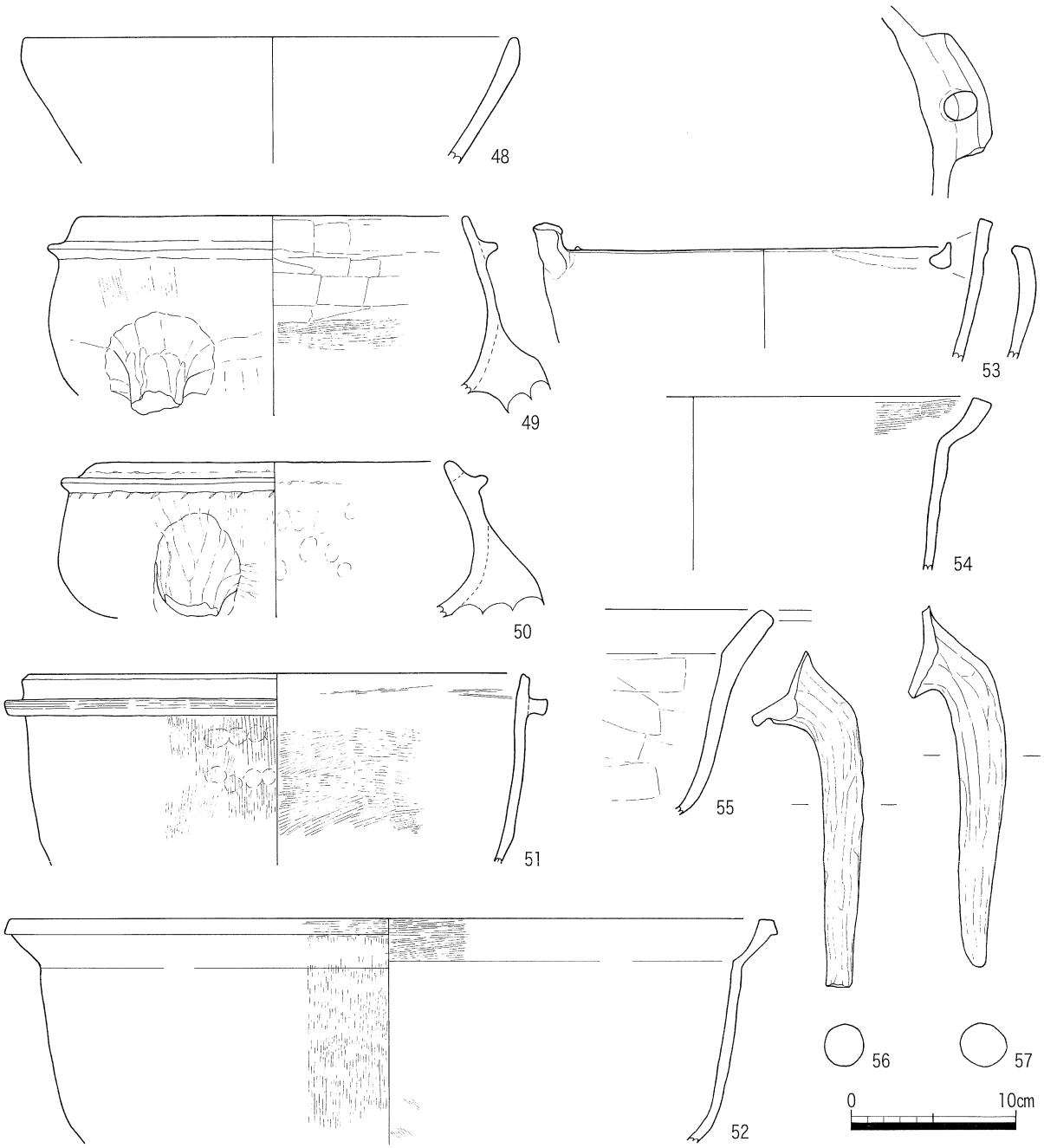

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 42 | 陶器　擂鉢 | 27.0 | 13.6 | 11.4 | 口縁部横ナデ　内外面回転ナデ　卸目　明石焼 | 灰黄褐10YR4/2 | 鈍い赤褐5YR5/3 | 微砂 |
| 43 | 瓦質土器擂鉢 | 28.2 | | (8.6) | 口縁部横ナデ　外面指押え　内面ナデ　卸目 | 灰白2.5Y7/ | 黄灰2.5Y6/1 | 微砂 |
| 44 | 瓦質土器擂鉢 | 34.2 | | (6.7) | 口縁部横ナデ　内外面ナデ　卸目 | 灰N6/ | 灰N4/ | 微～粗砂 |
| 45 | 陶器　甕 | | 20.8 | (14.8) | 回転ナデ後に篦ナデ　備前焼 | 灰褐5YR5/2 | 褐灰7.5Y5/1 | 微砂 |
| 46 | 土師質土器壷 | 23.8 | | (4.6) | 口縁部横ナデ　内側に拡張 | 灰白10YR8/1 | | 細砂 |
| 47 | 土師質土器壷 | 28.8 | | (11.7) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ，篦ナデ，内面ナデ | 灰黄褐10YR6/2 | 褐10YR4/4 | 細砂 |

第52図　ＳＤ2001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

る。44は片口の擂鉢で，3本単位の卸目が施される。

49・50は球形の胴部で脚をもち，鍔以下に煤や吹きこぼれが多量に付着する。51は長胴であり，断面方形の鍔を有する。外面に煤が付着する。

52・54・55は口辺部が外反する土鍋で，53は耳を有する土鍋である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 48 | 土師質土器土鍋 | 30.0 | | (7.7) | 口縁部横ナデ　胴部外面刷毛目ナデ　内面ナデ | 鈍い橙7.5YR7/3 | 黒褐10YR3/1 | 粗砂 |
| 49 | 土師質土器羽釜 | 23.8 | | (12.0) | 胴部外面篦ナデ　内面板ナデ・刷毛目 | 灰黄褐10YR5/2 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 微砂 |
| 50 | 土師質土器羽釜 | 21.6 | | (9.5) | 胴部外面刷毛目，篦ナデ　内部指押え篦ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 浅黄橙10YR8/3 | 粗砂 |
| 51 | 土師質土器羽釜 | 30.4 | | (11.6) | 胴部外面指押え後に刷毛目　内面刷毛目 | 褐灰7.5YR4/1 | 灰白10Y8/2 | 粗砂 |
| 52 | 土師質土器土鍋 | 46.8 | | (13.7) | 外面刷毛目　口縁内面刷毛目　胴部内面篦ナデ | 淡赤橙2.5YR7/4 | | 粗砂 |
| 53 | 土師質土器土鍋 | 28.0 | | (7.0) | 外面指押え，刷毛目，ナデ　内面板ナデ | 灰白10YR8/2 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 細砂 |
| 54 | 土師質土器土鍋 | 34.0 | | (10.6) | 口縁横ナデ　胴外面刷毛目，ナデ　内面刷毛目，板ナデ | 褐灰5YR5/1 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 粗砂～細礫 |
| 55 | 土師質土器土鍋 | 47.0 | | (12.6) | 外面指押え後にナデ　内面板ナデ | 褐灰10YR5/1 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 粗砂～細礫 |
| 56 | 土師質土器羽釜 | | | | 篦ナデ | 褐灰10YR6/1 | | 細砂 |
| 57 | 土師質土器羽釜 | | | | 篦ナデ | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 細砂 |

第53図　ＳＤ2001出土遺物（３）（Ｓ：１／４）

58は土師質土器短頸壺であり，胴部外面に格子目状タタキ，内面に板ナデが施される。59は備前焼壺であり，口縁部は玉縁状に折り返す。胴部外面に直線文・波状文の櫛描沈線を巡らす。60は須恵器短頸壺である。61は須恵器甕であり，口縁部は上下に拡張する。外面に格子目状タタキ，内面に青海波状タタキが施される。

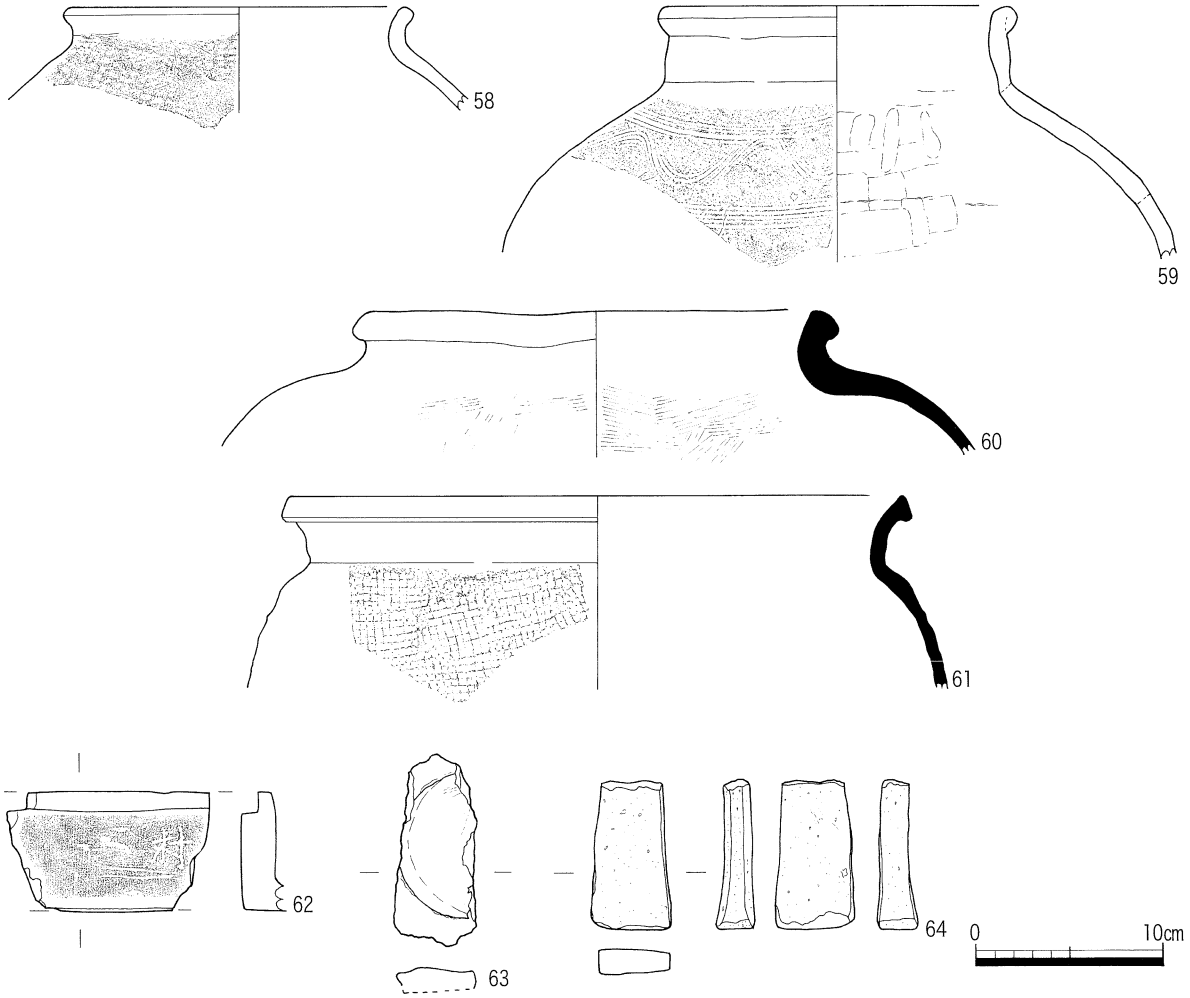
62は外面に「村」の線刻があり，底面に煤が付着し火鉢の可能性がある。

63は粘板岩製の硯である。64は砂岩の砥石で全面使用している。

65は非常に薄い木製容器で，若干上げ底である。内面・体部外面に黒漆が塗られている。66は内面赤漆，外面黒漆が塗られている。68は厚い底部の碗で，内面に赤漆が塗られている。

70は柾目板材で２個一対の孔が３組残存する。71は桜の樹皮が残存する。72は完形の板材であり，先端をやや尖らす。75の両端は一部切断した後に折り取っている。

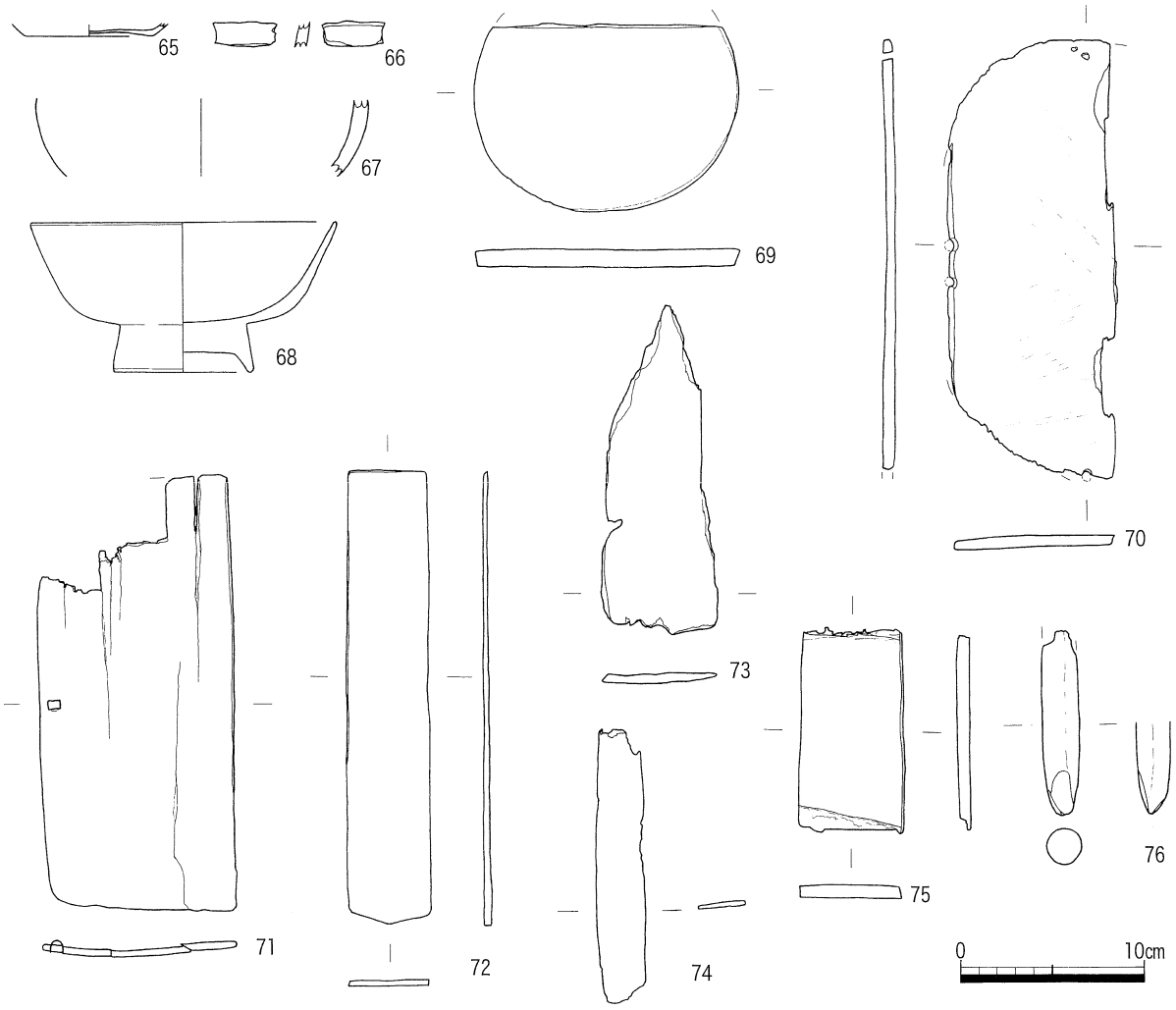
76は先端を２方向から加工している。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 58 | 須恵質土器 | 18.0 | | (5.5) | 口縁部横ナデ　胴部外面格子目状タタキ　内面板ナデ | 灰白2.5Y8/1 | | 微砂 |
| 59 | 陶器　壷 | 18.0 | | (13.4) | 備前焼　胴部外面ナデ　内面指ナデ，板ナデ | 灰黄褐10YR4/2 | 褐灰10YR5/1 | 細～粗砂 |
| 60 | 須恵器　壷 | 23.0 | | (7.5) | 口縁部横ナデ　胴部内外面刷毛目 | 灰N4/ | 灰N5/ | 細～粗砂 |
| 61 | 須恵器　甕 | 32.6 | | (10.15) | 胴部外面格子目状タタキ　内面青海波状タタキ | 灰黄褐10YR6/2 | 灰黄褐10YR5/2 | 細～粗砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 62 | 不明　土器 | | | | | | 「村」の線刻　底面に煤付着 |
| 63 | 硯 | (10.1) | (4.3) | (1.3) | 94.7 | 粘板岩 | |
| 64 | 砥石 | (8.0) | (4.2) | (2.1) | 78.2 | 砂岩 | 全面使用する |

第54図　ＳＤ2001出土遺物（４）（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 65 | 木製　容器 | | (底) 7.0 | (器高)(0.7) | | | 内外面黒漆 |
| 66 | 木製　容器 | | | (器高)(1.4) | | | 外面黒漆　内面赤漆 |
| 67 | 木製　容器 | | | (器高)(4.2) | | | 最大径18cm |
| 68 | 碗 | (口径) 16.4 | (底径) 7.4 | (器高) 8.1 | | | 内面赤漆　加工痕が全面にある |
| 69 | 桶（底板） | (直径) 14.3 | | 0.9 | | | |
| 70 | 加工板 | 23.1 | | 0.6 | | | 2個一対の孔　3組　柾目 |
| 71 | 加工板 | 23.6 | 10.5 | 0.4 | | | 桜の皮を残存　柾目 |
| 72 | 加工板 | 24.5 | 4.3 | 0.4 | | | 柾目 |
| 73 | 加工板 | (17.8) | (6.3) | (0.5) | | | 柾目 |
| 74 | 加工板 | (14.8) | (2.6) | 0.3 | | | 柾目 |
| 75 | 加工板 | 11.0 | 5.5 | 0.7 | | | 両端を一部切断後に折り取る　柾目 |
| 76 | 加工木 | (10.0) | (径) 2.0 | | | | 先端を2方向から加工 |

第55図　ＳＤ2001出土遺物（５）（Ｓ：１／４）

ＳＤ2002　（第56図）

調査区北側においてＳＤ2003と平行に検出された溝であり，西端はＳＲ2001に切られ，ＳＫ2001・2002を切っている。東端ではＳＤ2003と合流する。

検出面のレベルは標高1.95m前後である。検出できた溝の全長は約13.6m，幅は0.40～0.75m，深さは６～32cmを測る。溝の方向はＥ－６°－Ｓである。底の断面は船底状を呈し，底面のレベルは西から東方向へ比高差0.26mで低くなっている。埋土は暗灰黄色シルト質極細砂の単一層である。溝の東端は南側にも分流する。ＳＤ2003と同じ埋土であるが，切り合い関係を見ると，ＳＤ2002が切り込んでいる。

遺物は，数点の陶磁器片であるが，図化できるものはなかった。

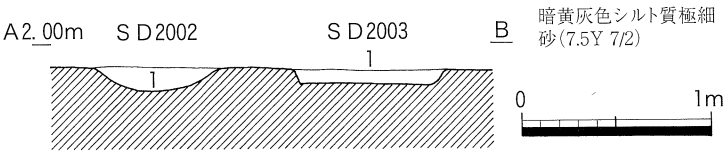
ＳＤ2003　（第56・57図）

調査区北側においてＳＤ2002の南側に平行して走る溝である。溝の西端にはＳＲ2001，東側はＳＤ2001によって切られている。

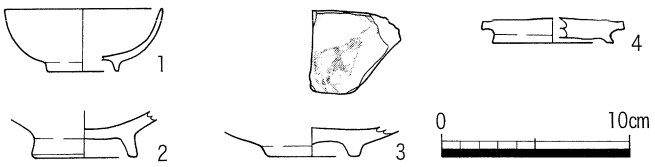
検出面のレベルは標高1.95m前後である。検出できた溝の全長は約12.6m，幅は0.30～0.65m，深さ７cmを測る。溝の方位はＥ－６°－Ｓである。溝の断面は逆台形を呈し，底面のレベルは西から東へ約２cmの比高差でゆるやかに低くなっている。埋土は暗灰黄色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は，磁器碗（１・２），同皿（３），須恵質土器碗（４）。

１は内外面施釉，２は高い高台の碗であり，内外面施釉。３は内面に草花文が描かれる。４は鋭角な高台で，割った面を磨いている。




第56図　ＳＤ2002・2003断面図（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 8.4 | 3.8 | 3.4 | 内外面施釉 | 透明 | 灰白10Y8/1 | 密 |
| 2 | 磁器　碗 | | 5.4 | (1.6) | 内外面施釉 | 明褐灰5YR7/2 | 鈍橙5YR6/4 | 密 |
| 3 | 磁器　皿 | | 5.0 | (1.5) | 内外面施釉　内面に草花文 | 透明 | 明緑灰7.5GY8/1 | 密 |
| 4 | 須恵質土器碗 | 7.5 | 6.4 | (1.3) | 内外面施釉　割れた面を磨いている | オリーブ灰10Y6/2 | 灰7.5Y6/1 | 密 |

第57図　ＳＤ2003出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＤ2004

調査区中央西側において検出された溝であり，ＳＲ2001に切られている。

検出面のレベルは標高1.68m前後である。検出できた溝の全長は10.1m，幅は0.20～0.50m，深さは0.15mを測る。溝の方位はＮ－０°－Ｅを示す。溝の南端は自然消滅しているが，本来は南側に延びていたと思われる。溝の北端は東側へ直角に曲がる様相を呈していたが，ＳＤ2001の調査を重視したため，詳細は不明である。溝の断面はＵ字形を呈し，埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。溝底面のレベルは平坦である。

ＳＤ2005　（第58・59図）

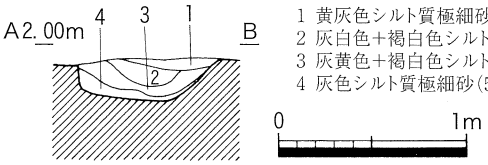
調査区南側において検出された溝である。溝の西端は柱穴に切られている。検出面のレベルは標高1.86mである。検出できた溝の全長は7.10m，幅0.76m，深さ0.22mを測る。溝の方位はＥ－10°－Ｓを示す。溝の断面はＵ字形を呈し，底面のレベルは東側にゆるやかに低くなっている。埋土は４層に分層され，レンズ状堆積をなしている。

遺物は，陶器火入（１），磁器皿（２），軒丸瓦（３），桶（４），加工木（５）である。１は口縁部が水平であることから17世紀後半のものである。２は蛇の目高台で，見込みに砂目が残存する。３は巴文瓦である。

ＳＤ2006　（第60図）

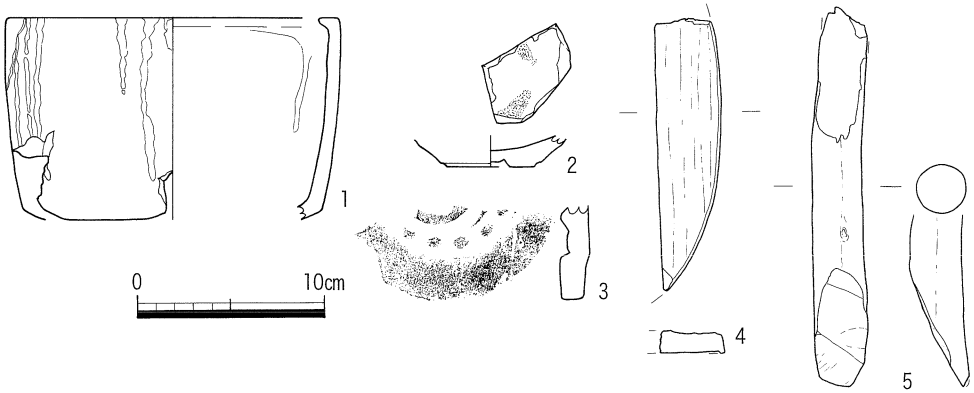
調査区南側においてＳＤ2005と平行する位置に検出された溝である。検出面のレベルは標高1.86mである。溝の検出長は6.30m，幅は0.55m，深さは0.14mを測る。溝の断面はＵ字形を呈し，底面のレベルは平坦である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は，土製円盤（１），軒丸瓦（２）である。




1 黄灰色シルト質極細砂(2.5Y 5/1)
2 灰白色＋褐白色シルト質極細砂(2.5Y 5/1+5Y 7/2)
3 灰黄色＋褐白色シルト質極細砂(7.5Y /2+5/1)
4 灰色シルト質極細砂(5Y 6/13層を含む)

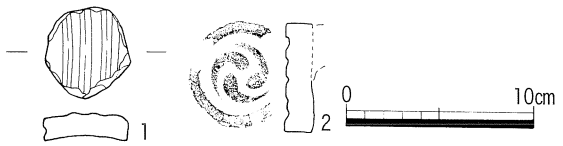
第58図　ＳＤ2005断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 陶器　火入 | 17.6 | | (10.7) | 内面上半と外面施釉　鶯色と淡青色の釉たれ | 灰白10YR8/1 | 浅黄橙10YR8/3 | 密 |
| 2 | 磁器　皿 | | 4.6 | (1.6) | 外面無釉　見込みに砂目 | 灰白5Y7/2 | 灰白2.5Y8/2 | 密 |

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 軒丸瓦 | | | | | | 巴瓦 |
| 4 | 桶 | (9.5) | (3.5) | 1.2 | | | 底板　柾目 |
| 5 | 加工木 | (15.2) | (径) 2.7 | | | | 端部を1方向から加工 |

第59図　ＳＤ2005出土遺物（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土製円盤 | (径) 4/8×4.5 | | 1.2 | | | 陶器片を割って円盤状にする |
| 2 | 軒丸瓦 | | | | | | 巴瓦 |

第60図　ＳＤ2006出土遺物（Ｓ：１／４）

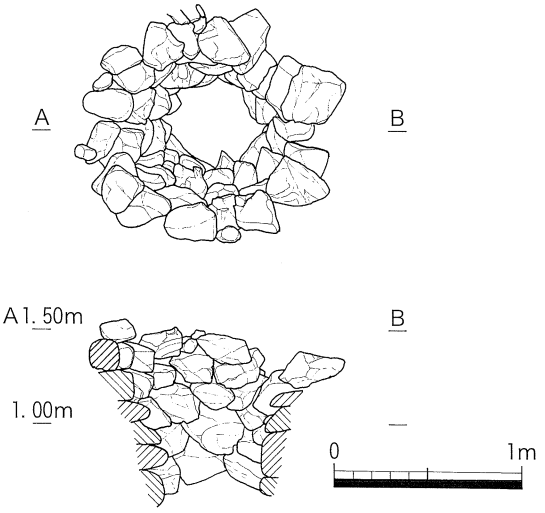
3　井戸

ＳＥ2001　（第61図）

調査区中央東端においてＳＤ2001と重複した状態で検出された井戸である。

検出面のレベルは標高1.50mである。井戸の直径は上場で0.80m，底面は0.50mを測る。底面までの深さは約1.00mである。井戸の掘り方は直径約1.50mを測る。側壁は河原石を５段に積み上げている。側壁は掘り方と同様に上方に向かって広がっている。井戸の側面は砂礫層まで達しており調査時にも多量の湧水があった。

陶磁器が出土したが，調査時の不注意でＳＤ2001の遺物に混入し，その詳細は不明となってしまった。



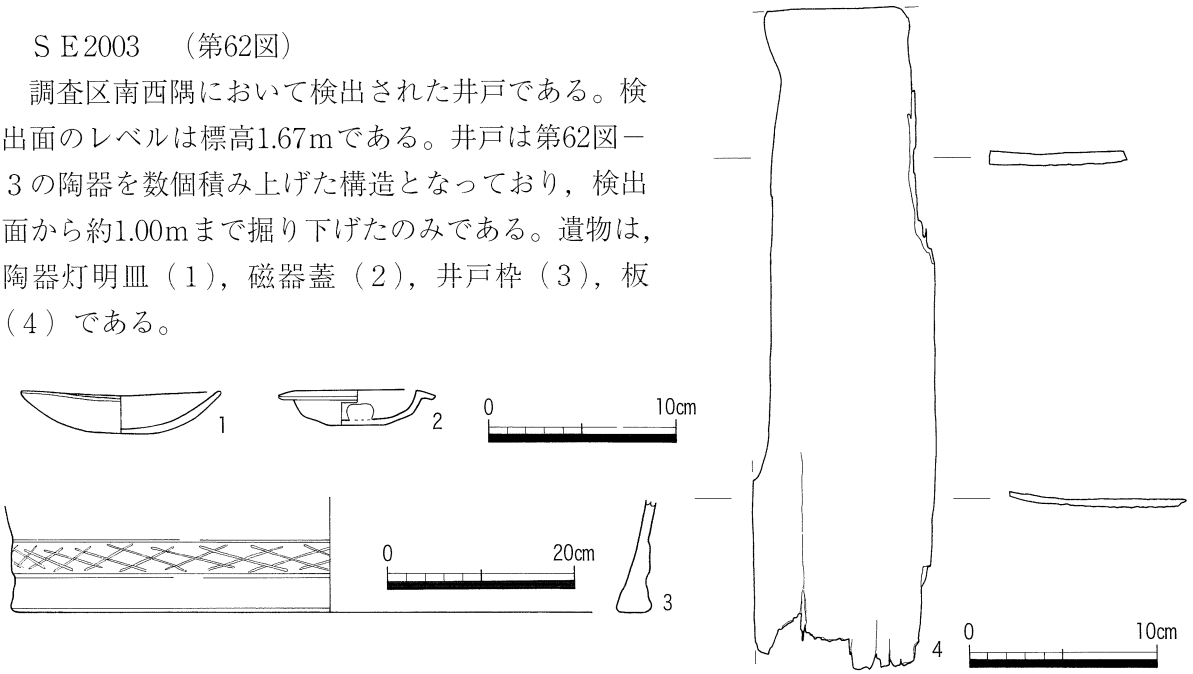

第61図　ＳＥ2001平・断面図（Ｓ：１/40）

ＳＥ2002

調査区南東隅において検出された井戸である。井戸は丸太を方形に組んで井戸枠としたもので，１辺の長さは1.00mを測る。近代の井戸であるため，井戸は完掘しなかった。遺物は多量の陶磁器，瓦，ビニール等が出土した。

ＳＥ2003　（第62図）

調査区南西隅において検出された井戸である。検出面のレベルは標高1.67mである。井戸は第62図－３の陶器を数個積み上げた構造となっており，検出面から約1.00mまで掘り下げたのみである。遺物は，陶器灯明皿（１），磁器蓋（２），井戸枠（３），板（４）である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外（釉） | 内（素地） | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 陶器　灯明皿 | 10.6 | 3.6 | 2.2 | 内面施釉　体部外面回転篦削り　内面に4本 | 鈍い黄褐10YR7/3 | 鈍い黄橙10YR5/3 | 微砂 |
| 2 | 磁器　蓋 | 8.2 | 2.9 | 1.8 | 内面施釉　底面回転糸切り　信楽系 | 橙7.5YR6/8 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 微砂 |
| 3 | 井戸　枠 | 68.0 | | (12.1) | 外面回転ナデ　内面板ナデ　斜格子状沈線 | 鈍い黄橙10YR6/3 | | 微砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 加工板 | (35.0) | 9.5 | 0.7 | | | 柾目 |

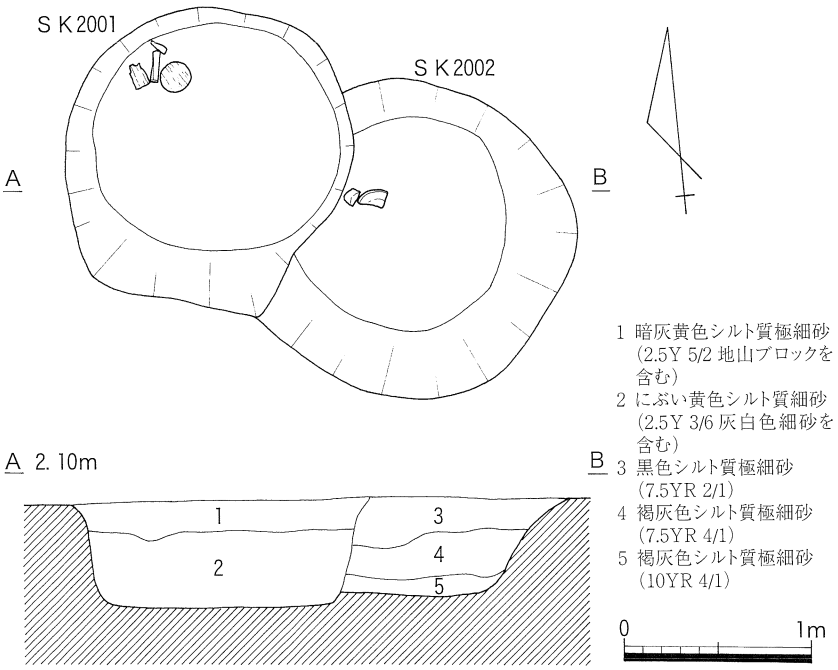
第62図　ＳＥ2003出土遺物（Ｓ：1/4，1/8）

４　土坑

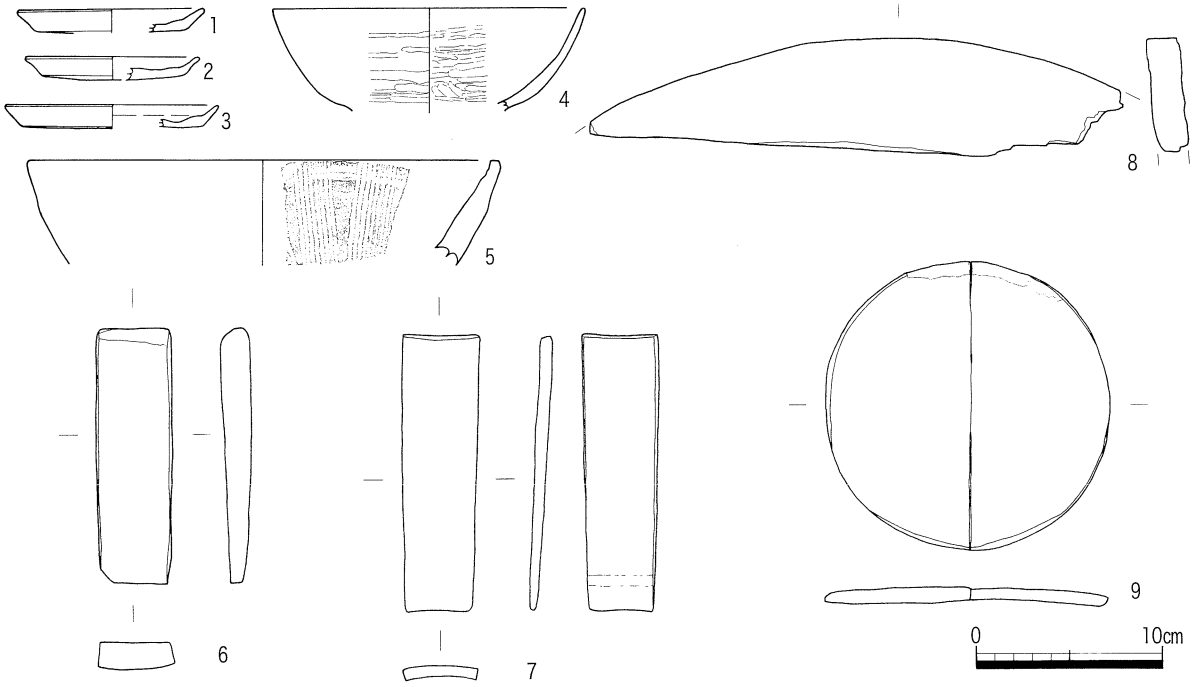
ＳＫ2001　（第63・64図）

調査区北側においてＳＫ2002・ＳＤ2002と重複して検出された土坑である。切り合い関係は，この土坑がＳＫ2002を切り，ＳＤ2002に切られている。

検出面のレベルは標高1.95mである。平面形は円形を呈し，直径1.60mを測る。検出面からの深さは約0.60mを測る。底面は平坦であり，北側にやや片寄っている。埋土は上下２層に分層されるが，下層のにぶ




第63図　ＳＫ2001・2002平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 10.0 | 7.8 | (1.2) | 回転ナデ　底面回転篦切り | 灰褐7.5YR6/2 | 灰白10YR8/1 | 微砂 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 9.4 | 7.8 | 1.2 | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 灰白5Y7/1 | | 微砂 |
| 3 | 土師質土器小皿 | 11.4 | 9.6 | 1.2 | 回転ナデ　底面ナデ | 淡橙5YR8/3 | 灰白5YR8/1 | 微砂 |
| 4 | 土師質土器碗 | 16.4 | | (5.4) | 体部外面ナデ，篦磨き　内面篦磨き | 灰白2.5Y8/2 | 黒2.5Y2/1 | 微砂 |
| 5 | 陶器　擂鉢 | 25.0 | | (5.5) | 回転ナデ　卸目　備前焼 | 赤褐2.5YR4/6 | | 細砂 |

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 桶 | 13.6 | 4.1 | 1.6 | | | 側板で若干湾曲する　柾目 |
| 7 | 桶 | 14.8 | 4.0 | 0.6 | | | 側板で若干湾曲する　柾目 |
| 8 | 桶 | (28.6) | (9.0) | 1.9 | | | 底板　板目 |
| 9 | 桶 | (径) 15.3 | | 0.9 | | | 2枚の板材を木釘で接合する　柾目 |

第64図　ＳＫ2001出土遺物（Ｓ：１／４）

い黄色シルト質極細砂が厚く堆積する。

遺物は土師質土器小皿（１～３），土師質土器椀（４），陶器擂鉢（５），桶材（６～９）。

１～３は平底から短く立ち上がる小皿で，１の底部は回転ヘラ切り，２は回転ヘラ切り後にナデ，３はナデが施される。

４は体部外面ナデ，ヘラミガキ，内面ヘラミガキが施される。内面に黒色処理を施す。

５は備前焼擂鉢で，内面に８本単位の卸目がある。

ＳＫ2002　（第63・65図）

調査区北側でＳＫ2001の東側において検出された土坑で，ＳＫ2001・ＳＤ2002に切られる。

検出面のレベルは標高1.95mである。平面形は円形であり，直径は1.70mを測る。検出面からの深さは0.53mを測る。底面は平坦であり，わずかに北側に片寄っている。

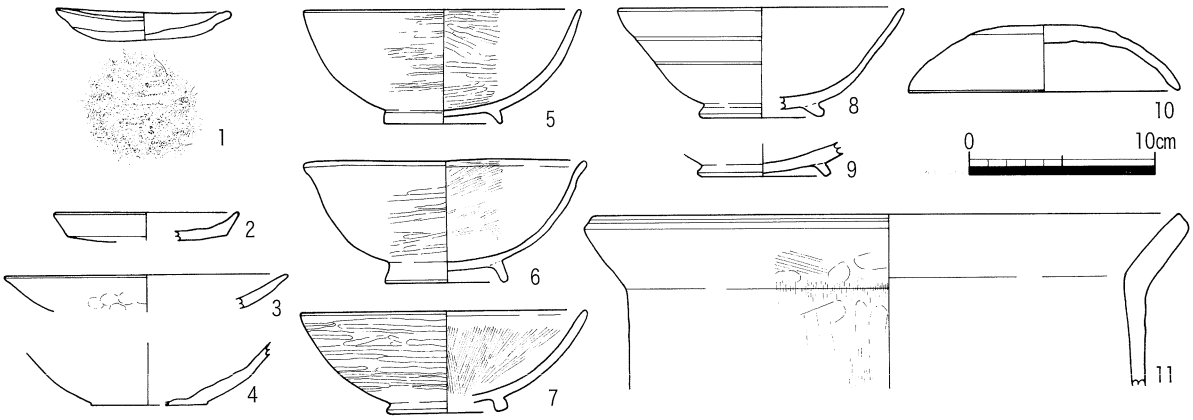
遺物は，土師質土器小皿（１～３），須恵質土器杯（４），土師質土器椀（５～９），同蓋（10），同甕（11）である。

１は左右非対称な小皿で，２は短い体部，３は外面にわずかな段を有する。

５は断面逆三角形の高台を有し，内外面ヘラミガキが施される。内面が黒色処理される。６は若干外反する口縁部，高い高台の椀で，内外面ヘラミガキが施される。７は断面台形の高台で，内面は４本単位の刷毛目，外面ヘラミガキが施される。８は内面黒色処理の椀で，外面回

転ヘラ削り後にナデ，内面ナデ，ヘラミガキが施される。５～９は13世紀のものである。

11は長胴から外反する口辺部の甕で，13世紀のものである。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 9.4 | 4.1 | 1.9 | 回転ナデ　底面手持ち篦削り　体部外面ナデ | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 10.0 | 8.6 | (1.5) | 回転ナデ　底面回転篦切り後に周辺ナデ | 鈍い黄橙10YR7/4 | 橙5YR7/6 | 微～細砂 |
| 3 | 土師質土器小皿 | 15.2 | | (1.85) | 回転ナデ　外面指押え | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 4 | 須恵質土器杯 | | 6.2 | (3.3) | 回転ナデ　底面回転篦切り | 灰白7.5Y8/1 | | 微～粗砂 |
| 5 | 土師質土器碗 | 14.8 | 6.2 | 6.0 | 外面篦磨き･ナデ　内面篦磨き　内黒 | 灰白10Y8/1 | 黒10Y2/1 | 微砂 |
| 6 | 土師質土器碗 | 15.1 | 6.2 | 6.5 | 外面篦磨き･ナデ　内面篦磨き　底面回転篦切り後ナデ | 灰白10Y8/1 | | 微砂若干 |
| 7 | 土師質土器碗 | 15.2 | 6.4 | 5.4 | 外面篦磨き　内面刷毛目　重ね焼き | 灰白N8/ | | 細砂 |
| 8 | 土師質土器碗 | 15.2 | 6.6 | 5.8 | 外面回転篦削り後にナデ　内面ナデ･篦磨き　内黒 | 灰白10Y8/1 | 黒褐2.5Y3/1 | 微～細砂 |
| 9 | 土師質土器碗 | | 7.0 | (1.7) | 内面篦磨き | 灰白10Y8/1 | 灰NN5/ | 微砂若干 |
| 10 | 土師質土器蓋 | 14.4 | 7.8 | 3.5 | 回転ナデ　天井部回転篦切り後にナデ | 灰白10YR8/1 | | 微砂 |
| 11 | 土師質土器甕 | 31.0 | | (9.2) | 口縁部横ナデ　胴部外面刷毛目･ナデ　内面ナデ | 黄灰2.5Y5/1 | 灰黄2.5Y6/2 | 微～粗砂 |

第65図　ＳＫ2002出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＫ2003　（第66図－１・２）

調査区中央東端において検出された土坑で，ＳＫ2008と重複している。

検出面のレベルは標高1.88ｍである。土坑の平面形は隅丸方形を呈し，長辺0.96ｍ，短辺0.90ｍを測る。検出面からの深さは６㎝を測る。土坑の断面は逆台形を呈し，底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は，土師質土器小皿（１），磁器皿（２）である。

ＳＫ2004　（第66図－３）

調査区中央において検出された土坑であり，7本の柱穴と重複する。

検出面のレベルは標高1.87ｍである。土坑の平面形は南東隅を拡張した不整な楕円形を呈し，東西方向の長軸は約1.70ｍ，短軸は約1.00ｍを測る。検出面から底面までの深さは0.10ｍを測る。底面は平坦である。埋土は褐灰色シルト質極細砂が主体となっている。

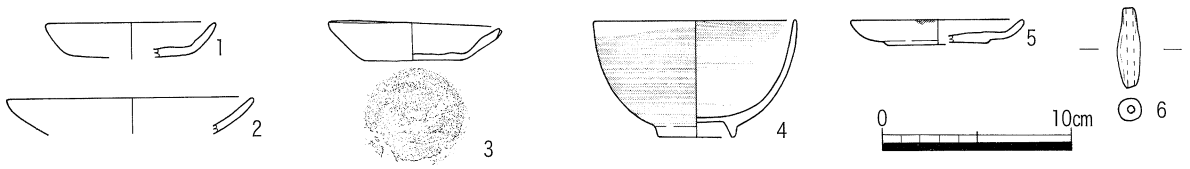
土坑を完掘した後で，底面に４本の柱穴を検出したことから，この土坑は柱穴より若干新しい時期の遺構であると考えられる。

遺物は，土師質土器杯（３），磁器碗（４）である。４は肥前系碗であり，内外面に刷毛目文が施され，18世紀後半のものである。

ＳＫ2005　（第66図－５）

調査区中央でＳＤ2001の南側において単独で検出された土坑である。

検出面のレベルは標高1.88ｍである。土坑の平面形は楕円形を呈し，長軸0.90ｍ，短軸0.67ｍを測る。深さは0.28ｍを測る。土坑の断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。底面に拳大




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 9.0 | 6.4 | (1.8) | 磨滅 | 浅黄橙10YR8/3 | | 微砂若干 |
| 2 | 磁器　皿 | 13.0 | | (1.9) | 回転ナデ　内外面施釉 | 灰白5Y7/1 | 淡黄2.5Y8/3 | 密 |
| 3 | 土師質土器小皿 | 9.1 | 5.0 | 2.1 | 底面静止篦削り後に篦ナデ　底部内面指ナデ | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂 |
| 4 | 磁器　碗 | 10.6 | 4.0 | 6.1 | 内外面施釉　内外面刷毛目文　肥前系 | 明褐7.5YR5/6 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 密 |
| 5 | 土師質土器小皿 | 9.0 | 5.4 | 1.3 | 底部外面回転糸切り　内面静止篦削り　煤付着 | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂 |

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 土錘 | 4.2 | (径) 1.2 | | 5.5 | | |

第66図　ＳＫ2003～2006出土遺物（Ｓ：１／４）

の石が数個集中して検出された。

遺物は，土師質土器小皿（５），その他の磁器片である。５は口縁部の一部に煤が付着しており，灯明皿である。

ＳＫ2006　（第66図－６）

調査区中央のやや南寄りにおいて単独で検出された土坑である。

検出面のレベルは標高1.85mである。土坑の平面形はやや不整な隅丸方形を呈し，一辺0.80mを測る。深さは0.15mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は東端でやや低くなるがほぼ平坦である。埋土は，中心に灰白色シルト質極細砂，周辺に灰色シルト質極細砂の２層が堆積する。

ＳＫ2007　（第67図）

調査区南東側において単独で検出された土坑である。

検出面のレベルは標高1.86mである。土坑の平面形は不整な楕円形を呈し，南北方向の長軸は0.95m，短軸は0.80mを測る。検出面から底面までの深さは0.30mを測る。土坑の断面はＵ字形を呈する。底面と側面に土師質土器大甕が密着した状態で出土した。埋土は３層に分層され，東側から土の流入が始まった様相を示す。

遺物は，数点の磁器片と前述した土師質土器大甕である。

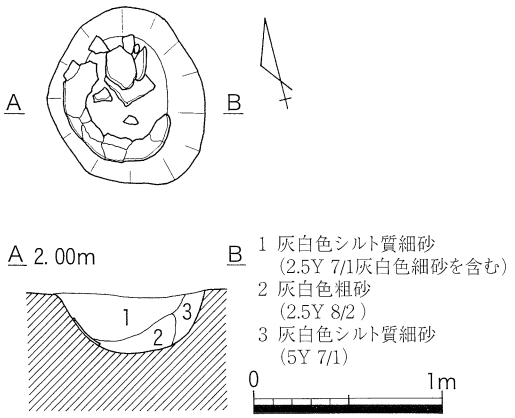
ＳＫ2008　（第68・69図）

調査区中央の東端において検出された土坑で，ＳＫ2003と重複している。

検出面のレベルは標高1.88mである。土坑の平面形は不整な楕円形を呈し，東西方向の長軸は1.20m，短軸は1.08mを測る。検出面から底面までの深さは0.76mを測る。土坑の断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。土坑の上面には径８～20cmの河原石が多量に集中する状態で検出された。

遺物は，磁器蓋（１），同皿（２・５），同碗（３・４），その他の陶磁器片である。

１は蛇の目釉ハギの蓋で，肥前系である。２は外

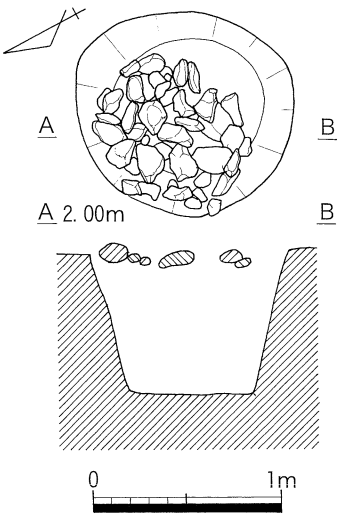



第67図　ＳＫ2007平・断面図
（Ｓ：１/40）

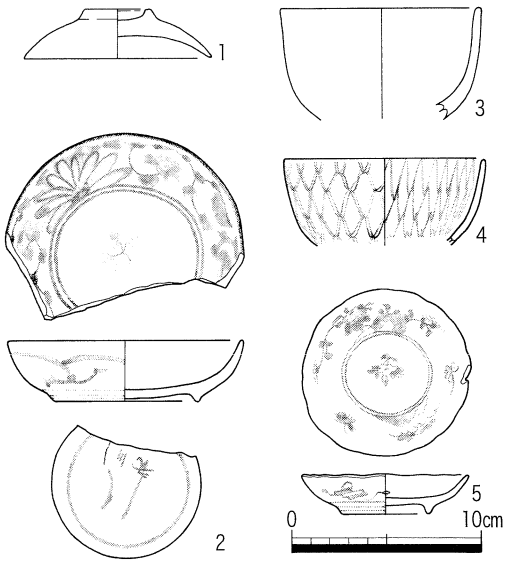
面に如意頭文崩れの唐草文，内面に牡丹唐草文が描かれ，高台に「大明年製」の銘，見込みに花弁文があり，18世紀後半のものである。

4は内外面に二重網目文が描かれる。

5は輪花皿で，外面に宝尽文，内面に花鳥文が描かれ，18世紀後半のものである。




第68図　ＳＫ2008平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　蓋 | 10.0 | 3.6 | 2.6 | 内外面施釉　蛇の目釉ハギ | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白N8/ | 密 |
| 2 | 磁器　皿 | 12.4 | 7.8 | 3.2 | 外面唐草文　内面牡丹唐草文「大明年製」肥前系 | 透明 | 灰白N8/ | 密 |
| 3 | 磁器　碗 | 10.4 | | (5.8) | 内外面施釉　くらわんか碗　肥前系 | 透明 | 淡黄2.5Y8/3 | 密 |
| 4 | 磁器　碗 | 10.4 | | (4.6) | 内外面施釉　内外面二重網目文　肥前系 | 透明 | 灰白N8/ | 密 |
| 5 | 磁器　皿 | 8.6 | 4.6 | 2.1 | 内外面施釉　外面宝尽文　内面花鳥文　肥前系 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |

第69図　ＳＫ2008出土遺物（Ｓ：１/４）

5　柱穴

ＳＰ2173・2174　（第70図）

調査区中央東側の重複した円形の柱穴で，直径0.26ｍと0.34ｍを測る。ＳＰ2173の深さは0.22ｍ，ＳＰ2174は0.15ｍである。２本の柱穴は埋土に詰石を残存する。

ＳＰ2371　（第70・104図）

調査区中央において検出された円形の柱穴で，直径0.30ｍ，深さ0.30ｍを測る。底面上に根石が残存する。遺物は土師質土器鍋（１）である。

ＳＰ2373　（第70・105図）

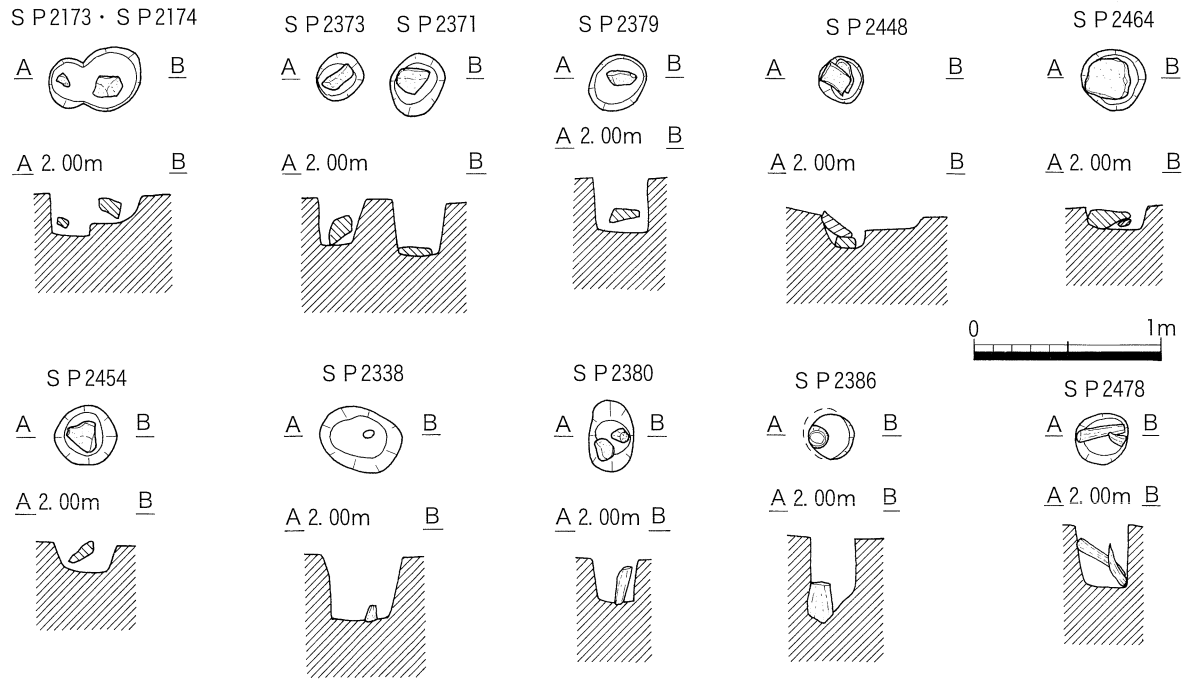
調査区中央において検出された円形の柱穴で，直径0.25ｍ，深さ0.26ｍを測る。底面に根石が残存する。遺物は土師質土器杯（１）である。

ＳＰ2379　（第70図）

調査区中央において検出された円形の柱穴で，直径0.30ｍ，深さ0.30ｍを測る。底面より約５㎝上の埋土中に石が残存する。

ＳＰ2448　（第70図）

調査区南側において検出された柱穴で，ＳＤ2005に切られている。土坑の平面形は円形を呈し，直径は0.24ｍ，深さ0.16ｍを測る。２段に重なった石が残存する。




第70図　２工区ＳＰ平・断面図（Ｓ：１/40）

ＳＰ2454　（第70図）

調査区南側において検出された柱穴で，平面形は円形を呈す。直径は0.35m，深さは0.16mを測る。埋土中に傾いた石が残存する。

ＳＰ2464　（第70図）

調査区南西側において検出された柱穴で，平面形は円形を呈す。直径は0.34m，深さは0.10mを測る。底面直上に根石が残存する。

ＳＰ2338　（第70図）

調査区中央において検出された柱穴である。平面形は楕円形を呈し，長軸0.43m，短軸0.32m，深さは0.34mを測る。断面は逆台形を呈す。底面に現存長10cmを測る柱材の一部が直立する。

ＳＰ2380　（第70図）

調査区中央において検出された柱穴である。平面形は楕円形を呈し，長軸0.40m，短軸0.24mを測る。深さは0.23mを測る。現存長0.20mを測る柱材の一部が直立し，詰石がある。

ＳＰ2386　（第70図）

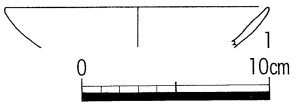
調査区中央において検出された柱穴である。平面形は円形を呈し，直径0.26m，深さ0.46mを測る。現存長0.20m，径0.12mの柱材が直立する。柱材は先端部分を２方向から加工される。

ＳＰ2478　（第70図）

調査区南東側において検出された柱穴である。平面形は円形を呈し，直径0.30m，深さ0.32mを測る。ミカン割りの加工材が２本出土した。

ＳＰ2021　（第71図）

調査区北側において検出された円形の柱穴で，直径0.14m，深さ６cmを測る。遺物は土師質土器杯（１）である。




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器杯 | 13.8 | | (2.1) | 回転ナデ | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂若干 |

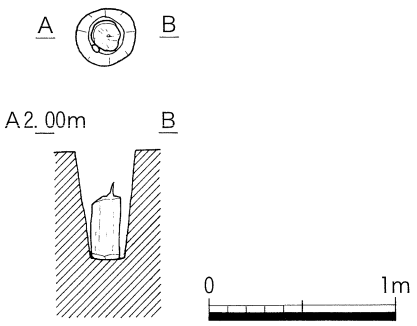
第71図　ＳＰ2021出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2057　（第72・73図）

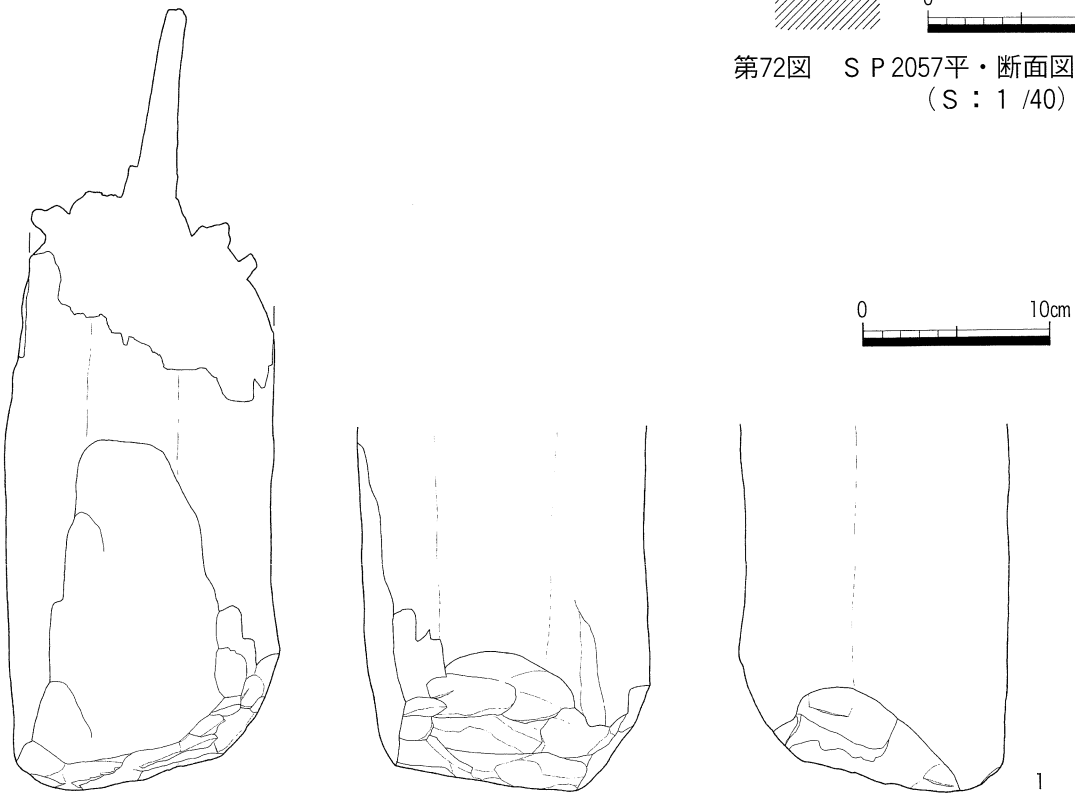
調査区中央の北東寄りにおいて検出された柱穴である。

平面形は円形を呈し，直径0.32m，深さ0.58mを測る。土坑の断面は逆台形を呈す。底面に柱材の一部が直立する。

柱材は芯部分を含めた残存長は0.415mを測るが，遺存状態の良いのは0.285mである。直径は0.142mを測り，斜め角度の加工が１方向から行われる。




第72図　ＳＰ2057平・断面図（Ｓ：１/40）

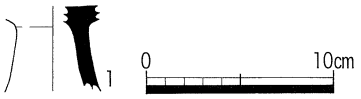



| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 柱材 | (41.5) | (径) 14.2 | | | | 3方向から斜めの加工　1方向から直角の加工 |

第73図　ＳＰ2057出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2072　（第74図）

調査区中央の北西側に検出された円形の柱穴で，直径0.20m，深さ0.20m。遺物は須恵器高杯（１）である。

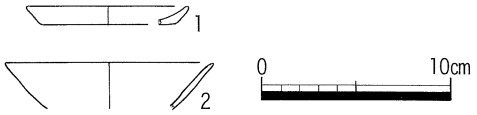



| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵器高杯 | | | (4.5) | 回転ナデ | 灰白N7/ | | 密 |

第74図　ＳＰ2072出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2080　（第75図）

調査区中央の北西にある円形の柱穴で，直径0.34m，深さ0.13mを測る。遺物は土師質小皿（１），同杯（２）。

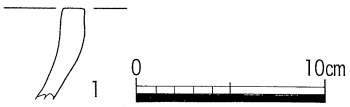



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.6 | 7.0 | 1.0 | 磨滅 | 灰白7.5YR8/2 | | 微砂 |
| 2 | 土師質土器杯 | 11.0 | | (2.4) | 回転ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微砂 |

第75図　ＳＰ2080出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2086　（第76図）

調査区中央の北西側にある円形の柱穴で，直径0.20m，深さ0.22mを測る。遺物は土師質土器土鍋（１）である。

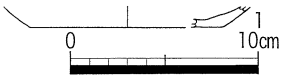



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器土鍋 | | | (4.8) | 口縁部横ナデ　外面ナデ　内面板ナデ | 黄灰2.5Y6/1 | | 細砂 |

第76図　ＳＰ2086出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2093　（第77図）

調査区中央の北西側において検出された柱穴である。平面形は円形を呈し，直径0.34mを測る。底部の南側が一段深くなり，その深さは0.20mを測る。遺物は土師質土器小皿（１）である。

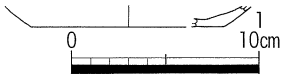



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 11.8 | | (1.5) | 内外面回転ナデ | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |

第77図　ＳＰ2093出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2097　（第78図）

調査区中央の北西側に検出された円形の柱穴で，直径は0.35m，深さは0.49mを測る。ＳＰ2098に切られる。遺物は土師質土器杯（１）。

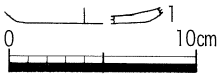



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器杯 | | 10.2 | (1.1) | 外面磨滅　内面回転ナデ | 灰白7.5YR8/1 | | 微砂 |

第78図　ＳＰ2097出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2098　（第79図）

調査区中央の北西側で検出された楕円形の柱穴で，長軸0.40m，短軸0.30mを測る。深さは0.51mを測る。遺物は土師質土器小皿（１）である。

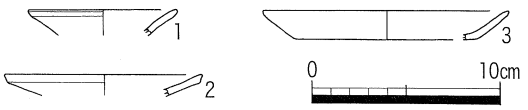



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | | 7.0 | (0.8) | 外面磨滅　内面回転ナデ | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂 |

第79図　ＳＰ2098出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2100　（第80図）

調査区中央において検出された楕円形の柱穴で長軸0.40m，短軸0.30m，深さ0.55mを測る。遺物は土師質土器小皿（１・２），同杯（３）である。

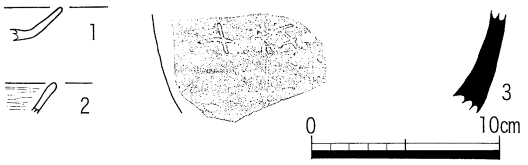



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.0 | | (1.3) | 内外面回転ナデ | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 10.4 | | (1.1) | 内外面回転ナデ　口縁端部が角張る | 淡橙5YR8/4 | | 微砂 |
| 3 | 土師質土器杯 | 13.0 | 9.8 | 1.5 | 内外面磨滅 | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |

第80図　ＳＰ2100出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2128　（第81図）

調査区中央の東側にある楕円形の柱穴で，長軸0.56m，短軸0.34m，深さ0.47mを測る。遺物は土師杯（１），瓦器椀（２），須恵器壷（３）である。



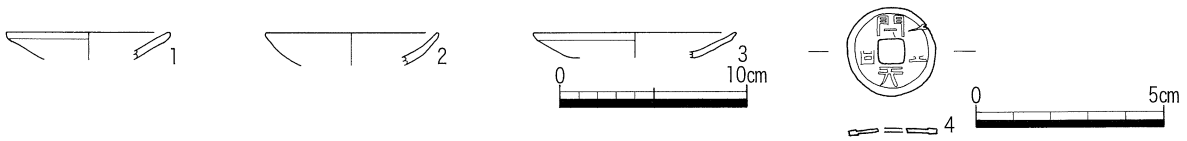

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　杯 | | | (1.7) | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微砂 |
| 2 | 瓦器　碗 | | | (1.6) | 口縁部横ナデ　内面篦磨き | 褐灰10YR4/1 | | 微砂若干 |
| 3 | 須恵器　壷 | | | (5.4) | 回転ナデ　外面に窯印「＋」「井」 | 明青灰5PB7/2 | 青灰5PB6/2 | 微砂 |

第81図　ＳＰ2128出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2145　（第82図）

調査区中央東端において検出された柱穴である。平面形は不整な楕円形を呈し，東西方向の長軸は0.85m，短軸0.44m，深さ0.52mを測る。

遺物は，土師質土器小皿（１～３），銭（４）である。



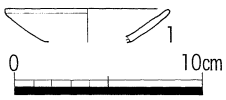

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.6 | | (1.4) | 内外面回転ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微砂 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 9.0 | | (1.7) | 磨滅 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 橙2.5YR7/6 | 微砂 |
| 3 | 土師質土器小皿 | 10.8 | 6.8 | (1.3) | 内外面回転ナデ　口縁部外面に若干の稜線 | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 銭 | (径) 2.3 | | 0.1 | | | 「開元通宝」 |

第82図　ＳＰ2145出土遺物（Ｓ：１／2，1／4）

ＳＰ2156　（第83図）

調査区中央東端にある円形の柱穴で，土坑と重複する。柱穴の直径は0.26m，深さ0.15mを測る。遺物は，土師質土器小皿（１）である。

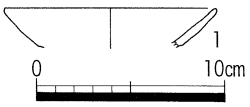



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.8 | | (1.75) | 回転ナデ | 灰白7.5Y8/1 | | 微～細砂 |

第83図　ＳＰ2156出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2181・2182　（第84図）

調査区中央東側にあり，接続する柱穴で，平面形は円形である。直径は0.25m，深さ0.33mである。遺物は，土師質土器小皿（１）である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 11.2 | | (2.1) | 回転ナデ | 淡橙5YR8/3 | | 微砂 |

第84図　ＳＰ2181，2182出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2193　（第85図）

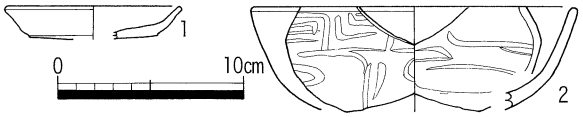
調査区中央で検出された柱穴で，平面形は楕円形である。柱穴の直径は0.16×0.22m，深さは0.21mを測る。遺物は土師質土器小皿（１），同杯（２）である。２はＳＰ2191出土のものと接合した。

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 7.8 | 6.0 | 1.4 | 内外面回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微砂 |
| 2 | 土師質土器杯 | 12.0 | 7.4 | (2.0) | 内外面回転ナデ | 褐灰7.5YR6/1 | | 微砂 |

第85図　ＳＰ2193出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2205　（第86図）

平面形は楕円形を呈し，直径は0.22×0.35m，深さは0.25mを測る。遺物は，土師質土器小皿（1），緑釉鉢（3）である。

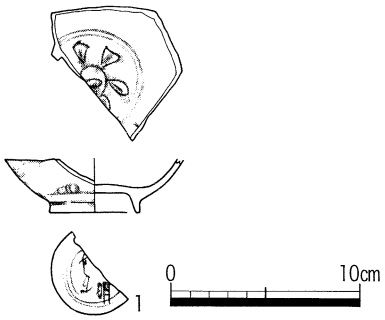



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 9.2 | 6.8 | 1.7 | 内回転ナデ　底面回転篦切り | 灰白7.5Y8/1 | 灰白5Y8/1 | 微砂 |
| 2 | 緑釉　鉢 | 17.0 | | (5.4) | 内外面施釉　片刃彫り | 黄緑 | 灰白N8/ | 密 |

第86図　ＳＰ2205出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2219　（第87図）

調査区中央やや西寄りにある柱穴で，平面形はくびれのある楕円形を呈し，２本の柱穴の可能性もある。直径は0.26×0.46m，深さは0.24mを測る。遺物は，磁器碗（1）である。1は高台に「□明年製」の銘があり，肥前系で18世紀のものである。

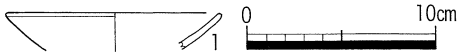



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 4.8 | | (2.8) | 内外面施釉　「□明年製」　肥前系 | 透明 | 灰白N8/ | 密 |

第87図　ＳＰ2219出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2228　（第88図）

調査区中央西側にある柱穴で，平面形は楕円形を呈する。柱穴の直径は0.38×0.52m，深さは0.28mを測る。遺物は瓦質土器灯明皿（1）である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 瓦質灯明皿 | 11.4 | | (1.9) | 回転ナデ　内面に煤 | 褐灰7.5YR6/1 | 褐灰7.5YR4/1 | 微砂 |

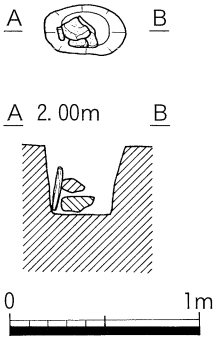
第88図　ＳＰ2228出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2220　（第89・90図）

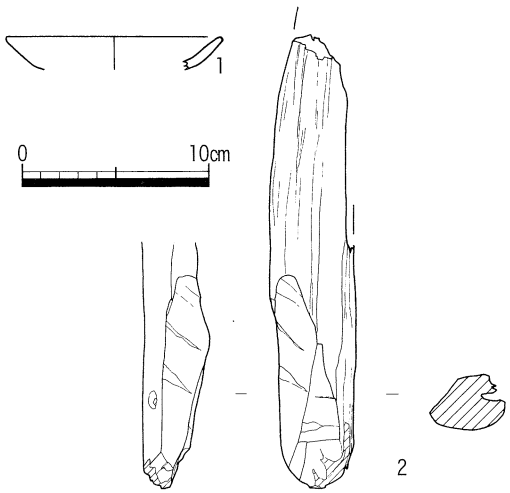
調査区中央西側に検出された柱穴で，平面形は楕円形を呈す。

柱穴の直径は0.26×0.44m，深さは0.36mを測る。底面中央に２段に積まれた２個の石とほぼ直立する加工木が検出された。

遺物は，土師質土器小皿（1），加工木（2）である。1は回転ナデが施される。2は端部を1方向から加工している。




第89図　ＳＰ2220
平・断面図
（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 11.4 | | (1.7) | 回転ナデ | 灰白7.5YR8/2 | | 微砂 |

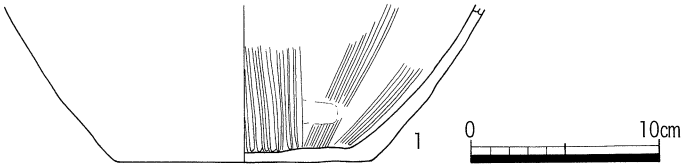
| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 加工木 | (24.1) | 4.5 | 3.5 | | | 端部を2方向から明瞭に加工する |

第90図　ＳＰ2220出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2236・2237　（第91図）

調査区中央西側で検出された柱穴であり，確認時は２本の柱穴であったが，調査の結果１本の柱穴であることが判明した。柱穴の平面形は不整な円形を呈し，直径は0.50×0.56m，深さは0.42mを測る。

遺物は，土師質土器擂鉢（１）である。１は６本単位の卸目を放射状に施している。




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器擂鉢 | | 13.5 | (8.3) | 外面剥離　内面ナデ　卸目 | 橙5YR7/6 | 灰白7.5YR8/1 | 微～粗砂 |

第91図　ＳＰ2236，2237出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2267　（第92図）

調査区中央西側で検出された柱穴である。柱穴の平面形は円形を呈し，直径は0.15m，深さは0.17mを測る。

遺物は，瓦質土器灯明皿（１）である。１は非常に器肉が薄く，内外面とも回転ナデが施される。

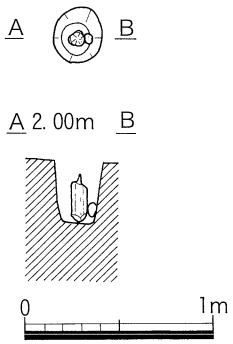
| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 瓦質灯明皿 | 9.0 | | (1.5) | 回転ナデ | 鈍い橙5YR7/4 | 淡橙5YR8/4 | 微砂 |

第92図　ＳＰ2267出土遺物（Ｓ：１／４）

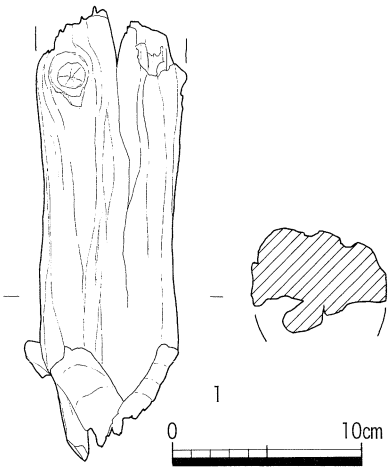
ＳＰ2272　（第93・94図）

調査区中央西側で検出された柱穴である。柱穴の平面形は円形を呈し，直径は0.30m，深さは0.32mを測る。底面中央に直径７cmの柱材の一部が直立し，1個の詰石が検出された。

遺物は，柱材（１）である。１は現存長0.24mを測り，先端部を２方向から明瞭な加工が行われている。枝打ちの加工も見られる。




第93図 SP2272平・断面図
（Ｓ：１/40）



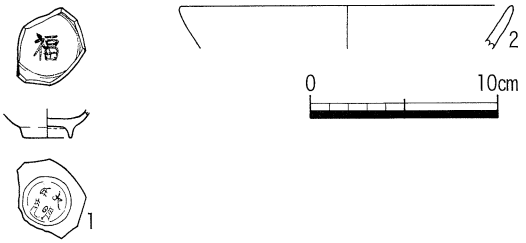

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 柱材 | (24.0) | (径) 6.2 | | | | 先端を2方向から加工 |

第94図　ＳＰ2272出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2329　（第95図）

調査区中央で検出された柱穴である。柱穴の平面形はくびれのある楕円形を呈し，長軸0.51m，短軸0.30m，深さ0.41mを測る。

遺物は，磁器碗（１），同皿（２）である。１は肥前系で，18世紀のものである。



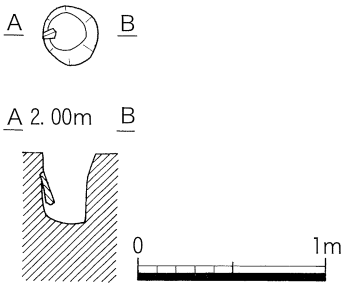

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | | 2.6 | (1.5) | 内外面施釉　見込み「福」　高台「大明年製」　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 2 | 磁器　皿 | 17.6 | | (2.3) | 内外面施釉 | オリーブ黄5Y6/3 | 灰白5Y8/1 | 密 |

第95図　ＳＰ2329出土遺物（Ｓ：１／４）

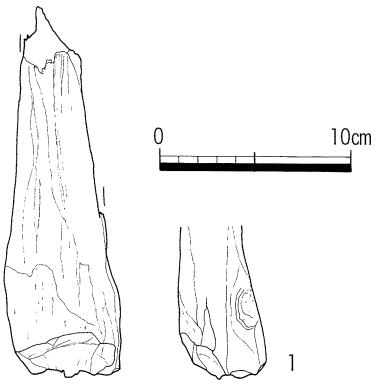
ＳＰ2335　（第96・97図）

調査区中央で検出された円形の柱穴である。柱穴の直径は0.30m，深さ0.36mを測る。柱穴の壁に沿って直立する柱材の一部が残存する。柱材は底面より浮いている。

遺物は，柱材（１）である。１は先端部を２方向から加工する。




第96図　ＳＰ2335平・断面図




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 柱材 | (19.6) | (6.2) | (4.5) | | | 先端を2方向から加工し折り取る |

第97図　ＳＰ2335出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2336　（第98図）

調査区中央に検出された柱穴である。柱穴の平面形は楕円形を呈し，長軸0.40m，短軸0.26m，深さ0.24mを測る。遺物は土師質土器杯（１），同羽釜（２）である。

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器杯 | 11.2 | | (2.4) | 回転ナデ | 淡黄5YR8/3 | | 微砂 |
| 2 | 土師質土器羽釜 | 19.2 | | (3.1) | 横ナデ | 灰白10YR8/1 | 明褐灰5YR7/2 | 粗砂 |

第98図　ＳＰ2336出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2348　（第99図）

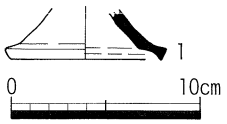
調査区中央において検出された柱穴である。柱穴の平面形は円形を呈し，直径0.16m，深さ0.33mを測る。遺物は，土師質土器小皿（１）である。

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.0 | | (1.3) | 回転ナデ　底面ナデ | 灰白7.5YR8/2 | 灰白7.5YR8/2 | 微砂 |

第99図　ＳＰ2348出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2349　（第100図）

調査区中央において検出された柱穴である。柱穴の平面形は円形を呈し，直径0.25m，深さ0.28mを測る。遺物は，須恵器高杯（１）である。



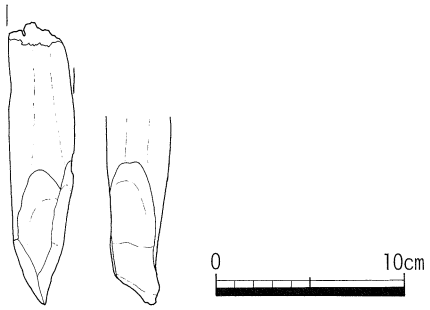

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵器高杯 | | 8.0 | (2.7) | 回転ナデ | 灰白5Y7/1 | 灰白N7/ | 密 |

第100図　ＳＰ2349出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2355　（第101図）

調査区中央においてＳＢ2001のＰ－17に切られた状態で検出された柱穴である。平面形は円形で，直径0.20m，深さ0.20mを測る。底面中央に加工木が直立する状態で出土した。

遺物は，加工木（１）である。現存長0.15m，直径3.5cmを測り，先端部を３方向から明瞭に加工されている。



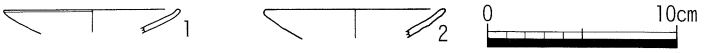

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 加工木 | (15.0) | (径) 3.5 | | | | 先端を3方向から明瞭に加工する　柱材か |

第101図　ＳＰ2355出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2360　（第102図）

調査区中央においてＳＰ2361と重複する状態で検出された柱穴である。柱穴の平面形は円形を呈し，長軸は0.40m，短軸は0.28m，深さは0.35mを測る。切り合い関係は不明である。

遺物は，土師質土器小皿（1・2）である。



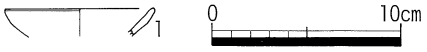

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 9.2 | | (1.2) | 回転ナデ | 灰白7.5YR8/2 | 灰白7.5YR8/1 | 細砂 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 11.6 | | (1.5) | 回転ナデ | 灰白7.5YR8/2 | | 微砂 |

第102図　ＳＰ2360出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2366　（第103図）

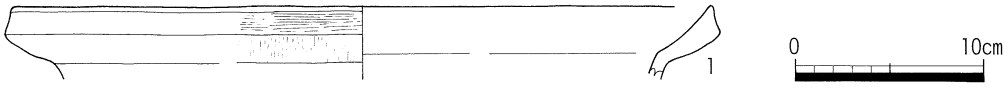
調査区中央において検出された柱穴である。柱穴の平面形はくびれのある楕円形を呈し，２本の柱穴が繋がったものとも考えられる。長軸は0.64m，短軸は0.40m，深さは0.42mを測る。

遺物は，土師質土器小皿（１）である。１は内外面回転ナデが施される。



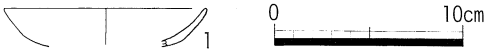

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.0 | | (1.5) | 回転ナデ | 灰白10YR8/2 | 浅黄橙10YR8/3 | 細砂 |

第103図　ＳＰ2366出土遺物（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器土鍋 | 37.0 | | (3.6) | 外面粗い刷毛目　内面板ナデ | 鈍い褐7.5YR6/3 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 微～細砂 |

第104図　ＳＰ2371出土遺物（Ｓ：１／４）



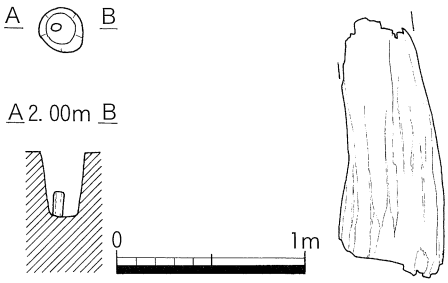

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 10.8 | | (2.0) | 回転ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 微砂 |

第105図　ＳＰ2373出土遺物（Ｓ：１／４）

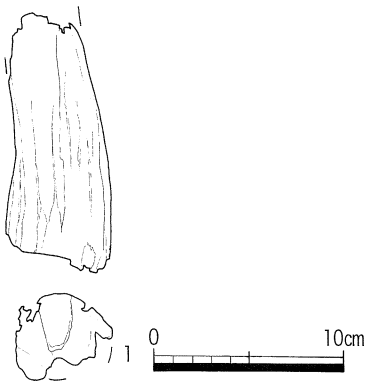
ＳＰ2378　（第106・107図）

調査区中央において検出された柱穴である。柱穴の平面形は不整な円形を呈し，直径は0.24m，深さは0.29mを測る。底面のやや片寄った位置に柱材の一部が直立した状態で出土した。

遺物は，柱材（１）である。１は現存長0.139m，直径5.2cmを測り，先端部を軸に直角方向からの加工。




第106図　SP2378平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 柱材 | (13.9) | (径) 5.2 | | | | 先端を軸に対して直角に加工する |

第107図　ＳＰ2378出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2383　（第108図）

調査区中央において検出された柱穴である。柱穴の平面形は不整な円形を呈し，直径は0.38m，深さは0.41mを測る。

遺物は，土師質土器杯（１）である。１は底部を若干残存し，内外面とも回転ナデが施される。

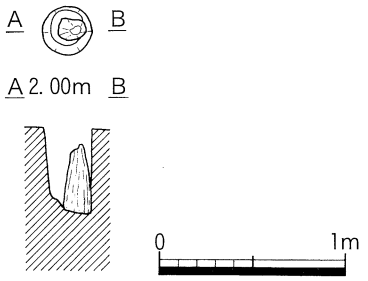
| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器杯 | 11.0 | 7.2 | (2.0) | 回転ナデ | 浅黄橙7.5YR8/4 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 微砂 |

第108図　ＳＰ2383出土遺物（Ｓ：１／４）

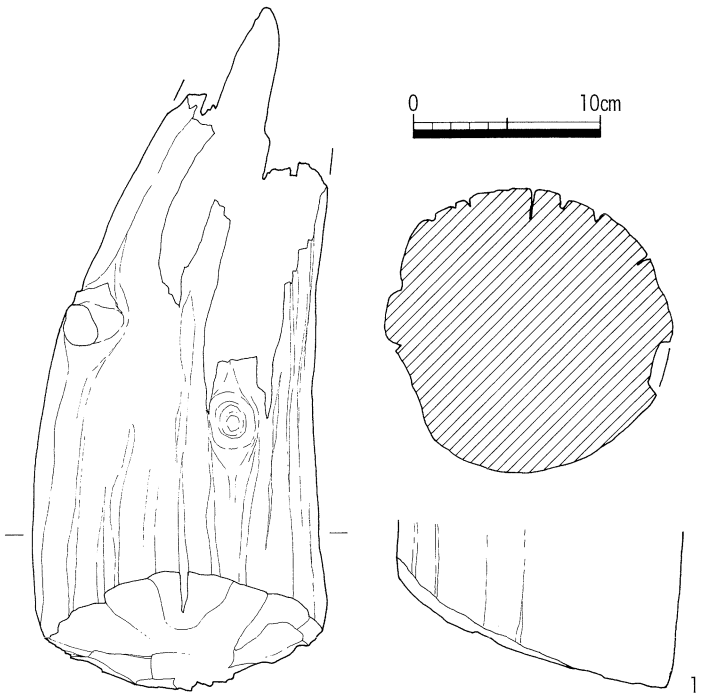
ＳＰ2391　（第109・110図）

調査区中央において検出された柱穴である。柱穴の平面形は不整円形を呈し，直径は0.26m，深さは0.46mを測る。底面直上より柱材の一部が直立した状態で出土した。

遺物は，柱材（１）である。１は現存長0.363m，直径0.152mを測る丸木であり先端部を１方向から加工している。個々の加工痕は不明である。側面には枝払い痕がある。




第109図　ＳＰ2391平・断面図（Ｓ：１/40）



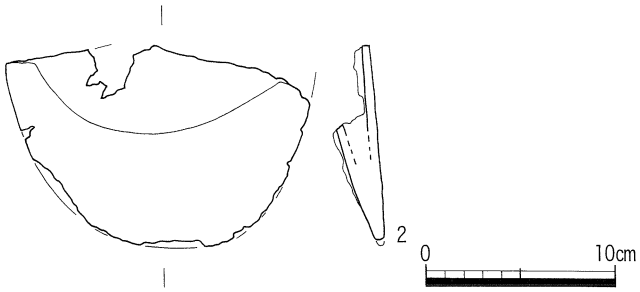

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 柱材 | (36.3) | (径) 15.2 | | | | 先端を1方向から加工 |

第110図　ＳＰ2391出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2402　（第111図）

調査区中央の東側において検出された柱穴である。柱穴の平面形は円形を呈し，直径は0.24m，深さは0.35mを測る。

遺物は，鉄製鍬（１）である。１は断面がＶ字形を呈する装着式の鍬であり，保存状態は悪い。



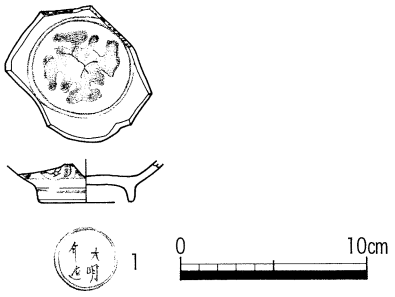

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鍬 | (10.4) | (15.7) | 0.5 | | 鉄 | |

第111図　ＳＰ2402出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2489　（第112図）

調査区中央の北西側において検出された柱穴で，ＳＲ2001に切られる。柱穴の平面形は楕円形を呈し，長軸は0.60m，短軸は0.43m，深さは0.16mを測る。

遺物は，磁器皿（１）である。１は外面と見込みに染付，高台内に「大明年製」の銘があり，断面の一部に漆つぎの痕が残存する。肥前系で18世紀のものである。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 磁器　皿 | | 4.8 | (2.2) | 内外面施釉　高台「大明年製」　漆つぎ | 明緑杯7.5GY8/1 | 灰白N8/ | 密 |

第112図　ＳＰ2489出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ2491　（第113図）

調査区中央の東端においてＳＸ2001と重複して検出された柱穴であり，切り合い関係はこの柱穴がＳＸ2001を切っている。柱穴の平面形は不整な楕円形を呈し，長軸は0.80m，短軸は0.50m，深さは0.62mを測る。

遺物は，土師質土器小皿（１），同杯（２）である。１は内外面回転ナデ，２は内外面回転ナデ，底面ナデが施される。

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.8 | | (1.75) | 内外面回転ナデ | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 2 | 土師質土器杯 | | 7.0 | (1.8) | 内外面回転ナデ　底面ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 微砂 |

第113図　ＳＰ2491出土遺物（Ｓ：１／４）

６　性格不明遺構

ＳＸ2001　（第114～117図）

調査区中央の東端において検出された竪穴状の落ち込みの遺構であり，ＳＢ2001・ＳＰ2363・ＳＰ2491・ＳＰ4513と重複する。切り合い関係は，柱穴がこの遺構を切っているが，埋土・遺物から考えてその時期差はほとんどないと思われる。底面には多数の柱穴が検出される。これらの柱穴のすべてがＳＸ2001に伴うものかどうか不明であるが，検出面において柱穴が確認できなかったので，ＳＸ2001の柱穴として報告する。

検出面のレベルは標高1.85mである。遺構の東端部が調査区外にのびているが，検出された部分の平面形は，北壁がやや直線的であるが全体としては不整な円形を呈する。規模は南北3.80m，検出できた東西は約3.90m，深さ0.17mを測る。底面は平坦である。底面中央には長軸1.30m，短軸0.58mを測るやや大きな柱穴があり，その周囲に直径0.12～0.65mを測る柱穴が不規則に存在する。柱穴の深さは３～31cmを測る。埋土は４層に分層でき，その堆積状態を見ると南側からの土の流入が始まったと考えられる。

遺物は，硯（１），土師質土器小皿（２），同杯（３・４），同擂鉢（７），同土鍋（９），同羽釜（10），瓦質土器灯明皿（５），同片口鉢（６），陶器擂鉢（８），柱材（11）である。これらの遺物の中で１，３，５，８，10，11は柱穴内からの出土である。

１は完形の硯で灰赤色の砂岩製である。

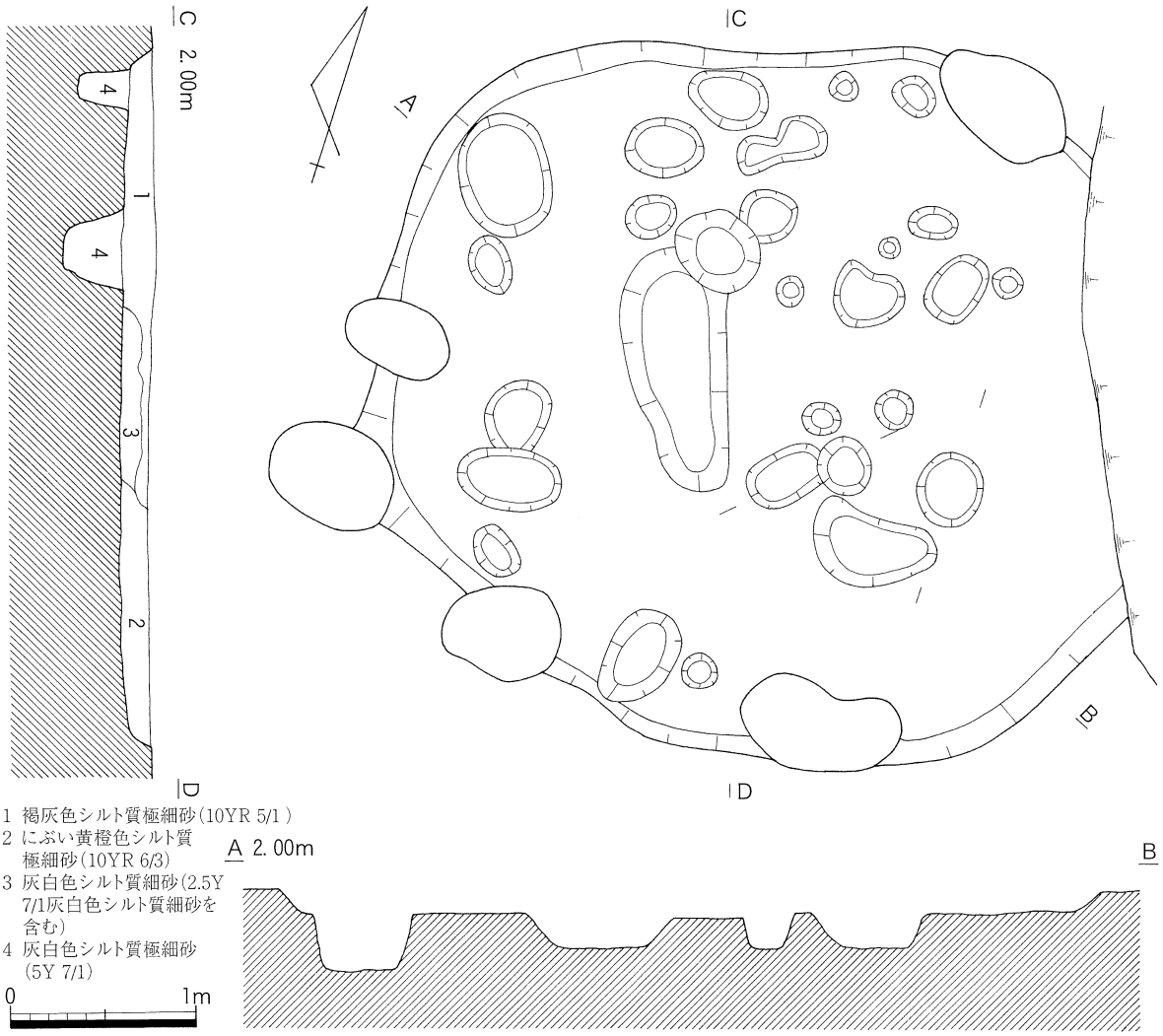
２は平底で，中央部が薄くなる。３の底面は回転ヘラ切り後にナデ，４の底面は回転ヘラ切

りが施される。5は内面に抉りのある凸帯を持つ灯明皿である。

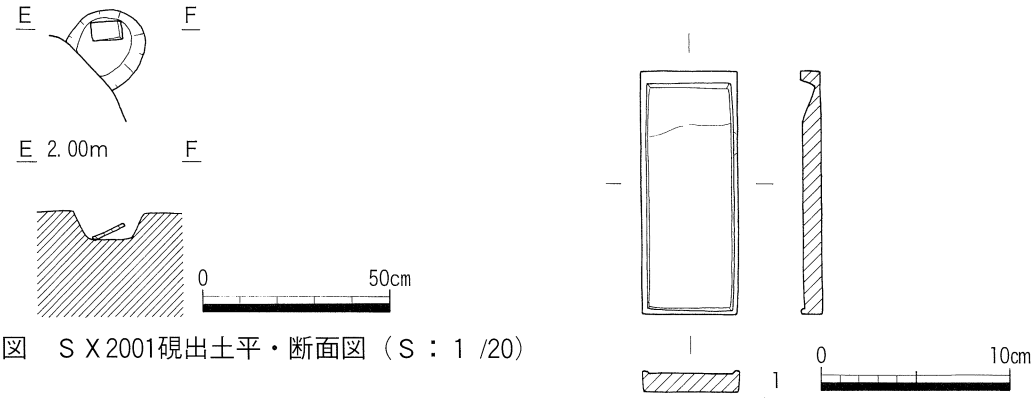
6は片口の鉢で，口縁部にヨコナデ，内面板ナデが施される。

7は口縁部外面に稜を有し，内面に卸目を放射状に施す。8は口縁部が拡張し，外面に2条の沈線を廻らしており，18世紀後半の備前焼である。

11は先端部を2方向から加工し，柱穴内で直立しており柱材の一部である。



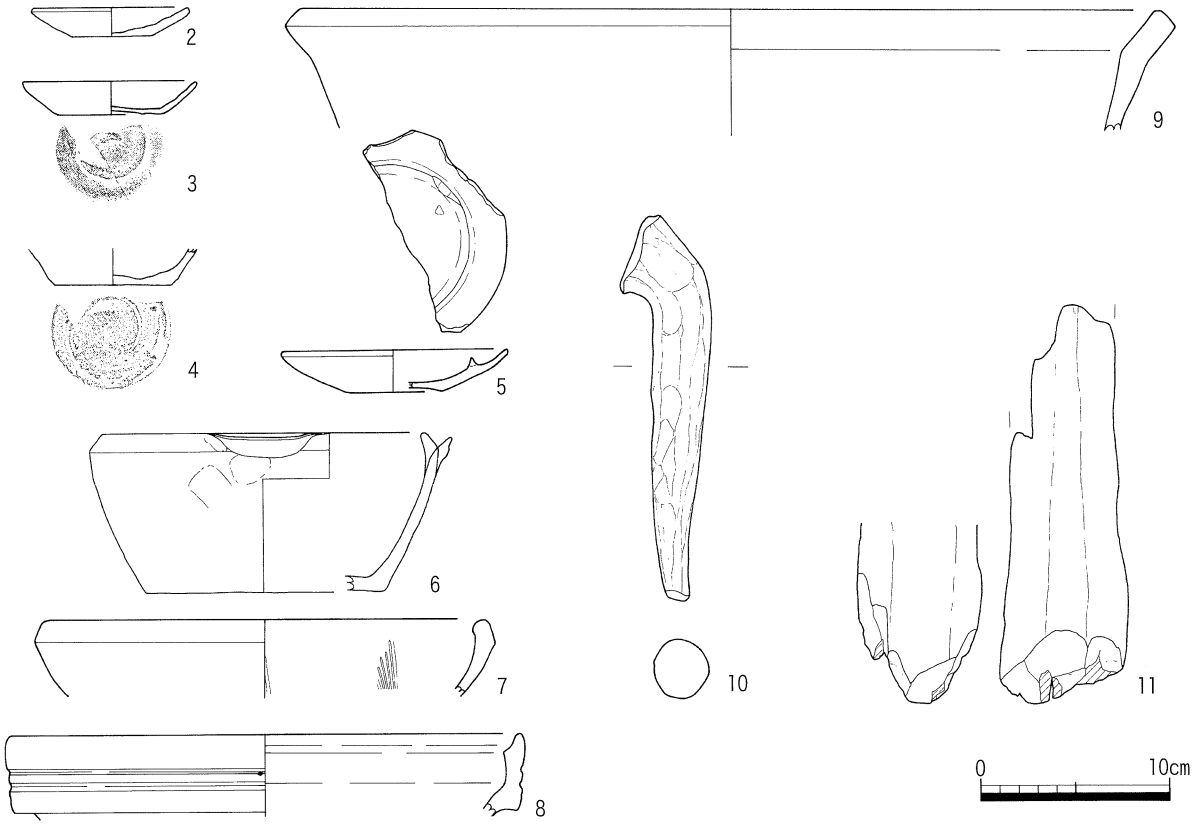

第114図　ＳＸ2001平・断面図（Ｓ：１/40）




第115図　ＳＸ2001硯出土平・断面図（Ｓ：１/20）

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 硯 | 12.9 | 5.1 | 1.1 | 154.1 | 砂岩 | 先端を2方向から加工し折り取る |

第116図　ＳＸ2001出土遺物（１）（Ｓ：１/４）




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 2 | 土師質土器小皿 | 8.2 | 4.2 | (1.5) | 内外面回転ナデ　底面ナデ | 灰黄褐10YR5/2 | 灰白10YR8/1 | 細砂 |
| 3 | 土師質土器杯 | 9.3 | 5.5 | 1.75 | 内外面回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 4 | 土師質土器杯 | | 6.2 | (1.9) | 内外面回転ナデ　底面回転篦切り | 浅黄橙10YR8/4 | 浅黄橙10YR8/3 | 微砂 |
| 5 | 瓦質土器灯明皿 | 12.0 | 5.0 | 2.15 | 内外面回転ナデ　内面施釉 | 灰黄2.5Y7/2 | 灰白2.5Y7/1 | 微砂 |
| 6 | 瓦質土器鉢 | 27.2 | 12.6 | 8.4 | 口縁部横ナデ　体部内面板ナデ　外面磨滅 | 灰白10YR8/1 | 灰白10YR8/2 | 微～細砂 |
| 7 | 土師質土器擂鉢 | 23.6 | | (4.0) | 口縁部横ナデ　外面指押え　内面板ナデ | 鈍い橙5YR7/4 | 明褐灰5YR7/1 | 粗砂 |
| 8 | 陶器　擂鉢 | 27.0 | | (4.4) | 口縁部横ナデ　備前焼 | 灰白N7/ | 灰白N7/ | 微砂 |
| 9 | 土師質土器土鍋 | 45.5 | | (6.6) | 口縁部横ナデ　外面ナデ　内面板ナデ　外面煤 | 褐灰5YR4/1 | 灰白5YR8/2 | 粗砂 |
| 10 | 土師質土器羽釜 | | | | 篦ナデ | 灰黄褐10YR5/2 | | 粗砂 |

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | 柱材 | (21.1) | (径) 6.8 | | | 木 | 先端を2方向から加工　丸木 |

第117図　ＳＸ2001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

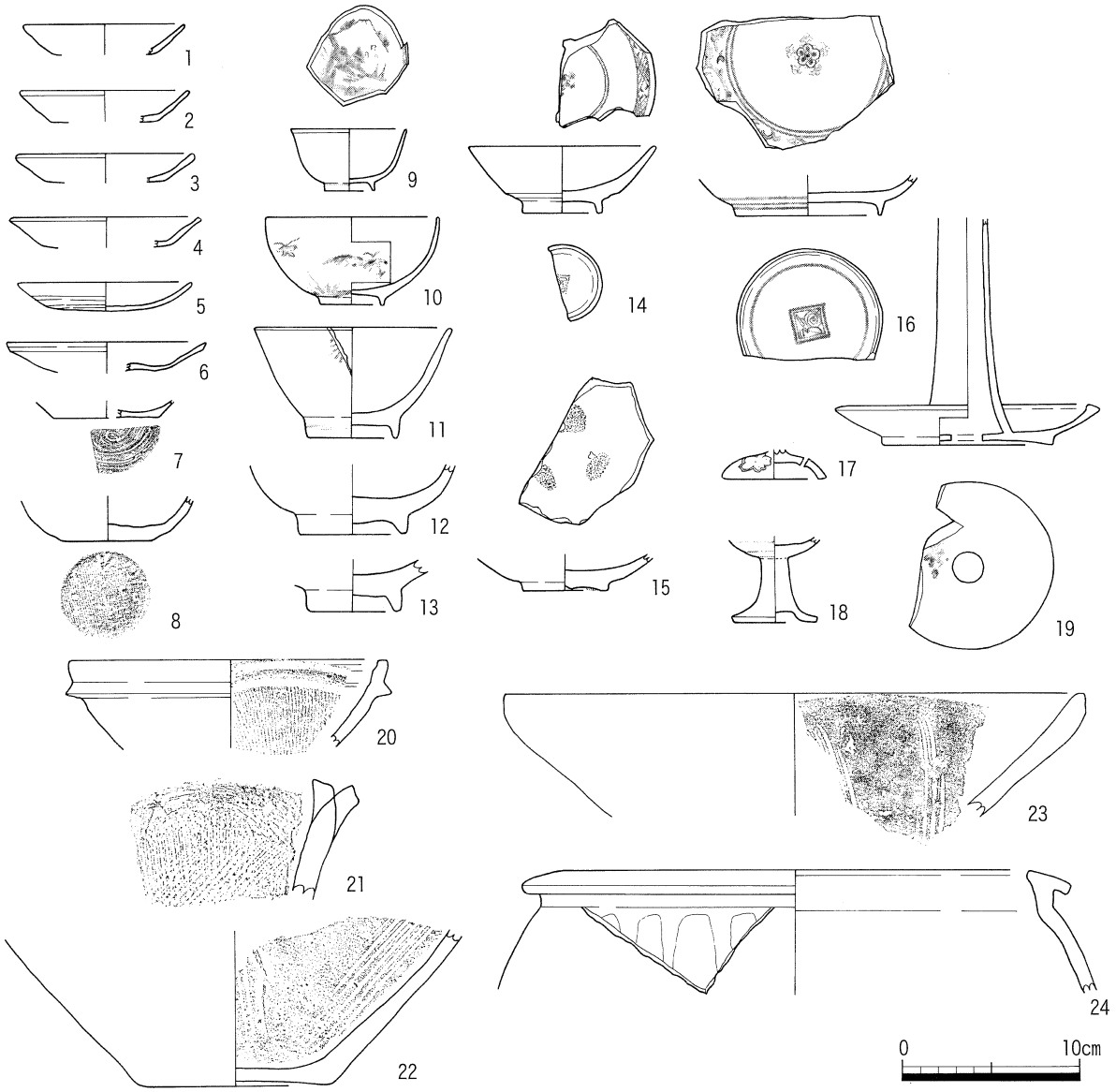
7　自然旧河道

ＳＲ2001　（第118～120図）

調査区の西端から南端にかけて検出された自然旧河道である。後述する３工区のＳＲ3001と４工区のＳＲ4002と同一の河道である。ＳＲ2001はＳＤ2001～2004，多数の柱穴を切っており，ＳＤ2006・２基の土坑に切られている。

検出面のレベルは標高1.80～1.90mである。調査区の南端ではＳＲ2001は東西方向に流れているが，西端に近づくとほぼ直角に屈曲し南北方向に流れを変える。旧河道の東岸のみの検出であるので，幅や深さ等の正確な規模は不明であるが，検出された部分での最大幅は約8.00mを測る。検出面からの深さは，南端で0.46m，北端で0.68mを測り，川床のレベルは約10cmの比高差で南から北方向にゆるやかに低くなっている。調査区南端において川床が部分的に低くなっている。

遺物は，土師質土器小皿（１～４），瓦質土器灯明皿（５），土師質杯（６～８），磁器盃（９），同碗（10・11），同鉢（12），同皿（13～16），同蓋（17），同仏器（18），陶器灯火具（19），土




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 9.0 | 5.2 | (1.7) | 内外面回転ナデ | 灰白2.5Y8/1 | | 密　微砂 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 9.6 | 6.0 | (1.8) | 内外面回転ナデ　底面篦ナデ | 灰白5Y8/1 | 灰白2.5Y8/1 | 微砂 |
| 3 | 土師質土器小皿 | 10.0 | 6.6 | (1.6) | 内外面回転ナデ　底面静止篦削り | 灰白7.5Y7/1 | | 細砂 |
| 4 | 土師質土器小皿 | 10.4 | 7.0 | (1.7) | 外面回転ナデ後にナデ　内面回転ナデ | 灰白7.5YR8/2 | 灰白10YR8/2 | 細砂 |
| 5 | 瓦質土器灯明皿 | 9.85 | 4.6 | 1.6 | 内外面回転ナデ　外面回転篦削り　赤彩 | 赤褐2.5YR4/6 | 暗赤褐10R3/3 | 密 |
| 6 | 土師質土器杯 | 11.2 | 5.6 | (1.7) | 内外面回転ナデ　底面回転篦ナデ | 灰白10YR8/1 | 灰白10YR8/2 | 細砂 |
| 7 | 土師質土器杯 | | 6.0 | (0.9) | 内外面回転ナデ　底面回転糸切り | 灰白10YR7/1 | | 密 |
| 8 | 土師質土器杯 | | 5.0 | (2.55) | 内外面回転ナデ　底面1方向からの刷毛目 | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 微砂 |
| 9 | 磁器　盃 | 6.6 | 2.7 | 3.5 | 内外面施釉　内面に山水文　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 10 | 磁器　碗 | 9.8 | 3.6 | 4.9 | 内外面施釉　外面に草花文　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 11 | 磁器　碗 | 11.2 | 5.0 | 6.2 | 内外面施釉　内外面に貫入　肥前系 | 透明 | 灰白7.5Y8/2 | 密 |
| 12 | 磁器　鉢 | | 5.6 | (3.9) | 内外面施釉　外面青磁 | オリーブ灰10Y5/2 | 灰白10YR7/1 | 密 |
| 13 | 磁器　皿 | | 5.0 | (2.9) | 内外面施釉　外面青磁 | 透明 | | 密 |
| 14 | 磁器　皿 | 10.2 | 4.4 | 3.75 | 内外面施釉　見込み五弁花文　高台渦福　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 15 | 磁器　皿 | 4.8 | | (2.0) | 内外面施釉　蛇の目高台　見込み畳付に砂目　肥前系 | 灰白10Y7/1 | 灰白N7/ | 密 |
| 16 | 磁器　皿 | | 8.3 | (2.25) | 内外面施釉　見込み五弁花文　高台渦福　肥前系 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 17 | 磁器　蓋 | 6.0 | | (1.6) | 外面施釉　孔 | 灰10Y6/1 | 鈍い橙5YR6/4 | 密 |
| 18 | 磁器　仏器 | | 4.7 | (4.8) | 畳付のみ無釉 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 密　微砂を多く含む |
| 19 | 陶器　灯明具 | | 9.6 | (12.7) | 回転ナデ　底面に墨書 | 鈍い黄橙10YR7/4 | 灰白10YR8/2 | 密 |
| 20 | 土師質土器擂鉢 | 18.0 | | (5.0) | 回転ナデ　卸目 | 橙2.5YR6/8 | 明赤褐2.5YR5/6 | 密 |
| 21 | 土師質土器擂鉢 | | | (6.2) | 口縁部横ナデ　外面篦ナデ　内面に「＋」の刻印 | 浅黄橙10YR8/3 | 鈍い黄橙10YR7/4 | 粗砂～細礫 |
| 22 | 土師質土器擂鉢 | | 10.0 | (8.7) | 内面，底面篦ナデ | 灰白10YR8/2 | | 細礫 |
| 23 | 瓦質土器擂鉢 | 32.6 | | (6.9) | 口縁部横ナデ　内外面ナデ | 灰N5/ | | 粗砂 |
| 24 | 陶器　壷 | 36.2 | | (6.8) | 外面に釉たれ | 黒褐10YR3/1 | 鈍い黄褐10YR4/3 | 微砂～細砂 |

第118図　ＳＲ2001出土遺物（１）（Ｓ：１／４）

師質土器擂鉢（20～22），瓦質土器擂鉢（23），陶器壷（24），土師質土器羽釜（25・26・30・31），同土鍋（27～29），陶器甕（32），土師質土器甕（33），須恵器平瓶（34），同壷（35），同器台（36），同甕（37），木製椀（38～42），桶（43），土製円盤（44），キセル（45），土錘（46・47）である。

1～4は回転ナデが施され，2の底面はヘラナデ，3は静止ヘラ削りが施される。5は外面に回転ヘラ削りが施され，口縁部と内面は赤彩される。6の底面は回転ヘラナデ，7は回転糸切り，8は刷毛目が施される。

9は内面に山水文が描かれる。肥前系で18世紀前半のものである。10はくわらんか碗，11は広東碗で，肥前系で18世紀のものである。

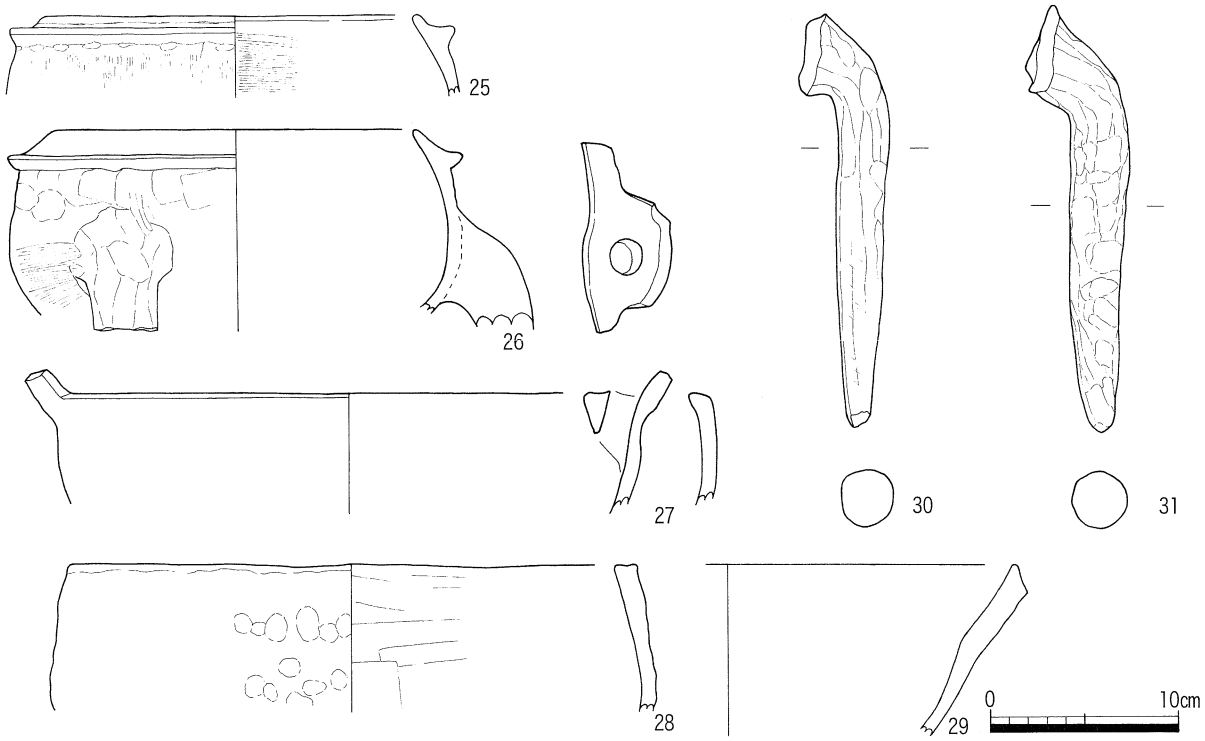
13は外面青磁の皿である。14は口縁部内面に四方襷文，見込みに五弁花文，高台内に二重方形枠内に「渦福」の銘がある。15は如意頭文崩れの唐草文が内面に描かれ，見込みに五弁花文高台内に二重方形枠「渦福」の銘がある。これらは肥前系で18世紀のものである。

17は外面に桜の花の装飾がある。19は上部を欠損し，外面無釉である。底面に墨書がある。

20・21は内面全面に卸目があり，22・23は放射状の卸目である。

25・26は外面指押え・刷毛目，内面刷毛目・ヘラナデが施される。27の外面はヘラナデ，内面板ナデ，28の外面は指押え・ナデ，内面板ナデ，29の外面はヘラナデ，内面は刷毛目が施され，すべて外面に煤が付着する。

32は玉縁状の口縁である。33は口縁部が若干拡張する。35は太い波状文を外面に巡らす。



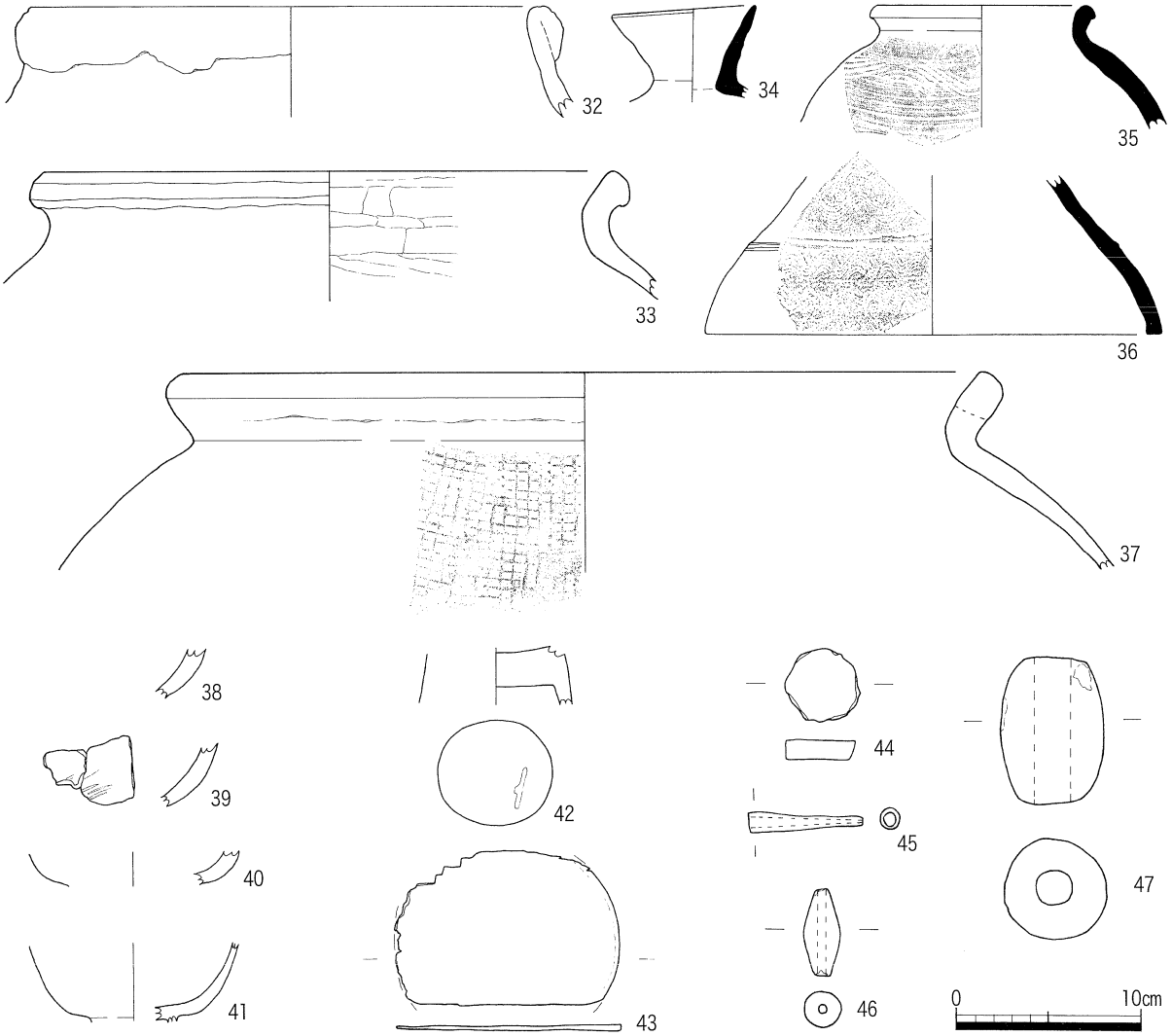

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 25 | 土師質土器羽釜 | 19.4 | | (4.3) | 口縁横ナデ　胴部外面指押え刷毛目　内面刷毛目 | 鈍い赤褐5YR5/4 | 鈍い黄褐10YR5/3 | 細～粗砂 |
| 26 | 土師質土器羽釜 | 19.0 | | (10.6) | 口縁横ナデ　胴部外面指押え，板ナデ　内面篦ナデ | 鈍い黄橙10YR7/2 | | 微砂 |
| 27 | 土師質土器土鍋 | 25.6 | | (6.3) | 外面篦ナデ　内面板ナデ　耳を有する | 橙5YR7/4 | | 粗砂 |
| 28 | 土師質土器土鍋 | 30.0 | | (7.7) | 外面指押え後にナデ　内面板ナデ | 褐灰5YR5/1 | 灰褐5YR6/2 | 粗砂～細礫 |
| 29 | 土師質土器土鍋 | 30.2 | | (9.0) | 外面篦ナデ　内面刷毛目 | 暗灰N3/ | 灰白7.5YR8/2 | 粗砂～細礫 |
| 30 | 土師質土器羽釜 | | | | 脚部 | 浅黄2.5Y7/3 | | 微砂 |
| 31 | 土師質土器羽釜 | | | | 脚部 | 灰黄褐10YR6/2 | | 微砂 |

第119図　ＳＲ2001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

36は外面に波状文４条を巡らす。37は外面に格子目状タタキを施す。

38・39・42は内面赤漆塗り，外面黒漆塗りの椀，40は内外面黒漆塗りの椀，41は内外面赤漆塗りの椀である。42は高台内に「ト」形の刻印がある。

46は管状の小さな土錘，47は重さ217ｇの大型の土錘である。



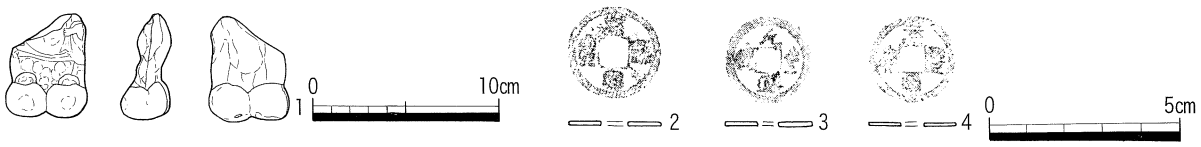

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 32 | 陶器　甕 | 28.0 | | (6.0) | 内外面横ナデ　備前焼 | 鈍い赤褐5YR5/3 | 褐灰5YR5/1 | 粗砂 |
| 33 | 土師質土器甕 | 31.4 | | (7.0) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ　内面篦削り後に篦ナデ | 鈍い褐7.5YR6/3 | | 細砂～粗砂 |
| 34 | 須恵器　平瓶 | 7.7 | | (5.0) | 回転ナデ | 灰N6/ | 灰白N7/ | 密 |
| 35 | 須恵器　壷 | 11.4 | | (6.6) | 外面に波状文 | 灰N6/ | 灰N5/ | 細礫 |
| 36 | 須恵器　器台 | | 24.8 | (8.7) | 脚部若干内湾　外面に波状文4条 | 灰N5/ | 褐灰7.5YR5/1 | 密 |
| 37 | 須恵器　甕 | 43.0 | | (10.8) | 口縁部横ナデ　胴部外面格子目状タタキ　内面ナデ | 灰N4/ | | 粗砂 |
| 38 | 木製品　碗 | | | (2.7) | 外面黒漆塗り　内面赤漆塗り | | | |
| 39 | 木製品　碗 | | | (3.5) | 外面黒漆塗り　内面赤漆塗り | | | |
| 40 | 木製品　碗 | | | (1.9) | 内外面黒漆塗り | | | |
| 41 | 木製品　碗 | | 4.8 | (4.3) | 内外面赤漆塗り | | | |
| 42 | 木製品　碗 | | | (3.2) | 外面黒漆塗り　内面赤漆塗り　高台「ト」刻印 | | | |

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 43 | 桶 | | (径) 12.3 | 0.3 | | | 底板 |
| 44 | 土製品　円盤 | | (径) 4.0 | 1.0 | | | 灰赤色2.5YR5/2 |
| 45 | キセル | 6.2 | (径) 1.0 | | | | |
| 46 | 土錘 | 4.8 | (径) 2.0 | | 13.4 | | |
| 47 | 土錘 | 8.0 | (径) 5.5 | | 217.0 | | |

第120図　ＳＲ2001出土遺物（３）（Ｓ：１／４）

2）２工区包含層出土遺物

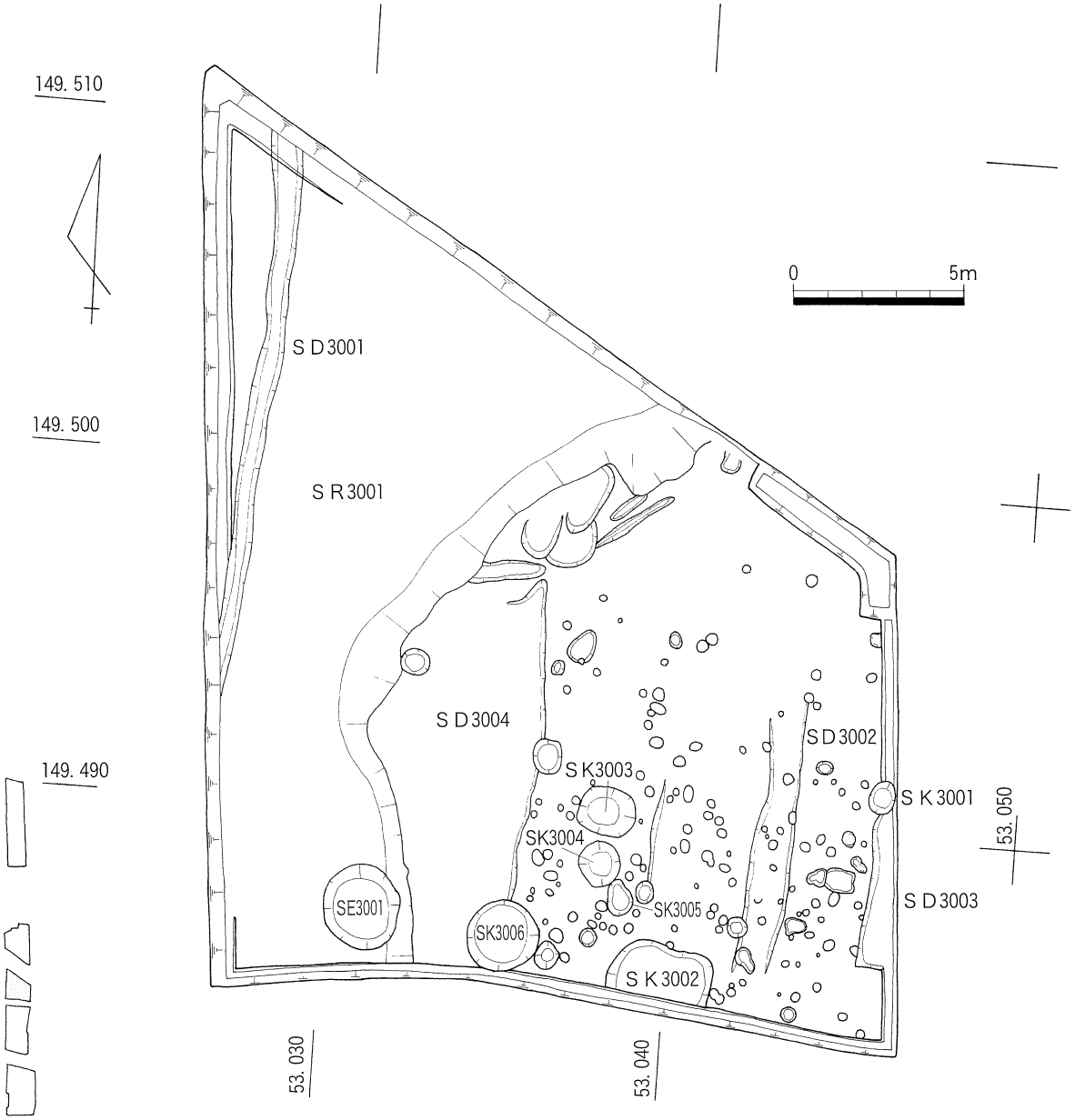
２工区の包含層からは多量の陶磁器・瓦等が出土したが，図示したのは土人形（１），銭（２～４）のみである。１は「大黒さん」である。２～４は遺存状態が悪い。




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土人形 | | | | | 土 | 大黒　表裏鈍い橙7.5YR7/3　密 |
| 2 | 銭 | | (直径) 2.5 | 0.15 | | | 灰赤色2.5YR5/2 |
| 3 | 銭 | | (直径) 2.3 | 0.1 | | | |
| 4 | 銭 | | (直径) 2.4 | 0.1 | | | |

第121図　２工区包含層出土遺物（Ｓ：１/２，１/４）

## ３　３工区




第122図　３工区遺構配置図（Ｓ：１/200）

３工区は本遺跡のほぼ中央に位置する調査区であり，南側は水路，北側は高松琴平電気鉄道株式会社の線路によって区切られている。線路が調査区に対して斜めに走っているため，調査区の西壁と東壁の長さは異なり，調査区の平面形は台形を呈する。調査区西壁の長さは約26.8m，東壁は約14.6m，東西方向の幅は約20.0mを測る。調査区中央の南北軸座標値はＸ＝146.490，東西軸座標値はＹ＝53.035である。

調査全域の土層堆積状態はほぼ水平堆積をなし，上層より現水田耕作土，１面の近世条里型水田層があり，その直下が遺構検出面となっている。遺構検出面は地山であり，平坦である。

１）　弥生時代

１　土坑

ＳＫ3001　（123～125図）

調査区東壁の中央付近において検出された土坑であり，土坑の一部は調査区外に延びている。土坑南側の一部はＳＤ3003に切られている。

検出面のレベルは標高2.00mである。土坑の平面形は，北東－南西方向に長軸をもつ不整な楕円形を呈し，長軸の長さは1.00m，短軸は0.80mを測る。土坑の西壁・南壁は上場より約0.10m入り込んでおり，断面はフラスコ状をなす。底面は中央にゆるやかに低くなっており，最深部は土坑の中央よりやや北側に寄っている。検出面から最深部までの深さは0.56mを測る。埋土は黒褐色シルト質極細砂が主体である。遺物の出土は上層からあるが，最深部より約0.20m上の位置からほぼ完形に近い土器が集中して出土した。

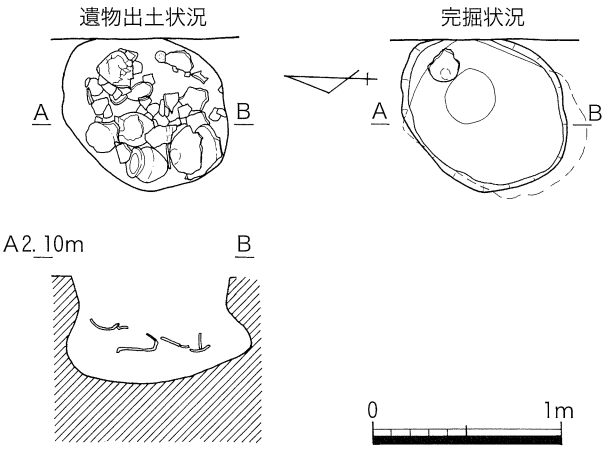
遺物は，弥生土器壷（１～３），同細頸壷（４），同小型丸底壷（５・６），同鉢（７～10），同製塩土器（11～13），同甕（14～27）である。

１は最大径0.278mを測る球形の胴部の壷であり，胴部上位に両面から打ち欠いた孔を１個有する。外面上部は刷毛目，中部はタタキ目後に刷毛目・ヘラミガキが施され，胴部下半はヘラミガキが施される。内面上部は指頭圧痕，中部はナデ・ヘラナデ，下半はヘラ削りが施される。２は口縁部が大きく外反する。胴部外面には粗い刷毛目，内面には指頭圧痕後に刷毛目が施され，内面に輪積み痕が残存する。３は丸底気味で，外面はヘラミガキを施す。

４は胴部のみ残存し，中位に横方向のヘラミガキ，その上に縦方向のヘラミガキ，その下に刷毛目が施される。５・６は算盤玉状の胴部で，外面はヘラミガキを施す。

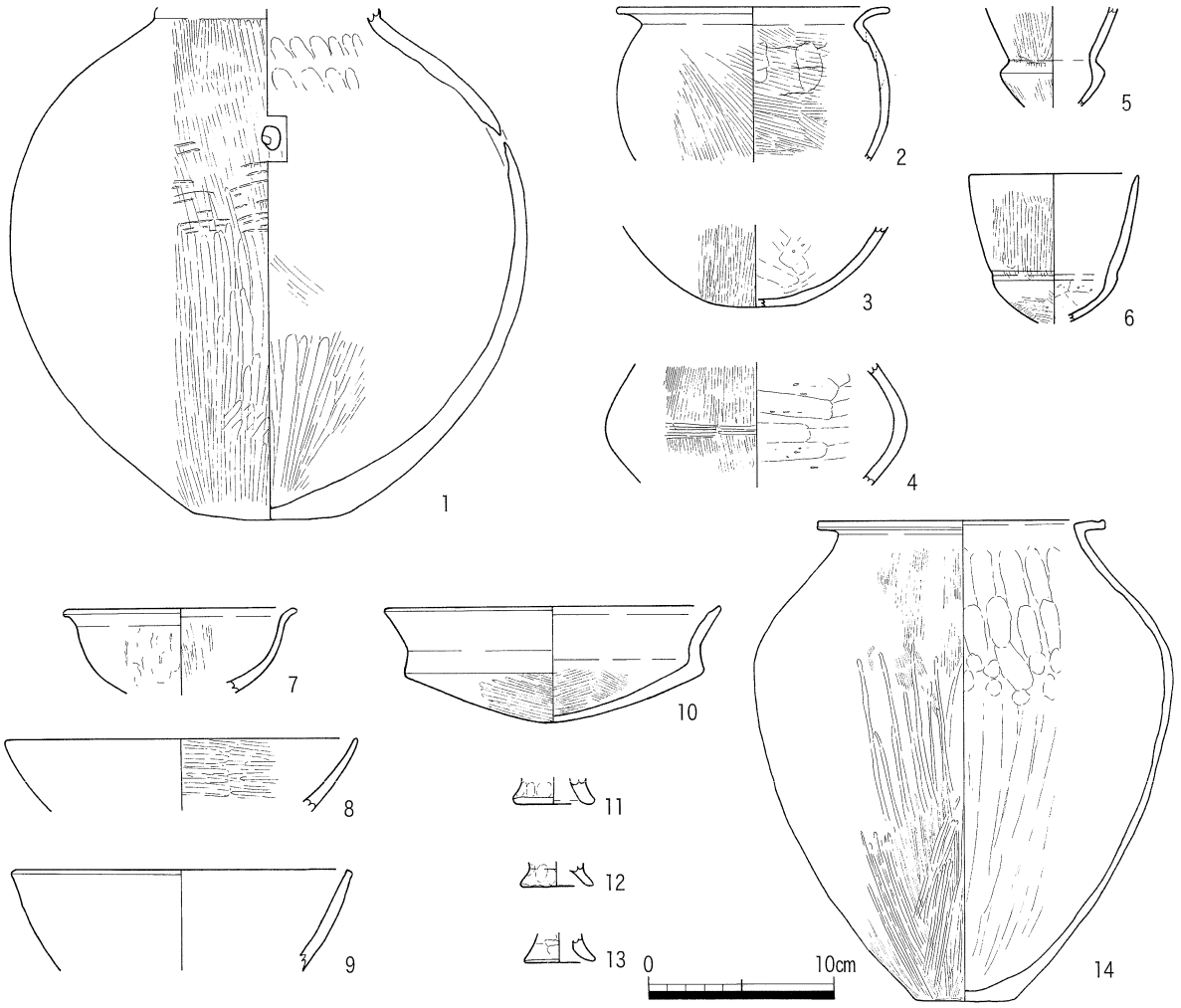
７の口縁部は外反し，胴部外面は一部ナデが施される。８は半球状の胴部で，内面はヘラミガキが施される。９の口縁端部は角ばり，内外面ナデが施される。10は高杯と同形態の鉢であり，口縁部内面にわずかな凹線を巡らす。体部は内外面ヘラミガキが施される。

14～22は「く」の字状に鋭角に屈曲する口縁部と肩の張る胴部の甕である。14・16～19は，胴部外面上半に刷毛目，下半にヘラミガキが施され，内面上半に指頭圧痕，下半にヘラ削りが施される。15の胴部外面は粗い刷毛目，内面は板ナデが施される。



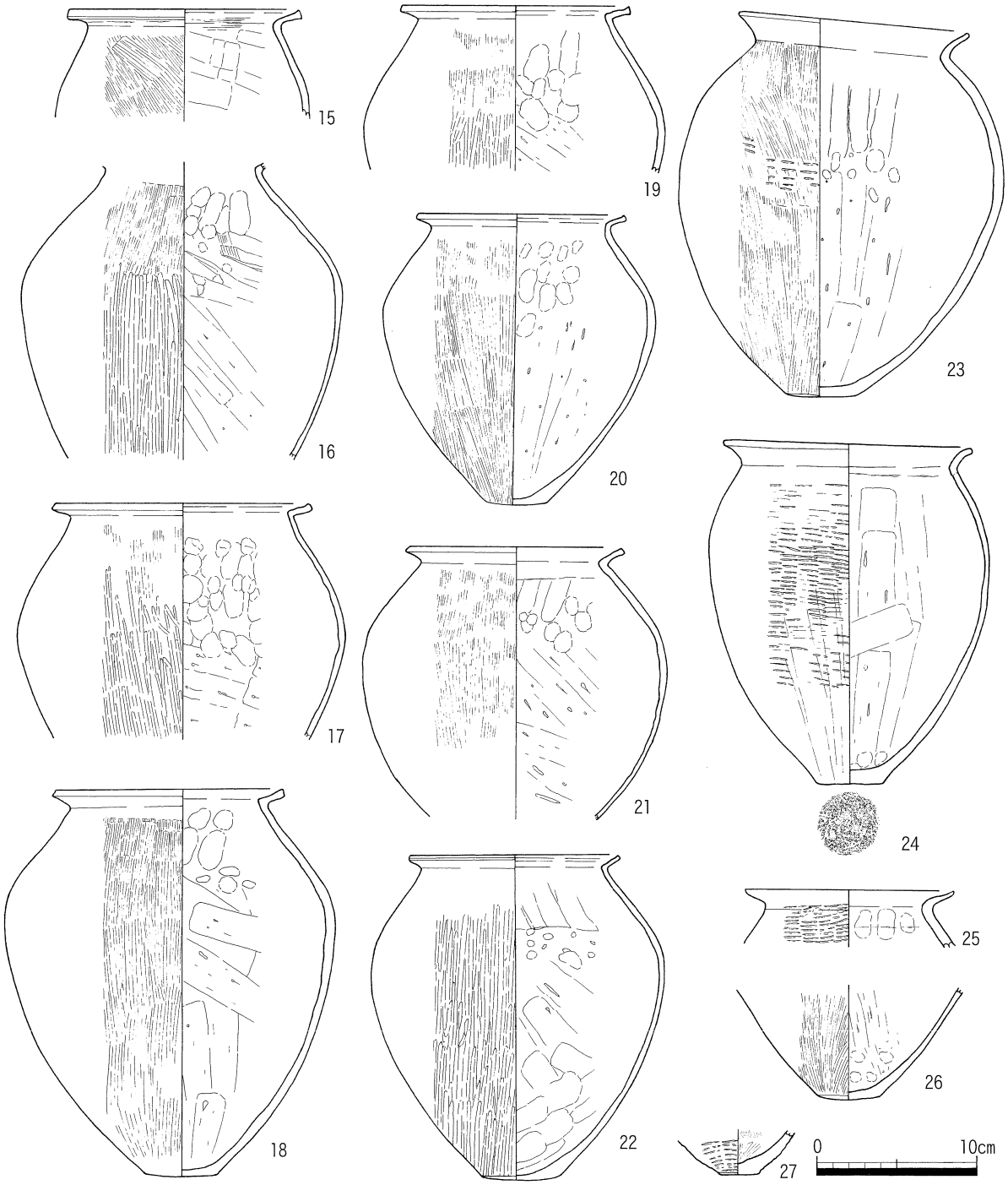

第123図　ＳＫ3001平・断面図（Ｓ：１/40）

20の胴部外面は刷毛目，内面上半は指頭圧痕，下半はヘラ削りが施される。底面は１方向からのヘラミガキが施される。21の胴部外面は刷毛目，内面上半は指ナデ・指頭圧痕，下半はヘラ削りが施される。22の胴部外面はヘラミガキ，内面上半は指ナデ・指頭圧痕，下半はヘラ削りが施される。23はくの字口縁で，胴部外面上位は刷毛目，中位はタタキ目後に刷毛目，下半はヘラミガキが施され，内面上半は指ナデ・指頭圧痕，下半はヘラ削りが施される。24は胴部外面にタタキ目，下位にヘラナデ，内面にヘラ削り後に一部ナデが施される。底面に籾痕がある。25の外面にタタキ目が施される。26・27は平底で，26の外面はヘラミガキ，底面は１方向からのヘラミガキが施され，27の外面はタタキ目，内面は刷毛目・刷毛原体の押圧が施される。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 弥生土器　壷 | | 7.5 | (27.1) | 外面刷毛目，タタキ目，篦磨き　内面指頭圧痕，篦削り | 橙2.5YR6/6 | | 石英，長石 |
| 2 | 弥生土器　壷 | 14.5 | | (8.0) | 胴外面刷毛目　内面指頭圧痕，刷毛目 | 橙7.5YR7/6 | | 石英，長石 |
| 3 | 弥生土器　壷 | | | (4.2) | 外面篦磨き　内面篦削り | 灰黄褐10YR5/2 | 鈍い褐7.5YR5/3 | 石英，長石 |
| 4 | 弥生土器　細頸壷 | | | (6.6) | 外面篦磨き，刷毛目　内面篦削り | 灰褐7.5YR5/2 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 石英，長石，角閃石 |
| 5 | 弥生土器　小型壷 | | | (5.3) | 外面篦磨き，刷毛原体の押圧　内面ナデ | 橙5YR7/6 | 鈍い橙2.5YR6/4 | 石英，長石，角閃石 |
| 6 | 弥生土器　小型壷 | 9.0 | | (7.8) | 外面篦磨き，ナデ　内面ナデ，篦削り | 鈍い橙5YR6/4 | | 石英，長石，角閃石 |
| 7 | 弥生土器　鉢 | 12.4 | | (4.5) | 外面一部ナデ　内面ナデ | 鈍い橙5YR7/4 | 浅黄橙10YR8/3 | 石英，長石 |
| 8 | 弥生土器　鉢 | 18.8 | | (3.8) | 外面ナデ　内面篦ガキ | 鈍い褐7.5YR6/3 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 石英，角閃石 |
| 9 | 弥生土器　鉢 | 17.6 | | (5.4) | 口縁部横ナデ　体部内外面ナデ | 明赤褐5YR5/6 | 鈍い黄橙10YR6/4 | 石英，長石 |
| 10 | 弥生土器　鉢 | 16.0 | | 6.0 | 口縁部横ナデ　体部4分割の篦磨き | 明黄褐10YR7/6 | | 石英，長石，角閃石 |
| 11 | 弥生土器　製塩土器 | | 4.4 | (1.35) | 外面篦削り　内面ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英，長石，角閃石 |
| 12 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.9 | (1.3) | 外面篦削り　内面ナデ | 鈍い橙5YR6/3 | | 石英，長石，角閃石 |
| 13 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.8 | (1.5) | 外面ナデ　内面ナデ | 鈍い橙7.5YR7/3 | | 石英，長石，角閃石 |
| 14 | 弥生土器　甕 | 15.4 | 5.4 | 25.6 | 外面刷毛目，篦磨き　内面指ナデ，指頭圧痕，篦削り | 鈍い橙7.5YR6/4 | | 石英，長石，角閃石 |

第124図　ＳＫ3001出土遺物（１）（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 弥生土器　甕 | 14.4 | | (6.8) | 口縁部横ナデ　胴外面刷毛目　内面板ナデ | 鈍い橙7.5YR6/4 | | 石英,長石,角閃石 |
| 16 | 弥生土器　甕 | | | (18.5) | 胴外面刷毛目,篦磨き　内面指ナデ,指頭圧痕,篦削り | 鈍い褐7.5YR5/3 | | 石英,長石,角閃石 |
| 17 | 弥生土器　甕 | 16.1 | | (14.7) | 胴外面刷毛目,篦磨き　内面指頭圧痕,篦削り | 鈍い橙7.5YR7/3 | | 石英,長石,角閃石 |
| 18 | 弥生土器　甕 | 14.2 | 4.6 | 24.2 | 胴外面刷毛目,篦磨き　内面指頭圧痕,篦削り | 鈍い黄褐10YR5/3 | | 石英,長石,角閃石 |
| 19 | 弥生土器　甕 | 14.2 | | (10.3) | 胴外面刷毛目,篦磨き　内面指頭圧痕,篦削り | 鈍い褐5YR5/4 | | 石英,長石,角閃石 |
| 20 | 弥生土器　甕 | 12.7 | 3.9 | 18.1 | 胴外面刷毛目 | 鈍い橙7.5YR6/4 | | 石英,長石,角閃石 |
| 21 | 弥生土器　甕 | 13.6 | | (16.9) | 胴外面刷毛目,篦磨き　内面指頭圧痕,篦削り | 明赤褐2.5YR5/6 | | 石英,長石,角閃石 |
| 22 | 弥生土器　甕 | 13.0 | 5.0 | 20.4 | 胴外面,篦磨き　内面指頭圧痕,篦削り | 鈍い橙7.5YR6/4 | | 石英,長石,角閃石 |
| 23 | 弥生土器　甕 | 14.0 | 4.4 | 23.5 | 胴外面刷毛目,タタキ目,篦磨き　内面指頭圧痕,篦削り | 鈍い赤褐5YR5/4 | | 石英,長石,角閃石 |
| 24 | 弥生土器　甕 | 15.4 | 3.8 | 21.2 | 胴外面,タタキ目,篦磨き　内面篦削り後ナデ | 鈍い橙5YR6/4 | | 石英,長石,角閃石 |
| 25 | 弥生土器　甕 | 13.0 | | (3.5) | 胴外面タタキ目　内面指頭圧痕 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 褐灰10YR5/1 | 石英,長石 |
| 26 | 弥生土器　甕 | | 4.0 | (7.0) | 外面篦磨き　内面指頭圧痕,篦削り | 鈍い橙7.5YR6/4 | 橙5YR6/6 | 石英,長石,角閃石 |
| 27 | 弥生土器　甕 | | 2.5 | (2.8) | 外面タタキ目　内面刷毛目,刷毛原体の押圧 | 浅黄橙7.5YR8/4 | 灰白10YR8/2灰白 | |

第125図　ＳＫ3001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

2）近世

1　溝

ＳＤ3001　（第126・127図）

調査区西端において検出された溝であり，ＳＲ3001の上層を掘り込んでいる。溝の方向・規模から考えると，本遺構と４工区ＳＤ4001は同一の溝である。

検出面のレベルは標高1.50ｍ前後である。検出できた溝の全長は約15.8ｍ，幅は0.60～0.80ｍを測る。溝の方向はＮ－13°－Ｅを示す。溝の断面はＵ字状を呈し，その深さは測量時に約10㎝であるが，旧河道という認識で全面的に掘り下げてしまったので本来の掘り込み面は約10㎝位上であったと考えられる。埋土は２層である。

この遺構からは多量の土器が出土したが，前述の通りＳＲ3001として掘り下げたため，土器の大半はＳＲ3001のものと混入してしまった。底面から出土した遺物は，土師質土器羽釜（１・２），同土鍋（３）である。

ＳＤ3002

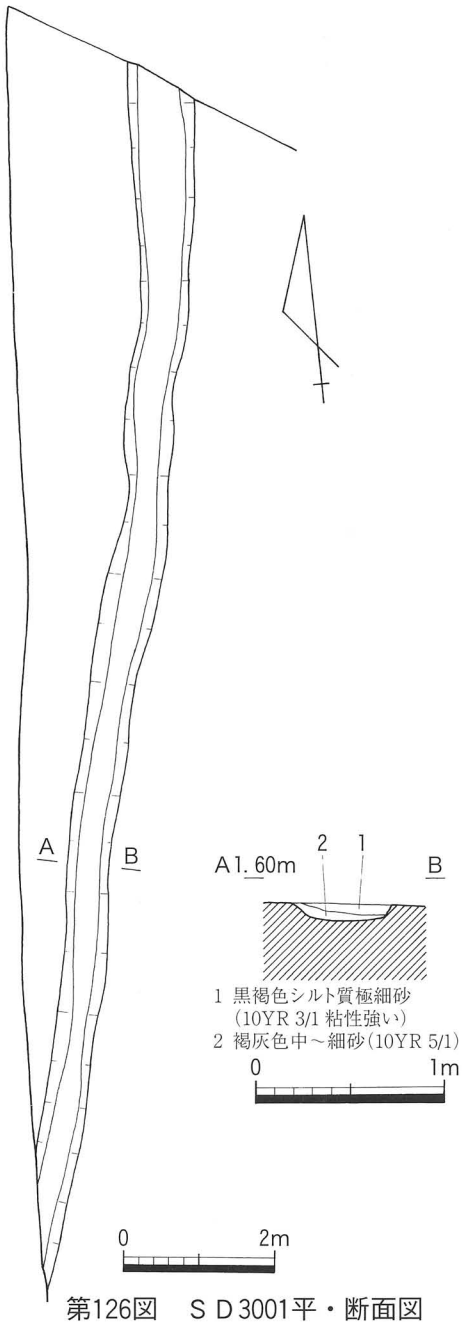
調査区南東部において検出された溝であり，多数の柱穴を切っている。

検出面のレベルは標高1.92ｍである。検出できた溝の全長は約5.80ｍ，幅は1.20ｍ，深さは５㎝を測る。断面は逆台形を呈し，埋土は灰白色シルト質極細砂である。

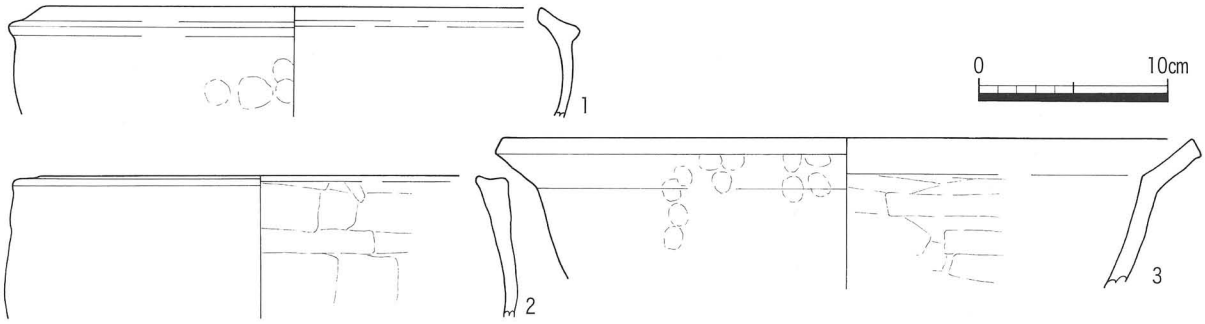
ＳＤ3003

調査区南東隅において検出された溝である。

検出面のレベルは標高2.00ｍである。溝の大半は調査区外に延びるため，方向や規模は不明である。検出できた全長は約2.60ｍ，深さ0.24ｍを測る。




第126図　ＳＤ3001平・断面図
（Ｓ：１/40，1/100）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器羽釜 | 26.0 | | (5.8) | 口縁部横ナデ　胴外面指押え後ナデ　内面ナデ | 灰白10YR8/2 | | 細砂 |
| 2 | 土師質土器羽釜 | 26.0 | | (7.5) | 口縁部横ナデ　胴外面指押え後ナデ　内面ナデ | 淡黄2.5Y8/3 | | 細砂～細礫 |
| 3 | 土師質土器土鍋 | 36.0 | | (7.9) | 口縁部横ナデ　胴外面指押え後ナデ　内面板ナデ | 褐灰10YR6/1 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 細礫 |

第127図　ＳＤ3001出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ3004　（第128図）

調査区中央において検出された溝であり，ＳＫ3006に切られている。

検出面のレベルは標高1.97ｍである。検出できたのは溝の東側掘り込みのみであり，その全長は約9.30ｍ，深さは５㎝前後である。溝の方向はＮ－０°－Ｅを示す。溝の底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は磁器皿（１）である。

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　皿 | 11.0 | | (1.9) | 内外面回転ナデ　施釉 | 浅黄7.5Y7/3 | 灰白2.5Y8/1 | 密 |

第128図　ＳＤ3004出土遺物（Ｓ：１／４）

２　井戸

ＳＥ3001　（第129～132図）

調査区の南西側において検出された井戸であり，ＳＲ3001を掘り込んでいる。

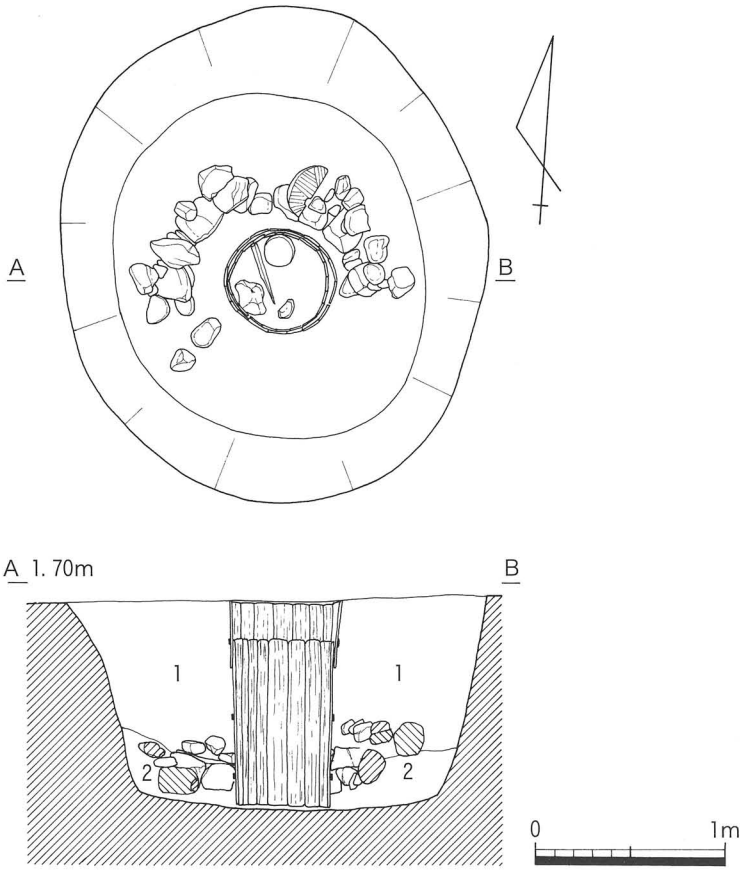
検出面のレベルは標高1.60ｍである。井戸の掘り方の平面形はやや不整な楕円形を呈し，南北の長軸は2.65ｍ，東西の短軸は2.30ｍを測り，底面までの深さは約1.10ｍを測る。底面の長軸は1.86ｍ，短軸1.66ｍを測り，底面はほぼ平坦である。掘り方の中央に板材を２段に並べて筒状にして竹製箍で締めた井戸枠が検出された。井戸枠の内径は0.50ｍを測る。板材は長さ0.86ｍ，幅0.10ｍの板目であり，箍は３ヶ所ある。井戸枠の底面の周囲は河原石を３段積みにした側壁が残存している。側壁は底面から約0.50ｍ上まで残存する。掘り方の埋土は２層に分層され，井戸枠の中には灰色シルト質極細砂が充填されていた。遺物は主として井戸枠の中より出土した。

遺物は，陶器灯明皿（１・２），磁器碗（３），同皿（４・５・７・９），同火入（６），陶器徳利（８），同擂鉢（10），瓦質土器羽釜（11），土師質土器土鍋(12)，陶器甕(13)，平瓦（14），竹製品（15），木製椀(16)，栓（17・18），木槌（19），下駄（20・21），加工木（22・23・29），加工板（24～28），桶（30），砥石（31～33），石臼（34・36），石製容器（35）である。

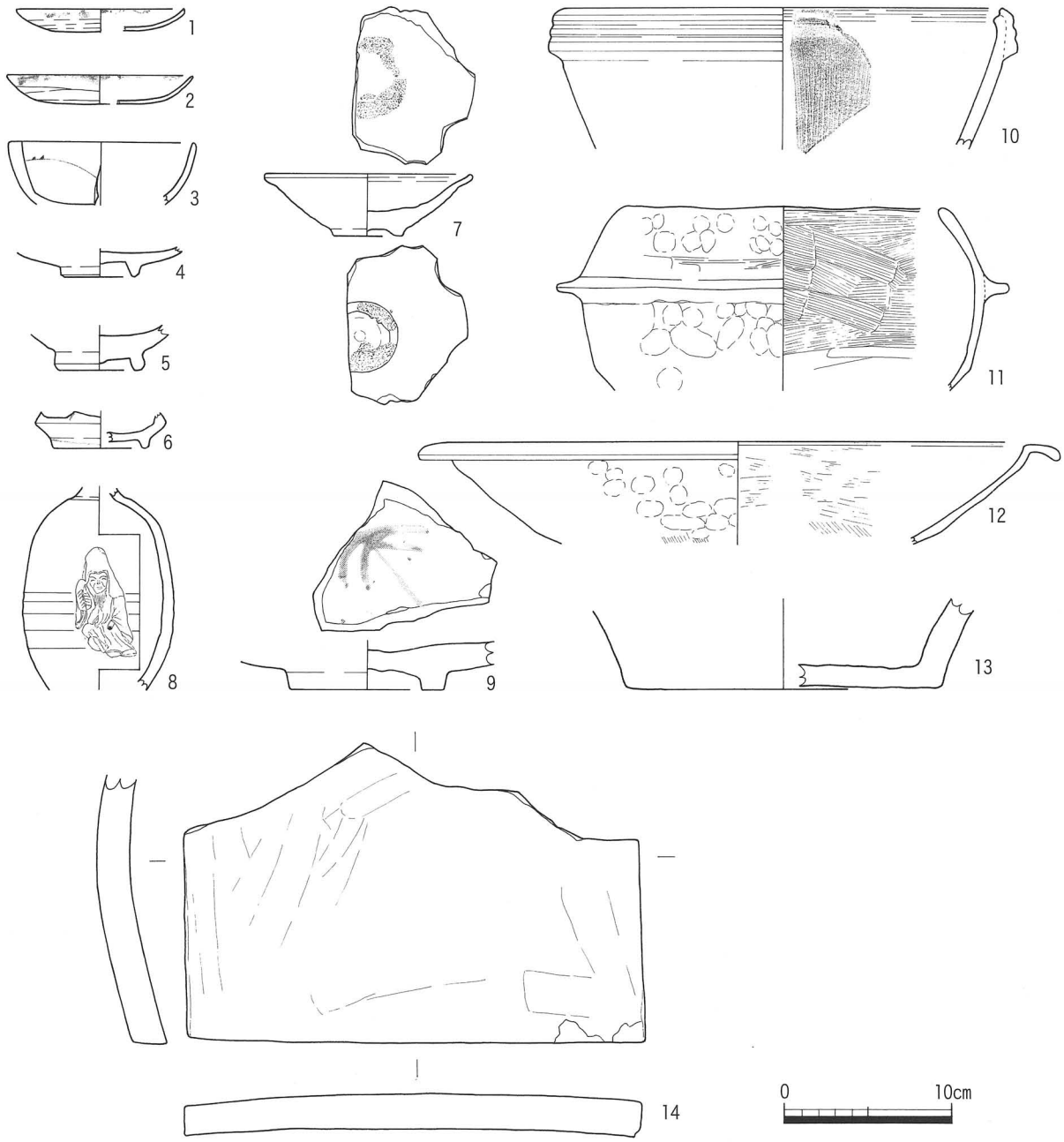
１・２は外面に回転ヘラ削りを施し，口縁部に煤が付着する。

４・５は高台無釉であり，４は青磁である。７は肥前系であり，高台無釉で見込みと畳付に砂目が付着し，17世紀前半のものである。

８は胴部の凹んだ部分に福禄寿が描かれている。



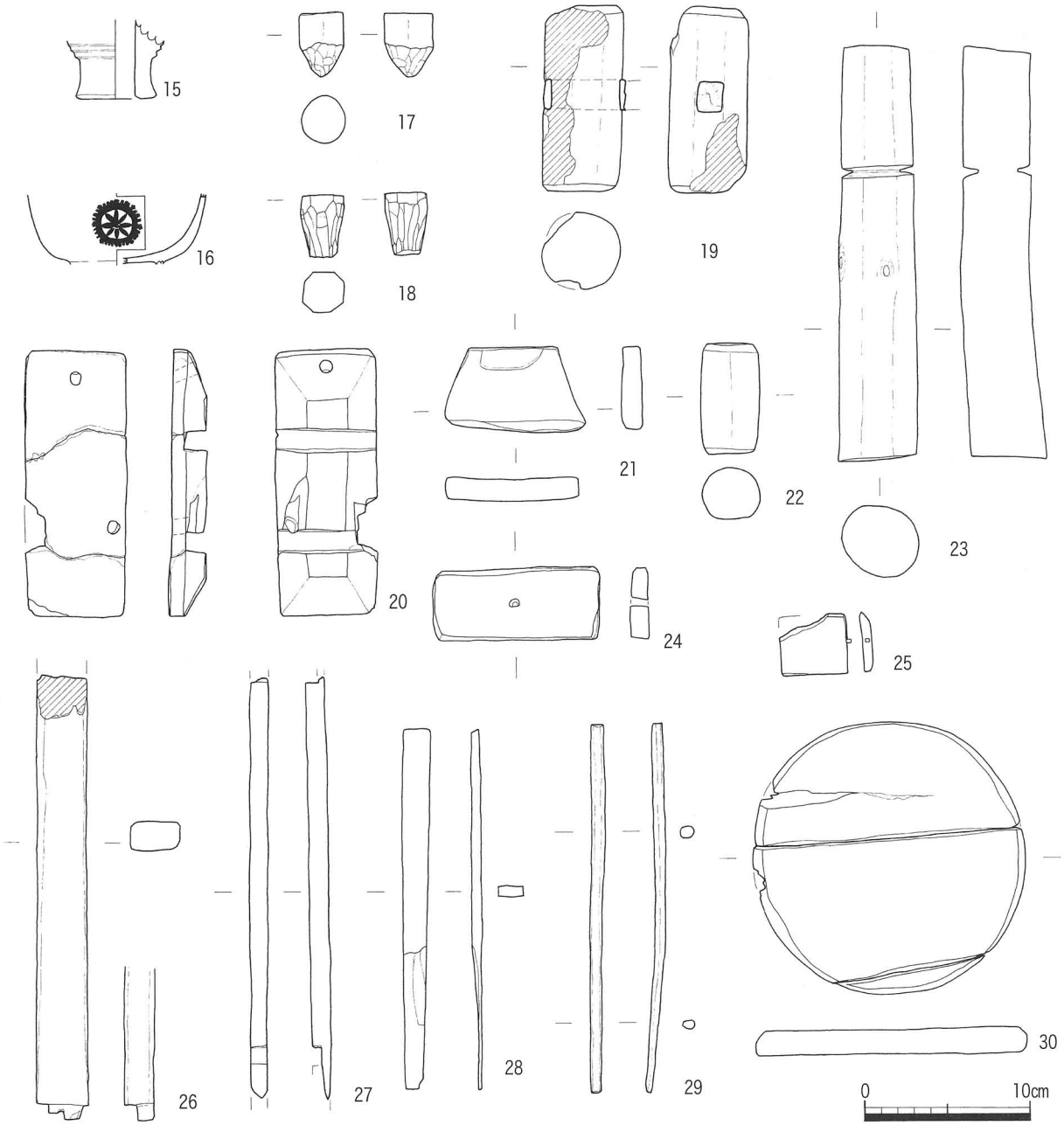

第129図　ＳＥ3001平・断面図（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 陶器　灯明皿 | 10.0 | | (1.3) | 内面回転ナデ　外面回転篦削り　口縁部煤付着 | 褐灰10YR6/1 | 灰褐7.5YR4/2 | 精良 |
| 2 | 陶器　灯明皿 | 11.0 | | (1.7) | 内面回転ナデ　外面回転篦削り　口縁部煤付着 | 赤褐10R5/4 | 灰赤10YR4/2 | 密 |
| 3 | 磁器　碗 | 11.0 | | (3.7) | 内外面施釉 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 4 | 磁器　皿 | | 4.2 | (1.7) | 高台無釉　青磁 | 明緑灰5G7/1 | 灰白10Y8/1 | 精密 |
| 5 | 磁器　皿 | | 4.7 | (2.7) | 高台無釉　青磁 | 淡緑 | 灰白5Y7/1 | 密 |
| 6 | 磁器　火入 | | 5.6 | (2.2) | 内面・畳付無釉 | 灰白10Y7/1 | 灰白10YR7/2 | 密 |
| 7 | 磁器　皿 | 12.5 | 4.2 | 3.7 | 蛇の目高台　高台無釉　見込み畳付砂目　肥前系 | 灰オリーブ5Y6/2 | 鈍い黄橙 | 密 |
| 8 | 磁器　徳利 | | | (12.1) | 内外面回転ナデ　外面上部カキ目 | 黒褐7.5YR3/2 | 褐灰10YR5/1 | 密 |
| 9 | 磁器　皿 | | 4.5 | (2.9) | 蛇の目高台　高台無釉　底面回転篦切り | 灰オリーブ7.5Y6/2 | 灰白10Y7/1 | 密 |
| 10 | 陶器　擂鉢 | 26.0 | | (8.4) | 回転ナデ　全面卸目　備前焼 | 鈍い赤褐2.5YR5/3 | 赤褐10YR5/3 | 密 |
| 11 | 瓦質土器　羽釜 | 18.8 | | (11.0) | 外面指押え，篦ナデ　内面刷毛目，篦ナデ　煤 | 黄灰2.5Y6/1 | 黒10YR2/1 | 細砂 |
| 12 | 土師質土器　焙烙 | 38.4 | | (6.0) | 口縁横ナデ　外面指押え　内面刷毛目後にナデ | 黒褐5YR2/1 | 褐灰5YR5/1 | 粗砂 |
| 13 | 陶器　甕 | | 18.6 | (5.4) | 回転ナデ　底未調査　備前焼 | 明赤灰2.5YR3/1 | 赤褐10YR4/4 | 密 |

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 平瓦 | 27.5 | (18.0) | 2.0 | | | 凸凹面篦ナデ |

第130図　ＳＥ3001出土遺物（１）（Ｓ：１／４）



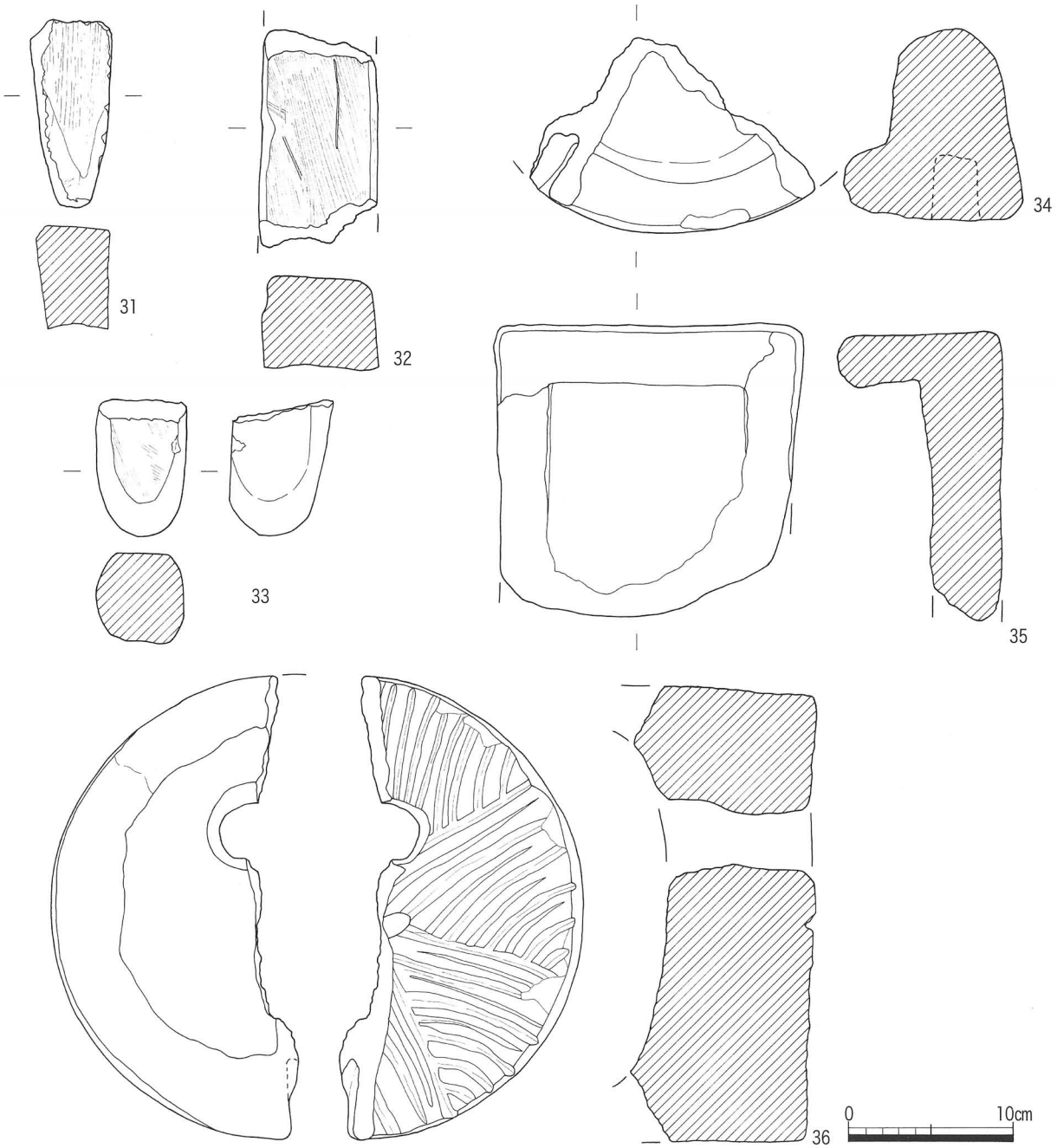

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 竹製容器 | (底径) 4.8 | (現存高) 4.8 | | | 竹 | 竹の節を利用したもの　端部を切断 |
| 16 | 碗 | (底径) 5.6 | (現存高) 4.3 | | | | 内外面漆塗り「八剣輪宝」　赤漆 |
| 17 | 栓 | 3.9 | (径) 2.9 | | | | 先端は全方向から細かい加工　上端切断 |
| 18 | 栓 | 3.8 | (径) 2.6 | | | | 先端は全方向から細かい加工　上端切断 |
| 19 | 木槌 | 11.2 | (径) 4.7 | | | | 柄を欠損 |
| 20 | 下駄 | 16.1 | 6.2 | | | | 差し歯下駄 |
| 21 | 下駄 | 5.1 | 8.5 | 1.3 | | | 歯　柾目 |
| 22 | 加工木 | 6.7 | (径) 3.4 | | | | 両端を切断し，側面を加工する |
| 23 | 加工木 | 25.2 | (径) 4.8 | | | | 両端を切断し，側面に切り込みがある |
| 24 | 加工板 | 10.1 | 4.3 | 1.1 | | | 中央に孔　上面に加工痕　板目 |
| 25 | 加工板 | 4.0 | 3.6 | 0.5 | | | 側面に木釘が残存　板目 |
| 26 | 加工板 | 26.8 | 3.0 | 1.3 | | | 先端にさし込みが残存　建築材　板目 |
| 27 | 加工板 | 25.3 | | 1.2 | | | 障子　抉りがある |
| 28 | 加工板 | 21.7 | 1.5 | 0.6 | | | 下端付近を加工する　柾目 |
| 29 | 加工木 | 22.2 | 0.8 | 0.7～0.5 | | | 全面を加工し面取りをする |
| 30 | 桶 | 16.3 | 1.5 | | | | 底板　柾目 |

第131図　ＳＥ3001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

10は口縁部が拡張し，内外面に沈線を巡らし，全面に卸目が施される。18世紀後半の備前焼である。11・12の外面は指押え，内面は刷毛目が施され，煤が外面に付着する。

16は外面に「八剣輪宝」を描く。20は歯と台の一部を欠損する差し歯下駄である。22・23は両端を切断する。24は孔を有し，25の側面には木釘が残存する。

31・33は１面，32は３面を使用する。36は石臼の上部である。35の内面は煤が若干残存する。




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 31 | 砥石 | (11.4) | 4.9 | 6.2 | 500.1 | 安山岩 | 1面使用 |
| 32 | 砥石 | (13.3) | 7.2 | 5.7 | 1060.6 | 砂岩 | 3面使用 |
| 33 | 砥石 | (8.4) | 5.3 | 5.4 | 418.5 | 砂岩 | 1面使用 |
| 34 | 石臼 | (17.5) | (11.8) | 10.8 | | 集塊岩 | 側面に孔の一部残存 |
| 35 | 石製容器 | (17.7) | 18.8 | 10.0 | | 集塊岩 | 内面に煤が若干付着 |
| 36 | 石臼 | (28.4) | (14.9) | 11.3 | | 御影石 | 下面に溝多数　側面に孔の一部残存 |

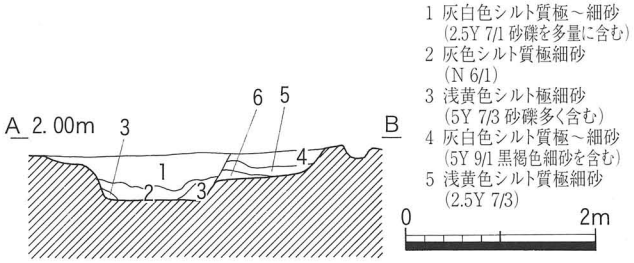
第132図　ＳＥ3001出土遺物（３）（Ｓ：１／４）

3　土坑

ＳＫ3002　（第133図）

調査区南端において検出された土坑であり，土坑の南側は調査区外に延びる。

検出面のレベルは標高1.87mである。土層の堆積状態は，西側の深い方が切る様相を呈し，2基の土坑の可能性も考えられる。土坑の平面形は不整な楕円形を呈し，東西軸約3.00mを測る。深さは東側で0.35m，西側で0.54mを測る。埋土は１～３層と４～６層に大別されるが，色調等の区別はほとんど無い。遺物は数点の磁器片のみである。




第133図　ＳＫ3002断面図（Ｓ：１/80）

ＳＫ3003　（第134・135図）

調査区中央やや南寄りにおいて検出された土坑である。

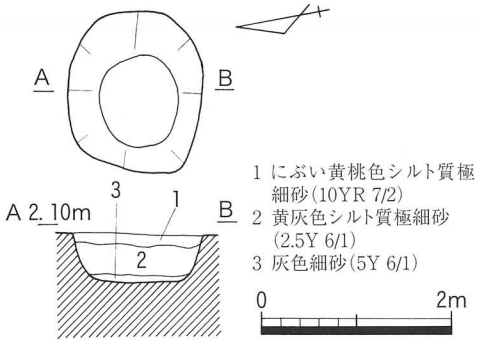
検出面のレベルは標高1.98mである。土坑の平面形は不整な楕円形を呈し，西側は若干角ばる。東西方向の長軸は1.68m，短軸は1.40m，深さは0.50mを測る。土坑の断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。底面直上に径0.15mの河原石が数個検出された。埋土は１・２層のシルト質極細砂と３層細砂に大別される。

遺物は，陶器灯明皿（１），磁器茶碗（２），ミニチュア土器擂鉢（３），磁器盃（４），陶器仏器（５），同擂鉢（６）がある。

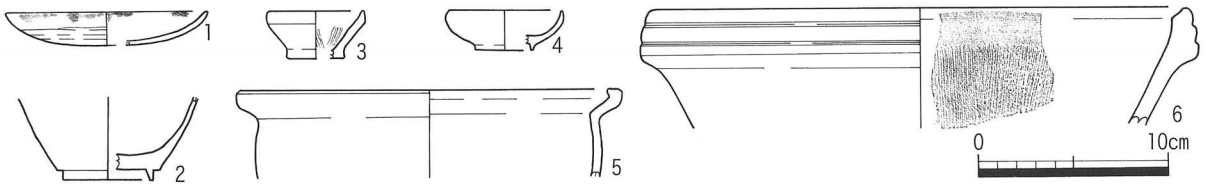
１は外面回転ヘラ削りを施し，口縁部に煤付着する。

２の底面は器厚が厚く，高台無釉である。３は口径５cmを測るミニチュア土器の擂鉢で，外面は赤彩する。

６は口縁部外面に沈線を有し，18世紀後半のもの。




第134図　ＳＫ3003平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 陶器　灯明皿 | 10.6 | | 1.65 | 回転ナデ　外面回転篦削り　口縁部煤付着 | 鈍い赤褐2.5YR5/4 | 赤褐10R4/3 | 密 |
| 2 | 磁器　茶碗 | | 4.8 | (4.4) | 高台無釉 | 明緑灰7.5GY7/1 | 灰黄2.5Y7/2 | 密 |
| 3 | ミニチュア土器　擂鉢 | 5.0 | 3.0 | 2.5 | 外面赤彩　4本単位の卸目 | 赤橙10R6/6 | 赤橙10R6/6 | 密 |
| 4 | 磁器　皿 | 6.0 | 3.1 | 2.1 | 回転ナデ　内外面施釉 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |
| 5 | 磁器　仏器 | 20.0 | | (4.7) | 回転ナデ　内外面施釉 | 鈍い赤褐2.5YR4/3 | 灰白2.5Y7/1 | 密 |
| 6 | 陶器　擂鉢 | 28.0 | | (6.3) | 口縁部横ナデ　外面回転ナデ　卸目　備前焼 | 橙5YR6/6 | 橙5YR6/6 | 密 |

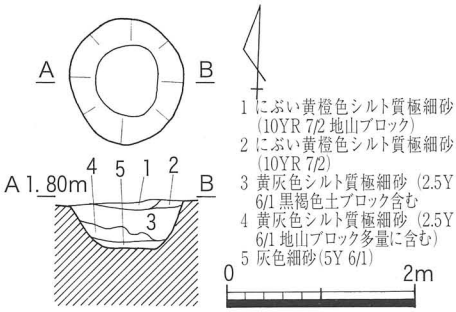
第135図　ＳＫ3003出土遺物

ＳＫ3004　（第136図）

調査区中央南寄りにおいて検出された土坑である。

検出面のレベルは標高1.95m前後である。土坑の平面形は不整な円形を呈し，直径は約1.25m，深さは0.46mを測る。土坑の断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。埋土は５層に分層される。

遺物は数点の陶磁器片のみであり，図化できなかった。




第136図　ＳＫ3004平・断面図（Ｓ：１/80）

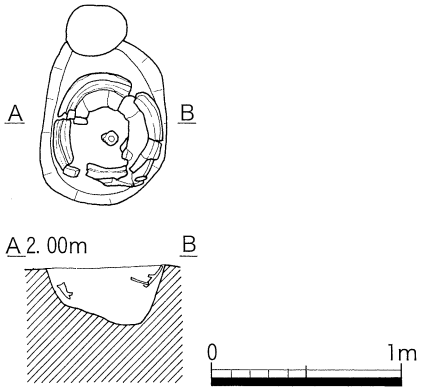
ＳＫ3005　（第137・138図）

調査区中央南寄りにおいて検出された土坑であり，ＳＫ3004の南側，ＳＫ3002の北側に位置する。

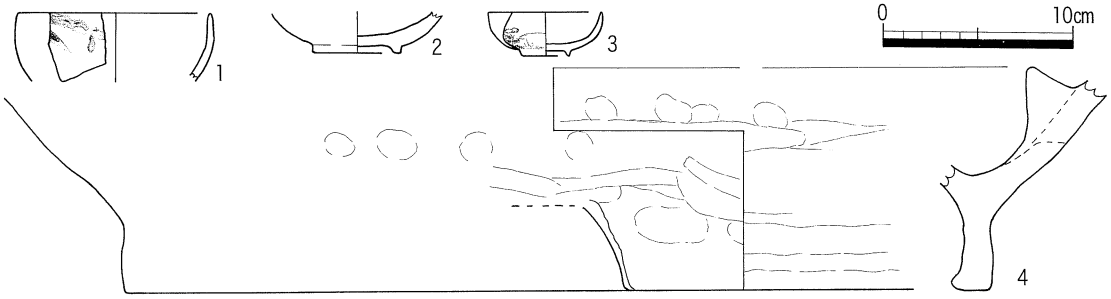
検出面のレベルは標高1.90mである。平面形は不整な楕円形を呈し，長軸0.90m，短軸0.66m，深さ0.30mを測る。

底面は東側が低くなっている。土坑の側面に風呂釜（４）が残存する。

遺物は，磁器碗（１・２），同盃（３），土師質土器風呂釜（４）である。１～３は肥前系で，18世紀のものである。




第137図　ＳＫ3005平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 10.0 | | (3.6) | 内外面施釉　「くらわんか碗」　肥前系 | 浅黄色 | 灰白色 | 精良 |
| 2 | 磁器　碗 | 4.7 | | (2.2) | 内外面施釉　肥前系 | 暗褐7.5YR3/3 | 灰色7.5Y8/1 | 精良 |
| 3 | 磁器　盃 | 6.0 | 2.4 | 1.3 | 内外面施釉　外面に草花文　肥前系 | 灰白7.5Y8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 4 | 風呂　釜 | | 46.0 | (11.85) | 内外面指押え，ナデ，篦ナデ　外面・台内面に煤付着 | 橙2.5YR7/6 | 灰白2.5Y8/2 | 細礫 |

第138図　ＳＫ3005出土遺物（Ｓ：１/４）

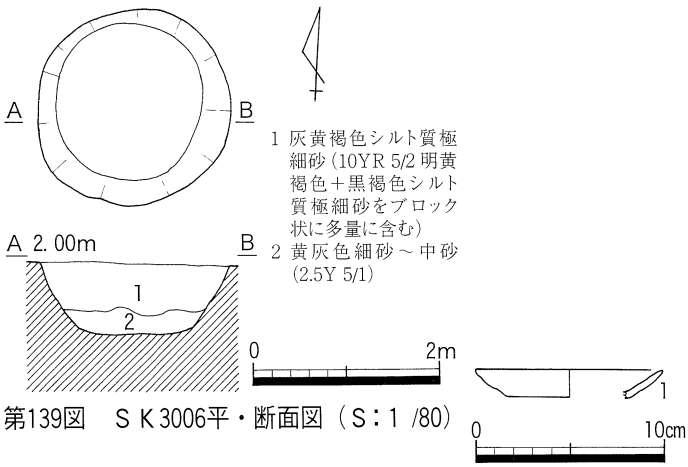
ＳＫ3006　（第139・140図）

調査区南端で検出された土坑であり，ＳＥ3001とＳＫ3002の中間にある。

検出面のレベルは標高1.95mである。

土坑の平面形は円形を呈し，直径約2.00m，深さ0.76mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦であり，若干北西に片寄っている。埋土は２層である。

遺物は，土師質土器小皿（１），その他の陶磁器片のみである。




第139図　ＳＫ3006平・断面図（Ｓ：１/80）

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 9.8 | 6.2 | (1.5) | 内外面回転ナデ | 橙5YR6/6 | 暗灰黄2.5Y5/2 | 微砂 |

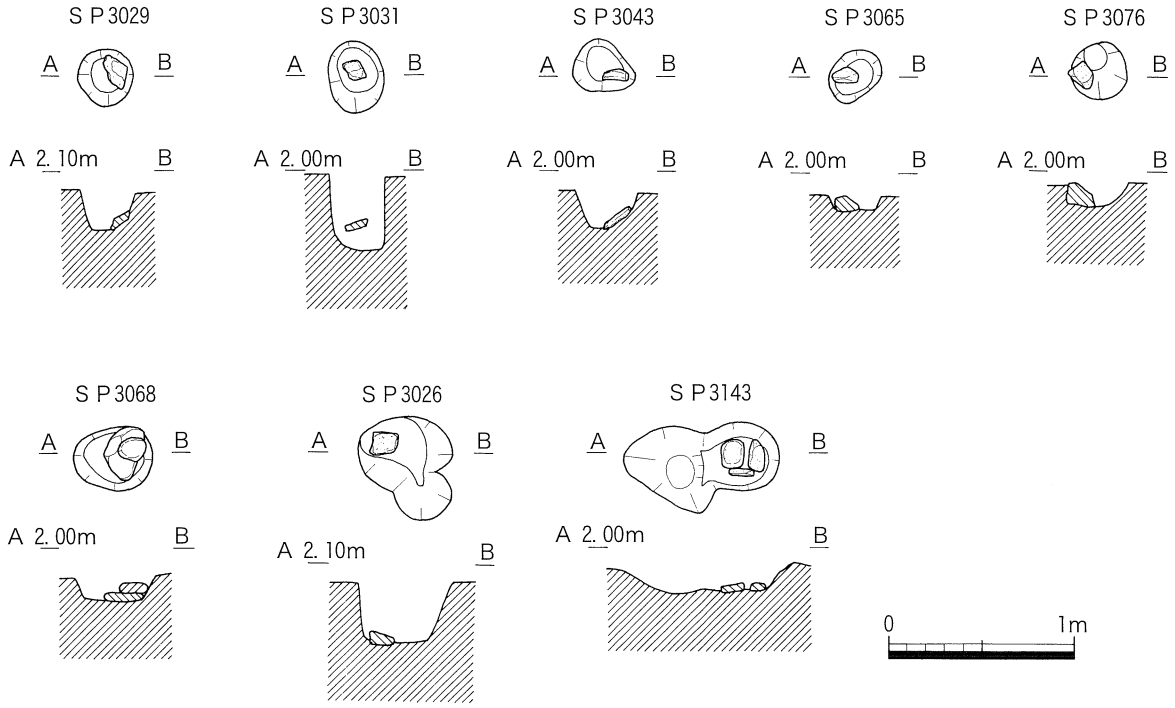
第140図　ＳＫ3006出土遺物（Ｓ：１/４）

４　柱穴

ＳＰ3026　（第141図）

調査区南東側で検出された柱穴であり，ＳＰ3027と重複し，ＳＰ3025を切っている。

検出面のレベルは標高1.98mである。柱穴の平面形はくびれのある不整な円形を呈し，直径は約0.50m，深さは0.30mを測る。底面に詰石としての河原石が残存する。




第141図　３工区ＳＰ平・断面図（Ｓ：１/40）

ＳＰ3029　（第141図・第143図－３）

調査区南東側で検出された円形の柱穴である。

検出面のレベルは標高1.96mである。直径は0.26m，深さは0.20mを測る。底面に詰石が残存する。遺物は土師質土器小皿（３）である。

ＳＰ3031　（第141図）

調査区南東側で検出された円形の柱穴である。

検出面のレベルは標高1.96mである。直径は0.40m，深さ0.50mを測る。埋土中に河原石が残存する。

ＳＰ3043　（第141図）

調査区南東隅で検出された柱穴である。

検出面のレベルは標高1.90mである。平面形は不整な円形を呈し，直径は0.34m，深さは0.20mを測る。底面に河原石が残存する。

ＳＰ3065　（第141図）

調査区中央で検出された柱穴である。

検出面のレベルは標高1.89mである。平面形は不整な円形を呈し，直径は0.26×0.32m，深さは0.10mを測る。底面に根石が残存する。

ＳＰ3068　（第141図）

調査区中央やや南寄りに検出された柱穴である。

検出面のレベルは標高1.85mである。平面形は楕円形を呈し，直径は0.33×0.42m，深さは0.12mを測る。底面は平坦で，南側に片寄った位置に２段積みの河原石が残存する。

ＳＰ3076　（第141図）

調査区南側の中央において検出された柱穴である。

検出面のレベルは標高1.90mである。平面形は円形を呈し，直径は0.30m，深さは0.12mを測る。底面は東方に片寄っており，河原石が直上に残存する。

ＳＰ3143　（第141図）

調査区南東側で検出された柱穴である。ＳＤ3004に上面は削平され，西側はＳＰ3142に切られている。

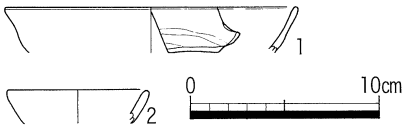
検出面のレベルは標高1.90mである。直径は0.36m，深さは0.12mを測る。底面に根石としての河原石が３個残存する。

ＳＰ3033　（第142図）

調査区南東側で検出された柱穴である。

検出面のレベルは標高1.96mである。平面形は楕円形を呈し，直径は0.20×0.32m，深さは９㎝を測る。

遺物は，瓦器椀（１），土師質土器小皿（２）がある。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 瓦器　碗 | 15.4 | | (2.4) | 内外面回転ナデ　内面暗文風の篦磨き | 灰N5/ | | 密 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 7.4 | | (1.8) | 内外面回転ナデ | 灰白2.5Y8/2 | 灰白10YR8/2 | 粗砂 |

第142図　ＳＰ3033出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ3023　（第143図－１・２）

調査区南東側で検出された柱穴であり，東半分をＳＤ3003に切られている。

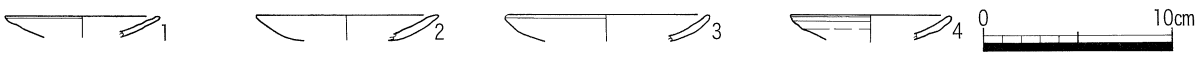
検出面のレベルは標高1.96mである。平面形は不整な楕円形を呈し，直径は0.30m，深さは0.23mを測る。

遺物は，土師質土器小皿（１・２）があり，共に回転ナデが施される。

ＳＰ3058　（第143図－４）

調査区南東側で検出された柱穴である。検出面のレベルは標高1.90mである。平面形は円形を呈し，直径は0.30m，深さ0.17mを測る。

遺物は，土師質土器小皿（４）があり，外面に回転ヘラ削りが施される。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.2 | | (1.1) | 内外面回転ナデ | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 密 |
| 2 | 土師質土器小皿 | 9.8 | | (1.1) | 内外面回転ナデ | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 密 |
| 3 | 土師質土器小皿 | 10.6 | | (1.4) | 内外面回転ナデ | 淡橙5YR8/4 | | 密 |
| 4 | 土師質土器小皿 | 8.6 | | (1.25) | 内外面回転ナデ　外面回転篦削り | 橙5YR7/6 | | 密 |

第143図　３工区ＳＰ出土遺物（Ｓ：１／４）

5　自然旧河道

ＳＲ3001　（第144・145図）

調査区の西側において検出された自然旧河道である。前述した２工区ＳＲ2001と北側の４工区ＳＲ4002と同一旧河道である。ＳＲ3001はＳＤ3001・ＳＥ3001に切られている。

検出面のレベルは標高1.95ｍ前後である。検出できたのはＳＲ3001の東岸のみであり，幅や深さ等の正確な規模は不明であるが，検出された部分での最大幅は約14ｍを測る。東岸は調査区南側では南北方向に延びているが，調査区中央から北側では北東～南西方向に流れを変えている。検出面からの深さは，平均0.70ｍを測り，最深部で0.76ｍを測る。河床は平坦であり，南端と北端での標高はほぼ同じである。川床は砂礫層であり，拳大から人頭大の河原石がある。埋土はレンズ状堆積を呈し，上層に灰白色シルト質極細砂があるが，灰色細～粗砂が主体を占める。遺物の出土は全域にわたっているが，その出土レベルは上面～中層までに集中しており，河床からの出土は非常に少ない。

遺物は，土師質土器小皿（１），同杯（２～７），同壺（10），同擂鉢（13・14），同釜（16），同火鉢（17），同羽釜（18・19・21・23），同鉢（20），同土鍋（22），磁器碗（８），同皿（９），須恵質土器壺（10），須恵器甕（12），陶器擂鉢（15），石臼（24），砥石（25），土錘（26）である。前述したように，これらの遺物の中にＳＤ3001出土の遺物が混入している。

１は底面に回転ヘラ削り後にナデを施す。２・３は器高の低い杯であり，２の底面は回転ヘラ切り後に周辺部にヘラナデを施し，３は回転ヘラ切りのみである。４は若干外反する口縁部でやや器高が高い。底面は回転糸切りが残る。５～７は器高の高い器形を呈する。５は口縁部がわずかに外反し，底面は１方向の刷毛目が施される。６の底面は１方向のヘラナデ，７の底面は１方向の刷毛目が施される。

８は底部の厚い碗で，高台は無釉である。９は底部の厚い皿で，見込みに草花文の染付が描かれ，19世紀前半のものである。

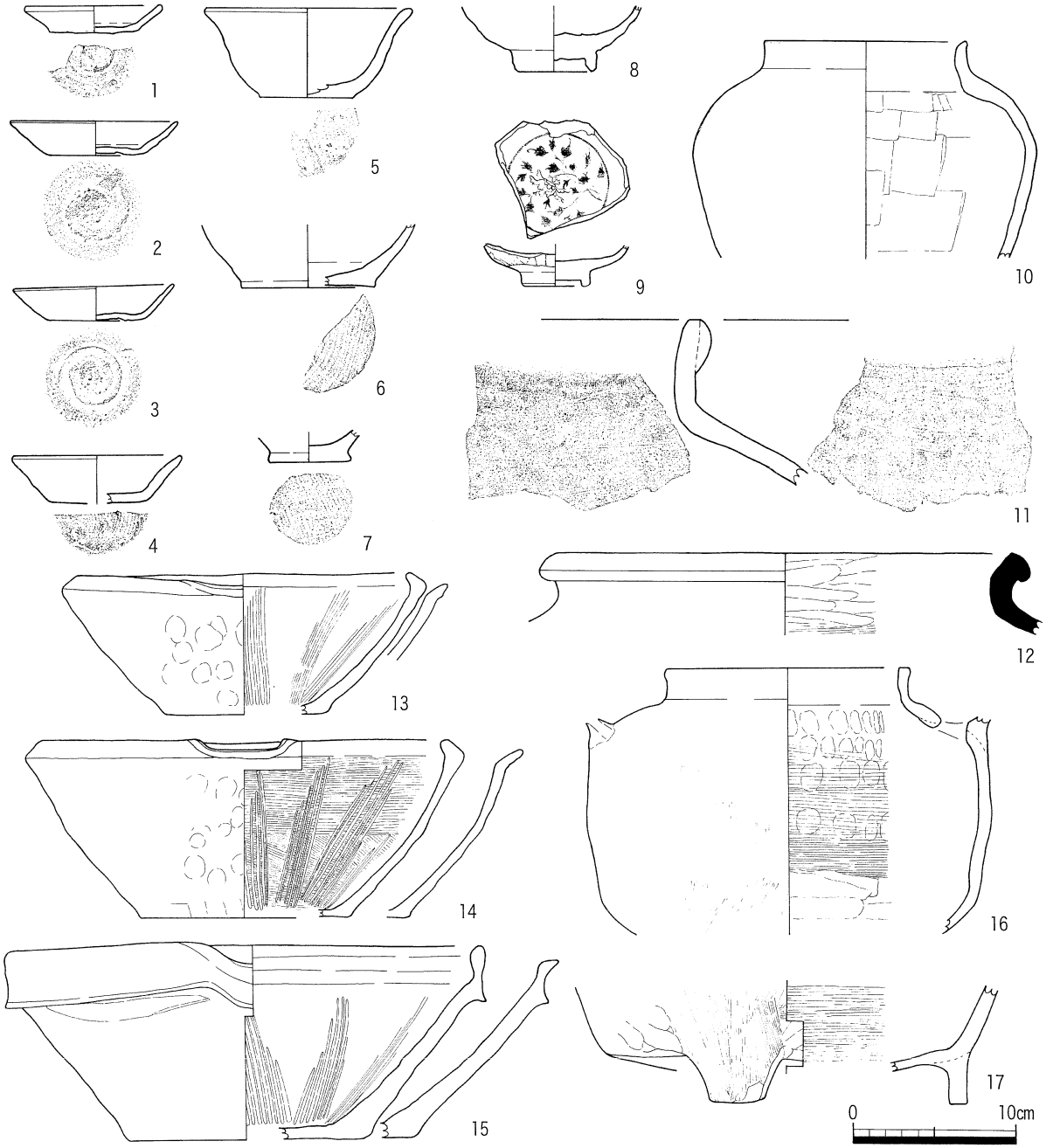
10は短く直立する口縁部の壺である。11は直立する口縁部で，口縁端部は外面に拡張し玉縁状になる。胴部外面は刷毛目，内面は板ナデが施される。12は短く外反する口縁部を持ち，口縁端部は下方に拡張する。

13はわずかな片口を有する擂鉢で，内面に５本単位の卸目を放射状に施す。外面は指押え，内面は非常にうすい刷毛目が施される。14は方形気味の片口を有する擂鉢で，内面に３本ないし４本単位の卸目を放射状に施す。外面は指押え，内面は横方向と斜め方向の刷毛目が施される。14は備前焼の擂鉢で，口縁部に自然釉がかかっている。内面には８本単位の卸目が放射状に施される。13～15は18世紀のものである。

16は外耳と孔を有する釜であり，胴部下位に煤が付着する。胴部外面はナデ・ヘラナデ，内面上半は指押え後に粗い刷毛目，下半は指ナデが施される。18は口縁部ヨコナデ，胴部ナデである。外面に煤が付着する。19の鍔直下は指押えされ波状となる。胴部外面に粗い刷毛目が施される。23は外耳と孔を有し，外面は規則的な指押えが見られる。内面は板ナデが施される。

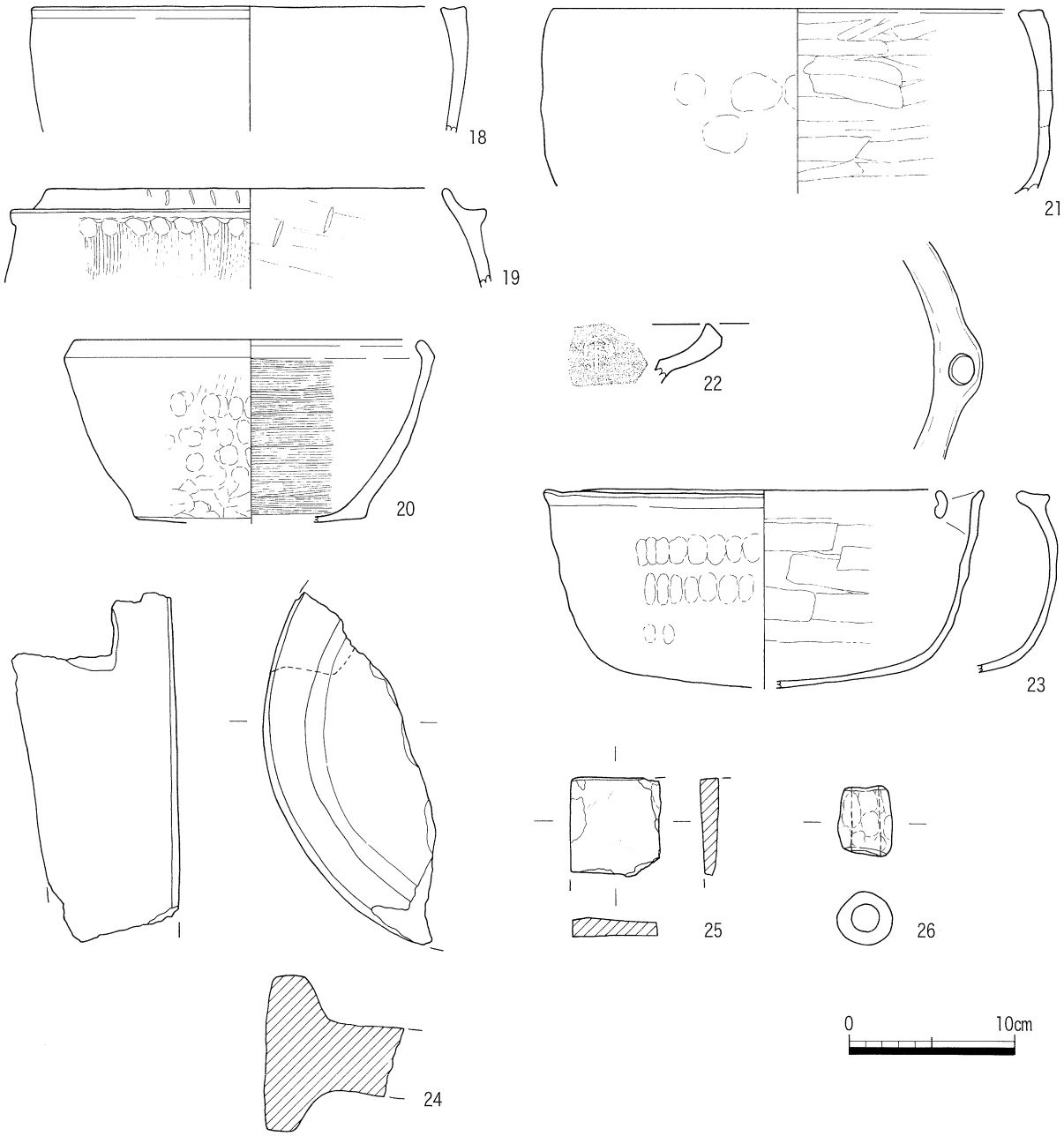
17は３ヶ所に脚を付す火鉢で，外面は刷毛目・ヘラナデ，内面は刷毛目が施される。底面はヘラ削り，ヘラナデが施される。22は内面に「中」の線刻がある。

24は石臼の破片であり，横打穴の一部が残存する。集塊岩製である。25は砂岩製砥石の破片である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師質土器小皿 | 8.2 | 2.2 | 1.65 | 内面回転ナデ　外面ナデ　底面回転篦削り後にナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 密 |
| 2 | 土師質土器杯 | 10.2 | 6.0 | 2.0 | 内外面回転ナデ　底面回転篦切り後に周辺を篦ナデ | 淡橙5YR8/4 | 灰白10YR8/1 | 微砂 |
| 3 | 土師質土器杯 | 9.8 | 5.8 | 2.1 | 内外面回転ナデ　底面回転篦切り | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 4 | 土師質土器杯 | 10.4 | 6.0 | 2.9 | 内外面回転ナデ　底面回転糸切り | 淡赤橙2.5YR7/4 | 橙2.5YR7/6 | 粗砂 |
| 5 | 土師質土器杯 | 12.4 | 5.4 | 5.4 | 内外面回転ナデ　底面1方向の刷毛目 | 浅黄橙10YR8/3 | | 密 |
| 6 | 土師質土器杯 | | 8.0 | (3.8) | 内外面回転ナデ　底面1方向の篦ナデ | 鈍い橙7.5YR7/3 | 灰白10YR8/2 | 密 |
| 7 | 土師質土器杯 | | 5.1 | (1.9) | 内外面回転ナデ　底面1方向の篦ナデ | 淡橙5YR8/4 | | 微砂 |
| 8 | 磁器　碗 | | 4.5 | (4.0) | 高台無釉 | 明褐灰5YR7/2 | 鈍い橙5YR7/4 | 微砂 |
| 9 | 磁器　皿 | | 4.2 | (25.0) | 高台無釉　見込みに草花文 | 淡青色 | 白色 | 精良 |
| 10 | 土師質土器壷 | 12.0 | | (13.1) | 短頸壷　口縁部横ナデ　内面板ナデ　外面剥離 | 灰白10YR8/1 | 褐灰10YR4/1 | 細礫 |
| 11 | 須恵質土器壷 | 42.0 | | (10.0) | 口縁部外面拡張　胴部外面刷毛目　内面板ナデ | 灰白2.5Y8/1 | 黄灰7.5Y6/1 | 細礫 |
| 12 | 須恵器　甕 | 29.6 | | (4.9) | 口縁部横ナデ　内面篦ナデ・刷毛目 | 青灰5B5/1 | | 細礫 |
| 13 | 土師質土器擂鉢 | 22.0 | 9.8 | 8.5 | 片口　口縁部横ナデ　体部外面指押え　内面刷毛目 | 灰白10YR8/1 | | 細礫 |
| 14 | 土師質土器擂鉢 | 24.4 | 12.8 | 10.8 | 片口　口縁部横ナデ　体部外面指押え　内面刷毛目 | 浅黄2.5Y8/3 | 灰白2.5Y8/2 | 細礫 |
| 15 | 陶器　擂鉢 | 48.7 | 14.0 | 12.0 | 片口　口縁部自然釉　底面未調整 | 明褐灰5YR7/1 | 黄褐2.5Y5/3 | 密 |
| 16 | 土師質土器釜 | 14.6 | | (16.0) | 外面ナデ・篦ナデ　内面指押え・指ナデ・刷毛目 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 灰白2.5Y8/2 | 粗砂 |
| 17 | 土師質土器火鉢 | | | (7.3) | 外面刷毛目・篦ナデ　内面刷毛目 | 鈍い黄橙10YR7/2 | | 細礫 |

第144図　ＳＲ3001出土遺物（１）（Ｓ：１／４）



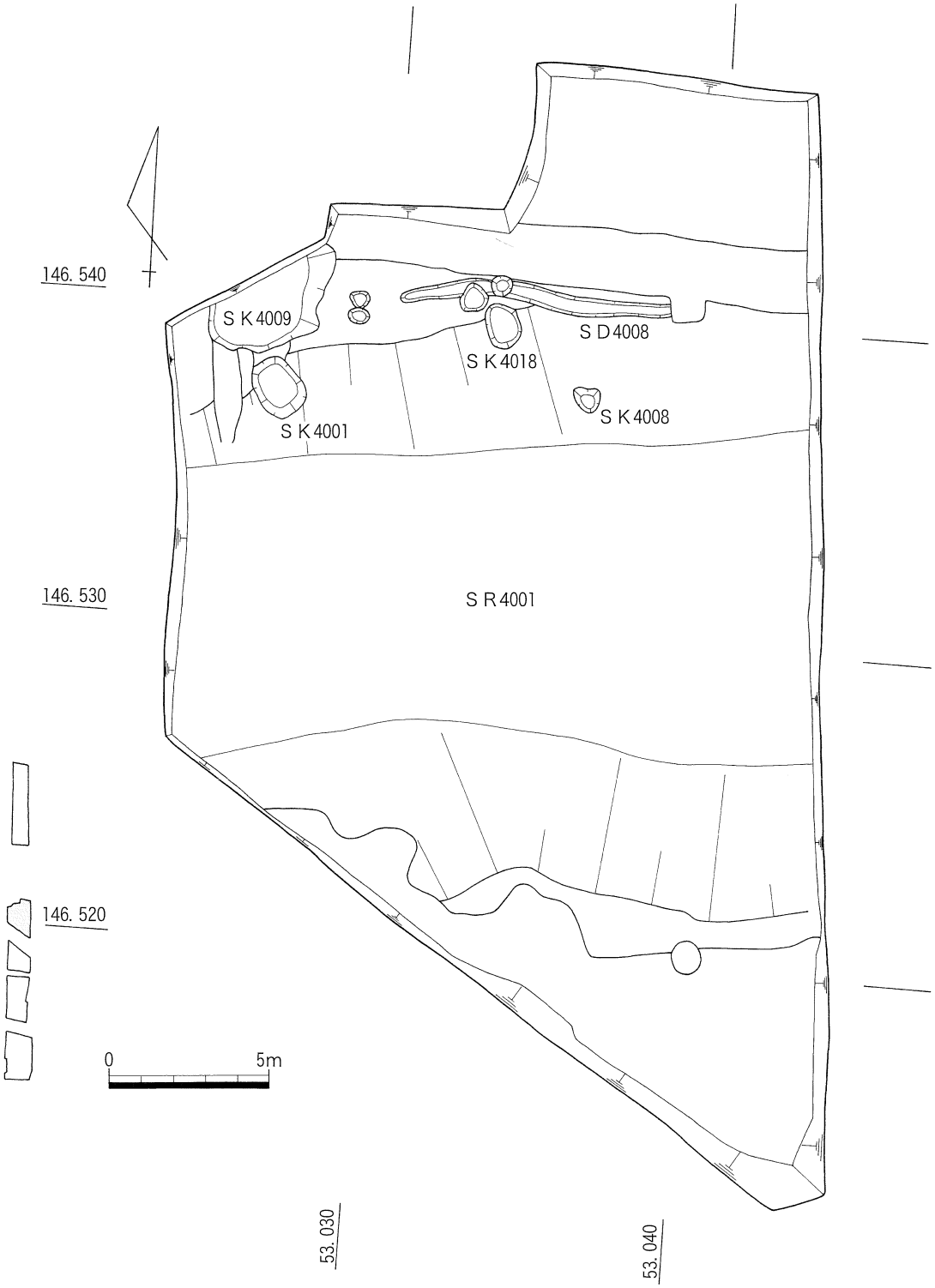

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 18 | 土師質土器羽釜 | 26.2 | | (7.5) | 口縁部横ナデ　胴部ナデ　外面煤 | 灰白10YR4/2 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 細礫 |
| 19 | 土師質土器羽釜 | 24.0 | | (5.9) | 口縁部板ナデ　胴部外面粗い刷毛目　内面板ナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 細礫 |
| 20 | 土師質土器鉢 | 20.8 | 14.0 | (10.9) | 口縁部横ナデ　胴部外面指押え・ナデ　内面刷毛目 | 浅黄橙10YR8/3 | 浅黄橙7.5YR8/4 | 密 |
| 21 | 土師質土器羽釜 | 29.0 | | (11.1) | 口縁部横ナデ　胴部外面指押え・ナデ　内面篦ナデ | 褐灰10YR6/1 | 灰白2.5YR8/2 | 細礫 |
| 22 | 土師質土器土鍋 | | | (3.5) | 回転ナデ　口縁部内面に「中」刻印 | 灰褐7.5YR6/2 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 細礫 |
| 23 | 土師質土器羽釜 | 26.0 | | (11.8) | 外耳　孔　外面指押え・ナデ　内面板ナデ | 黒褐2.5Y3/1 | 灰白2.5YR8/2 | 粗砂 |

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 24 | 石臼 | | (8.4) | 9.3 | | 集塊岩 | |
| 25 | 砥石 | (5.8) | (5.3) | (1.1) | | 砂岩 | 1面使用 |
| 26 | 土錘 | 4.2 | 3.2 | | 41.1 | | 表灰黄2.5Y7/2　裏同じ　微砂 |

第145図　ＳＲ3001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

## 4　4工区

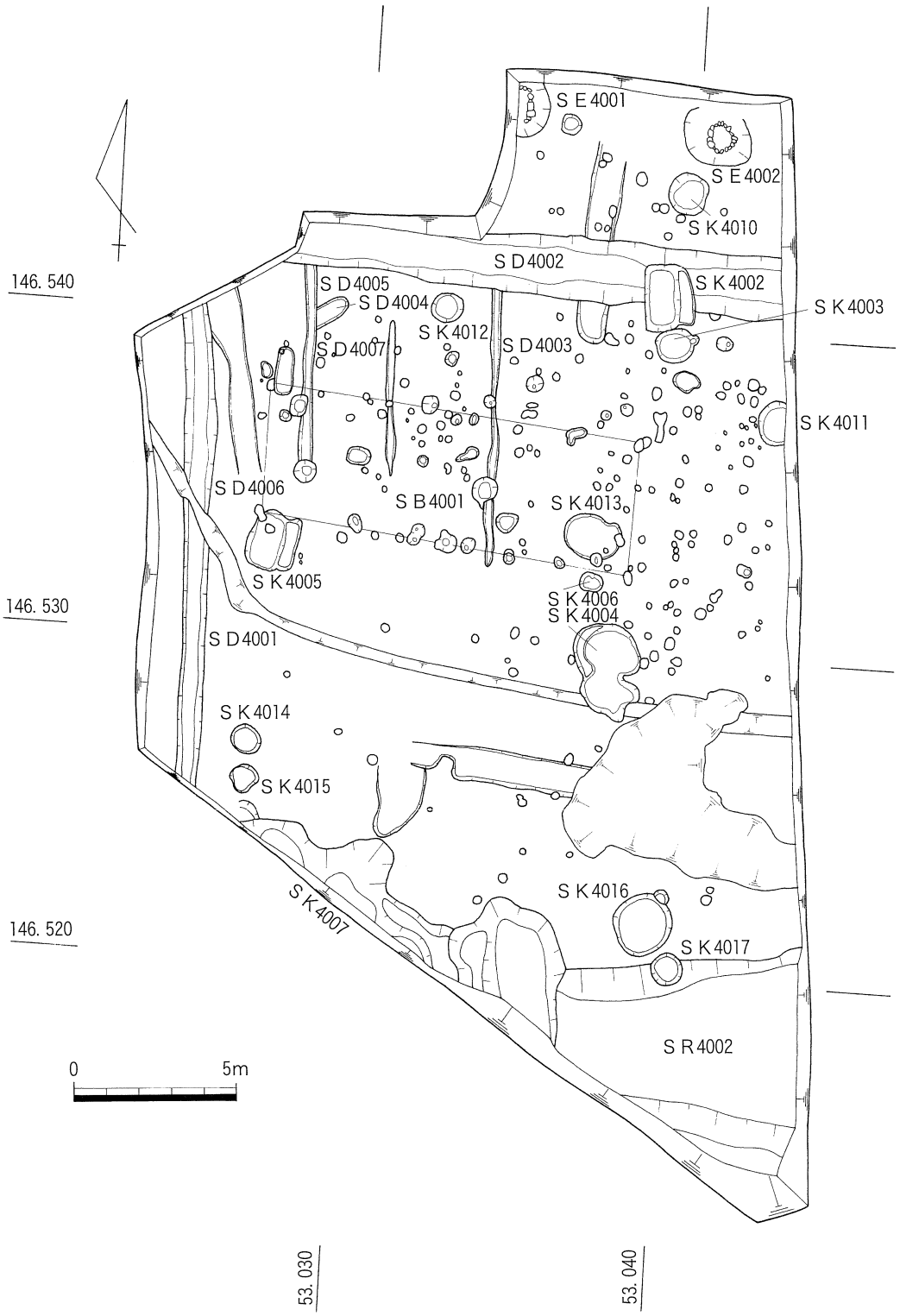
4工区は本遺跡の中央よりやや北側に位置する調査区で，3工区の北側にある。調査区の南側は高松琴平電気鉄道株式会社の線路，北側は現有道路によって区切られている。個人住宅の存在と調査工程の都合により調査区の北西隅は未調査となった。調査区東壁の長さは約34m，西壁は約22.5mを測り，東西幅は約20mである。調査区中央の南北軸座標はX＝146.530，東西




第146図　4工区遺構配置図（1）（S：1/200）

軸座標値はＹ＝53.035である。

調査区の北東部は，現地表から約30cmの深さまで花崗土が入っているが，その他に撹乱はない。全体の土層堆積は，上層から現水田耕作土，近世の条里型水田の灰黄色シルト質極細砂・灰黄褐色シルト質極細砂・地山である。遺構は全域にわたって検出され，灰黄色シルト質極細砂を掘り込んだ近世の遺構と地山を掘り込んだ遺構に分けられ，２面の遺構検出面がある。




第147図　４工区遺構配置図（２）（Ｓ：１/200）

1）弥生時代後期末～古墳時代初頭

1　土坑

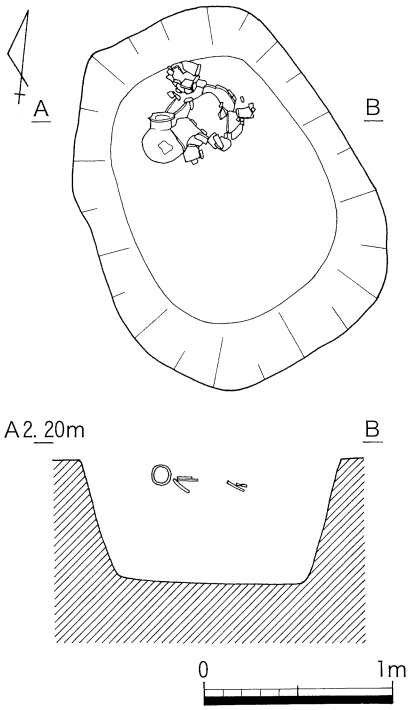
ＳＫ4001　（第148・149図）

調査区中央やや北東寄りの位置において検出された土坑であり，ＳＲ4001を掘り込んでいる。

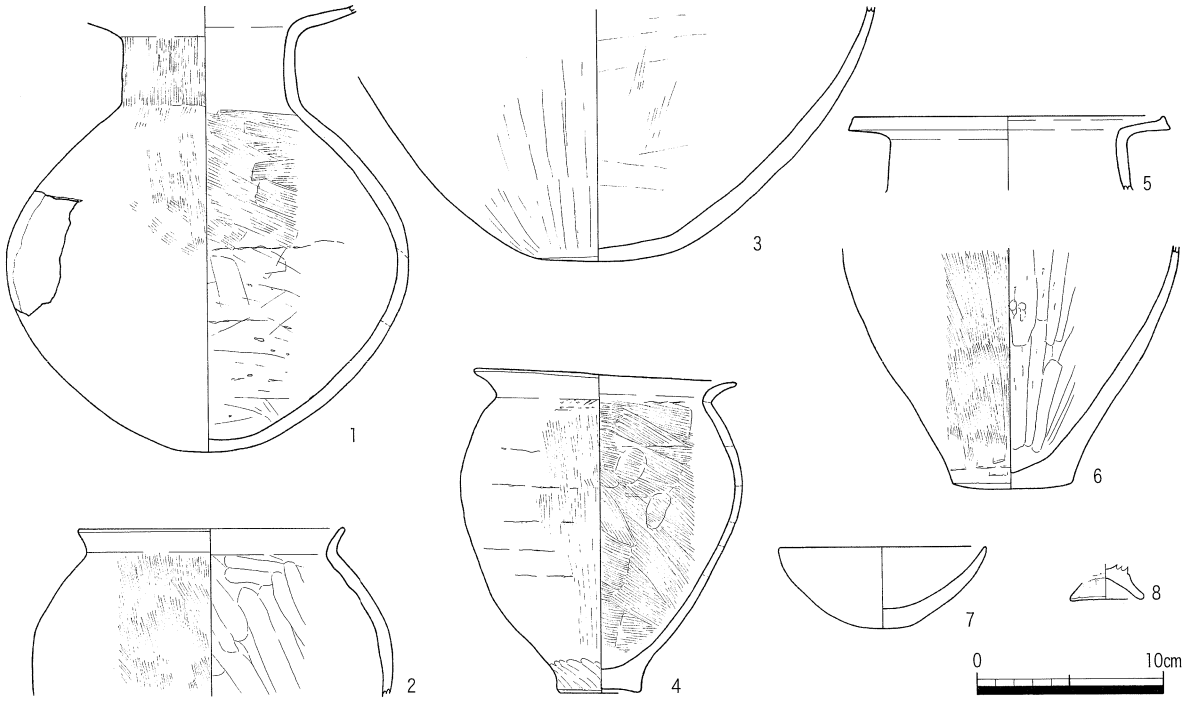
検出面のレベルは標高2.10mである。土坑の平面形は北西隅がやや乱れるが隅丸長方形を呈し，南北方向の長軸は1.95m，東西方向の短軸は約1.46mを測る。土坑の断面は逆台形を呈する。底面の平面形は隅丸長方形を呈し，平坦である。検出面から底面までの深さは0.66mを測る。埋土は，褐灰色・黄灰色・黒褐色シルト質極細砂が主体となるが，その堆積の詳細は不明である。

土坑の北壁寄りの上層において数個体の土器がまとまって出土した。

遺物は，弥生土器壺（1～3・5），同甕（4・6），同鉢（7），同製塩土器（8），その他の弥生土器片である。




第148図　ＳＫ4001平・断面図（Ｓ：1/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 弥生土器　壺 | | | (23.7) | 外面刷毛目・ナデ　内面刷毛目・篦削り | 浅黄橙10YR8/3 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 石英，長石 |
| 2 | 弥生土器　壺 | 14.4 | | (14.0) | 口縁横ナデ　胴外面刷毛目　内面指ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | 灰白10YR8/2 | 石英，長石，角閃石 |
| 3 | 弥生土器　壺 | | 6.5 | (13.5) | 外面篦削り後にナデ　内面篦ナデ・指ナデ | 橙2.5YR7/6 | | 石英，長石 |
| 4 | 弥生土器　甕 | 13.9 | 4.3 | 17.9 | 外面刷毛目・刷毛目後にナデ・篦削り　内面刷毛目 | 鈍い橙7.5Y7/4 | | 石英，長石，角閃石 |
| 5 | 弥生土器　壺 | 16.6 | | (4.0) | 口縁部横ナデ　頸部ナデ | 明赤褐5YR5/6 | | 石英，長石，角閃石 |
| 6 | 弥生土器　甕 | | 6.5 | 12.9 | 平底　外面刷毛目・篦ナデ　内面篦削り | 浅黄橙10YR8/3 | 灰白10YR8/2 | 石英，長石，角閃石 |
| 7 | 弥生土器　鉢 | 11.2 | 2.5 | 4.4 | 内外面ナデ | 浅黄橙7.5YR8/2 | | 石英，長石 |
| 8 | 弥生土器　製塩土器 | | 4.0 | (1.9) | 外面篦削り　内面ナデ | 鈍い橙2.5YR6/4 | 鈍い橙5YR6/4 | 石英，長石，角閃石 |

第149図　ＳＫ4001出土遺物（Ｓ：1/4）

1は口縁部を欠損する。胴部は球形を呈し，直立する頸部から口縁部は外に大きく広がる。胴部中央の一部が打ち欠かれている。口縁部はヨコナデ，頸部外面と胴部外面上半は刷毛目，下半はナデが施される。胴部内面上半は刷毛目，下半はヘラ削りが施され，接合痕が明瞭に残存する。2は球形の胴部，短く外反する口縁部の壺である。口縁部はヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面は指ナデが施される。5は直立する頸部から大きく広がる口縁部であり，口縁端部が上方に若干拡張する。

4は若干肩の張った胴部，上げ底気味の底部，短く外反する口縁部の甕である。口縁部はナデ，胴部外面上半は刷毛目，下半は刷毛目後にナデ，ヘラ削り，内面は刷毛目が施される。底面はナデである。胴部外面に接合痕が明瞭に残存する。6は平底の甕で，外面は刷毛目，ヘラナデ，内面はヘラ削りが施される。底面はナデである。

7は半球状の鉢であり，内外面にナデが施される。

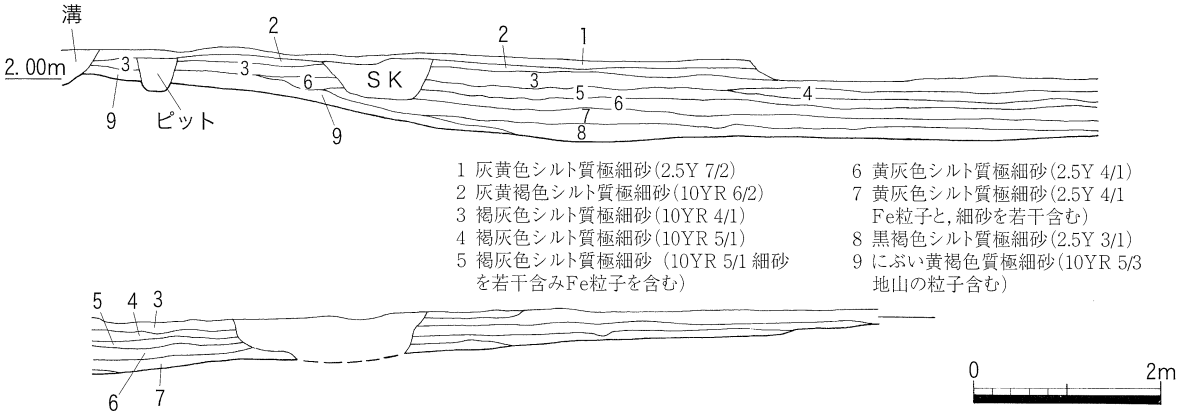
2　自然旧河道

ＳＲ4001　（第151～157図）

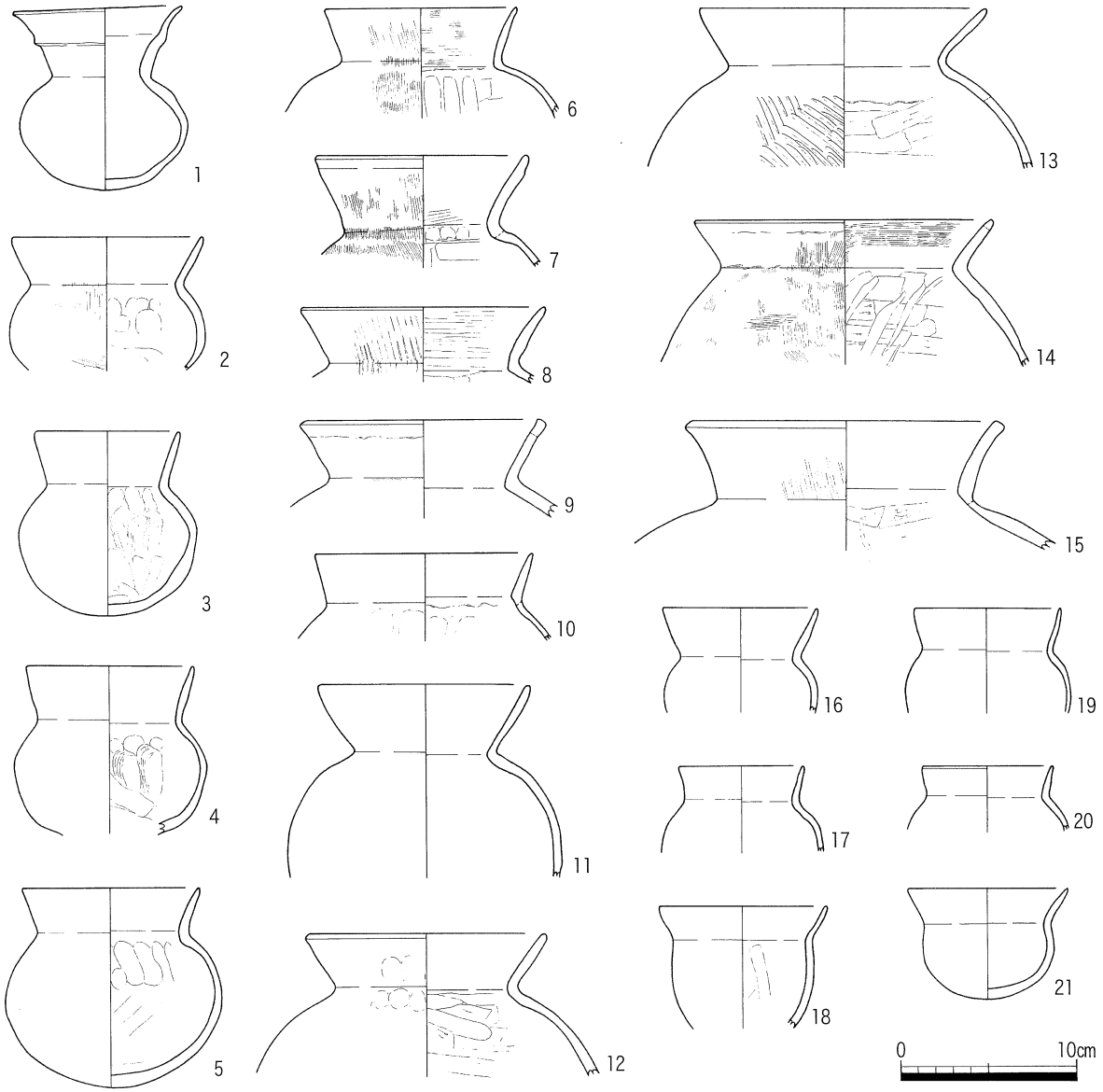
調査区中央において検出された自然旧河道であり，すべての遺構に切られている。

検出面のレベルは北岸で標高2.17m前後，南岸で標高2.00mである。河道は調査区を横断しており，その方向は東西方向を示す。検出することができた範囲内での河道の幅は約18.5mを測り，検出面から河床までの深さは約0.60mを測る。河床の幅は8.10m～10.30mであり，そのレベルは西端から東端に向かって約6㎝の比高差で低くなっている。両岸の掘り込みは非常にゆるやかである。埋土は第150図の第5～9層の5層に分層され，その堆積はレンズ状堆積を呈し，その上層は土壌層と非土壌層が交互に見られる。遺物は第5・6層より出土した。

遺物は，弥生土器壺（2～5・10・14・16～21・43～48・58），同甕（22・24～42・59～61），同鉢（62～71），同甑（72・73），同ミニチュア土器（74～83），同高杯（84～96），同製塩土器（97～110），土師器壺（1・6～9・11～13・15・55～57），同甕（23・54），須恵器杯身（116～120），同杯蓋（121～123），同壺（124），同コップ状土器（125），同甑（126・127），同甕（128），同高杯（129～131），同器台（132），土錘（111），打製石包丁（112・113），磨製石斧（114），打製石鏃（115），その他の弥生土器片，土師器片，須恵器片である。

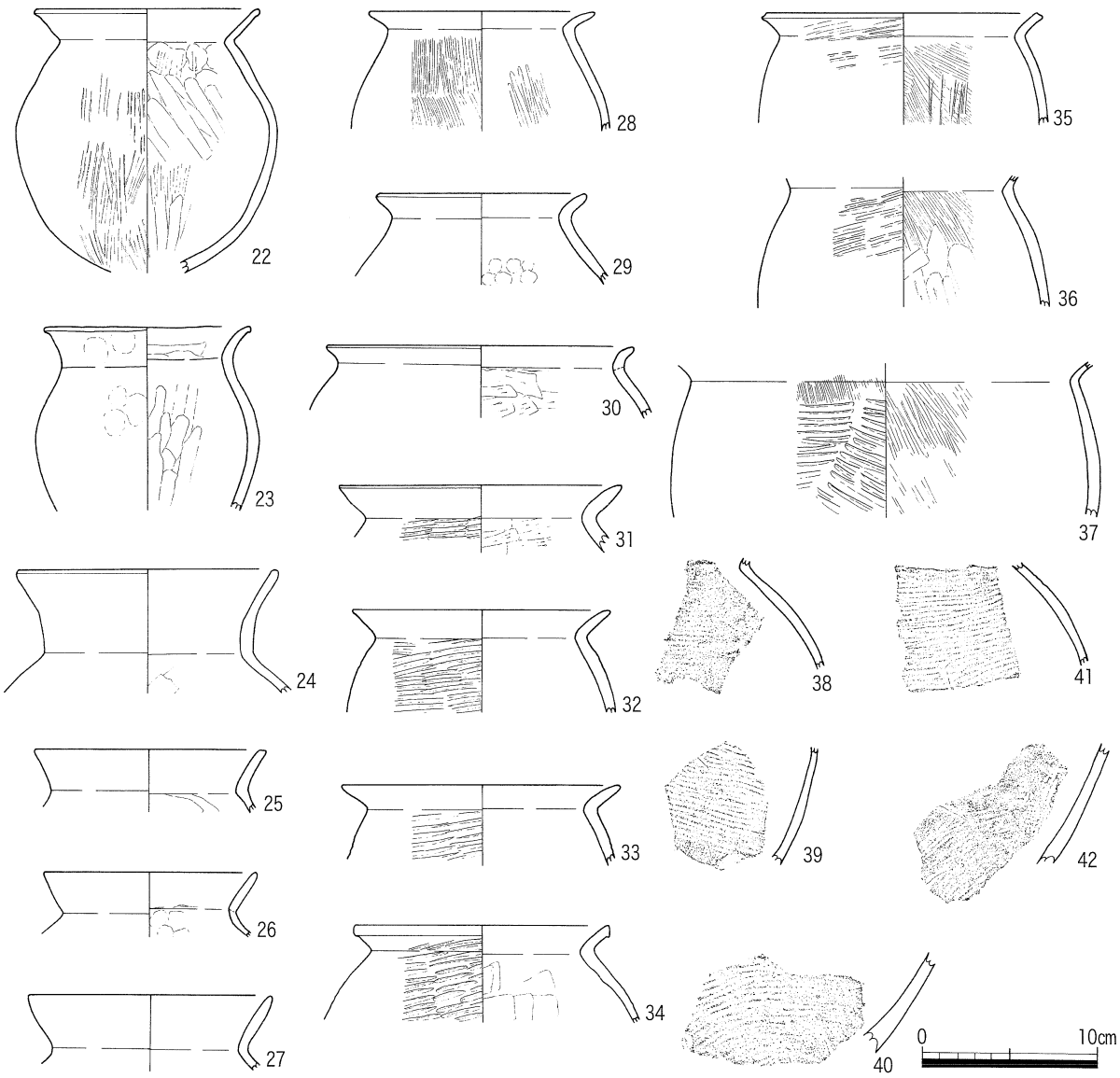



第150図　ＳＲ4001断面図




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　壷 | 9.65 | | 10.4 | 二重口縁　外面摩滅　内面ナデ | 橙2.5YR6/6 | 橙2.5YR6/6 | 石英・長石 |
| 2 | 弥生土器　壷 | 10.8 | | (7.6) | 胴部外面刷毛目　内面指頭圧痕・指ナデ | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 石英・長石 |
| 3 | 弥生土器　壷 | 8.4 | | 10.6 | 外面摩滅　内面指頭圧痕・刷毛目・指ナデ | 淡黄2.5Y8/4 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 4 | 弥生土器　壷 | 9.6 | | (9.7) | 口縁部横ナデ　胴部内面指頭圧痕・刷毛目・指ナデ | 灰白10YR8/2 | | 石英・長石・細砂 |
| 5 | 弥生土器　壷 | 10.1 | | 11.4 | 口縁部横ナデ　胴部内面指頭圧痕・ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英・長石・微砂 |
| 6 | 土師器　壷 | 11.0 | | (6.3) | 外面・口縁部内面刷毛目　胴部内面指ナデ・篦ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英・長石・微砂 |
| 7 | 土師器　壷 | 11.8 | | (6.4) | 外面刷毛目　口縁部内面横ナデ　胴部内面篦削り | 浅黄2.5Y8/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 8 | 土師器　壷 | 14.0 | | (4.3) | 内外面粗い刷毛目　胴部内面篦削り | 灰白2.5Y8/2 | | 石英・長石・角閃石 |
| 9 | 土師器　壷 | 13.0 | | (5.5) | 口縁部横ナデ　胴部ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 10 | 弥生土器　壷 | 12.4 | | (5.0) | 口縁部摩滅　胴部指頭圧痕 | 淡黄2.5Y8/3 | | 石英・微砂～細砂 |
| 11 | 土師器　壷 | 11.8 | | (10.9) | 内外面摩滅 | 淡橙5YR8/4 | 灰白2.5Y7/1 | 石英・長石・角閃石 |
| 12 | 土師器　壷 | 13.6 | | (8.1) | 口縁部ナデ　胴部外面ナデ　内面篦削り・板ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 13 | 土師器　壷 | 14.0 | | (9.1) | 口縁部摩滅　胴部外面叩目　内面篦削り | 鈍い橙7.5YR7/4 | 灰白7.5YR8/2 | 石英・微砂～細砂 |
| 14 | 弥生土器　壷 | 17.0 | | (8.3) | 外面・口縁部内面刷毛目　胴部内面篦削り | 浅黄橙10YR8/4 | 淡黄2.5Y8/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 15 | 土師器　壷 | 17.0 | | (7.3) | 口縁部横ナデ・刷毛目　胴部外面ナデ　内面篦削り | 淡黄2.5Y8/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 16 | 弥生土器　小型壷 | 8.7 | | (6.0) | 内外面摩滅 | 灰白10YR8/1 | | 石英・長石・微砂 |
| 17 | 弥生土器　小型壷 | 7.0 | | (5.0) | 内外面ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | 鈍い黄橙10YR6/3 | 石英・長石・角閃石・細砂 |
| 18 | 弥生土器　小型壷 | 9.4 | | (7.0) | 外面摩滅　内面ナデ | 鈍い黄橙10YR7/2 | 灰白10YR7/1 | 石英・長石・微砂 |
| 19 | 弥生土器　小型壷 | 8.2 | | (6.0) | 内外面ナデ | 浅黄橙10YR8/4 | 灰白10YR8/2 | 微砂 |
| 20 | 弥生土器　小型壷 | 7.4 | | (3.8) | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 石英・微砂 |
| 21 | 弥生土器　小型壷 | 9.0 | | 6.3 | 内外面摩滅 | 橙5YR7/6 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 石英・長石・微砂 |

第151図　ＳＲ4001出土遺物（１）（Ｓ：１／４）



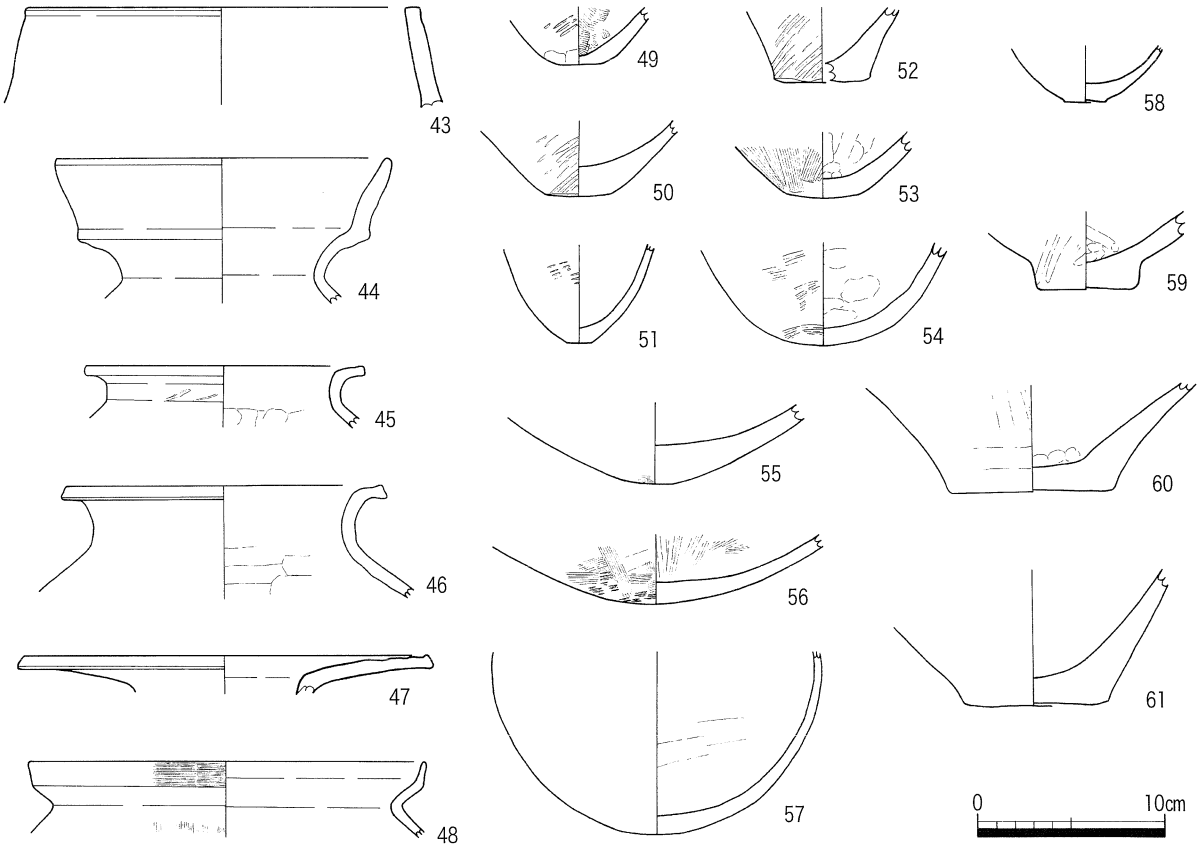

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 22 | 弥生土器　甕 | 12.8 | | (15.0) | 胴部外面刷毛目・ナデ　内面指ナデ・刷毛目・篦ナデ | 鈍い黄橙10YR7/4 | | 石英・長石・細砂 |
| 23 | 土師器　甕 | 11.8 | | (10.5) | 外面摩滅　胴部内面指ナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 24 | 弥生土器　甕 | 15.0 | | (7.0) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ　内面篦削り | 灰白10YR8/2 | | 石英・長石・細～粗砂 |
| 25 | 弥生土器　甕 | 13.2 | | (3.6) | 口縁部横ナデ　胴部内面篦削り | 橙2.5YR6/6 | 灰褐5YR6/2 | 石英・長石・微砂 |
| 26 | 弥生土器　甕 | 12.2 | | (3.7) | 摩滅　胴部内面指頭圧痕 | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英・長石・微砂 |
| 27 | 弥生土器　甕 | 14.0 | | (4.3) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ | 鈍い橙7.5YR7/4 | 浅黄橙10YR8/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 28 | 弥生土器　甕 | 12.8 | | (6.8) | 口縁部横ナデ　胴部外面刷毛目　内面篦磨き・ナデ | 浅黄橙10YR8/4 | 灰白2.5Y8/2 | 石英・長石・細砂 |
| 29 | 弥生土器　甕 | 12.0 | | (5.2) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ　内面指頭圧痕 | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微～細砂 |
| 30 | 弥生土器　甕 | 17.4 | | (4.0) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ　内面篦削り | 鈍い黄橙7.5YR7/4 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 石英・長石・微砂・粗砂 |
| 31 | 弥生土器　甕 | 16.0 | | (3.8) | 口縁部横ナデ　胴部外面叩目　内面篦削り | 鈍い黄橙7.5YR7/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 32 | 弥生土器　甕 | 14.6 | | (5.8) | 口縁部横ナデ　胴部外面叩目　内面ナデ | 橙5YR6/6 | 鈍い黄橙10YR7/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 33 | 弥生土器　甕 | 15.8 | | (4.6) | 口縁部横ナデ　胴部外面叩目　内面ナデ | 橙7.5YR7/6 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 34 | 弥生土器　甕 | 14.4 | | (5.6) | 口縁部横ナデ　胴部外面叩目　内面篦ナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | 浅黄2.5Y7/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 35 | 弥生土器　甕 | 15.2 | | (6.4) | 口縁部横ナデ　胴部外面叩目後にナデ　内面刷毛目 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 36 | 弥生土器　甕 | | | (7.3) | 胴部外面叩目　内面刷毛目・篦削り | 赤橙10R6/6 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 石英・長石・角閃石 |
| 37 | 弥生土器　甕 | | | (8.8) | 胴部外面叩目　内面篦磨き | 赤10R5/8 | | 石英・長石・角閃石 |
| 38 | 弥生土器　甕 | | | (6.4) | 胴部外面叩目　内面指頭圧痕・ナデ | 鈍い黄橙10YR7/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 39 | 弥生土器　甕 | | | (6.8) | 胴部外面叩目　内面ナデ | 橙7.5YR6/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 40 | 弥生土器　甕 | | | (5.9) | 胴部外面叩目　内面摩滅 | 橙5YR6/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 41 | 弥生土器　甕 | | | (5.6) | 胴部外面叩目　内面篦ナデ | 橙7.5YR6/6 | | 石英・長石 |
| 42 | 弥生土器　甕 | | | (6.5) | 外面叩目後にナデ　内面刷毛目・ナデ | 浅黄2.5Y8/3 | | 石英・長石 |

第152図　ＳＲ4001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

2～5は小型丸底壺で，外面は磨滅し，内面は指頭圧痕・指ナデ・刷毛目が施される。14はくの字口縁で，外面・口縁部内面は刷毛目，胴部内面はヘラ削りが施される。16～21は口径・器高とも小さな小型丸底壺で，口縁部が比較的に発達した形態を呈す。43は口縁部が内傾する二重口縁壺である。44は頸部から一旦水平気味に屈曲した後に外反して口縁端部に至る。47は頸部から水平に屈曲する口縁部である。48は受け口状に立ち上がる口縁部を有する。

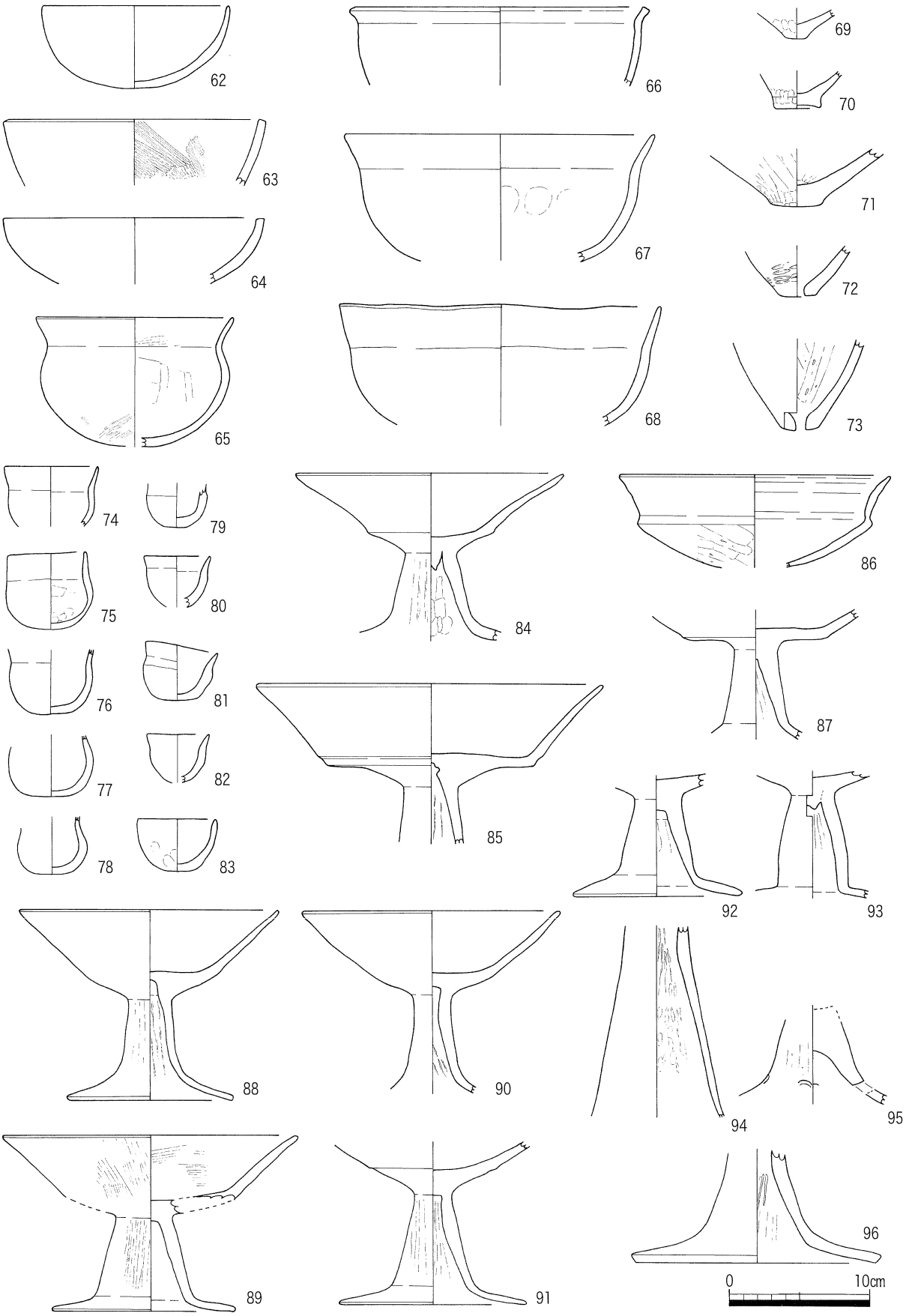
22は球形の胴部から口縁部が「く」字に屈曲する。24～30はゆるやかな「く」字口縁である。31～42は胴部外面にタタキ目が施される。

62～64は半球状の形態をなし，63・64の口縁部は角張る。65～68は体部から外反する口縁部を有する鉢で，65は小型丸底壺と似たプロポーションである。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 43 | 弥生土器　壷 | 21.0 | | (5.4) | 二重口縁　口縁端部横ナデ　接合痕 | 灰黄2.5Y6/2 | 鈍い黄橙10YR7/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 44 | 弥生土器　壷 | 17.6 | | (7.7) | 二重口縁　内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 石英・長石・細～粗砂 |
| 45 | 弥生土器　壷 | 15.0 | | (3.3) | 口縁部横ナデ　頸部外面ナデ　内面ナデ・篦ナデ | 鈍い橙5YR6/4 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 石英・微砂・小石 |
| 46 | 弥生土器　壷 | 16.8 | | (6.0) | 口縁部横ナデ　胴部内面篦削り　外面摩滅 | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 石英・長石・細砂 |
| 47 | 弥生土器　壷 | 21.4 | | (2.1) | 広口壷　外面横ナデ　内面摩滅 | 鈍い橙7.5YR6/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 48 | 弥生土器　壷 | 21.2 | | (4.0) | 口縁部外面刷毛目・横ナデ　胴部外面刷毛目　内面篦ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 49 | 弥生土器　甕 | | 2.2 | (3.0) | 外面叩目　内面刷毛目 | 鈍い橙5YR7/4 | 橙2.5YR6/6 | 石英・長石・微砂・粗砂 |
| 50 | 弥生土器　甕 | | 3.6 | (4.0) | 外面叩目　内面摩滅　底面ナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | 明黄褐10YR6/6 | 石英・長石・細砂多量 |
| 51 | 弥生土器　甕 | | 1.1 | (5.3) | 外面叩目　内面摩滅　底面ナデ | 橙5YR6/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 52 | 弥生土器　甕 | | 5.0 | (3.9) | 外面叩目　内面ナデ　底面ナデ | 鈍い橙7.5YR7/4 | 褐灰10YR6/1 | 石英・長石・細～粗砂 |
| 53 | 弥生土器　甕 | | 4.0 | (3.5) | 外面刷毛目　内面指頭圧痕・指ナデ　底面ナデ | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 石英・長石・細砂 |
| 54 | 土師器　甕 | | | (5.4) | 外面叩目後にナデ　内面指頭圧痕・ナデ | 淡黄2.5Y8/4 | | 石英・微～粗砂多量 |
| 55 | 土師器　壷 | | 2.0 | (4.2) | 底面1方向の刷毛目 | 灰白7.5Y8/1 | | 石英・長石・粗砂 |
| 56 | 土師器　壷 | | | (3.6) | 外面叩目後に刷毛目　内面篦磨き | 橙5YR6/6 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 石英・長石・細～粗砂 |
| 57 | 土師器　壷 | | | (9.4) | 内外面ナデ | 鈍い黄橙10YR7/4 | 浅黄2.5Y7/3 | 石英・長石・角閃石細砂多量 |
| 58 | 弥生土器　壷 | | 2.8 | (3.0) | 内外面摩滅 | 灰白2.5Y8/1 | | 微～細砂多量 |
| 59 | 弥生土器　甕 | | 5.0 | (4.1) | 外面篦削り　内面指頭圧痕・篦ナデ　底面ナデ | 褐灰7.5YR5/1 | 橙7.5YR7/6 | 石英・微砂 |
| 60 | 弥生土器　甕 | | 8.6 | (5.7) | 外面篦ナデ　内面指頭圧痕　底面ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | 淡黄2.5Y8/4 | 石英・細～粗砂 |
| 61 | 弥生土器　甕 | | 7.7 | (7.2) | 内外面摩滅 | 淡黄2.5Y8/3 | 浅黄2.5Y7/3 | 粗砂・小石を多量に含む |

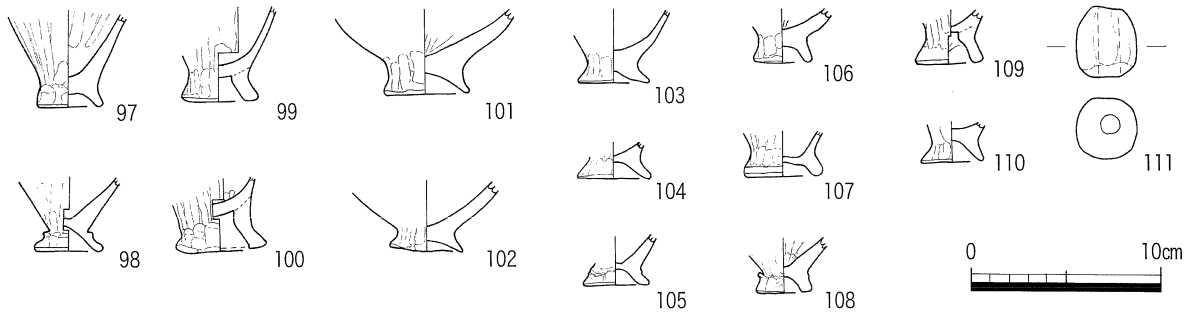
第153図　ＳＲ4001出土遺物（３）（Ｓ：１／４）




第154図　ＳＲ4001出土遺物（４）（Ｓ：１／４）

（第154図）

| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 62 | 弥生土器　鉢 | 13.2 | | 5.9 | 指頭圧痕　ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 石英・長石・角閃石・金雲母 |
| 63 | 弥生土器　鉢 | 18.6 | | (4.7) | 外面ナデ　内面刷毛目後にナデ | 橙2.5YR6/6 | 鈍い褐7.5YR6/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 64 | 弥生土器　鉢 | 18.6 | | (4.6) | 内外面ナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | | 石英・細～粗砂 |
| 65 | 弥生土器　鉢 | 14.0 | | 9.2 | 外面摩滅　胴部外面下半刷毛目　内面板ナデ | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 石英・長石・細～粗砂 |
| 66 | 弥生土器　鉢 | 20.6 | | (5.6) | 口縁部横ナデ　胴部摩滅（ナデ） | 鈍い黄橙10YR7/3 | 橙7.5YR6/6 | 石英・微～細砂 |
| 67 | 弥生土器　鉢 | 22.0 | | (8.9) | 内外面摩滅　内面指頭圧痕 | 橙2.5YR6/6 | 鈍い赤褐5YR5/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 68 | 弥生土器　鉢 | 22.6 | | (8.6) | 内外面摩滅 | 明赤褐2.5YR5/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 69 | 弥生土器　鉢 | | 1.5 | (2.1) | 外面指頭圧痕 | 鈍い橙5YR7/4 | 褐灰7.5YR4/1 | 細砂 |
| 70 | 弥生土器　鉢 | | 3.2 | (2.6) | 外面篦削り・ナデ　底面指頭圧痕 | 浅黄2.5Y7/3 | 黄灰2.5Y6/1 | 石英・長石・細砂 |
| 71 | 弥生土器　鉢 | | 3.6 | (3.9) | 外面篦削り後にナデ　内面ナデ・篦 | 鈍い黄橙10YR7/4 | | 石英・微～細砂 |
| 72 | 弥生土器　甑 | | 2.5 | (3.6) | 外面叩目・ナデ　内面摩滅 | 灰白10YR8/2 | | 微砂若干 |
| 73 | 弥生土器　甑 | | 2.6 | (6.4) | 外面摩滅　内面篦削り | 淡黄2.5Y8/3 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 石英・細～粗砂 |
| 74 | 弥生土器ミニチュア | 6.6 | | (4.3) | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微砂 |
| 75 | 弥生土器ミニチュア | 5.5 | 1.8 | 5.5 | 口縁部内面ナデ　胴部内面篦削り・指頭圧痕 | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 石英・長石・細砂 |
| 76 | 弥生土器ミニチュア | | 2.6 | (4.6) | 外面摩滅　内面ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 橙5YR7/6 | 石英・長石・微砂 |
| 77 | 弥生土器ミニチュア | | 3.1 | (4.4) | 内外面ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英・長石・細砂 |
| 78 | 弥生土器ミニチュア | | 2.0 | (4.1) | 内外面ナデ | 灰白10Y8/1 | | 石英・長石・微砂 |
| 79 | 弥生土器ミニチュア | | 16.0 | (3.1) | 内外面ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | 灰白2.5Y8/2 | 微砂 |
| 80 | 弥生土器ミニチュア | 4.7 | | (3.7) | 外面摩滅　内面ナデ | 橙5YR7/6 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 微砂 |
| 81 | 弥生土器ミニチュア | 5.2 | 2.2 | 4.3 | 外面摩滅　内面ナデ | 褐灰10YR4/1 | | 石英・長石・微砂 |
| 82 | 弥生土器ミニチュア | 4.4 | | 3.5 | 摩滅 | 淡黄5Y8/3 | | 石英・細砂 |
| 83 | 弥生土器ミニチュア | 5.6 | 2.0 | 3.7 | 摩滅（ナデ） | 灰白7.5Y8/1 | 灰白7.5YR8/2 | 石英・長石・微砂 |
| 84 | 弥生土器　高杯 | 11.0 | | (11.7) | 杯部摩滅　脚部篦削り | 橙5YR6/6 | 橙5YR7/6 | 石英・長石・角閃石 |
| 85 | 弥生土器　高杯 | 24.4 | | (11.3) | 内外面摩滅　脚部内面しぼり目 | 橙5YR6/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 86 | 弥生土器　高杯 | 19.0 | | (6.5) | 口縁部横ナデ　体部外面篦削り　内面摩滅 | 明赤褐5YR5/8 | | 石英・長石・角閃石 |
| 87 | 弥生土器　高杯 | | | (9.0) | 内外面摩滅　脚部内面篦削り | 淡橙5YR8/4 | | 石英・長石・細砂 |
| 88 | 弥生土器　高杯 | 18.4 | 11.6 | 13.3 | 内外面摩滅　脚部内面しぼり目 | 鈍い橙5YR7/4 | 鈍い橙5YR7/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 89 | 弥生土器　高杯 | 21.0 | 12.2 | 12.4 | 杯部内外面刷毛目　脚部外面篦磨き　内面篦ナデ | 橙2.5YR7/6 | | 石英・角閃石 |
| 90 | 弥生土器　高杯 | 18.2 | | (12.8) | 内外面摩滅　脚部内面しぼり目 | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 91 | 弥生土器　高杯 | | 13.2 | (11.4) | 杯部摩滅　脚部外面篦削り　内面しぼり目・篦ナデ | 灰白7.5YR8/2 | | 石英・長石・角閃石 |
| 92 | 弥生土器　高杯 | | 12.0 | (8.6) | 内外面摩滅　脚部内面篦削り | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微～細砂 |
| 93 | 弥生土器　高杯 | | | (9.0) | 内外面摩滅　脚部内面篦削り | 淡橙5YR8/4 | | 石英・微～細砂 |
| 94 | 弥生土器　高杯 | | | (13.5) | 外面摩滅　内面しぼり目・指頭圧痕 | 鈍い橙7.5YR6/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 95 | 弥生土器　高杯 | | | (6.9) | 外面篦削り　内面摩滅 | 橙5YR7/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 96 | 弥生土器　高杯 | | 17.4 | (7.9) | 外面摩滅　内面しぼり目・篦ナデ | 赤褐10R6/8 | | 石英・細砂 |




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 97 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.4×3.7 | (5.0) | 外面篦削り・篦ナデ　内面篦ナデ | 鈍い黄橙10YR6/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 98 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.6 | (3.9) | 外面篦削り・ナデ　内面摩滅 | 明赤褐2.5YR5/6 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 99 | 弥生土器　製塩土器 | | 4.1 | (4.9) | 外面篦削り・ナデ　内面摩滅 | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 100 | 弥生土器　製塩土器 | | 4.9 | (3.8) | 外面篦削り・ナデ　内面ナデ・指頭圧痕 | 赤褐2.5YR4/6 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 101 | 弥生土器　製塩土器 | | 4.6 | (4.4) | 外面篦削り・ナデ　内面ナデ・篦押圧 | 橙5YR6/6 | 灰白7.5YR8/2 | 微砂若干 |
| 102 | 弥生土器　製塩土器 | | 4.0 | (3.7) | 外面篦削り　内面摩滅 | 橙7.5YR6/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 103 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.8 | (3.9) | 外面篦削り・ナデ　内面ナデ | 灰黄2.5Y6/2 | 灰黄2.5Y7/2 | 石英・長石・角閃石 |
| 104 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.9 | (2.0) | 外面篦削り・ナデ　内面摩滅 | 明赤褐2.5YR5/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 105 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.5 | (2.6) | 外面篦削り・ナデ　内面ナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 石英・長石・角閃石 |
| 106 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.1 | (2.8) | 外面篦削り・ナデ　内面篦押圧 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 鈍い黄橙10YR7/4 | 細砂 |
| 107 | 弥生土器　製塩土器 | | 4.2 | (2.4) | 外面篦削り・ナデ　内面ナデ | 鈍い橙2.5YR6/4 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 石英・長石・微砂 |
| 108 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.0 | (2.9) | 外面篦削り・ナデ　内面篦押圧 | 鈍い橙5YR6/4 | 灰黄褐10YR6/2 | 石英・長石・角閃石 |
| 109 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.6 | (2.8) | 外面篦削り・ナデ　内面摩滅 | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 石英・長石・微砂若干 |
| 110 | 弥生土器　製塩土器 | | 3.4 | (2.1) | 外面篦削り・ナデ　内面摩滅 | 鈍い橙2.5YR6/4 | | 石英・長石・微～粗砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 111 | 土錘 | 3.8 | (径) 3.2 | | 39.7 | 土 | 摩滅　鈍い黄橙10YR7/4　石英・小石・粗砂 |

第155図　ＳＲ4001出土遺物（５）（Ｓ：１／４）

74～83は左右非対称な形態のものが多い。74～82は口縁部がわずかに外反する形態であるが，83は半球形の体部からそのまま口縁部に至る。

84・85・87～93・96は同一形態の高杯である。杯部は脚部との接合痕から短く外上方に直線的に伸び，綾を持ってやや上方に屈曲して直線的に伸び口縁部に至る。脚部は直線的ないし少し膨らんで下方に伸び，「ハ」字形に低く広がり裾部に至る。内外面とも磨滅が著しい。86は，体部と口縁部の境に稜を持って口縁部が立ち上がる。口縁部は内外面にわずかな凹線が巡る。94は長い脚部の高杯である。95は円孔を有する。

97～108は製塩土器の底部であり，左右非対称の形態を呈す。外面はヘラ削り・ナデである。

以上の弥生土器は弥生時代後期末のものである。

1は完形の壺であり，二重口縁である。内外面とも磨滅しており，胴部内面はナデである。

6～9・11～13・15は球形の胴部と大きく発達した口縁部を持つ。6～8・15は刷毛目，13はタタキ目が施される。55～57は丸底である。

23はゆるやかに外反する口縁部の甕であり，内面は指ナデが施される。

これらの土器は古墳時代初頭のものである。

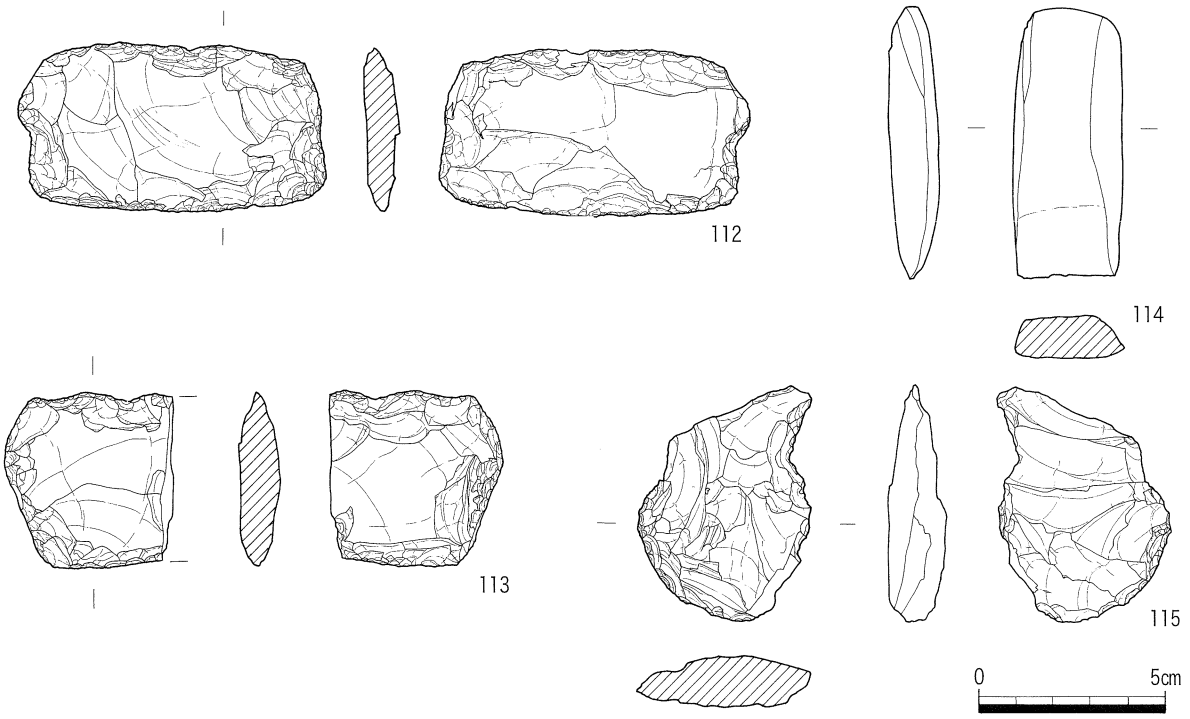
116～120は，口径0.10mと0.13m前後に分けられ，水平の受け部から内傾する口縁部が付く。体部外面下半は回転ヘラ削りが施される。121～123は天井部と口縁部の境にほとんど稜を持たない。天井部外面は回転ヘラ削りが施される。

125は口縁部を欠損し，外面はヘラ削り，底面の中央は静止ヘラ削り，周縁はヘラナデ。

129～131は杯部・裾部を欠損する。129・130は沈線を巡らし，130は方形の透しを有す。

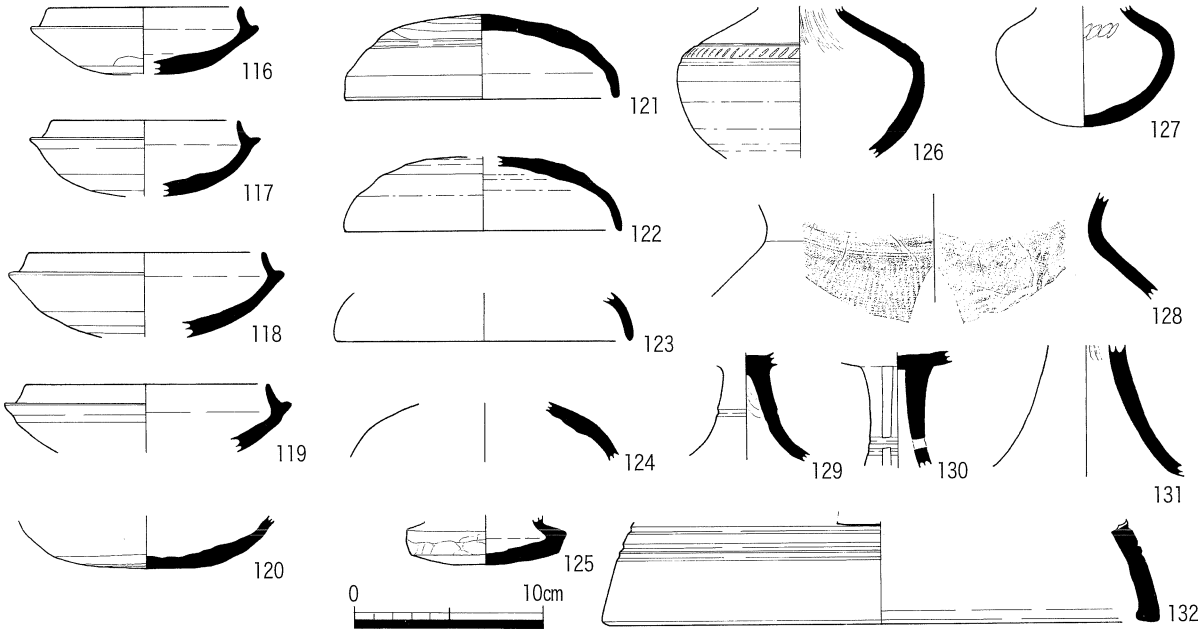
132は器台の脚部であり，透しを持つ。

これらの須恵器は6世紀後半のものである。




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 112 | 打製石包丁 | 4.5 | 8.3 | 0.9 | 39.9 | サヌカイト | 完形　左側縁部に抉り　両縁部は両面から調整 |
| 113 | 打製石包丁 | 4.7 | 4.7 | 1.2 | 34.8 | サヌカイト | 右側部を欠損　両縁部は両面から調整 |
| 114 | 磨製石斧 | 7.2 | 2.9 | 1.1 | 46.3 | 蛇紋岩 | |
| 115 | 打製石鏃 | 6.3 | 4.6 | 1.6 | 39.2 | サヌカイト | 上半部を欠損　縁部は両面から調整 |

第156図　ＳＲ4001出土遺物（６）（Ｓ：１/20）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 116 | 須恵器　杯身 | 10.4 | | (3.6) | 回転ナデ　体部外面下半回転篦削り | 灰白N7/ | | 微・細砂 |
| 117 | 須恵器　杯身 | 10.0 | | (4.0) | 回転ナデ　体部外面下半回転篦削り | 青灰5PB6/2 | | 微砂 |
| 118 | 須恵器　杯身 | 12.6 | | (4.5) | 回転ナデ　体部外面下半回転篦削り後にナデ | 灰白N8/ | | 微砂 |
| 119 | 須恵器　杯身 | 13.0 | | (3.6) | 回転ナデ　体部外面下半回転篦削り | 灰10Y6/1 | | 微砂 |
| 120 | 須恵器　杯身 | | | (2.9) | 体部外面下半回転篦削り　内面1方向からのナデ | 灰白N7/ | | 微砂 |
| 121 | 須恵器　杯蓋 | 14.6 | | 4.5 | 回転ナデ　天井部外面上半回転篦削り | 灰10Y6/1 | | 微砂 |
| 122 | 須恵器　杯蓋 | 14.8 | | (3.9) | 回転ナデ　天井部外面上半回転篦削り | 青黒5PB2/1 | 青灰5PB6/2 | 微～細砂 |
| 123 | 須恵器　杯蓋 | 15.8 | | (2.6) | 回転ナデ | 灰白N7/ | | 微砂 |
| 124 | 須恵器　壷 | | | (3.2) | 回転ナデ　外面　緑釉 | 灰白N7/ | 灰白N8/ | 細砂 |
| 125 | 須恵器 コップ状土器 | | 7.8 | (2.6) | 外面　篦削り　底面中央静止篦削り　周縁篦ナデ | 灰5Y6/1 | | 微砂若干 |
| 126 | 須恵器　甕 | | | (8.0) | 押圧文　胴部外面下半篦削り　内面上半しぼり目 | 灰白N7/ | | 微砂 |
| 127 | 須恵器　甕 | | | (6.5) | 回転ナデ　胴部下半ナデ | 灰N6/ | 灰白N7/ | 微砂若干 |
| 128 | 須恵器　甕 | | | (5.7) | 胴部外面格子目状叩き　内面青海波状叩き | 灰N6/ | | 微砂密 |
| 129 | 須恵器　高杯 | | | (5.8) | 回転ナデ　脚部内面しぼり目 | 灰白N7/ | | 微砂密 |
| 130 | 須恵器　高杯 | | | (6.1) | 回転ナデ　2段の透かし | 青灰5PB6/1 | | 微砂 |
| 131 | 須恵器　高杯 | | | (7.0) | 回転ナデ　脚部内面しぼり目 | 灰7.5Y6/1 | 紫灰5P6/1 | 微砂若干 |
| 132 | 須恵器　器台 | | 29.6 | (5.4) | 3条の沈線　透かし | 灰白7.5Y7/1 | | 微砂・細砂 |

第157図　ＳＲ4001出土遺物（７）（Ｓ：１／４）

２）近世

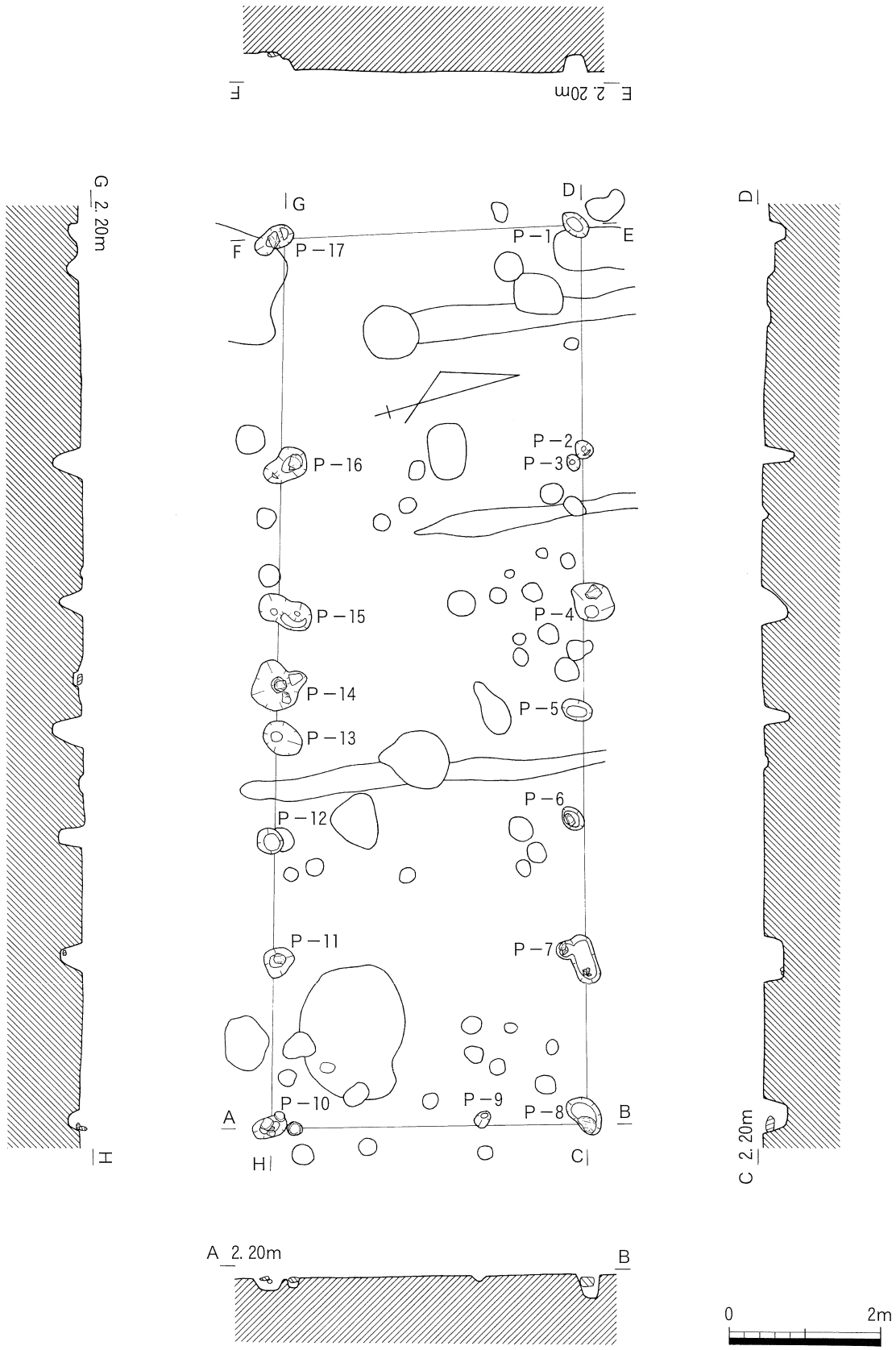
１　掘立柱建物跡

ＳＢ4001　（第158図）

調査区中央において検出された掘立柱建物跡であり，ＳＫ4005に切られる。柱穴群の中で詰石・根石を残存する柱穴を抽出した結果で確認された。

検出面のレベルは標高2.05～2.18mである。桁行は６間で12.0mを測り，梁間は東側で２間，西側は１間で4.60mを測る。隅柱と側柱の総数は17本を数える。建物の主軸方向はＥ－15°－Ｓである。桁行の柱穴間の距離は芯芯で1.40～3.00mを測り，東側の梁行の柱穴間の距離は芯芯で1.35mと2.80m，西側は4.00mを測る。柱穴の平面形は不整な円形・楕円形を呈する。円形の柱穴の直径は0.24～0.65mを測り，楕円形の長軸は0.40～0.70m，短軸は0.28～0.40mを測る。柱穴の深さは最も浅いＰ－14で0.12m，最も深いＰ－13で0.40mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂が主体を占め，他の柱穴と同じである。Ｐ－４・６～11・14・16・17には根石・詰石が残存している。

遺物は，若干の土師質土器小皿・陶器片であり，図化できるものはなかった。



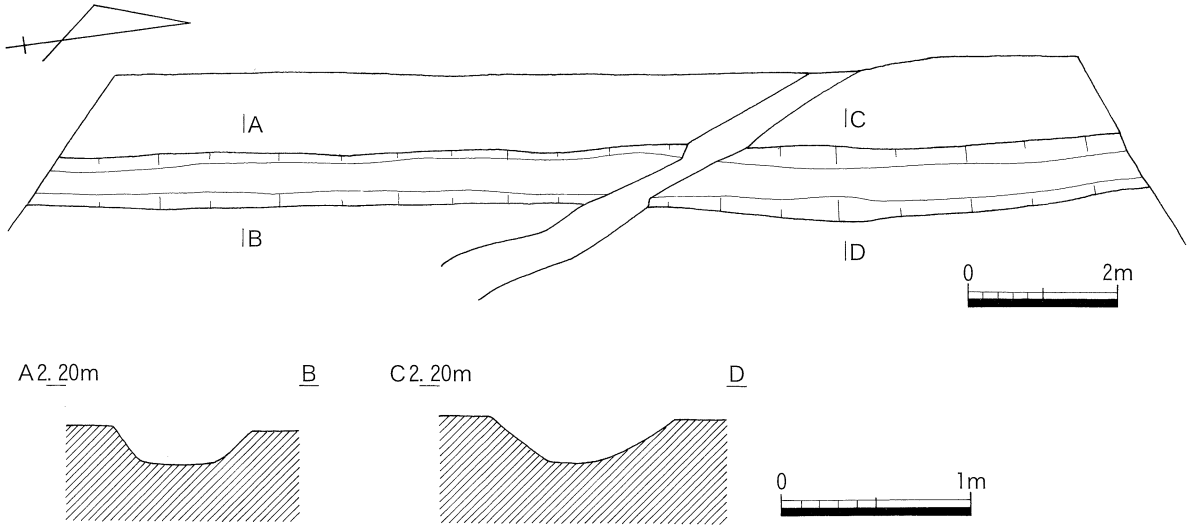

第158図　ＳＢ4001平・断面図（Ｓ：１/80）

2　溝

ＳＤ4001　（第159図・第161図－５）

調査区西端において検出された南北方向の溝であり，3工区ＳＤ3001と同一遺構である。

検出面のレベルは標高1.93～2.07mである。溝の方位はＮ－７°－Ｅである。検出できた溝の全長は15.0m，幅は0.60～1.00mを測る。深さは0.13～0.35mを測り，底面のレベルは約0.10mの比高差で南から北に下がっている。断面はＵ字形である。埋土は灰白色シルト質極細砂である。遺物は土師質土器・陶磁器であり，須恵器杯身（５）は混入。



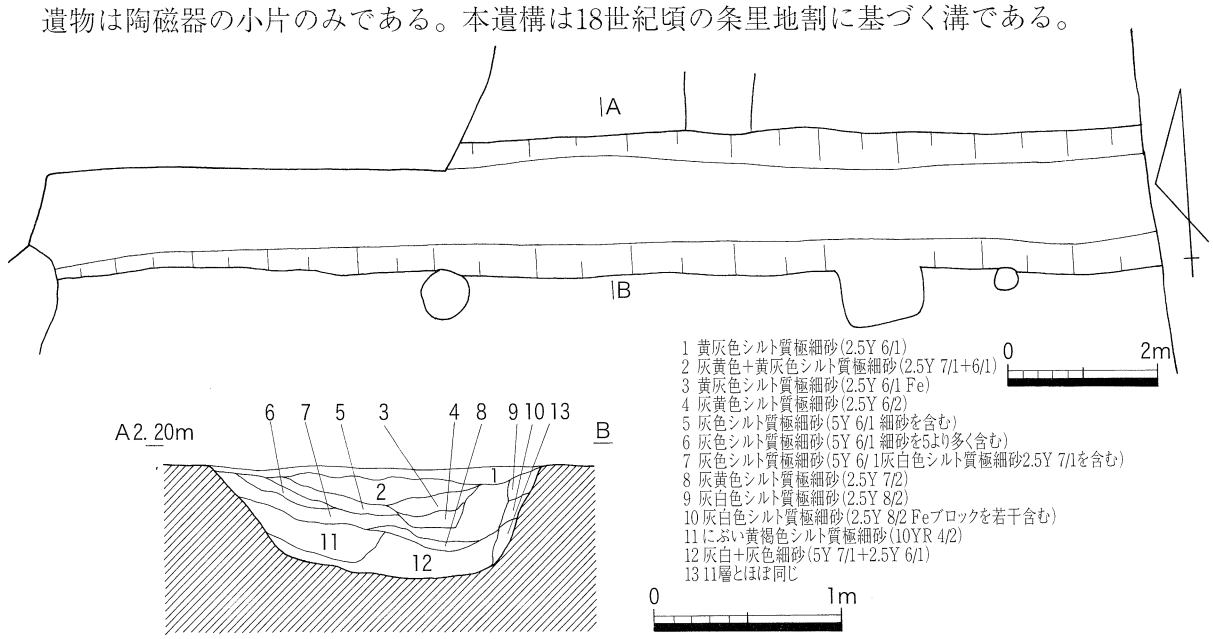

第159図　ＳＤ4001平・断面図（Ｓ：１/40，1/100）

ＳＤ4002　（第160図）

調査区北側に検出された東西方向の溝であり，ＳＫ4002・Ｐ－13に切られる。

検出面のレベルは標高2.14～2.19mである。溝の方向はＥ－11°－Ｓである。検出できた溝の全長は15.64m，幅は1.70～2.00mを測る。深さは0.26～0.60mを測り，底面のレベルは0.32mの比高差で西から東に下がっている。断面は逆台形を呈す。埋土は13層に分層される。

遺物は陶磁器の小片のみである。本遺構は18世紀頃の条里地割に基づく溝である。




第160図　ＳＤ4002平・断面図（Ｓ：１/40，1/100）

ＳＤ4003

調査区中央において検出された溝であり，ＳＤ4002・柱穴群に切られる。

検出面のレベルは標高2.12～2.20mである。溝の方位はＮ－６°－Ｅである。検出できた溝の全長は8.60m，幅は0.12～0.30mを測る。深さは６～８㎝を測り，底面のレベルは４㎝の比高差を持って北から南へ低くなっている。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

ＳＤ4004

調査区中央やや北西寄りにおいて検出された溝であり，柱穴群に切られる。

検出面のレベルは標高2.15mである。溝の方位はＮ－６°－Ｅである。検出できた溝の全長は4.80m，幅は0.20～0.30mを測る。深さは２㎝であり，埋土は灰白色シルト質極細砂である。

ＳＤ4005

調査区北西側において検出された溝であり，ＳＤ4002・土坑に切られ，ＳＤ4007を切る。

検出面のレベルは標高2.10m前後である。溝の方位はＮ－６°－Ｅである。検出できた溝の全長は6.00m，幅は0.40m，深さは４㎝を測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

ＳＤ4006　（第161図－２）

調査区北西側において検出された溝であり，ＳＤ4001・土坑に切られる。

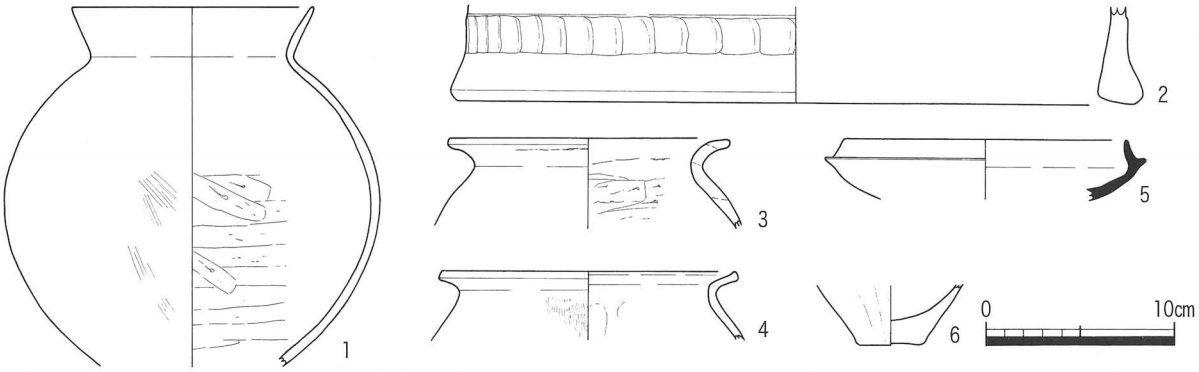
検出面のレベルは標高2.05mである。溝の方位はＮ－０°－Ｅである。検出全長は5.90m，幅0.76m，深さは２㎝を測る。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。遺物は土師質土器釜（２）である。

ＳＤ4007　（第161図－１・３・４・６）

調査区北西側において検出された溝であり，ＳＤ4005に切られる。

検出面のレベルは標高2.12mである。検出できた溝の全長は1.10m，幅は0.60m，深さは３㎝を測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

遺物は，弥生土器壺（１・３），同甕（４・６）であるが，ＳＲ4001の土器の混入である。



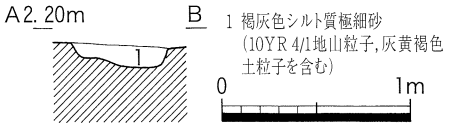

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 弥生土器　壺 | 12.8 | | (19.0) | 外面ナデ　内面ナデ・篦削り | 鈍い黄橙10YR7/2 | 灰白2.5Y8/2 | 微砂・粗砂・石英 |
| 2 | 土師質土器　釜 | 36.6 | | (5.2) | 外面横ナデ　内面指押え・横ナデ | 灰白10YR7/1 | 灰黄褐10YR6/2 | 粗砂 |
| 3 | 弥生土器　壺 | 14.8 | | (4.8) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ　内面篦削り | 浅黄橙10YR8/3 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 4 | 弥生土器　甕 | 15.6 | | (3.7) | 口縁部横ナデ　胴部外面刷毛目　内面指頭圧痕 | 明黄褐10YR7/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 5 | 須恵器　杯身 | 15.0 | | (3.2) | 回転ナデ　体部外面ナデ | 明オリーブ灰N7/ | | 密 |
| 6 | 弥生土器　甕 | | 3.2 | (3.15) | 外面篦ナデ　内面ナデ | 灰褐7.5YR6/2 | 褐灰7.5YR6/1 | 石英・長石・角閃石多量 |

第161図　４工区ＳＤ出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＤ4008　（第162・163図）

調査区中央やや北寄りにおいて検出された溝であり，ＳＫ4002・ＳＤ4001に切られている。

検出面のレベルは標高2.16mである。溝の方位はＥ－11°－Ｓであり，西端は若干南方に曲がる。検出できた溝の全長は8.40m，幅は0.40～0.56mを測る。深さは0.10mであり，底面のレベルは約６㎝の比高差で西から東に低くなっている。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

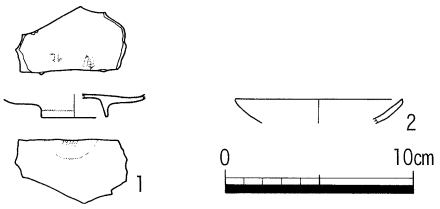


第162図　ＳＤ4008断面図（Ｓ：1／4）

遺物は，磁器皿（１），陶器灯明皿（２）である。

１は見込みに「□化□製」の銘，高台に渦福があり，外面に暗青灰色の染付がある。

２は内面・口縁部外面に赤彩する。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　皿 | | 3.6 | (1.2) | 内外面施釉　見込み「口化口製」　高台内渦福 | 透明 | 明緑灰7.5GY8/1 | 密 |
| 2 | 陶器　灯明皿 | 9.0 | | (1.3) | 回転ナデ　赤彩 | 赤10YR5/6 | 赤10YR5/8 | 密 |

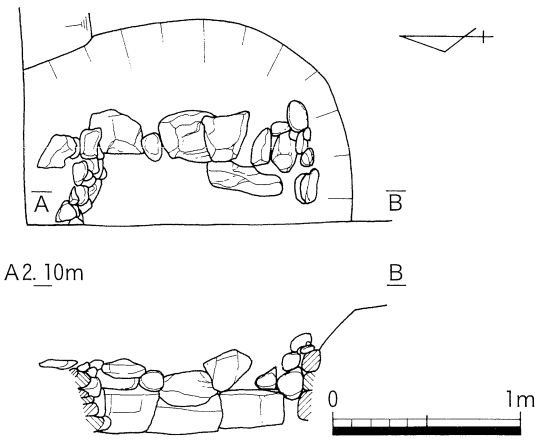
第163図　ＳＤ4008出土遺物（Ｓ：１／４）

３　井戸

ＳＥ4001　（第164・165図）

調査区北端の中央において検出された井戸であり，北側と西側は調査区外に広がっている。

検出面のレベルは標高2.21mである。検出できた井戸の掘り方は1.75mを測り，平面形は円形を呈すると考えられる。検出面から底面までの深さは0.70mを測る。河原石を２段ないし３段に積み上げた側壁が残存する。側壁の高さは底面から約0.50mである。側壁はコ字状になっており，側壁内面の長さは1.04mを測る。東側の側壁は大きな石を最下位に３個並べているが，北側と南側には小さな石を使用している。側壁内の底面は平坦であり，砂層となっている。調査時には湧水は見られなかった。



第164図　ＳＥ4001平・断面図（Ｓ：１/40）

遺物は，磁器碗（１），軒平瓦（２）である。

１は瀬戸系の碗であり，内外面に施釉し，外面に雲文の染付がある。

２は内区に唐草文があり，凹凸面はヘラナデ。

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 11.0 | | (4.4) | 内外面施釉　瀬戸系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白N/8 | 密 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 軒平瓦 | | | | | | 唐草文 |

第165図　ＳＥ4001出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＥ4002　（第166～168図）

調査区北東隅で検出された井戸である。

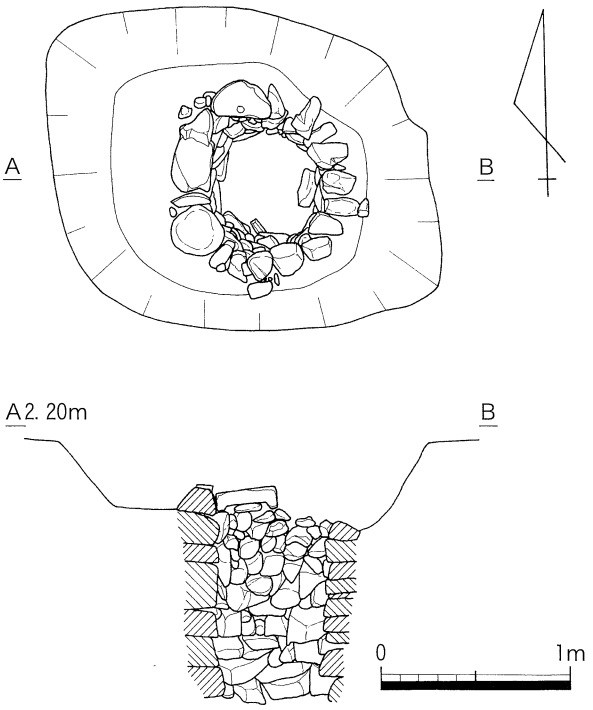
検出面のレベルは標高2.15mである。井戸の掘り方は不整な隅丸長方形を呈し，東西の長軸は2.00m，短軸は1.74mを測る。検出面から約0.25m下には河原石を円形に積み上げた側壁が検出された。側壁内の底面までの深さは検出面から1.40mを測る。側壁の内径は約0.60mを測る。

側壁はほぼ垂直に立ち上がり，下方になるにしたがい大きな石を使用している。側壁の最上には半分に割れた石臼が側壁として再利用されている。底面は砂礫層を切り込んでおり，調査時に湧水が見られた。

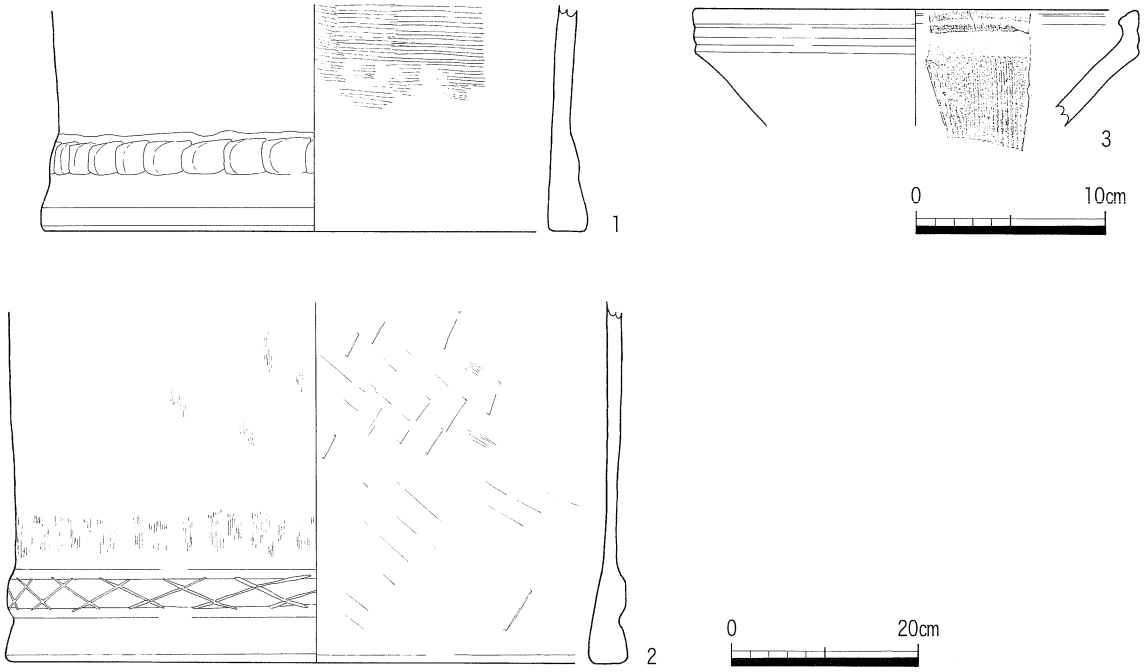
遺物は，土師質土器釜（1），同井戸枠（2），陶器擂鉢（3），石臼（4・5）である。

1は幅の広い押圧突帯を巡らし，内面と裾部外面に煤が付着する。2は斜格子状の沈線を有する幅広い突帯が巡る。

3は2本の沈線を巡らし，18世紀のもの。

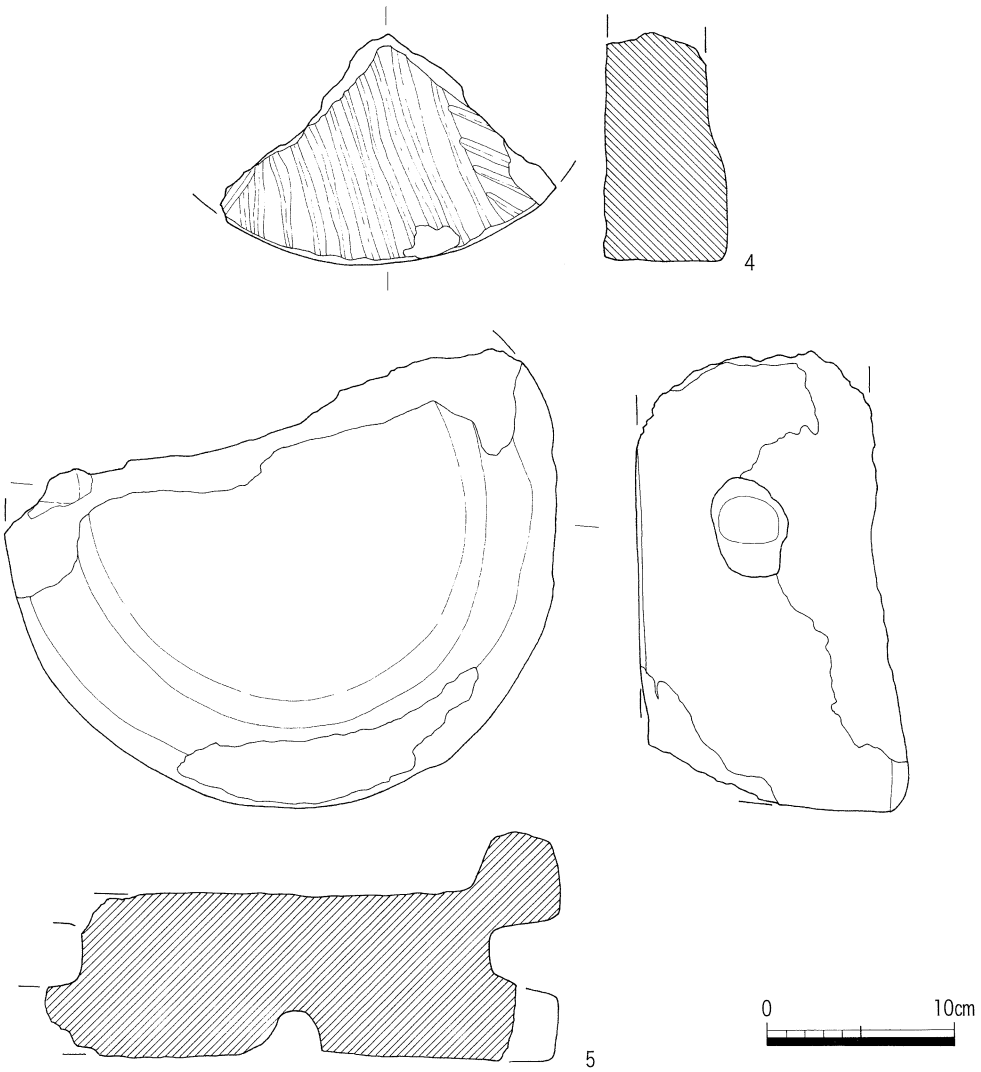



第166図　ＳＥ4002平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　釜 | | 28.6 | (12.1) | 外面ナデ・回転ナデ　内面回転ナデ・粗い刷毛目 | 鈍い橙5YR6/4 | 暗赤褐5YR3/4 | 微～細砂 |
| 2 | 土師質土器　井戸枠 | | 66.0 | (38.4) | 外面ナデ・刷毛目　内面刷毛目・篦削り・板ナデ | 鈍い黄橙10YR7/2 | | 細～粗砂多量 |
| 3 | 陶器　摺鉢 | 23.0 | | (6.2) | 口縁部回転ナデ　外面篦ナデ・卸目 | 鈍い赤褐2.5YR4/4 | | 細砂若干 |

第167図　ＳＥ4002出土遺物（１）（Ｓ：1/4，1/8）




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 石臼 | (12.0) | | (6.5) | | 砂岩 | 下臼　溝 |
| 5 | 石臼 | | (径) 30 | 13.9 | | 凝灰角礫岩 | 上臼　横打穴を一対有する |

第168図　ＳＥ4002出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

4　土坑

ＳＫ4002　（第169図）

調査区北東側において検出された土坑であり，ＳＫ4003と接し，ＳＤ4002を切っている。

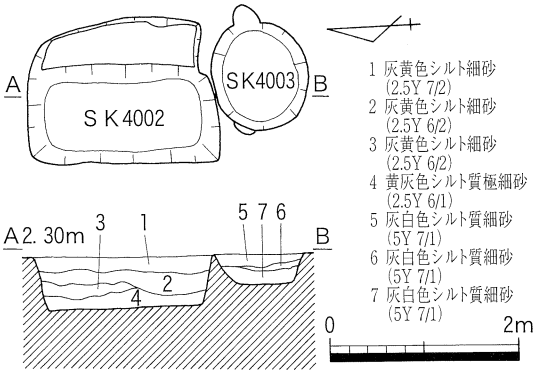
検出面のレベルは標高2.15m前後である。土坑の平面形は長方形を呈し，長辺は2.04m，短辺は1.50mを測る。深さは0.52mを測り，東側に0.41m高い所がある。埋土は４層に分層できる。

ＳＫ4003　（第169図）

ＳＫ4002の南側に検出された土坑である。

検出面のレベルは標高2.15mである。平面形は円形を呈し，直径1.12m，深さ0.32mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は３層に分層される。

東側と西側に柱穴が重複する。




第169図　ＳＫ4002・4003平・断面図（Ｓ：１/80）

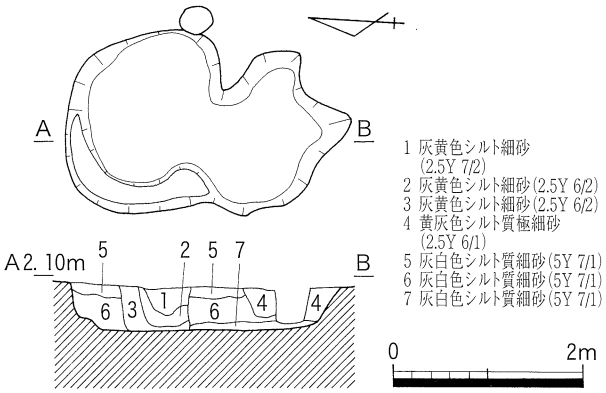
ＳＫ4004　（第170・171図）

調査区中央で検出された土坑である。

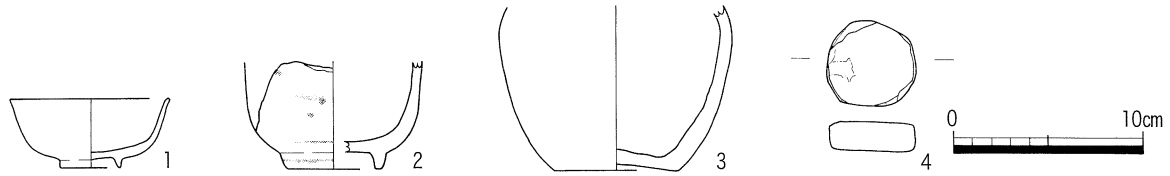
検出面のレベルは標高2.00m前後である。

平面形はくびれのある不整な楕円形を呈し，長軸は3.00m，短軸は1.90mを測る。深さは0.50mであり，北西側に0.14m高い部分がある。埋土は７層で，人為的堆積を示す。

遺物は，磁器湯飲み碗（１），同碗（２），陶器壺（３），瓦製円盤（４）である。これらは18世紀のものである。




第170図　ＳＫ4004平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　湯飲み碗 | 8.5 | 3.2 | 3.65 | 内外面施釉 | 透明 | 灰白7.5Y8/1 | 微砂 |
| 2 | 磁器　碗 | | 5.0 | (5.7) | 内外面施釉　外面染付　内外面貫入 | 透明 | 明オリーブ灰2.5GY7/1 | 密 |
| 3 | 陶器　壷 | | 6.6 | (8.8) | 外面回転ナデ後にナデ　底面回転篦切り後にナデ | 褐灰10YR4/1 | 暗灰N3/ | 密 |

| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 瓦製円盤 | | (径) 4.7 | 1.5 | | | 側面を磨き，丸形にしている |

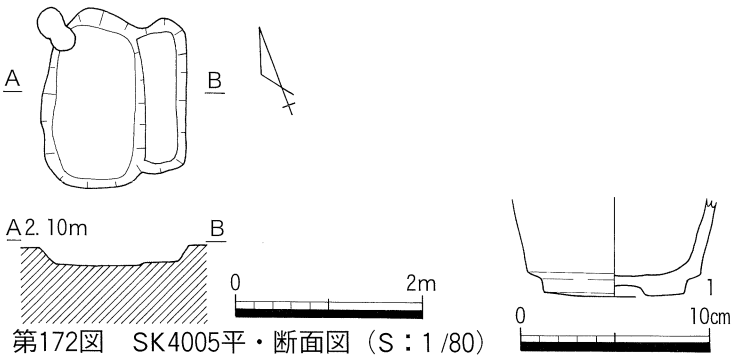
第171図　ＳＫ4004出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ4005　（第172・173図）

調査区中央西側において検出された土坑であり，ＳＢ4001のＰ－17を切っている。

検出面のレベルは標高2.02m前後である。平面形は長方形を呈し，長辺は1.92m，短辺1.50mを測る。深さは0.17mであり，東側に約３cm高い部分がある。埋土は単一層であるため，同一の土坑とした。

遺物は，磁器花生（１）である。蛇の目高台で，外面のみ施釉。




第172図　SK4005平・断面図（S：1/80）

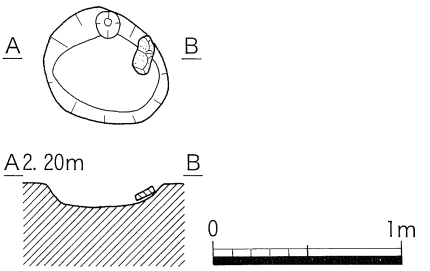
| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　花生 | | 7.6 | (5.3) | 内外面回転ナデ　蛇の目高台　内面・高台無釉 | 明緑灰7.5GY7/1 | 浅黄橙7.5YR8/4 | 微砂 |

第173図　ＳＫ4005出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ4006　（第174図）

調査区ほぼ中央において検出された土坑である。

検出面のレベルは標高2.06mである。平面形は不整な円形を呈し，直径0.66m，深さ0.13mを測る。掘り込みはゆるやかな傾斜である。底面東側に河原石が出土した。本遺構を完掘した後に，柱穴が検出されたことにより，本遺構が柱穴より後出の遺構である。




第174図　ＳＫ4006平・断面図（S：1/40）

ＳＫ4007　（第175・176図）

調査区南端の西寄りの位置で検出された土坑であり，南側は調査区外に広がっている。

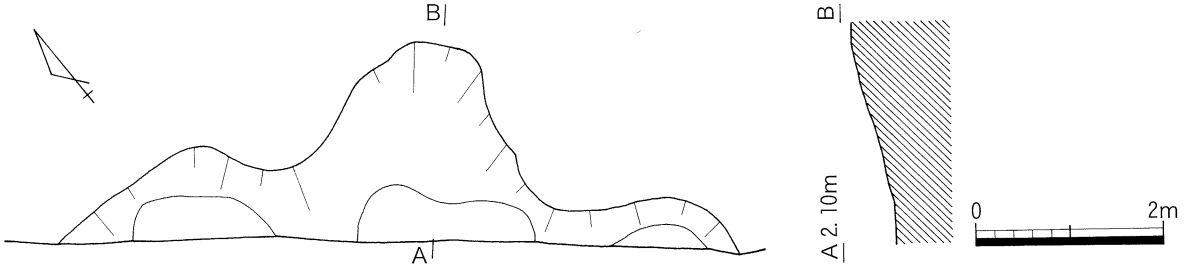
検出面のレベルは標高1.95mである。平面形は不明であるが，検出された範囲では３基の土坑が重なっているような形態を呈し，東西の長さは7.22m，南北は2.18mを測る。西側の底面までの深さは0.34m，中央は0.41m，東側は0.37mを測る。掘り込みはゆるやかな傾斜である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は，磁器小皿（１），同湯飲み碗（２），同蓋（３・４），同鍋（５），瓦製円盤（６）である。

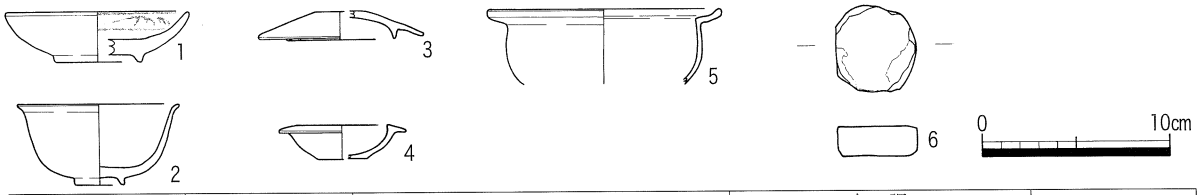
１は肥前系の紅皿で，見込みに蛇の目釉ハギが見られる。内面に笹文が描かれる。18世紀末のものである。２は高台ぎわ以下が無釉で，口縁部が若干外反する。

３・４は内面のみ施釉する。４は信楽系である。

５は信楽系の鍋であり，外面は無釉で煤が付着する。




第175図　ＳＫ4007平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外（釉） | 内（素地） | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 磁器　紅皿 | 9.8 | 4.6 | 2.65 | 内外面施釉　蛇の目釉ハギ　内面に笹文　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 密 |
| 2 | 磁器　湯飲み碗 | 8.6 | 2.6 | 4.3 | 高台脇以下無釉 | 灰白5Y7/2 | 灰黄2.5Y7/2 | 密 |
| 3 | 磁器　蓋 | 8.8 | 2.8 | 1.5 | 内面施釉　回転ナデ | 灰白5Y7/2 | 灰白2.5Y8/1 | 微砂 |
| 4 | 磁器　蓋 | 6.8 | 2.6 | 1.8 | 内面施釉　底面回転糸切り　信楽系 | 淡橙5YR8/4 | 橙5YR6/8 | 密 |
| 5 | 磁器　鍋 | 12.2 | | (4.0) | 内面施釉　外面煤　信楽系 | 明黄褐10YR | 浅黄橙10YR8/3 | 密 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 瓦製円盤 | | (径) 4.3 | 1.6 | | 土 | ナデ　表裏　灰N5/　密 |

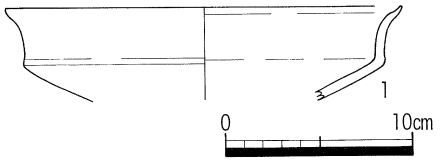
第176図　ＳＫ4007出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ4008　（第177図）

調査区中央やや北寄りにおいて検出された土坑であり，ＳＤ4008を切っている。

検出面のレベルは標高2.18mである。平面形は不整な円形を呈し，直径1.00mを測る。深さは0.18mである。断面は逆台形を呈する。埋土は褐灰色シルト質極細砂が主体をなす。

遺物は，磁器の小片・弥生土器高杯（１）である。１は混入であり，磁器には図化できるものはなかった。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 弥生土器　高杯 | 21.0 | | (5.0) | 体部外面篦削り後に篦磨き　内面篦磨き | 鈍い黄橙10YR7/3 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 石英・長石・角閃石 |

第177図　ＳＫ4008出土遺物（Ｓ：１/４）

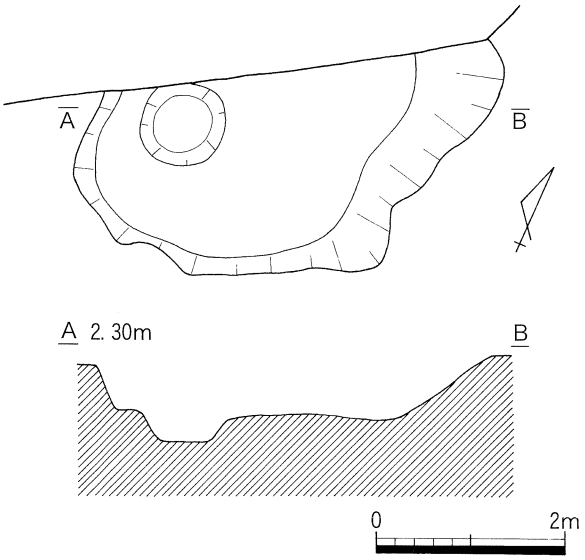
ＳＫ4009　（第178・179図）

調査区北西隅において検出された土坑であり，ＳＤ4005・4006に切られる。

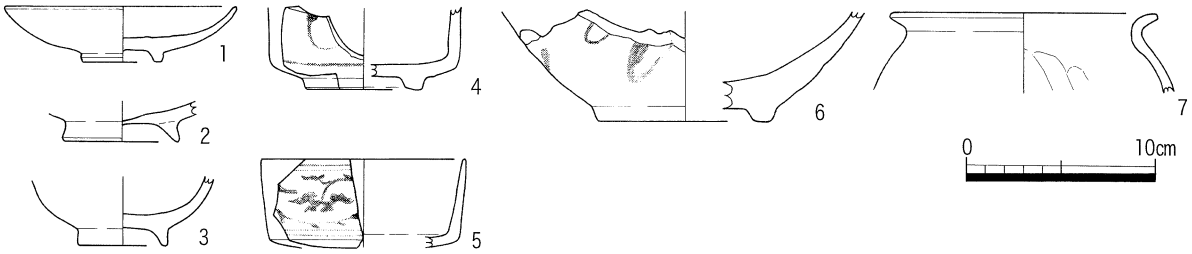
検出面のレベルは標高2.15mである。土坑は北側の調査区域外に広がっているため，平面形は不明である。検出できた東西径は4.66m，深さは0.45mを測る。底面の西側には直径0.96m，深さ0.25mを測る落ち込みがある。東壁の掘り込みはゆるやかである。

遺物は，磁器小皿（１），同碗（３），同湯飲み碗（４・５），同鉢（６），土師質土器椀（２），弥生土器壺（７）である。

１は見込みに蛇の目釉ハギがあり，３は広東碗である。４は蛇の目高台。18世紀末のもの。




第178図　ＳＫ4009平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　小皿 | 12.2 | 4.2 | 3.0 | 高台脇以下無釉　見込み蛇の目釉ハギ | 灰白5Y7/2 | 灰白2.5Y7/1 | 微砂 |
| 2 | 土師質土器　椀 | | 6.2 | (2.2) | 内面篦磨き　底面回転糸切り後にナデ | 黒褐2.5Y3/1 | 灰白2.5Y8/2 | 微砂 |
| 3 | 磁器　碗 | | 4.8 | (3.7) | 内外面施釉　広東碗 | 淡黄2.5Y8/4 | 灰白10YR8/2 | 微砂 |
| 4 | 磁器　湯飲み碗 | | 6.0 | (4.3) | 内外面施釉　蛇の目凹形高台 | オリーブ灰10Y6/2 | 暗褐7.5YR3/4 | 密 |
| 5 | 磁器　湯飲み碗 | 11.0 | | (4.7) | 内外面施釉　外面唐草文 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 6 | 磁器　鉢 | | 9.0 | (5.9) | 内外面施釉　蛇の目凹形高台無釉 | 灰黄褐10YR6/2 | 鈍い赤褐5YR4/3 | 密 |
| 7 | 弥生土器　壷 | 14.2 | | (4.3) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ　内面篦削り | 鈍い黄橙10YR7/4 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 石英・長石・角閃石 |

第179図　ＳＫ4009出土遺物（Ｓ：１/４）

５　柱穴

ＳＰ4012　（第180図）

調査区北東隅において検出された円形の柱穴である。

検出面のレベルは標高2.13mである。直径は0.22m，深さは0.13mを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は灰白色シルト質極細砂である。底面に根石が残存する。

ＳＰ4013　（第180図）

調査区北東側において検出された柱穴で，ＳＤ4002の上面を掘り込んでいる。

検出面のレベルは標高2.12mである。平面形は円形を呈し，直径は0.30m，深さは0.22mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。底面中央に根石が残存する。

ＳＰ4015・4016　（第180図）

調査区中央東端において検出された楕円形の柱穴である。検出面は標高2.12mである。直径は0.37×0.53m，深さは0.20mである。埋土中に石が残存する。

ＳＰ4035　（第180図）

調査区中央の東側において検出された円形の柱穴である。

検出面のレベルは標高2.12mである。柱穴の直径は0.32m，深さは0.32mを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は灰白色シルト質極細砂である。底面に根石が残存する。

ＳＰ4044・4045　（第180図）

調査区中央の東側にある柱穴で，２本として検出したが，調査の結果１本の柱穴となる。

検出面のレベルは標高2.05mである。直径は0.40×0.54m，深さは0.25mを測る。

ＳＰ4053　（第180図）

調査区中央の東側において検出された楕円形の柱穴である。検出面は標高2.00mである。直径は0.34×0.43m，深さは0.27mを測る。埋土中に詰石が残存する。

ＳＰ4056　（第180図）

調査区中央の東側において検出された円形の柱穴である。検出面は標高2.00mである。直径は0.24m，深さは0.13mを測る。中央部に根石が残存する。

ＳＰ4070　（第180図）

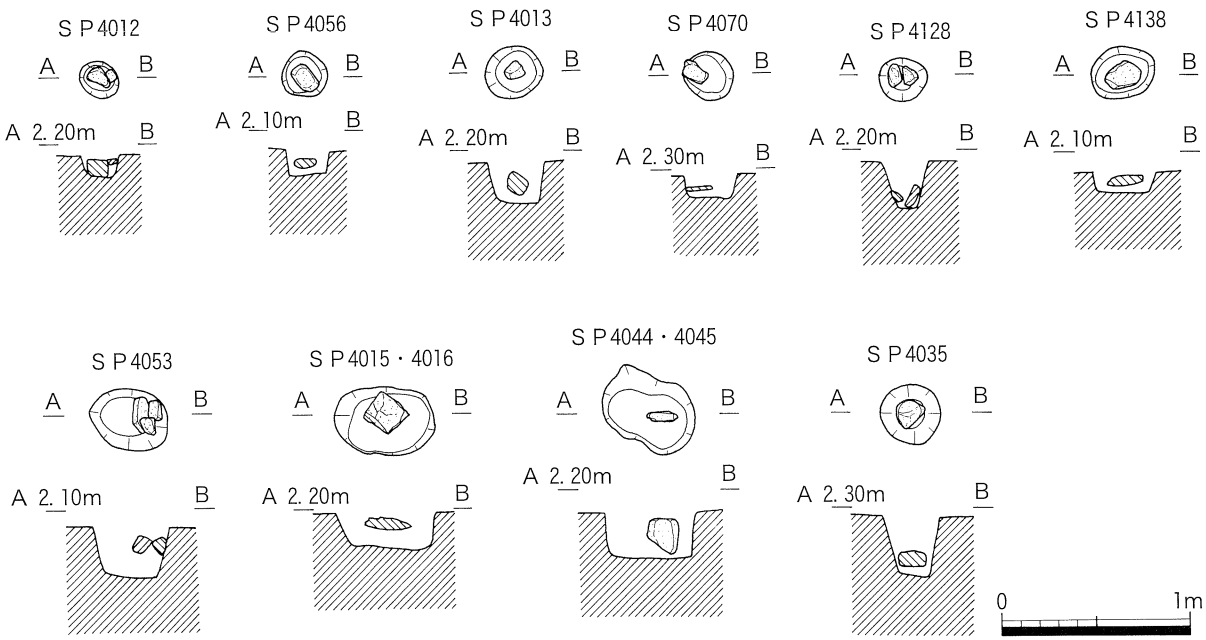
調査区中央北側において検出された円形の柱穴である。

検出面は標高2.19mである。直径は0.28m，深さは0.12mを測る。根石が残存する。

ＳＰ4128　（第180図）

調査区中央において検出された円形の柱穴である。

検出面は標高2.15mである。直径は0.26m，深さは0.25mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。底面に２個の根石が残存する。




第180図　４工区ＳＰ平・断面図（Ｓ：１/40）

ＳＰ4138　（第180図）

調査区中央の南側において検出された楕円形の柱穴である。

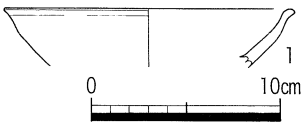
検出面のレベルは標高1.99mである。直径は0.30×0.35m，深さは0.12mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。底面中央に根石が残存する。

ＳＰ4065　（第181図）

調査区中央の北側において検出された円形の柱穴である。

検出面のレベルは標高2.18mである。直径は0.22m，深さは0.29mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。底面に段がある。

遺物は，磁器碗（１）である。１は内外面施釉し，口縁部が外反する。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 15.4 | | (3.1) | 内外面施釉 | オリーブ灰10Y6/2 | 灰白2.5Y7/1 | 細砂 |

第181図　ＳＰ4065出土遺物（Ｓ：１／４）

６　自然旧河道

ＳＲ4002　（第182・183図）

調査区南東隅において検出された自然旧河道であり，２工区ＳＲ2001・３工区ＳＲ3001と同一の河道である。

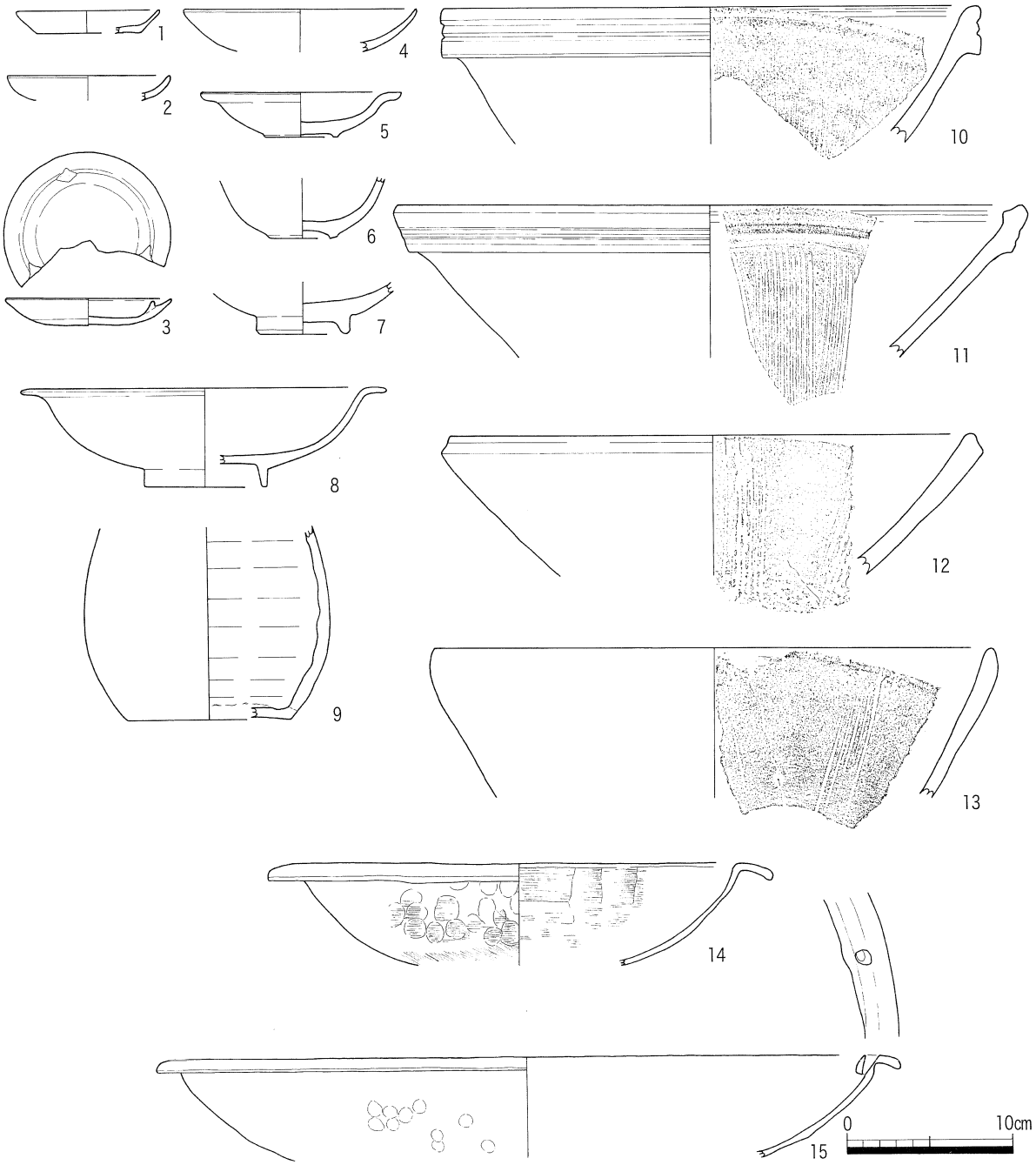
検出面のレベルは標高2.00m前後である。検出できたのは河道の西岸の一部のみであり，東西方向に流れている。本調査区では河道の北岸であるように見えるが，２・３工区での河道の流れは南北方向であり，３工区北端で北東方向に流れを変えているので，本調査区で検出したのは西岸である。３工区ＳＲ3001の東岸と本調査区の西岸との距離，すなわち河道の幅は約19mを測る。西岸は検出面から急傾斜で落ち込み，幅約4.50mを測る平坦部となり，さらに0.30mの比高差をもって急激に再び落ち込んでいる。検出面から平坦部までの深さは約0.60m，最深部までの深さは0.80mを測る。川床は砂礫層となっている。埋土は上層で細～粗砂が主体となし，最深部では黒褐色シルト質極細砂が堆積しており，多数の土器が出土した。

遺物は，土師質土器小皿（１・２），陶器灯明皿（３），磁器皿（４・５・７），同碗（６），同鉢（８），須恵質土器壺（９），陶器擂鉢（10・11），土師質土器擂鉢（12・13），同焙烙（14・15），瓦質土器茶釜（16），同羽釜（17～20），土師質土器羽釜（21～23），同土鍋（24・25），須恵器甕（26），土錘（27）である。

１は平底の小皿で，回転ヘラ切りで切り離した後に周辺部にナデを施す。

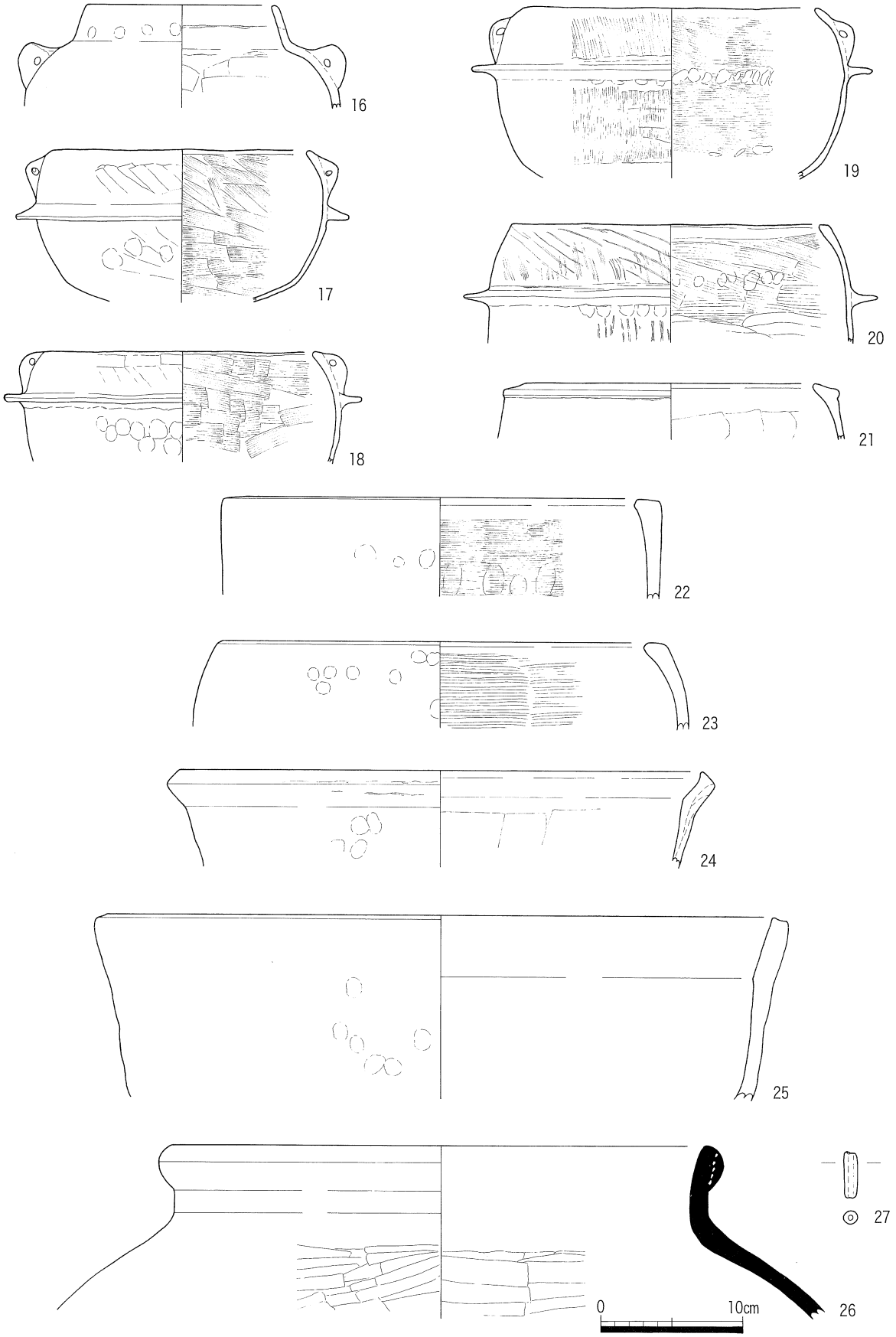
３は内面に３ヶ所の抉りを有する突帯のある灯明皿で，外面下半は回転ヘラ削りが施される。体部下半以下は回転ヘラ削りが施される。

４は高台脇以下無釉の小皿である。５は口縁部がほぼ水平に広がり，低い高台である。内面と口縁部外面のみ施釉する。６は肥前系の碗で，高台を欠損後に磨いて平坦にしている。７は青磁の皿であり，高台内が無釉である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師質土器 小皿 | 8.6 | 6.4 | 1.4 | 内外面回転ナデ　底面回転篦切り後に周縁ナデ | 橙5YR7/6 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 密 |
| 2 | 土師質土器 小皿 | 9.8 | | (1.5) | 内外面回転ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 微砂若干 |
| 3 | 陶器　灯明皿 | 10.1 | | 1.6 | 内外面回転ナデ　外面下半回転篦削り | 暗オリーブ褐2.5Y3/3 | | 微砂 |
| 4 | 磁器　皿 | 14.4 | | (2.6) | 高台脇以下無釉 | 緑灰5G6/1 | 灰白2.5Y8/2 | 微砂 |
| 5 | 磁器　皿 | 12.4 | 4.6 | 2.7 | 内面・口縁部外面施釉 | 暗灰黄2.5Y5/2 | | 密 |
| 6 | 磁器　碗 | | 4.2 | (3.7) | 回転ナデ　高台は欠損後に磨く | 灰白10YR8/1 | 鈍い黄2.5Y6/3 | 密 |
| 7 | 磁器　皿 | | 5.4 | (3.2) | 高台内無釉　高台内回転篦削り　外面青磁 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白N8/ | 密 |
| 8 | 磁器　鉢 | 22.4 | 7.6 | 6.0 | 高台脇以下無釉　回転ナデ | オリーブ黄5Y6/4 | 浅黄5Y7/3 | 密 |
| 9 | 須恵質土器　壷 | | 10.0 | (11.7) | 若干上げ底　外面回転ナデ後にナデ　内面回転ナデ | 浅黄5Y7/3 | 灰5Y5/1 | 密 |
| 10 | 陶器　擂鉢 | 32.6 | | (8.3) | 回転ナデ　卸目全面　備前焼 | 赤褐10R4/3 | 鈍い赤褐2.5YR5/4 | 粗砂 |
| 11 | 陶器　擂鉢 | 38.0 | | (9.3) | 口縁部横ナデ　外面篦削り・ナデ　卸目全面　備前焼 | 鈍い赤褐5YR5/3 | 灰褐5YR5/2 | 粗砂 |
| 12 | 土師質土器 擂鉢 | 31.9 | | (8.5) | 口縁部横ナデ　胴部ナデ　放射状の卸目 | 鈍い橙5YR7/4 | 淡橙5YR8/4 | 粗砂 |
| 13 | 土師質土器 擂鉢 | 34.0 | | (9.2) | 内外面ナデ　5本単位の卸目 | 褐灰10YR5/1 | | 粗砂 |
| 14 | 土師質土器 焙烙 | 30.9 | | (6.2) | 内面刷毛目後にナデ　外面指押え後に刷毛目　煤 | 灰黄褐10YR4/2 | 黒褐10YR3/2 | 微砂 |
| 15 | 土師質土器 焙烙 | 45.4 | | (6.2) | 口縁部横ナデ　外面指押え・ナデ　内面板ナデ | 灰N4/ | 暗灰N3/ | 微砂 |

第182図　ＳＲ4002出土遺物（１）（Ｓ：１／４）




第183図　ＳＲ4002出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

（第183図）

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 16 | 瓦質土器　茶釜 | 13.0 | | (7.0) | 胴部外面ナデ　内面篦ナデ　接合痕 | 黄灰2.5Y6/1 | 灰黄褐10YR5/2 | 微砂 |
| 17 | 瓦質土器　羽釜 | 17.8 | | (10.5) | 胴部外面指押さえ　内面刷毛目　煤 | 暗灰N3/ | 灰N4/ | 微砂 |
| 18 | 瓦質土器　羽釜 | 19.0 | | (7.6) | 胴部外面指押さえ　内面刷毛目　煤 | 褐灰10YR4/1 | 褐灰10YR5/1 | 微砂 |
| 19 | 瓦質土器　羽釜 | 20.2 | | (11.7) | 胴部外面刷毛目　内面指押え・刷毛目 | 褐灰10YR4/1 | | 微砂 |
| 20 | 瓦質土器　羽釜 | 22.0 | | (8.2) | 胴部外面刷毛目　内面指押え・刷毛目 | 褐灰10YR5/1 | 褐灰10YR6/1 | 微砂 |
| 21 | 土師質土器　羽釜 | 20.0 | | (3.9) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ　内面篦ナデ | 浅黄橙7.5YR8/4 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 細砂 |
| 22 | 土師質土器　羽釜 | 30.6 | | (6.8) | 胴部外面指押え・ナデ　内面指押え・刷毛目 | 灰白2.5Y8/2 | 灰白10YR8/2 | 細～粗砂 |
| 23 | 土師質土器　羽釜 | 31.0 | | (6.0) | 口縁部横ナデ　胴部外面指押え・ナデ　内面刷毛目 | 褐灰10YR4/1 | 灰白10YR8/2 | 細～粗砂 |
| 24 | 土師質土器　土鍋 | 36.2 | | (6.7) | 口縁部横ナデ　胴部外面指押え・ナデ　内面板ナデ | 灰白2.5Y7/1 | 灰白2.5Y8/2 | 細～粗砂 |
| 25 | 土師質土器　土鍋 | 46.4 | | (12.7) | 口縁端部ナデ　胴部外面指押え　内面板ナデ | 褐灰10YR4/1 | 灰白10YR8/2 | 細～粗砂 |
| 26 | 須恵器　甕 | 37.6 | | (12.0) | 口辺部横ナデ　胴部内外面板ナデ | 黒褐2.5Y3/1 | 黄灰2.5Y4/1 | 微砂・粗砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 27 | 土錘 | 3.25 | (径) 1.0 | | 2.6 | 土 | 灰白2.5Y8/1　密 |

8は水平に広がる口縁部，高い高台の鉢である。高台脇以下は無釉である。

9は内面にロクロ痕の凸凹があり，胴部外面下半のみ釉がかかっている。底面はヘラ削りが施される。

10は口縁部が拡張し，外面に2本の沈線があり，全面に卸目があることより18世紀後半の備前焼である。11は体部外面にヘラ削りが施されることより明石焼である。12の口縁端部は角ばり，13は丸くなっている。共に卸目は放射状である。

14は口縁部・胴部内面に刷毛目後にナデ，胴部外面上半に指押え後に刷毛目・ナデ，下半に粗い刷毛目を施す。15は口縁部に1個の穴を残存する。外面は指押え・ナデ，内面は板ナデ。

16は内傾する口縁部の下に外耳を有する茶釜である。

17～19は口縁部外面に外耳，その下に鍔を有する。17・18は同一の調整であり，鍔以下に煤と煮こぼれが付着する。19は外面に粗い刷毛目，内面に細かい刷毛目が見られ，内面に煮こぼれが付着する。20は平らな口縁端部で，外面に粗い刷毛目，内面に細かい刷毛目が施される。

21～23は口縁部が若干拡張し，内傾する羽釜である。

24・25は口縁部が外反する土鍋であり，内面に稜を有する。

26は玉縁状の口縁部の甕で，内外面ともヘラナデが施される。

3）4工区包含層出土遺物

1は貝殻状に型押し成形された白磁の紅皿であり，口縁の幅が広いことから19世紀前半のものである。2は内外面施釉する盃である。

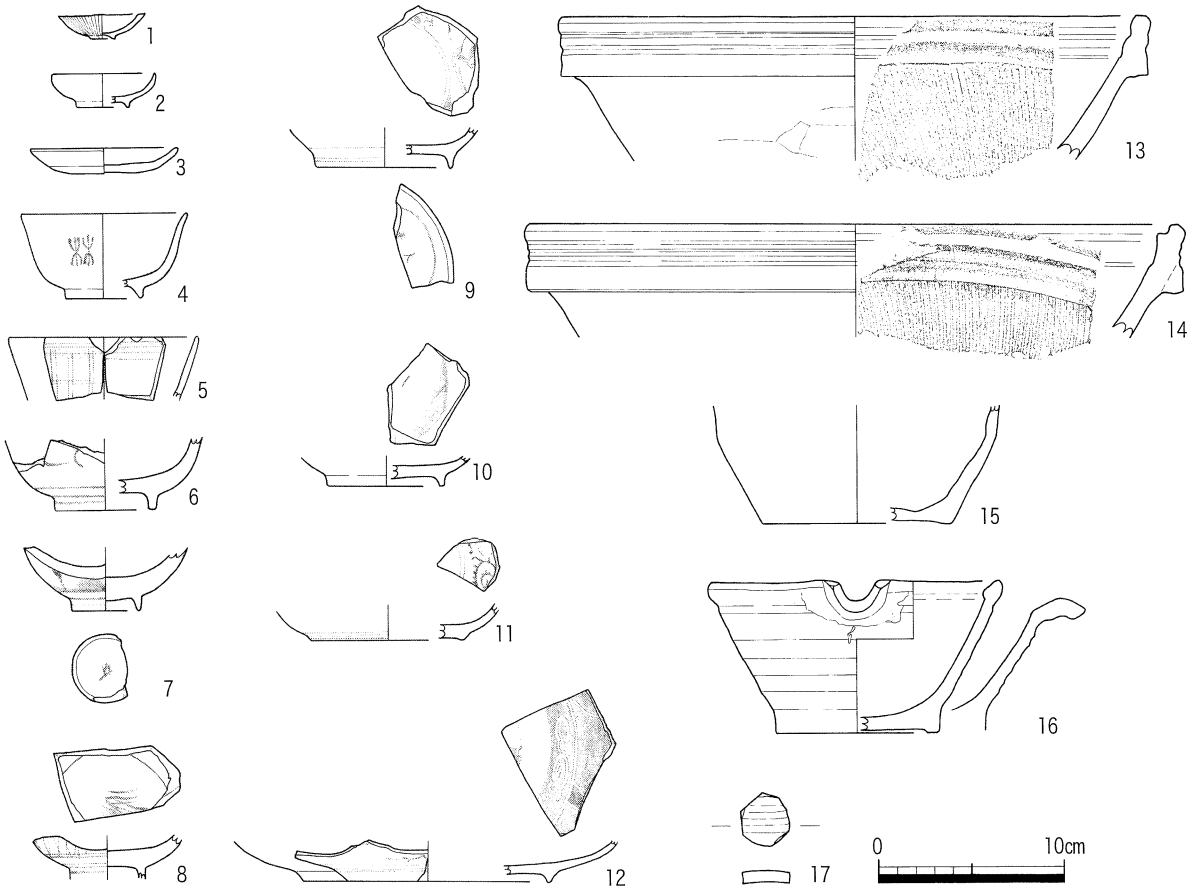
3は灯明皿で，外面下半に回転ヘラ削り，底面に回転糸切り後にナデが施される。

4は側面にいわゆる染色体文を描く湯飲み碗で，明治前半である。5は外面に2本単位の格子目文を描いた猪口である。6は広東碗で，外面に染付がある。18世紀末のものである。7は肥前系の碗で，高台内に銘がある。8は外面に網目文を描く碗である。

9は肥前系の皿で，高台内に「大□年□」の銘がある。10は内面に染付のある皿である。11は低い高台で内面にたこ唐草文を描く皿である。18世紀のものである。12は肥前系の皿で，外面に省略された唐草文，内面に墨弾きの技法が見られる。18世紀のものである。

13は明石焼の擂鉢であり，外面にヘラ削りが施される。14は備前焼の擂鉢であり，口縁部が拡張し，外面に3本の沈線が巡る。

15は内面無釉の壺である。16は片口鉢である。




| 番号 | 器種 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 磁器　紅皿 | 4.6 | 1.4 | 1.3 | 貝殻状の型押し　内面・口縁部施釉　肥前系　明緑灰 | 明青灰5BG7/1 | 灰白7.5Y8/1 | 微砂 |
| 2 | 磁器　盃 | 5.4 | 2.8 | 1.8 | 内外面施釉 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白2.5GY8/1 | 密 |
| 3 | 陶器　灯明皿 | 7.6 | 3.4 | 1.35 | 外面下半回転篦削り　底面回転糸切り後ナデ | 淡橙5YR8/3 | 鈍い赤褐2.5YR4/4 | 微砂 |
| 4 | 磁器　湯飲み碗 | 9.0 | 4.0 | 4.5 | 内外面施釉　変形字 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 5 | 磁器　猪口 | 10.0 | | (3.4) | 内外面施釉　外面に二重格子文 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 6 | 磁器　碗 | 5.4 | | (3.8) | 内外面施釉　広東碗 | 透明 | 灰白5Y7/1 | 精良 |
| 7 | 磁器　碗 | | 3.6 | (3.35) | 内外面施釉 | 透明 | 灰白5GY8/1 | 密 |
| 8 | 磁器　碗 | | | (2.3) | 内外面施釉　外面網目文 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白N8/ | 密 |
| 9 | 磁器　皿 | | 7.3 | (2.1) | 内外面施釉　内面波文　高台内「大□年□」　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白N8/ | 精良 |
| 10 | 磁器　皿 | | 6.2 | (1.6) | 内外面施釉 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白N8/ | 精良 |
| 11 | 磁器　皿 | | 8.0 | (1.9) | 内外面施釉　内面たこ唐草文 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 12 | 磁器　皿 | | 13.0 | (2.2) | 内外面施釉　外面唐草文　内面墨弾き | 明青灰5BG7/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 13 | 陶器　擂鉢 | 31.2 | | (7.6) | 口縁部回転ナデ　外面篦削り　明石焼 | 鈍い橙2.5YR6/4 | 赤褐10R5/4 | 細砂 |
| 14 | 陶器　擂鉢 | 34.4 | | (6.0) | 回転ナデ　備前焼 | 鈍い赤褐2.5YR5/3 | | 細砂 |
| 15 | 陶器　壷 | | 10.0 | (6.3) | 内外面回転ナデ　内面無釉 | 黒5Y2/1 | 灰白5Y7/2 | 密 |
| 16 | 磁器　片口鉢 | 15.2 | 8.5 | 8.05 | 内外面回転ナデ　高台脇以下無釉 | 浅黄5Y7/3 | 淡黄2.5Y8/3 | 密 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 土製円盤 | | (径)2.8×2.6 | 0.6 | | 土 | 土器片を丸く割る　紡錘車? |

第184図　４工区包含層出土遺物（Ｓ：１／４）

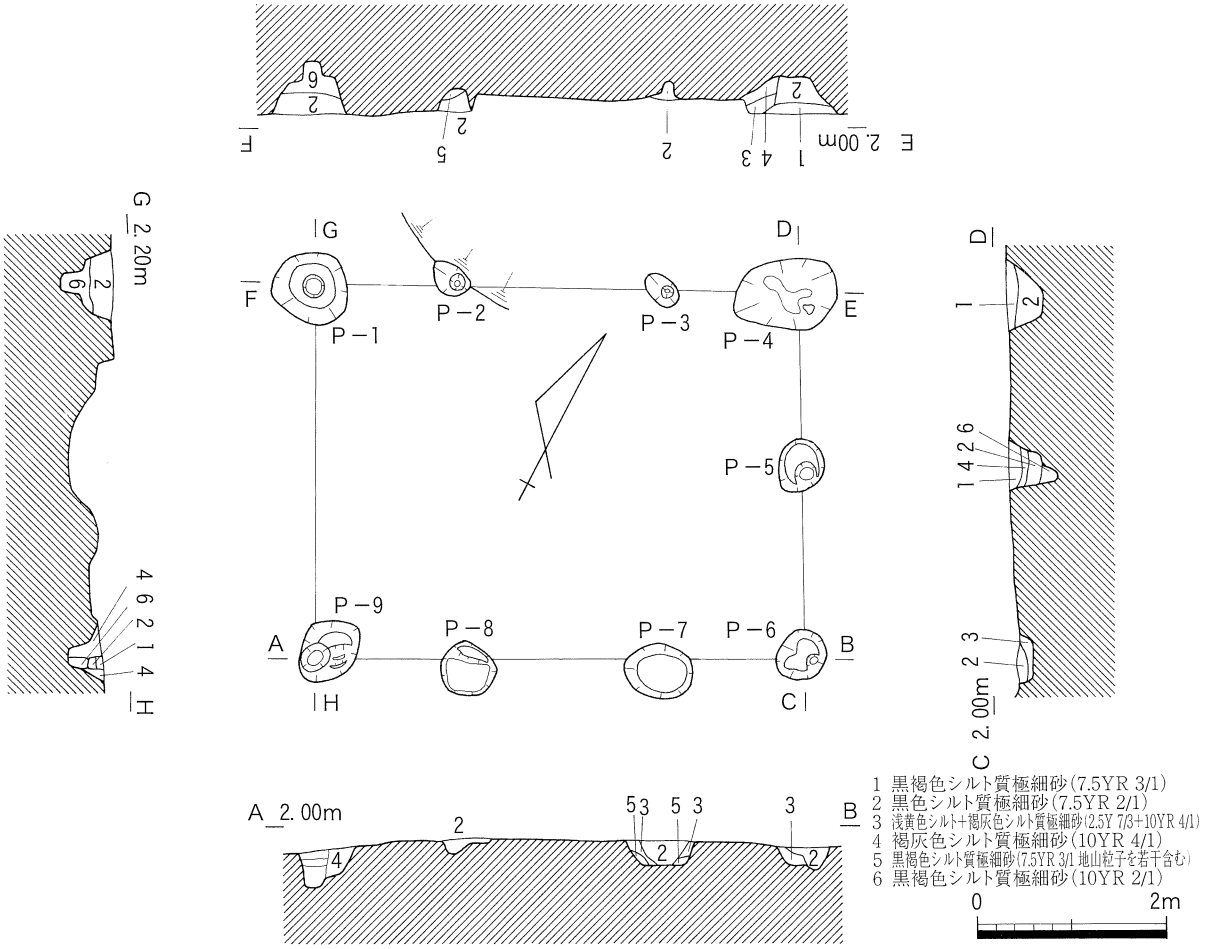
## 5　５工区

５工区は本遺跡の北端に位置する調査区であり，４工区と５工区は約47m離れている。調査区の北端は主要地方道高松長尾大内線と接する。調査区の南北長は73.5m，東西長は15mを測る。調査区中央の南北軸座標値はＸ＝146.630，東西軸座標値はＹ＝53.030である。

調査以前には個人住宅・倉庫が建っていたため，調査区全域に攪乱が見られ，特に調査区中央部には倉庫の基礎・コンクリート水路が地山まで達している。

遺構は調査区全域にわたって検出された。調査区北側・南側の検出面は地山であるが，中央部は地山が微低地となっているため，近世とそれ以前の遺構で検出面が異なる。

第185図　5工区遺構配置図（S：1/200）




第186図　ＳＢ5001平・断面図（Ｓ：１/80）

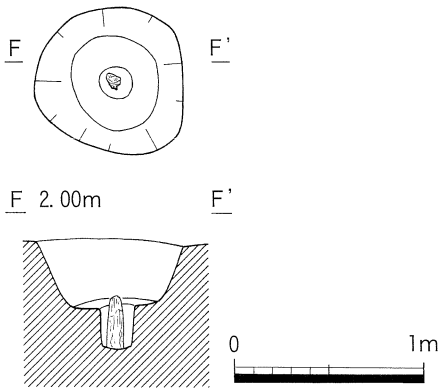
１）弥生時代

１　掘立柱建物跡

ＳＢ5001　（第186・187図）

調査区中央において検出された掘立柱建物跡である。

検出面のレベルは標高1.80～1.87mである。西列側柱は攪乱により消滅し，Ｐ－２・３・９は攪乱により上面を削平されている。検出できた柱穴の総数は９個である。桁行は３間で6.00mを測り，梁行は２間で4.50mを測る。建物の主軸方位はＮ－62°－Ｅである。




第187図　ＳＢ5001　Ｐ－１平・断面図（Ｓ：１/40）

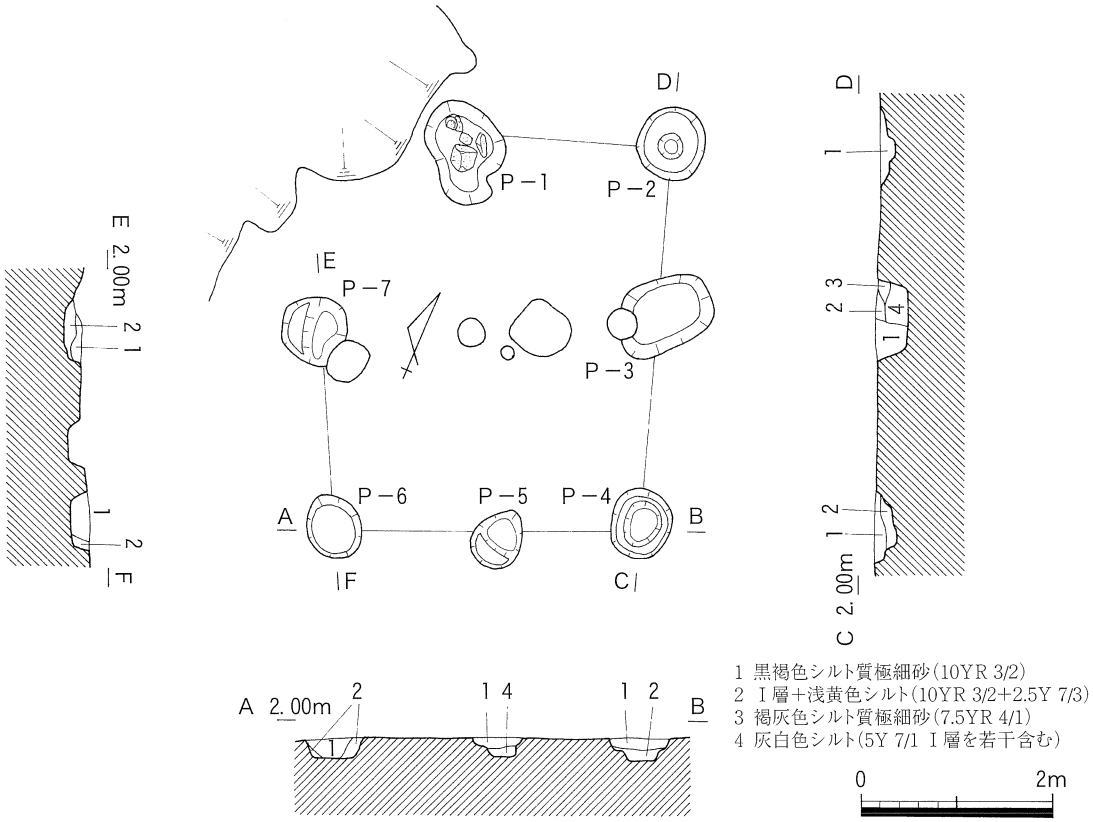
桁行の柱穴間の距離は芯芯で1.50mと2.23mを測り，梁行の柱穴間の距離は芯芯で2.00mを測る。柱穴の平面形は不整な円形・楕円形を呈し，Ｐ－１は直径0.80m，Ｐ－４は0.75×1.10mを測り，規模が大きい。その他の柱穴は直径0.50～0.75mを測る。深さは６～55cmを測る。Ｐ－１は底面中央に径0.18mで深さ0.23mを測る小穴があり，その中に柱材の一部が直立した状態で残存していた。Ｐ－２・３・５・９は底面に柱痕の小穴が検出された。埋土は６層に分層できた。Ｐ－４・６・７・９の土層図を見ると，柱痕が検出されており，特にＰ－９は明瞭である。柱痕の埋土は第１・２・６層である。

遺物は，数点の弥生土器片のみであり，図化できるものはなかった。

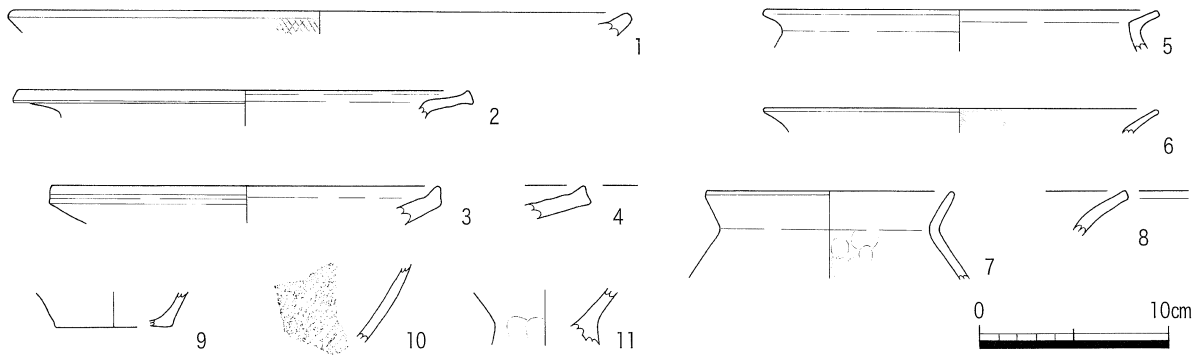
ＳＢ5002　（第188・189図）

調査区南側において検出された掘立柱建物跡であり，近世の柱穴に切られている。

検出面のレベルは標高1.70～1.80mである。北西隅柱は攪乱のため消滅しており，検出できた柱穴の総数は７個である。桁行は２間で4.80mを測り，梁行は２間で3.88mを測る。建物の主軸方位はＮ－17°－Ｗである。桁行の柱穴間の芯芯距離は1.80mと2.20mを測り，梁行の柱




第188図　ＳＢ5002平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 弥生土器　壷 | 32.4 | | (1.2) | 磨滅　外面に斜格子文 | 灰黄褐10YR5/2 | 明赤褐5YR5/6 | 細砂 |
| 2 | 弥生土器　壷 | 24.0 | | (1.5) | 口縁部横ナデ | 鈍い橙7.5YR6/4 | 鈍い褐7.5YR6/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 3 | 弥生土器　壷 | 20.8 | | (2.0) | 口縁部横ナデ | 鈍い褐7.5YR6/3 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 4 | 弥生土器　壷 | | | (1.80) | 口縁部横ナデ | 鈍い橙7.5YR6/4 | 鈍い褐7.5YR6/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 5 | 弥生土器　甕 | 20.8 | | (2.2) | 口縁部横ナデ　胴部内面ナデ | 鈍い橙5YR6/4 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 石英・長石・角閃石 |
| 6 | 弥生土器　甕 | 20.6 | | (1.3) | 外面横ナデ　内面刷毛目 | 灰黄褐10YR5/2 | 鈍い褐7.5YR6/3 | 石英・長石 |
| 7 | 弥生土器　甕 | 13.0 | | (4.6) | 胴部外面ナデ　内面指頭圧痕・刷毛目 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 鈍い橙5YR7/4 | 石英・長石 |
| 8 | 弥生土器　甕 | | | (2.4) | 口縁部横ナデ | 明赤褐5YR5/6 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 長石・角閃石 |
| 9 | 弥生土器　甕 | | 6.0 | (1.9) | 外面ナデ　内面ナデ | 鈍い橙7.5YR7/4 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 10 | 弥生土器　甕 | | | (4.0) | 外面ナデ・叩目　内面ナデ | 鈍い橙7.5YR6/4 | 鈍い褐7.5YR5/4 | 石英・長石・角閃石 |
| 11 | 弥生土器　高杯 | | | (2.9) | 外面篦削り　内面ナデ | 灰黄褐10YR5/2 | 鈍い黄褐10YR5/3 | 石英・長石・角閃石 |

第189図　ＳＢ5002出土遺物（Ｓ：１/４）

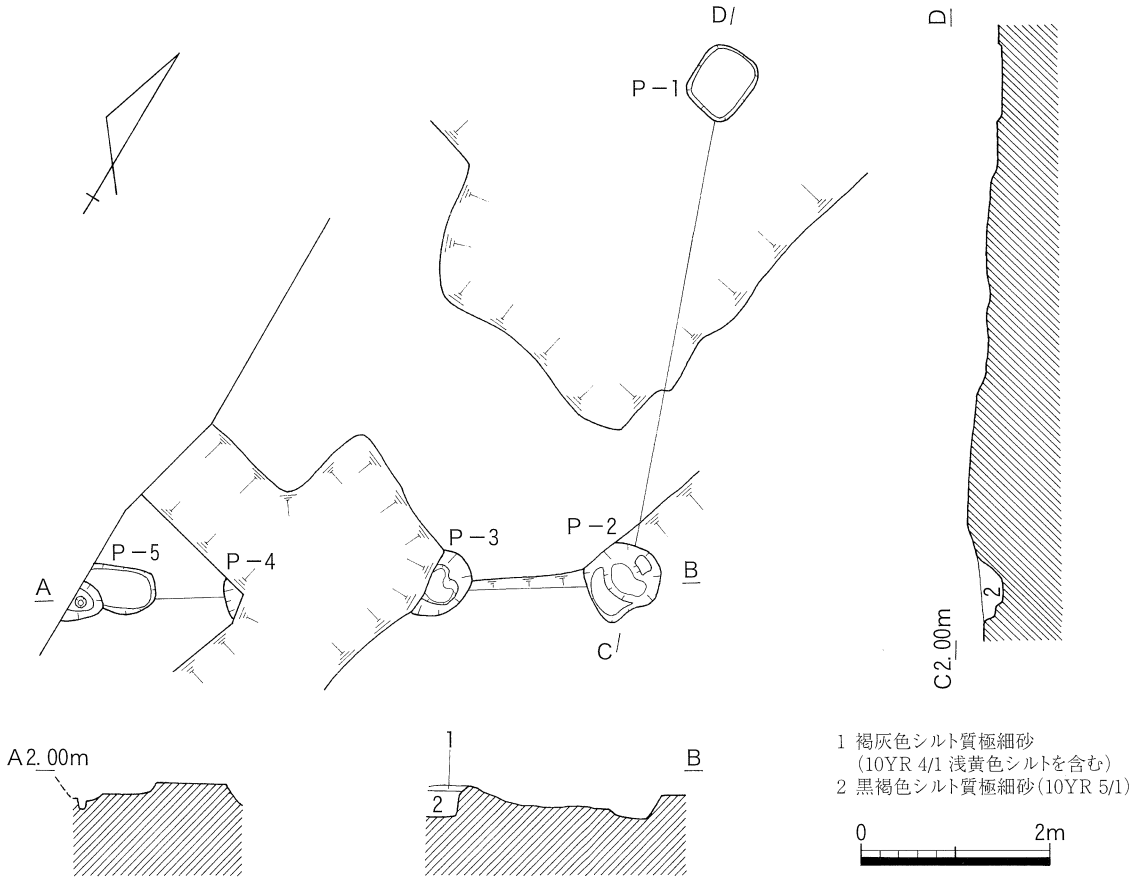
穴間の芯芯距離は1.50m・1.75mを測る。柱穴の平面形は不整な円形・楕円形を呈し，直径は0.52～0.78mを測る。P－3の直径は0.75×1.05mを測る。深さは0.18～0.34mを測る。P－1は底面直上に4個の河原石が残存する。P－2・4・5・7は底面に柱痕の小穴が検出され，土層の堆積を見るとP－3・6に柱痕が検出できた。

遺物は，弥生土器壺（1～4），同甕（5～10），同高杯（11）である。

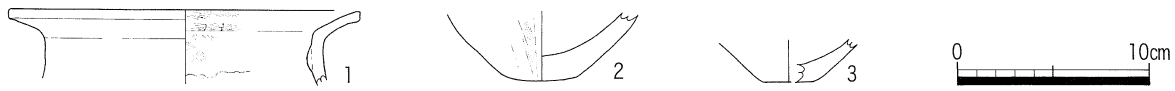
1は口縁部外面に斜格子が施される。2～4は水平に広がる広口壺であり，口縁端部が若干拡張する。5～8はくの字口縁である。9は平底，10の外面はタタキ目が施される。

ＳＢ5003　（第190・191図）

調査区南側において検出された掘立柱建物跡であり，柱穴は建物の基礎・コンクリート水路の攪乱を受けている。掘立柱建物跡は西側の調査区外に広がっている。




第190図　ＳＢ5003平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 弥生土器　壷 | 19 | | (3.9) | 外面横ナデ　内面刷毛目・ナデ | 鈍い橙7.5YR6/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 2 | 弥生土器　甕 | | 7.8 | (3.7) | 外面篦ナデ・刷毛目　内面摩滅　底面ナデ | 黒褐10YR3/1 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 石英・長石 |
| 3 | 弥生土器　甕 | | 2.6 | (2) | 外面ナデ　内面摩滅 | 灰黄褐10YR6/2 | 鈍い橙7.5YR6/4 | 石英・長石・角閃石 |

第191図　ＳＢ5003出土遺物（Ｓ：１/４）

検出面のレベルは標高1.88mである。検出できた柱穴の総数は５個のみであり，建物の規模・主軸方位は不明である。南列柱穴は３間以上であり，検出長は6.25mを測る。東列柱穴は１間であり，長さ6.10mを測る。南側の柱穴の芯芯距離は2.00m，東側の芯芯距離は5.40mを測る。全ての柱穴は撹乱を受けているため，柱穴の平面形・規模は原形を保っていない。完掘できたＰ－１は隅丸長方形，Ｐ－２は不整な楕円形を呈する。Ｐ－２の深さは0.28mである。Ｐ－２・５は柱痕の小穴を残存する。

遺物は，弥生土器壺（１），同甕（２・３）である。１は直立する頸部から口縁部が外反。

２　土坑

ＳＫ5001　（第192～194図）

調査区南側において検出された土坑であり，ＳＢ5003のＰ－３の北側に位置する。土坑の南側は建物の基礎により撹乱を受けている。

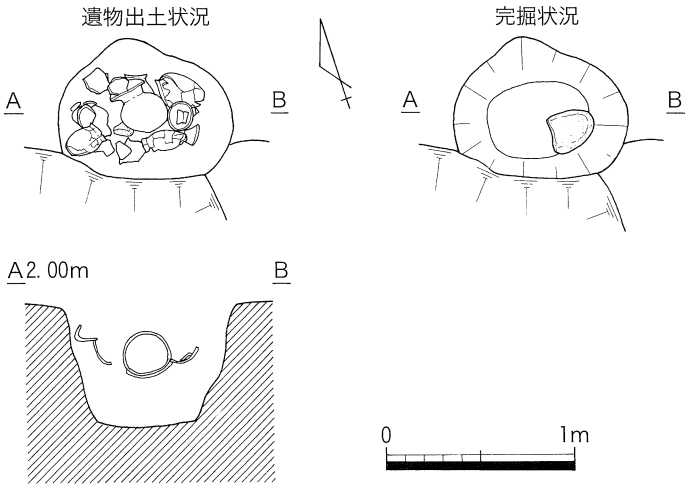
検出面のレベルは標高1.87mである。土坑の平面形は楕円形を呈し，北側に若干膨らんでいる。東西の長軸は0.92m，短軸は0.66m，深さは0.66mを測る。断面は逆台形を呈し，東壁にわずかな段を有する。底面は楕円形を呈し，0.40×0.55mを測る。埋土は黒褐色シルト質極細砂が主体となす。遺物の出土は，検出面から約0.30m下がった位置において数個体の完形土器を含む多量の土器が集中しており，底面直上では直径0.20mの河原石が出土した。

遺物は，弥生土器壺（１・２），同甕（３～11），同甑（12），同鉢（13～15）である。

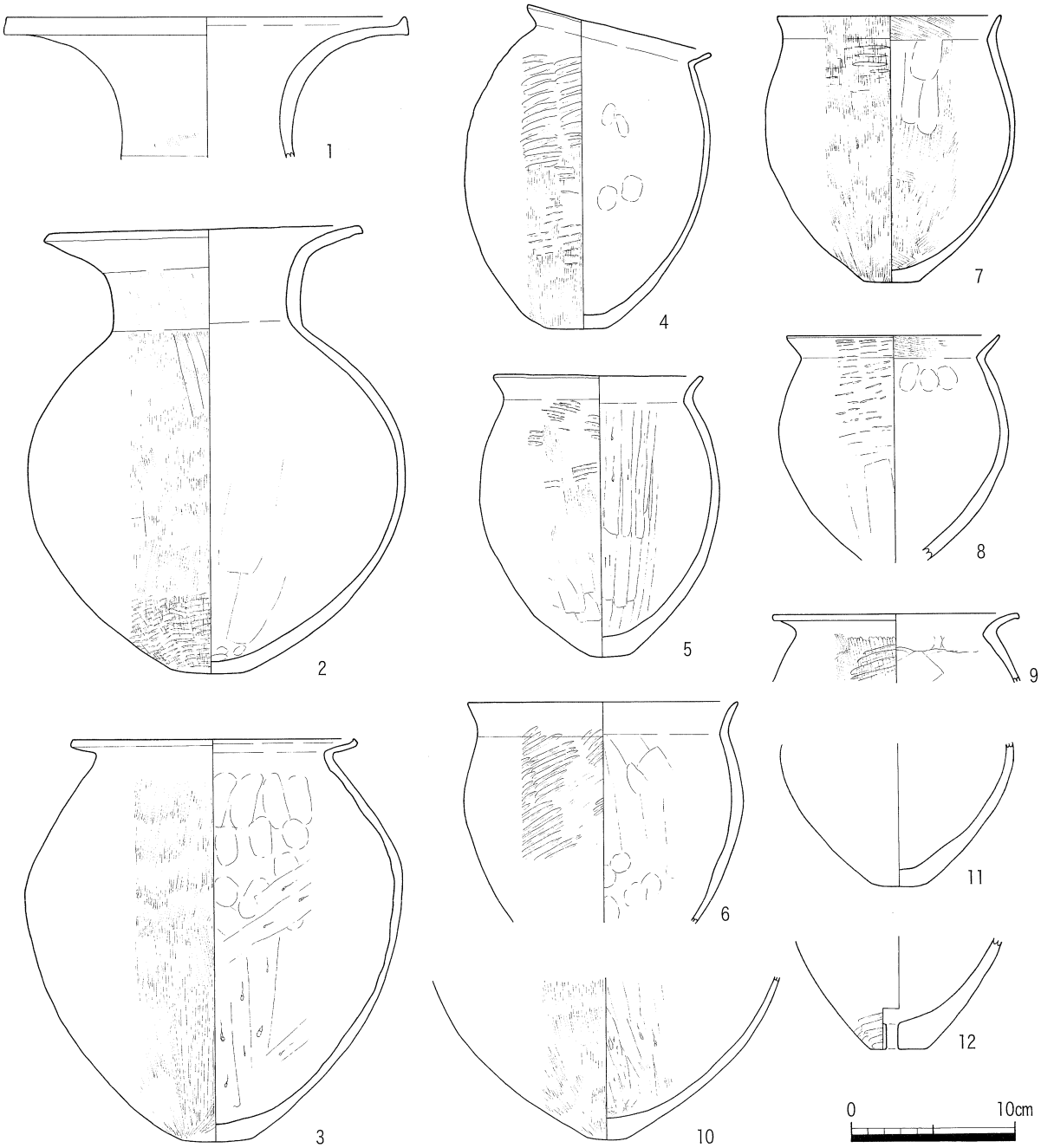
１は上方に拡張する口縁端部の広口壺であり，外面に刷毛目が部分的に残存する。２は広口壺で，球形の胴部から直立する頸部を有し，外上方に直線的に伸びる口縁部である。胴部外面は部分的なタタキ目の後に刷毛目，胴部外面下半はタタキ目の後にナデが施される。

３は肩の張る胴部から鋭角に屈曲する口縁部であり，口縁端部は摘み上げられている。胴部外面上半は刷毛目，下半はヘラミガキが施される。４は左右不対称な形態の甕で，卵形の胴部に屈曲して外反する口縁部を有する。胴部外面上半はタタキ目，下半はタタキ目の後に刷毛目が施される。５は卵形の胴部から外反する口縁部を有する。胴部外面上半はタタキ目の後にナデ・刷毛目，下半は板ナデ・ナデが施される。６の胴部外面はタタキ目，内面上半はヘラ削り，下半は指頭圧痕が施される。７は肩の張りが緩やかで少し丸みのある胴部である。胴部外面上半はタタキ目の後に刷毛目，下半は刷毛目が施される。底面は１方向からの刷毛目調整が見られる。８は球形の胴部から短く外反する口縁部である。口縁部外面・胴部外面上半はタタキ目が施される。９は胴部外面にタタキ目の後に刷毛目が施される。10の外面に刷毛目，内面にヘラ削りが施される。

12は底部近くの外面にタタキ目が施される。13の口縁端部は角張る。14は外反する口縁部を有する。15は「手捏ね」土器である。

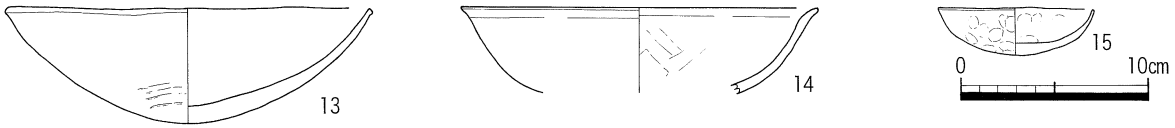



第192図　ＳＫ5001平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 弥生土器　壷 | 24.4 | | (8.6) | 内外面摩滅　外面刷毛目 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 灰白7.5YR8/2 | 石英・長石・金雲母 |
| 2 | 弥生土器　壷 | 19.2 | 4.5 | 27.3 | 頸部篦ナデ　胴部外面叩目後に刷毛目・ナデ | 鈍い黄橙10R7/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 3 | 弥生土器　甕 | 17.6 | 4.2 | 24.6 | 外面刷毛目・篦磨き　内面指頭圧痕・篦削り | 明赤褐5YR5/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 4 | 弥生土器　甕 | 11.8 | 3.8 | 18.9 | 外面叩目後に刷毛目　内面指頭圧痕・篦ナデ | 鈍い黄橙10R7/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 5 | 弥生土器　甕 | 13.0 | 2.5 | 17.2 | 外面叩目後にナデ・刷毛目　内面篦削り | 灰白10YR7/1 | 灰白7.5YR8/1 | 石英・長石 |
| 6 | 弥生土器　甕 | 16.6 | | (13.4) | 外面叩目　内面篦削り・指頭圧痕 | 灰白2.5Y8/2 | | 石英・微～粗砂 |
| 7 | 弥生土器　甕 | 12.6 | 3.4 | 16.3 | 外面叩目後に刷毛目　内面刷毛目 | 鈍い褐7.5YR6/3 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 8 | 弥生土器　甕 | 13.0 | | (13.7) | 外面叩目後にナデ　内面指頭圧痕・ナデ | 明赤褐5YR5/6 | 暗赤褐5YR3/6 | 石英・長石・角閃石 |
| 9 | 弥生土器　甕 | 14.8 | | (4.2) | 外面叩目後に刷毛目　内面ナデ・篦ナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 10 | 弥生土器　甕 | | 2.3 | (9.9) | 外面刷毛目　内面篦削り | 灰黄褐10YR6/2 | 灰黄2.5Y7/2 | 石英・微～細砂 |
| 11 | 弥生土器　甕 | | 3.3 | (8.7) | 内外面摩滅 | 鈍い黄橙10YR6/3 | 鈍い黄橙10R7/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 12 | 弥生土器　甑 | | 2.5×3.3 | (6.9) | 外面叩目　内面摩滅 | 灰白2.5Y8/2 | | 石英・長石・金雲母 |

第193図　ＳＫ5001出土遺物（１）（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 13 | 弥生土器　鉢 | 19.0 | | 6.1 | 外面摩滅・一部に叩目　内面ナデ | 灰褐7.5YR5/2 | | 石英・長石・角閃石 |
| 14 | 弥生土器　鉢 | 19.0 | | (4.5) | 内外面ナデ | 鈍い褐7.5YR5/3 | 鈍い褐7.5YR6/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 15 | 弥生土器　鉢 | 8.4 | | 2.5 | 手捏ね　内外面指頭圧痕 | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 細～粗砂・石英 |

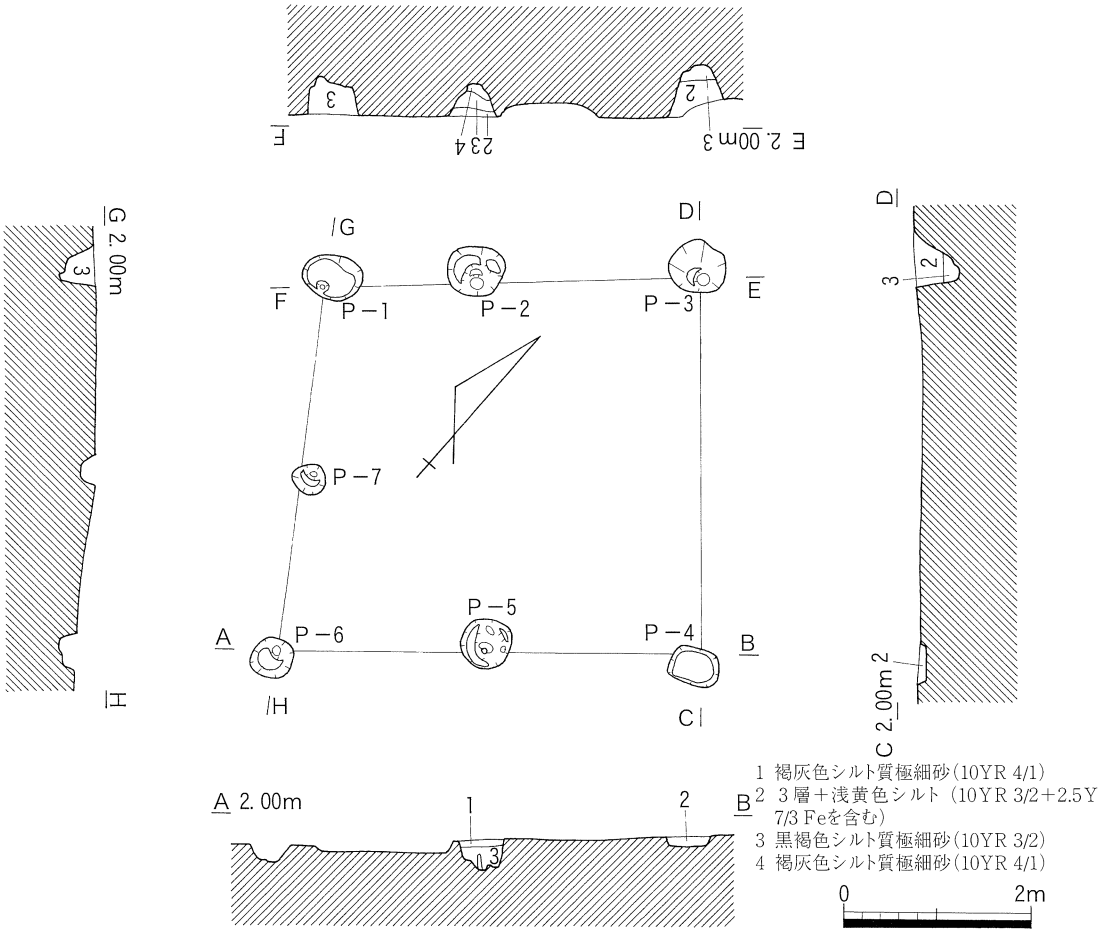
第194図　ＳＫ5001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

２）古墳時代

１　掘立柱建物跡

ＳＢ5004　（第195・196図）

調査区中央やや南寄りにおいて検出された掘立柱建物跡である。




第195図　ＳＢ5004平・断面図（Ｓ：１/80）

| 番号 | 器　種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | | 胎　土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵器　杯蓋 | 11.2 | | (2.1) | 内外面回転ナデ | 灰白N7/ | | 密 |
| 2 | 弥生土器　壷 | 23.0 | | (1.3) | 外面ナデ　内面摩滅 | 灰白10YR7/1 | 褐灰10YR5/1 | 細礫 |
| 3 | 弥生土器　甕 | | | (2.7) | 外面刷毛目　内面ナデ | 鈍い橙7.5YR6/4 | 鈍い褐7.5YR6/3 | 石英・長石・角閃石 |

第196図　ＳＢ5004出土遺物（Ｓ：１／４）

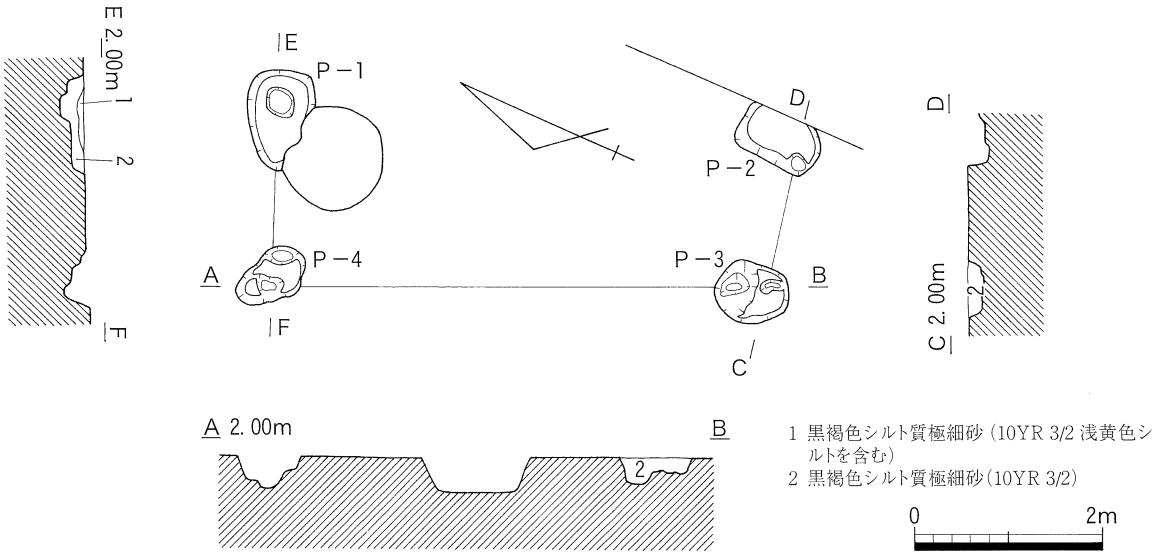
検出面のレベルは標高1.73～1.87mである。東列側柱は撹乱により消滅し，柱穴の総数は7個を数える。桁行は2間で，北側は4.46m，南側は4.95mを測り，梁行は2間で，東側は4.76m，西側は4.51mを測る。柱穴の配置は台形である。桁行の柱穴の芯芯距離は2.20m，梁行の芯芯距離は1.95mを測る。建物の主軸方位はN－50°－Eである。柱穴の平面形は不整な円形・楕円形を呈し，直径は0.35～0.63mを測る。深さは0.10～0.58mを測る。P－4を除いた柱穴は底面に柱痕の小穴が検出された。P－5は底面中央に現在長0.17mの柱材の一部が直立していた。埋土は4層に分けられ，柱痕を残す柱穴はない。

遺物は，須恵器杯蓋（1），弥生土器壺（2），同甕（3）であり，2と3は混入である。

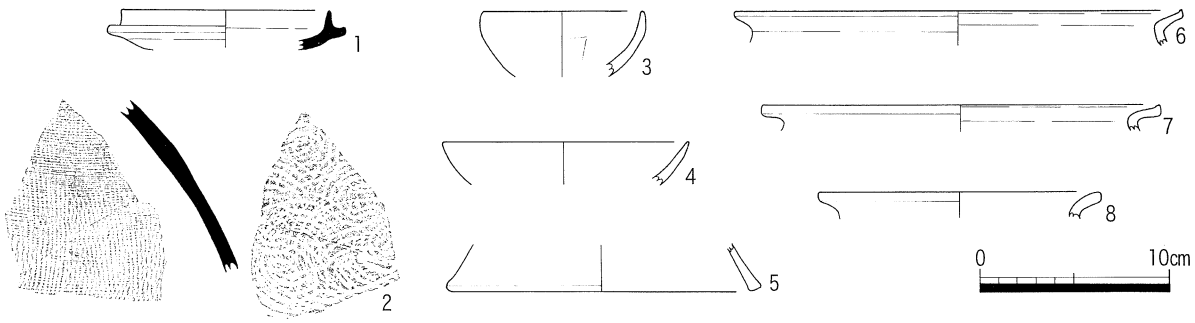
1はP－1より出土した杯蓋で，外面に若干の稜を持ち口縁部となる。

ＳＢ5005　（第197・198図）

調査区中央のやや南側に検出された掘立柱建物跡で，東側の調査区外にひろがっている。




第197図　ＳＢ5005平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵器　杯身 | 11.0 | | (2.1) | 内面回転ナデ　外面回転ナデ後にナデ | 灰白N7/ | | 細砂 |
| 2 | 須恵器　壺 | | | (9.8) | 外面叩目後に掻目　内面青海波状叩き | 灰白N8/ | | 密 |
| 3 | 土師器　椀 | 8.4 | | (3.5) | 口縁部ナデ　外面摩滅　内面篦ナデ | 橙7.5YR7/6 | | 密 |
| 4 | 土師器　杯 | 12.9 | | (2.3) | 内外面摩滅 | 橙2.5YR7/6 | | 微～細砂 |
| 5 | 弥生土器　高杯 | | 16.8 | (2.5) | 内外面摩滅　内面一部に篦削り | 鈍い褐7.5YR6/3 | 灰褐7.5YR6/2 | 石英・長石・角閃石 |
| 6 | 弥生土器　甕 | 23.8 | | (1.9) | 内外面摩滅 | 鈍い黄褐10YR5/3 | 鈍い黄褐10YR5/3 | 石英・長石・角閃石 |
| 7 | 弥生土器　甕 | 21.0 | | (1.4) | 内外面摩滅 | 鈍い橙7.5YR6/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 8 | 弥生土器　甕 | 15.0 | | (1.40) | 内外面摩滅 | 鈍い橙7.5YR7/3 | | 石英・長石 |

第198図　ＳＢ5005出土遺物（Ｓ：１/４）

検出面のレベルは標高1.76mである。検出できた柱穴の数は４個であり，Ｐ－１は近世の土坑に切られ，Ｐ－２の東側が調査区外にかかっている。西列柱穴は１間で，5.82mを測る。北列柱穴は１間のみの検出であり，現存長2.42mを測る。西列柱穴の芯芯距離は4.90m，北列柱穴の芯芯距離は2.00mを測る。西列柱穴の中心線の方位はＮ－25°－Ｗである。柱穴の平面形は不整な楕円形を呈し，短軸は0.50～0.73m，長軸0.78～1.05mを測る。深さは0.18～0.32mであり，全ての柱穴は底面に柱痕の小穴・段が検出される。埋土は２層に分けられる。

遺物は，須恵器杯身（１），同壺（２），土師器椀（３），同杯（４），弥生土器高杯（５），弥生土器甕（６～８）であり，５～８は混入である。

１は水平の受部で直立する口縁部の杯身であり，器高は低い。

２は胴部上半の破片であり，外面はタタキ目後にカキ目，内面は青海波状タタキ目である。

３は半球状の体部，４は器高の低い杯である。

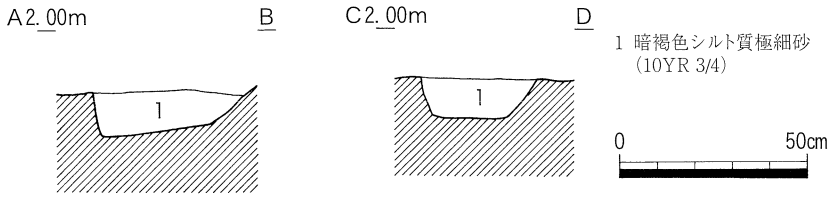
２　溝

ＳＤ5001　（第199・200図）

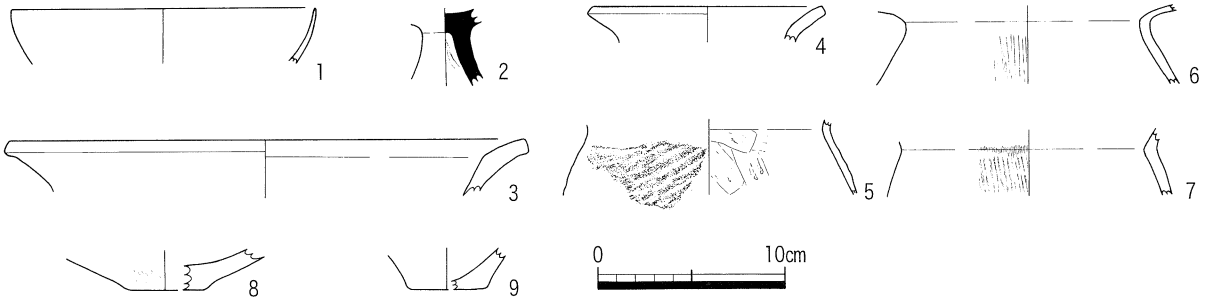
調査区北側において検出された東西方向の溝であり，東端は撹乱により消滅している。

検出面のレベルは標高1.90mである。検出できた溝の全長は約13.40mを測る。溝の幅は0.34～0.50m，深さは0.10mを測る。溝の方向はＥ－24°－Ｓである。溝の中央付近で２本の溝に分流し，再び１本に合流する。東端と西端では，ほぼ直角に曲がる溝と東西方向に走る溝に分流している。断面は逆台形を呈し，底面のレベルは同じである。埋土は単一層である。

遺物は，土師器鉢（１）須恵器高杯（２），土師器甕（３・４），弥生土器甕（５～９）であり，５～９は混入した遺物である。




第199図　ＳＤ5001断面図（Ｓ：１/20）



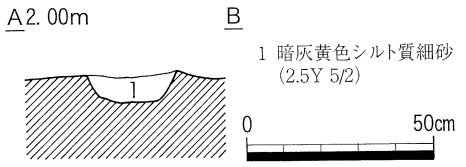

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　鉢 | 16.4 | | (2.9) | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 微砂 |
| 2 | 須恵器　高杯 | | | (4.1) | 杯部内面ナデ　脚部外面回転ナデ　内面しぼり目 | オリーブ灰2.5GY6/1 | | 微砂 |
| 3 | 土師器　甕 | 27.6 | | (3.0) | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 黒褐7.5YR3/1 | 微砂～粗砂 |
| 4 | 土師器　甕 | 12.2 | | (1.9) | 内外面摩滅 | 鈍い黄橙10YR7/4 | | 微砂～細砂多量 |
| 5 | 弥生土器　甕 | | | (4.0) | 外面叩目　内面篦削り | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英・長石 |
| 6 | 弥生土器　甕 | | | (4.1) | 外面粗い刷毛目　内面ナデ | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 微砂～細砂 |
| 7 | 弥生土器　甕 | | | (3.5) | 外面細かい刷毛目・粗い刷毛目　内面ナデ | 鈍い黄橙10YR7/4 | 橙2.5YR6/6 | 石英・長石・角閃石 |
| 8 | 弥生土器　甕 | | 4.0 | (2.1) | 外面刷毛目　内面篦削り | 淡黄2.5Y8/4 | | 微砂・石英 |
| 9 | 弥生土器　甕 | | 4.2 | (2.1) | 外面ナデ　内面摩滅 | 黒10YR2/1 | 黄褐10YR5/6 | 石英・長石・角閃石 |

第200図　ＳＤ5001出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ5002　（第201・202図）

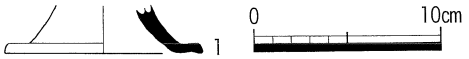
調査区中央において検出された南北方向の溝である。

検出面のレベルは標高1.80～1.90mである。検出できた溝の全長は約33m，幅は0.25m，深さは７㎝を測る。溝の方向はＮ－12°－Ｅを示す。底面のレベルは平坦であり，断面は逆台形を呈す。



第201図　ＳＤ5002断面図（Ｓ：１/20）

遺物は，須恵器高杯（１），同蓋，土師器甕である。



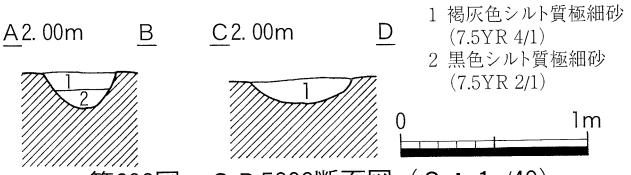

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵器　高杯 | | 10.4 | (2.5) | 内外面回転ナデ | 灰白10Y8/1 | | 微砂 |

第202図　ＳＤ5002出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ5003　（第203・204図）

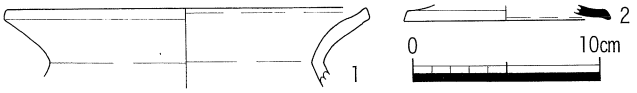
調査区中央に検出された溝であり，東端は攪乱を受け，ＳＤ5009・ＳＸ5001に切られる。

検出面のレベルは標高1.86mである。溝の検出全長は約7.00mを測り，幅は0.40m，深さは６～22㎝を測る。溝の方位はＥ－35°－Ｓを示し，西端部では北方向に湾曲する。底面のレベルは東から西に低くなっている。断面はＵ字形を呈する。埋土は２層に分層できる。



第203図　ＳＤ5003断面図（Ｓ：１/40）

遺物は，土師器甕（１），須恵器蓋（２）である。

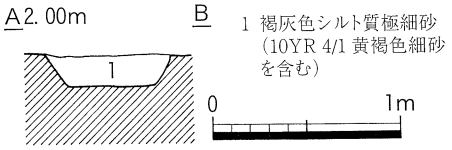



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　甕 | 19.0 | | 4.2 | 口縁部横ナデ　胴部ナデ | 淡黄2.5Y8/3 | | 微砂～細砂 |
| 2 | 須恵器　高杯 | | 11.0 | (0.8) | 回転ナデ | 灰白10Y8/1 | | 微砂 |

第204図　ＳＤ5003出土遺物（Ｓ：１/４）

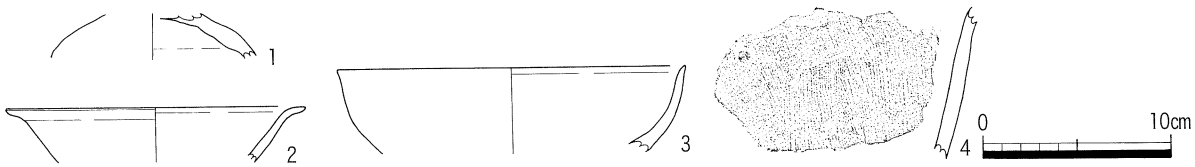
ＳＤ5004　（第205・206図）

調査区中央北寄りにおいて検出された溝であり，ＳＤ5007と交差し，ＳＢ5007に切られる。溝の南端はＳＸ5001の最深部とつながる。検出面のレベルは標高1.86m前後である。検出全長は約14.00m，幅は0.60m，深さは0.20mを測る。溝の方位はＮ－30°－Ｅを示し，ＳＤ5007の交差点で若干東方に曲がる。断面は逆台形を呈し，底面は北側に低くなる。



第205図　ＳＤ5004断面図（Ｓ：１/40）

遺物は，土師器杯蓋（１），同鉢（２・３），同甕（４）。



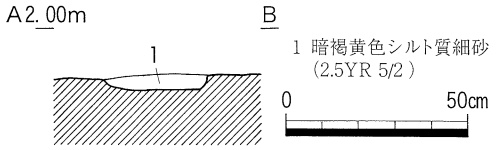

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　杯蓋 | | | (2.4) | 回転ナデ | 明オリーブ灰2.5G7/1 | | 細砂 |
| 2 | 土師器　鉢 | 15.8 | | (2.9) | 外面ナデ　内面摩滅 | 橙5YR6/6 | 鈍い黄橙10YR7/4 | 細砂～粗砂 |
| 3 | 土師器　鉢 | 18.6 | | (4.5) | 内外面摩滅 | 灰白7.5YR8/2 | | 微砂 |
| 4 | 土師器　甕 | | | (8.1) | 外面刷毛目　内面指頭圧痕・篦ナデ | 淡黄2.5Y8/3 | 灰白2.5Y8/2 | 細砂～粗砂 |

第206図　ＳＤ5004出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ5005　（第207・208図）

調査区中央北寄りにおいて検出された溝であり，ＳＢ5007・ＳＸ5001に切られる。検出面のレベルは標高1.85m前後である。検出全長は8.10m，幅は0.25m，深さは５㎝を測る。溝の方位はＮ－36°－Ｅを示す。断面は逆台形を呈し，底面は北側にゆるやかに低くなる。

遺物は，土師器壷（１）と土師器小片である。




第207図　ＳＤ5005断面図（Ｓ：１/20）

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　壷 | 14.6 | | (3.6) | 内外面摩滅 | 灰黄2.5Y6/2 | | 微砂 |

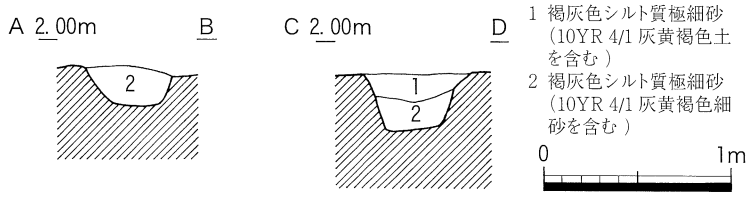
第208図　ＳＤ5005出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ5006　（第209・210図）

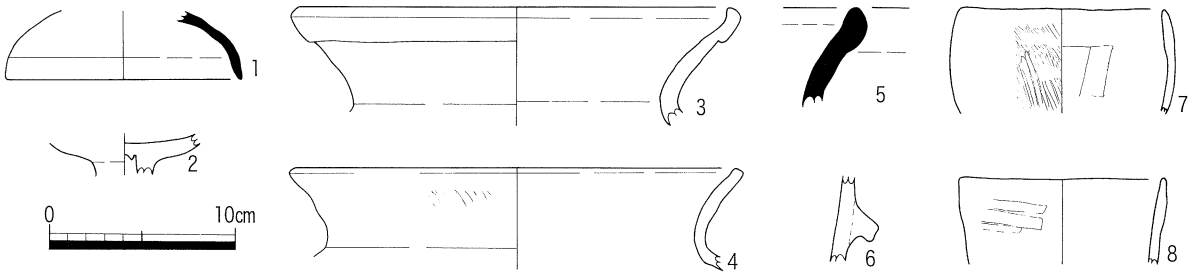
調査区中央北寄りに検出された溝であり，南端は撹乱を受け，北端はＳＤ5007と合流する。

本溝はＳＢ5007に切られる。検出面のレベルは標高1.90m前後である。検出全長波10.25m，幅は0.40～0.63m，深さは0.26～0.33mを測る。溝の方位はＮ－34°－Ｅを示す。断面は逆台形を呈す。底面のレベルは北側にゆるやかに低くなる。

遺物は，須恵器杯蓋（１），同甕（５），土師器高杯（２），同甕（３・４・６），同製塩土器（７・８）である。




第209図　ＳＤ5006断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵器　杯蓋 | 12.5 | | (3.6) | 回転ナデ | 灰白10Y8/1 | | 微砂～粗砂 |
| 2 | 土師器　高杯 | | | (2.2) | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微砂 |
| 3 | 土師器　甕 | 22.6 | | (6.3) | 回転ナデ | 灰5Y6/1 | 灰白5Y7/1 | 微砂 |
| 4 | 土師器　甕 | 23.4 | | (5.4) | 口縁部横ナデ　一部篦ナデ　胴部内面ナデ | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 微砂～粗砂 |
| 5 | 須恵器　甕 | | | (5.2) | 回転ナデ　外面施釉 | オリーブ灰2.5GY5/1 | オリーブ灰5GY6/1 | 細砂 |
| 6 | 土師器　甕 | | | (4.5) | 内外面摩滅 | 橙7.5YR7/6 | | 細砂～粗砂 |
| 7 | 土師器　製塩土器 | 10.8 | | (5.5) | 口縁部ナデ　胴部外面刷毛目後にナデ　内面板ナデ | 明赤褐2.5YR5/6 | 鈍い黄橙10YR6/4 | 微砂～細砂 |
| 8 | 土師器　製塩土器 | 10.8×12.4 | | (4.5) | 口縁部・胴部内面ナデ　外面ナデ・篦削り | 明赤褐2.5YR5/6 | | 細砂～粗砂 |

第210図　ＳＤ5006出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ5007　（第211～215図）

調査区中央やや北寄りで検出された溝であり，ＳＤ5004・5006・5008と交差・合流する。

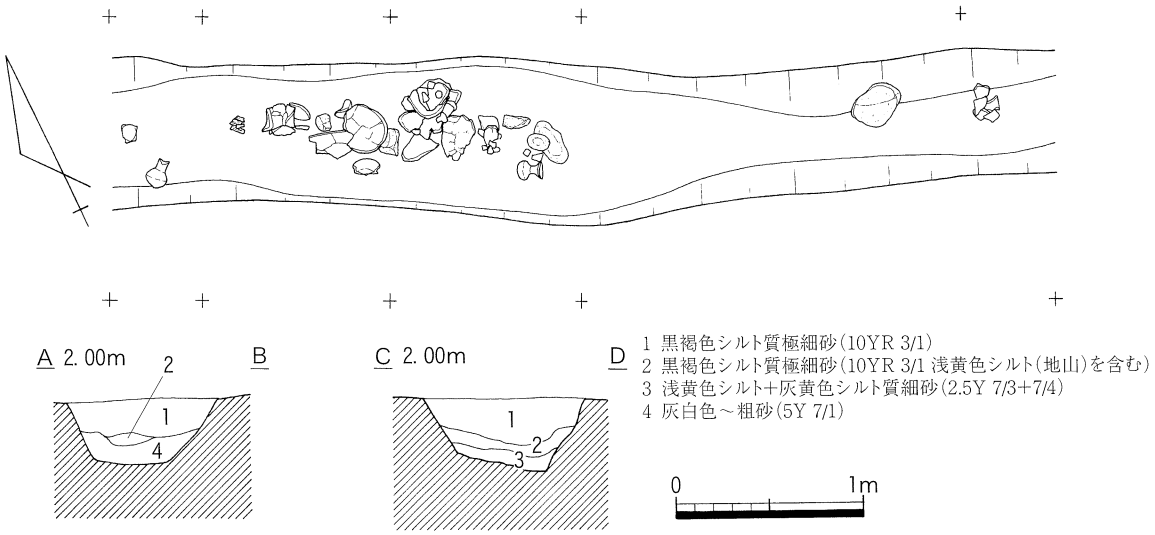
検出面のレベルは標高1.86～1.90mであり，ＳＤ5004との交差点より東側は撹乱による削平

を受けている。検出できた溝の全長は約20m，幅は0.50～0.85m，深さ0.20～0.30mを測る。溝の方位はE－30°－Sを示し，SD5006との合流点より東側は南方に曲がり，全体として湾曲している。SD5006の交差点において，本溝は分流するが，北側の溝は撹乱を受けて約3.20mのみ検出された。溝の断面は逆台形を呈し，埋土は4層に分層された。溝の底面レベルは平坦である。溝の西端において，多量の土器が集中して出土した。

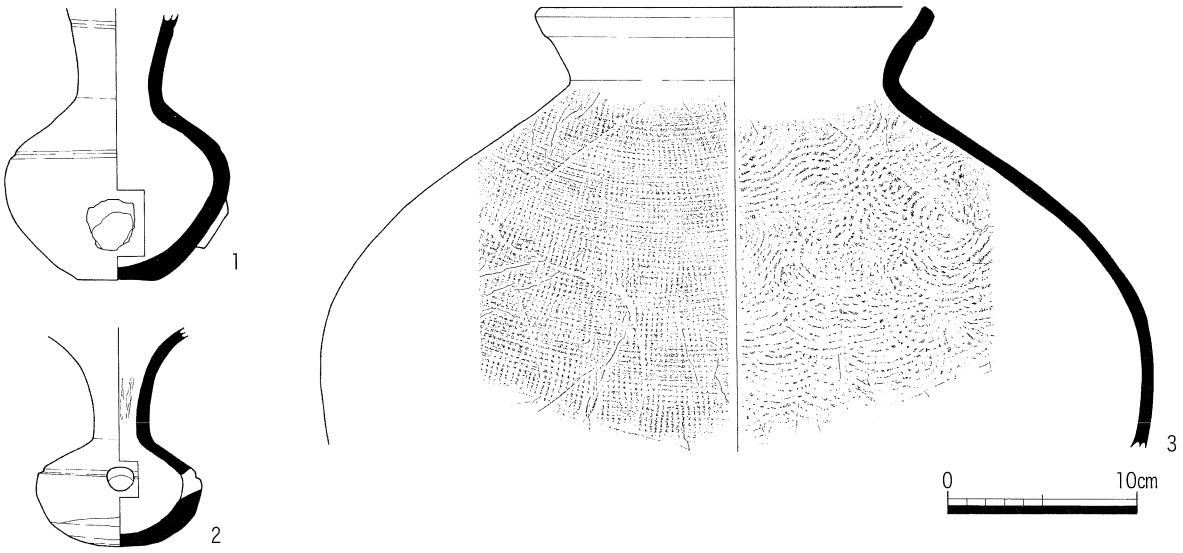
遺物は，須恵器壷（1），同瓶（2），同甕（3），土師器高杯（4～6），同甕（10・16），同鉢（7・15），弥生土器壺（8），同甕（9・11・12），土錘（13・14）である。

1は口縁部を欠損し，頸部内面と胴部外面上半に緑色の自然釉がかかっている。胴部外面下半に他の土器片が2個付着する。2は口縁部を欠損し，算盤玉状の胴部から頸部は大きく外反する。3の口縁部は外方に若干ふくれる。1～3は7世紀初頭のものである。

4は完形の高杯で，杯部は浅い半球形を呈す。6は粘土帯で離れている。




第211図　SD5007平・断面図（S：1/40）

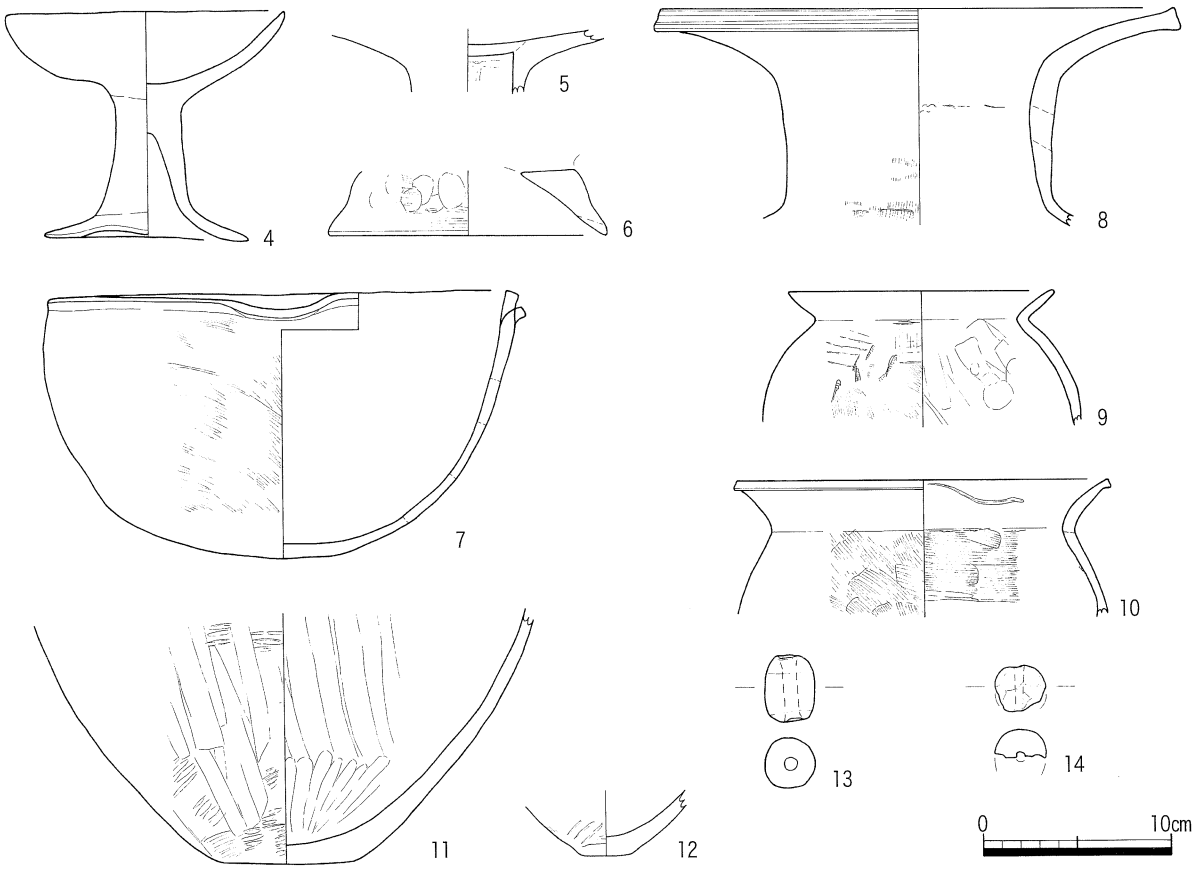



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内 | |
| 1 | 須恵器　壷 | | 4.4 | (14.3) | 頸部内面・胴部外面上半に自然釉 | 灰白N8/ | | 細砂 |
| 2 | 須恵器　瓶 | | | (11.6) | 頸部内面しぼり目　胴部外面下半回転篦削り | 明青灰5PB7/1 | | 微砂　精選 |
| 3 | 須恵器　甕 | 21.2 | | (23.5) | 胴部外面格子状叩目　内面青海波状叩目 | 灰白N7/ | | 密 |

第212図　SD5007出土遺物（1）（S：1/4）

7はほぼ完形の鉢であり，片口を有する。胴部は半球形を呈し，口縁部は若干外反する。外面は2種類の刷毛目が施される。断面に接合痕が明瞭に見える。

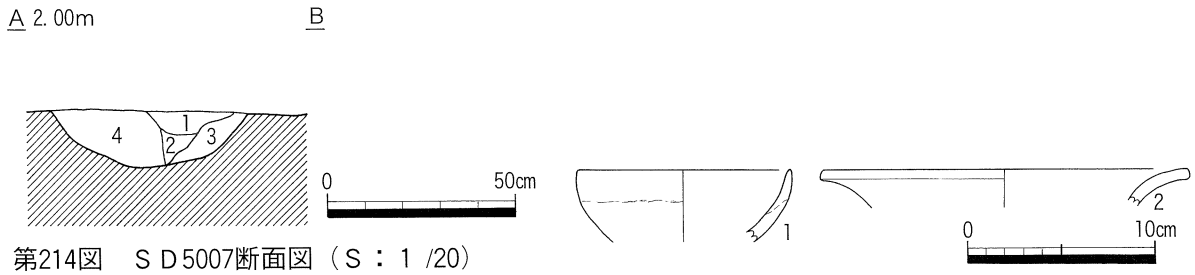
8～9，11～12は混入したものである。8は広口壺であり，口縁部にわずかな凹線を有し直




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外（釉） | 内（素地） | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 土師器　高杯 | 15.0 | 11.0 | 11.8 | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 褐灰7.5YR6/1 | 細砂～粗砂 |
| 5 | 土師器　高杯 | | | (3.4) | 内外面摩滅　脚部内面篦削り　円盤充填 | 橙5YR6/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 6 | 土師器　高杯 | | 14.8 | (3.4) | 外面指頭圧痕後に刷毛目　内面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微～粗砂 |
| 7 | 土師器　鉢 | 25.0 | | 14.1 | 片口　胴部外面刷毛目・ナデ　内面ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 細砂～粗砂 |
| 8 | 弥生土器　壺 | 27.2 | | (11.4) | 広口壺　口縁端部に凹線　頸部外面刷毛目 | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 石英・長石・角閃石 |
| 9 | 弥生土器　甕 | 14.0 | | (7.2) | 外面叩目後に篦ナデ・刷毛目　内面指頭圧痕・板ナデ | 橙7.5YR6/6 | | 石英・長石・角閃石 |
| 10 | 土師器　甕 | 19.6 | | (7.2) | 口縁部ナデ　胴部刷毛目 | 浅黄橙10YR8/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 11 | 弥生土器　甕 | | 7.0 | (13.3) | 外面叩目後に篦ナデ・ナデ　内面篦削り・指ナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 石英・長石・角閃石 |
| 12 | 弥生土器　甕 | | 2.5 | (3.4) | 外面叩目後にナデ・刷毛目　内面ナデ | 灰褐7.5YR6/2 | 浅黄2.5Y7/3 | 石英・長石・角閃石 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 土錘 | 3.5 | (径) 2.6 | | | | 淡黄2.5Y8/3　石英・長石・角閃石 |
| 14 | 土錘 | 2.4 | (径) 2.7 | | | | 橙5YR6/6　微砂 |

第213図　ＳＤ5007出土遺物（２）（Ｓ：１／４）




第214図　ＳＤ5007断面図（Ｓ：１/20）

| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 土師器　鉢 | 11.2 | | (3.8) | 内外面ナデ | 橙5YR7/6 | 浅橙5YR8/4 | 微砂 |
| 16 | 土師器　甕 | 19.4 | | (2.0) | 口縁部横ナデ | 橙5YR6/6 | 浅黄橙10YR8/3 | 微砂～粗砂 |

第215図　ＳＤ5007出土遺物（３）（Ｓ：１／４）

立する頸部から口縁部は大きく外反する。9はくの字口縁で，外面はタタキ目・刷毛目・ヘラナデ，内面は指頭圧痕後に板ナデが施される。

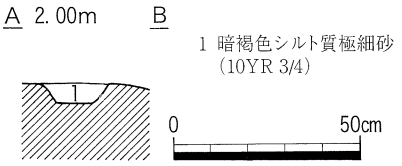
13は管状，14は玉状の土錘である。

ＳＤ5008　（第216・217図）

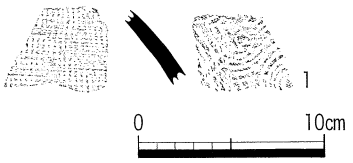
調査区北西側で検出された溝であり，ＳＤ5001とＳＤ5007の間に位置する。本溝の南端はＳＤ5007に切られる。

検出面のレベルは標高1.90mである。検出できた溝の全長は2.40m，幅は0.10m，深さは6㎝を測る。溝の方位はＮ－19°－Ｅを示し，ＳＤ5001の西端部で南側に分流する溝と同方向である。断面は逆台形を呈す。埋土は単一層である。

遺物は，須恵器壷（1）である。1は胴部上半の破片であり，外面は格子状タタキ目の後にカキ目が施される。




第216図　ＳＤ5008断面図（Ｓ：１/20）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵器　甕 | | | (4.2) | 外面格子状叩目の後に掻目　内面青海波状叩目 | 灰白10Y8/1 | | 微砂 |

第217図　ＳＤ5008出土遺物（Ｓ：１/４）

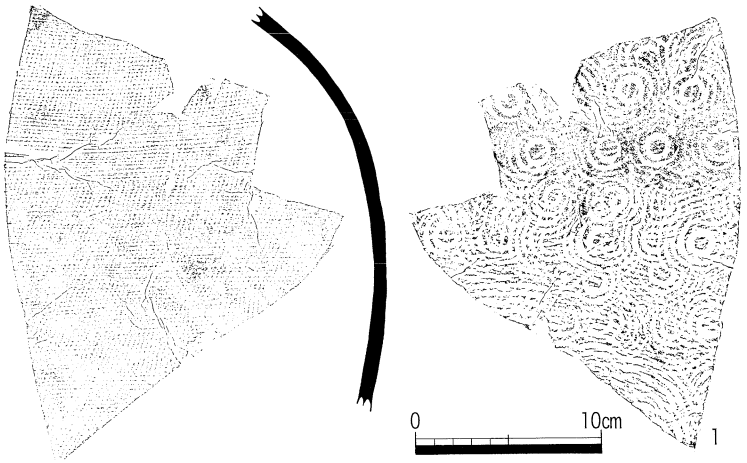
3　柱穴

ＳＰ5267　（第218図）

調査区中央の北東側に検出された柱穴であり，ＳＤ5007に切られる。

検出面のレベルは標高1.69mである。平面形は楕円形を呈し直径0.40×0.70m，深さ0.10mを測る。掘り方は段を有する。

遺物は，須恵器壷（1）であり，上部に自然釉がかかる。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵器　壷 | | | (21.7) | 外面格子状叩目の後に掻目　内面青海波状叩目 | 灰白N8/ | | 密 |

第218図　ＳＰ5267出土遺物（Ｓ：１/４）

4　性格不明遺構

ＳＸ5001　（第219～221図）

調査区中央の北西寄りにおいて検出された遺構であり，ＳＤ5003～5005と接する。本遺構がＳＤ5005を切っており，数個の近世の柱穴に切られている。ＳＤ5003・5005との新旧関係は不明であり，溝の掘り込みが本遺構内から検出されていることから，両遺構は何らかの関連があると考えられる。

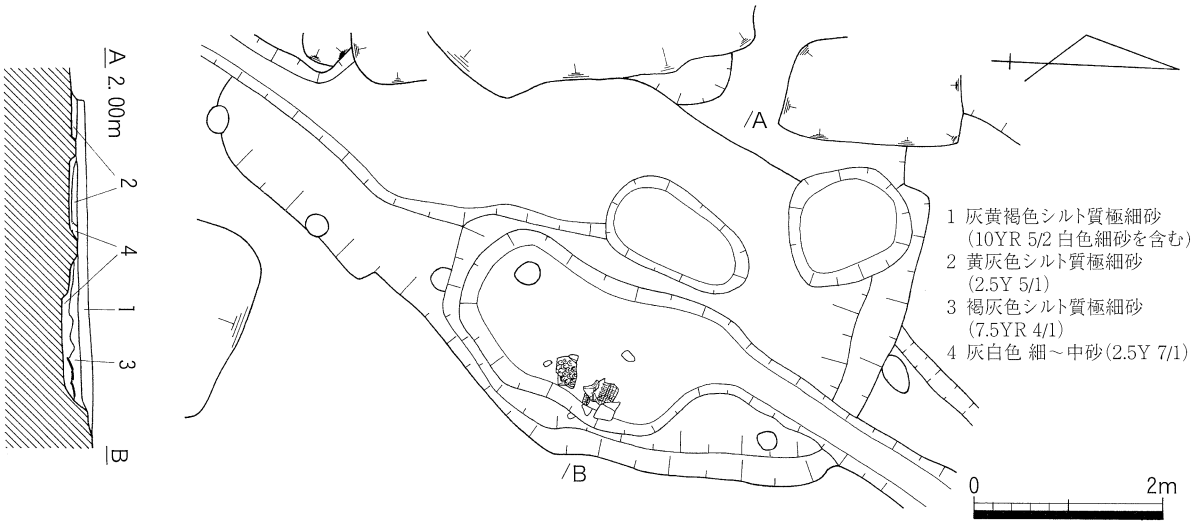
遺構は西側に撹乱を受けており，平面形は不明であるが，発掘部分から判断して他の土坑に比べ規模が大きいことから性格不明遺構とした。検出面のレベルは標高1.85m前後である。検出できた部分の平面形は不整な楕円形を呈し，南北径は約7.60mを測り，東西の長さは現状で約3.40mを測る。検出面から底面までの深さは0.10m測り，底面に3ヶ所の落ち込みが検出さ

れた。東側の落ち込みは不整楕円形を呈し，南北方向の長軸は2.76m，短軸は1.25mを測る。検出面からの深さは0.33mを測る。この落ち込みの北西隅はＳＤ5004とつながっている。この落ち込みの底面より10cm上において，須恵器甕（第221図－９）が割れた状態で出土した。中間にある落ち込みは不整な楕円形を呈し，南北方向の長軸は1.64m，短軸は0.92mを測る。検出面からの深さは0.29mである。西側の落ち込みは不整な楕円形を呈し，直径は1.30mを測る。検出面からの深さは0.27mである。これらの落ち込みを含めたＳＸ5001の埋土は４層に分層され，自然堆積である。ＳＸ5001の埋土は灰黄褐色シルト質極細砂の単一層であり，残りの３層は落ち込みに充填している。

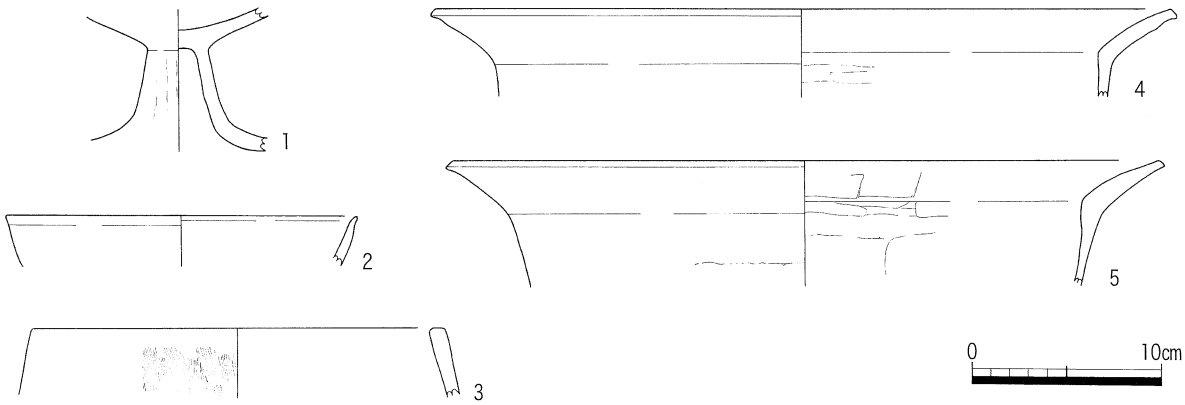
遺物は，土師器高杯（１），同鉢（２），同甕（３～５），須恵器杯身（６），同高杯（７），同甕（８・９），その他の土師器片・須恵器片である。

１は口縁部・裾部を欠損する。脚部は大きく外に広がる。内外面とも摩滅が著しいが，脚部外面にヘラ削り，内面にナデが部分的に残っている。

２は口縁部の外反する鉢で，内外面とも摩滅している。

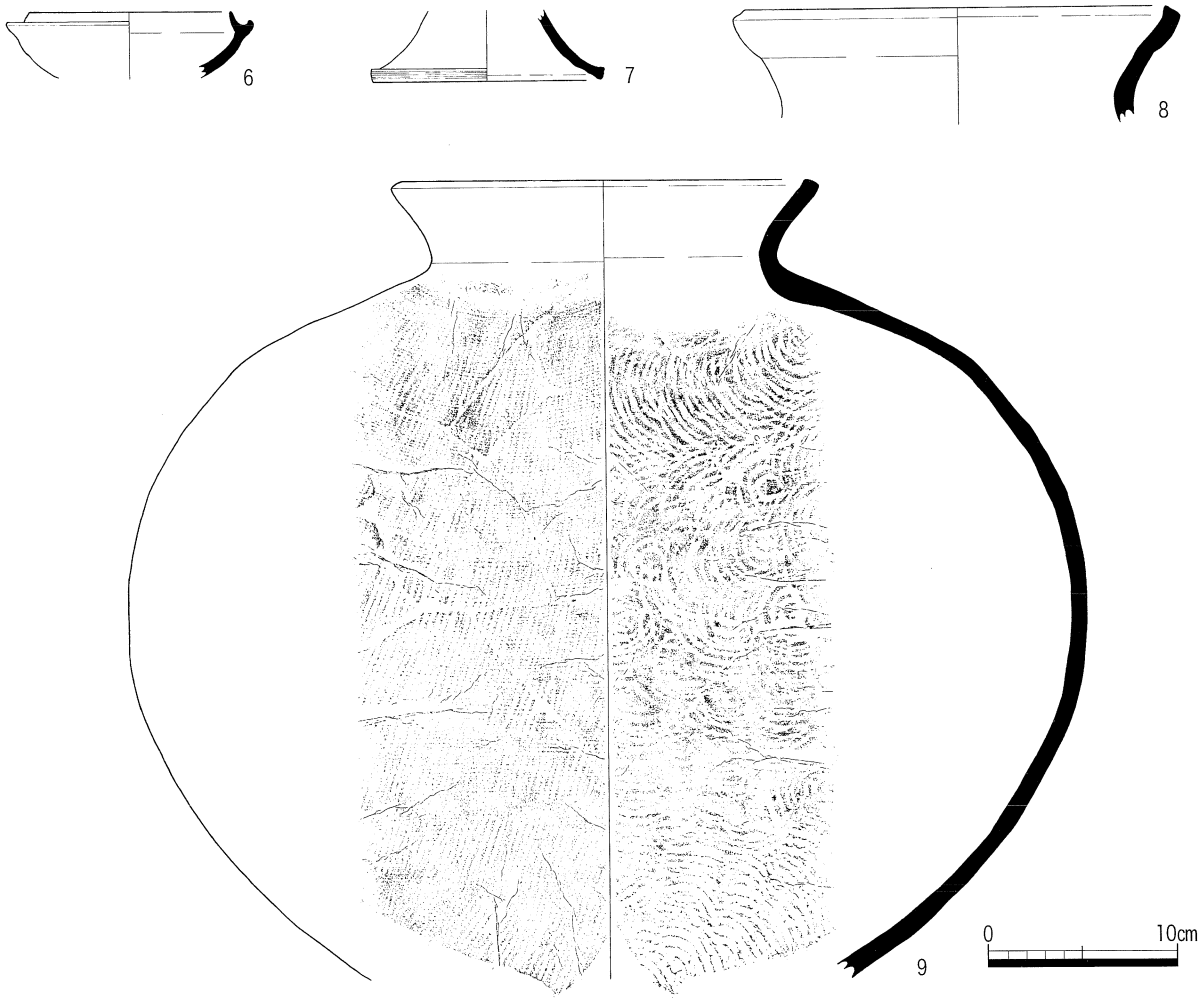



第219図　ＳＸ5001平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　高杯 | | | (7.5) | 内外面摩滅　脚部外面篦削り　内面ナデ | 灰白10YR8/2 | | 石英･細～粗砂 |
| 2 | 土師器　鉢 | 18.8 | | (2.7) | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 微砂 |
| 3 | 土師器　甕 | 21.8 | | (3.7) | 口縁部･胴部内面ナデ　胴部外面刷毛目 | 浅黄2.5Y8/3 | 灰白2.5Y7/1 | 細～粗砂 |
| 4 | 土師器　甕 | 38.8 | | (4.7) | 外面ナデ　内面ナデ･篦ナデ | 明赤褐5YR5/6 | | 微～粗砂 |
| 5 | 土師器　甕 | 37.4 | | (6.7) | 口縁部内面篦ナデ　胴部内面篦削り･ナデ | 橙5YR6/6 | | 細～粗砂 |

第220図　ＳＸ5001出土遺物（１）（Ｓ：１/４）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 6 | 須恵器　杯身 | 10.8 | | (3.5) | 外面回転ナデ後にナデ　内面回転ナデ | 明赤灰5R7/1 | 明青灰5PB7/1 | 細砂若干 |
| 7 | 須恵器　高杯 | | 12.2 | (3.7) | 回転ナデ | 灰白N7/ | | 微砂 |
| 8 | 須恵器　甕 | 22.2 | | (6.2) | 摩滅 | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂 |
| 9 | 須恵器　甕 | 22.6 | | (42.5) | 外面格子状叩目　内面青海波状叩目 | 灰白N8/ | | 粗砂 |

第221図　ＳＸ5001出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

３は内傾する胴部からそのまま口縁部に至る。外面は刷毛目，内面はナデが施される。

４・５は胴部から大きく外反する口縁部を有する甕であり，内外面はナデ・ヘラナデが施される。５は外面に接合痕が残存する。

６は口径10.8cmの杯身であり，斜めに延びる受部から内傾する口縁部が付く。外面は回転ナデの後にナデが施される。６世紀末～７世紀初頭のものである。

７は高杯の脚部であり，裾部は若干拡張し，外面に浅い沈線を巡らす。

８は口縁部のみ残存し，口縁部は外反し，口縁端部が内側に拡張する。内外面とも磨滅のため調整は不明である。６世紀末～７世紀初頭のものである。

９は口径22.6cm，胴部最大径51.0cmを測る大型の甕である。胴部は球形を呈し，口縁端部は若干内側に拡張する。胴部外面は格子目状タタキ目，内面は青海波状タタキ目が施される。６世紀末～７世紀初頭のものである。

ＳＸ5002　（第222・223図）

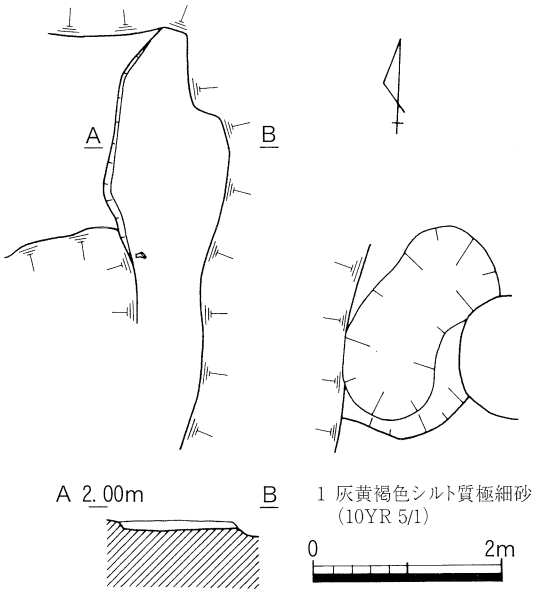
調査区中央の北側において検出された遺構であり，ＳＤ5007・ＳＫ5005に切られる。

検出面のレベルは標高1.90mである。遺構は撹乱を受けて，検出できたのは西側と南東側の一部であり，平面形は円形を呈する。東西径は約５ｍを測る。西側の深さは0.12mであり，底面は平坦である。南東部はほとんど掘り込みがないが，長軸2.20m，短軸1.15mを測る抉りのある楕円形の落ち込みが検出された。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂の単一層である。

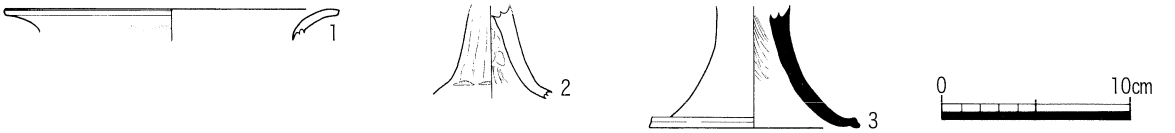
遺物は，土師器甕（１），同高杯（２），須恵器高杯（３），他の土師器片・須恵器片である。

３は脚部のみであり，裾部が上下に拡張する。

６世紀末～７世紀初頭のものである。




第222図　ＳＸ5002平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　甕 | 18.0 | | (1.7) | 口縁部横ナデ　外面刷毛目 | 鈍い黄橙10YR7/3 | | 石英・長石・角閃石 |
| 2 | 土師器　高杯 | | | (4.9) | 外面磨滅（篦削り）　内面摩滅（しぼり目・指頭圧痕） | 橙5YR7/6 | | 微砂若干 |
| 3 | 須恵器　高杯 | | 11.6 | (6.4) | 回転ナデ　内面しぼり目 | 灰白N8/ | | 細砂 |

第223図　ＳＸ5002出土遺物（Ｓ：１/４）

３）古代～中世

１　掘立柱建物跡

ＳＢ5006　（第224・225図）

調査区南側に検出された掘立柱建物跡であり，同時期と考えられる柱穴群と重複する。

検出面のレベルは標高1.71～1.80mである。遺構は東側の調査区外に延びており，規模や主軸方向等は不明である。建物は東西方向で３間以上，南北方向で４間の規模であり，検出できた東西方向の長さは約６ｍ，南北方向の全長は約8.40mを測る。検出された柱穴の総数は12個であり，総柱建物である。北西隅に１×２間の張り出し部分が存在する。南北方向の柱列の方位はＮ－12°－Ｅを示す。柱穴の距離は芯芯距離で2.00～2.20mを測る。柱穴は円形ないし楕円形を呈し，直径は0.20～0.44m，深さは８～27cmを測る。柱穴の中でＰ－３～５・Ｐ－９・Ｐ－11・Ｐ－12は２～６個の柱穴が重なり合って検出されており，建て替えが行われたとも考えられる。Ｐ－２・Ｐ－６・Ｐ－12は詰石・根石が残存する。Ｐ－３・Ｐ－６・Ｐ－10・Ｐ－11は底面の西寄りに段を有し，柱穴の東寄りに柱痕がある。Ｐ－８・Ｐ－11は柱穴内より土器が出土した。

遺物は，土師質小皿（１～４），同杯（５～９・21～23），同椀（10～17・20・24・25），瓦器椀（18），須恵器椀（19），同壺（26），他の土師器片・土師質土器片・須恵器片である。

１～４は回転ナデによる小皿で，１・４の底面は回転ヘラ切り後にナデが施される。

５・６は口径12.0cmを測る杯で，６の底面は回転ヘラ切り後にナデが施される。７～９は口

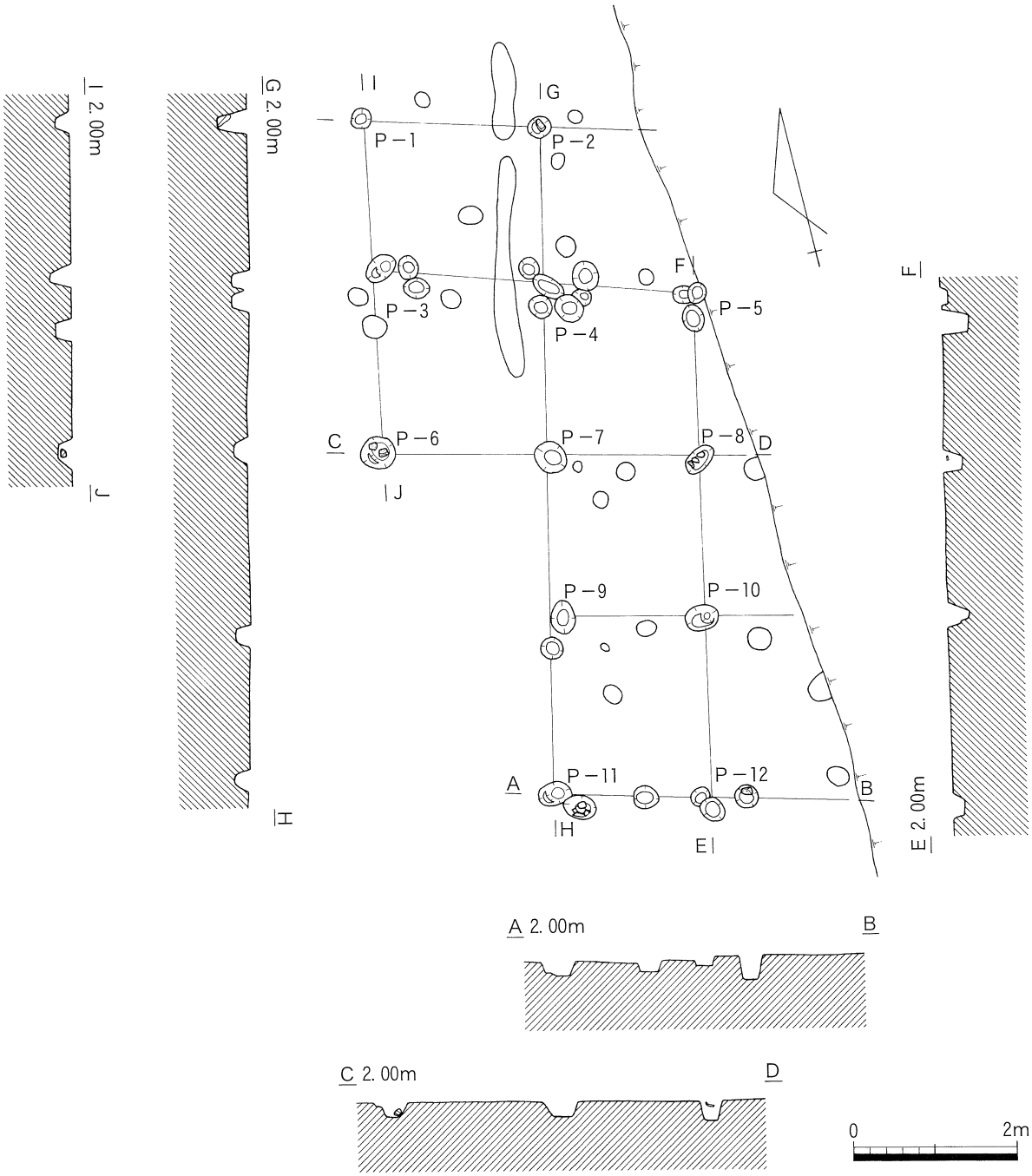
径14.0～16.0cmを測る杯である。21～23は平底で，23は回転ヘラ切り後にナデが施される。

10～17は半球形の体部の椀であり，10・12～17はヘラミガキが施される。12・13・14・17は内面黒色である。12には重ね焼き痕が見える。20は口径19.6cmを測る。24・25は高台を有する底部であり，25の高台は方形の断面を呈する。

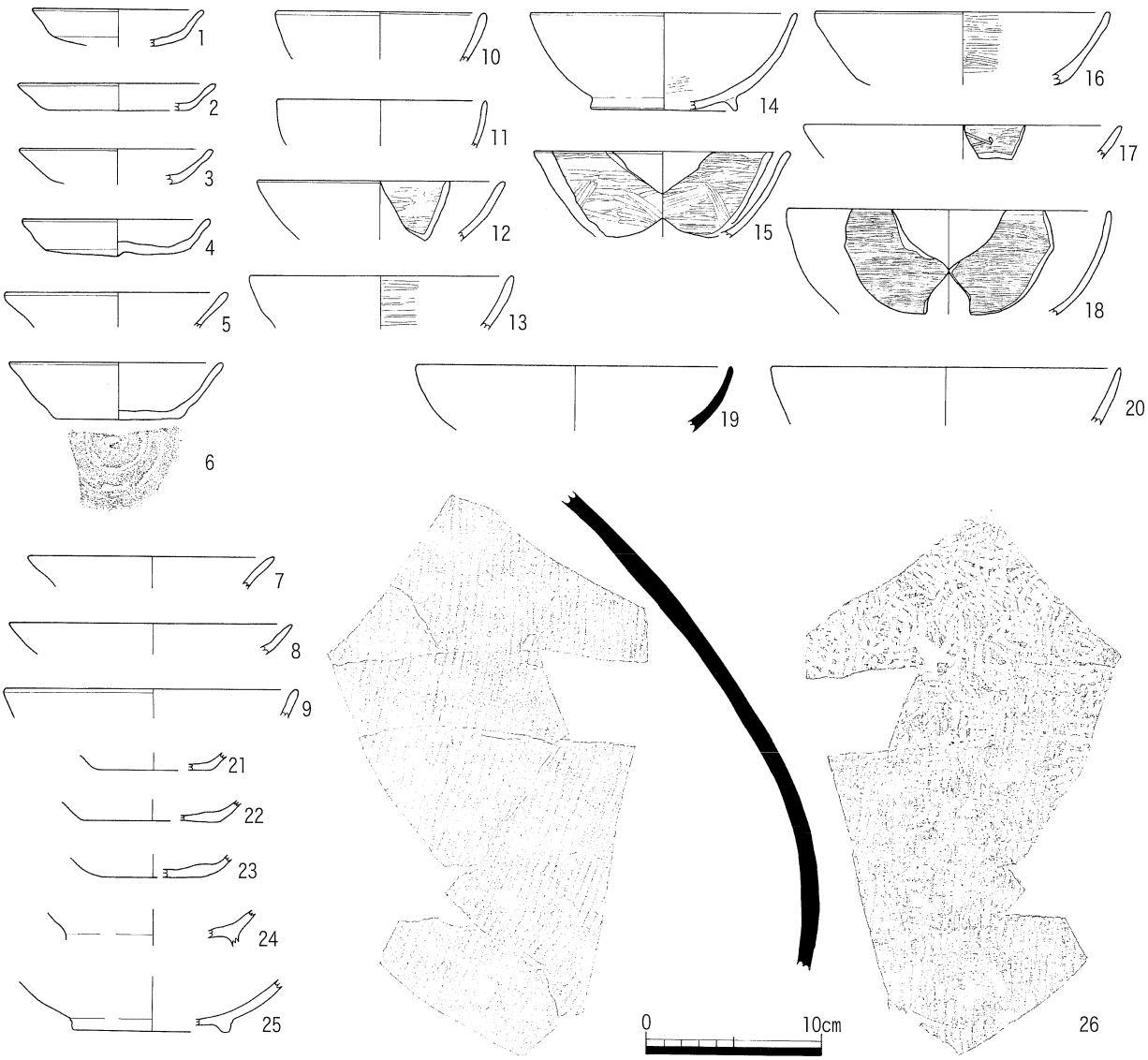
18は内外面にていねいなヘラミガキを施している。

19は器高の低い椀である。

26は胴部上半であり，外面に斜行タタキ目・格子タタキ目，内面に青海波状タタキ目が施され，上部に自然釉がかかる。




第224図　ＳＢ5006平・断面図（Ｓ：１/80）



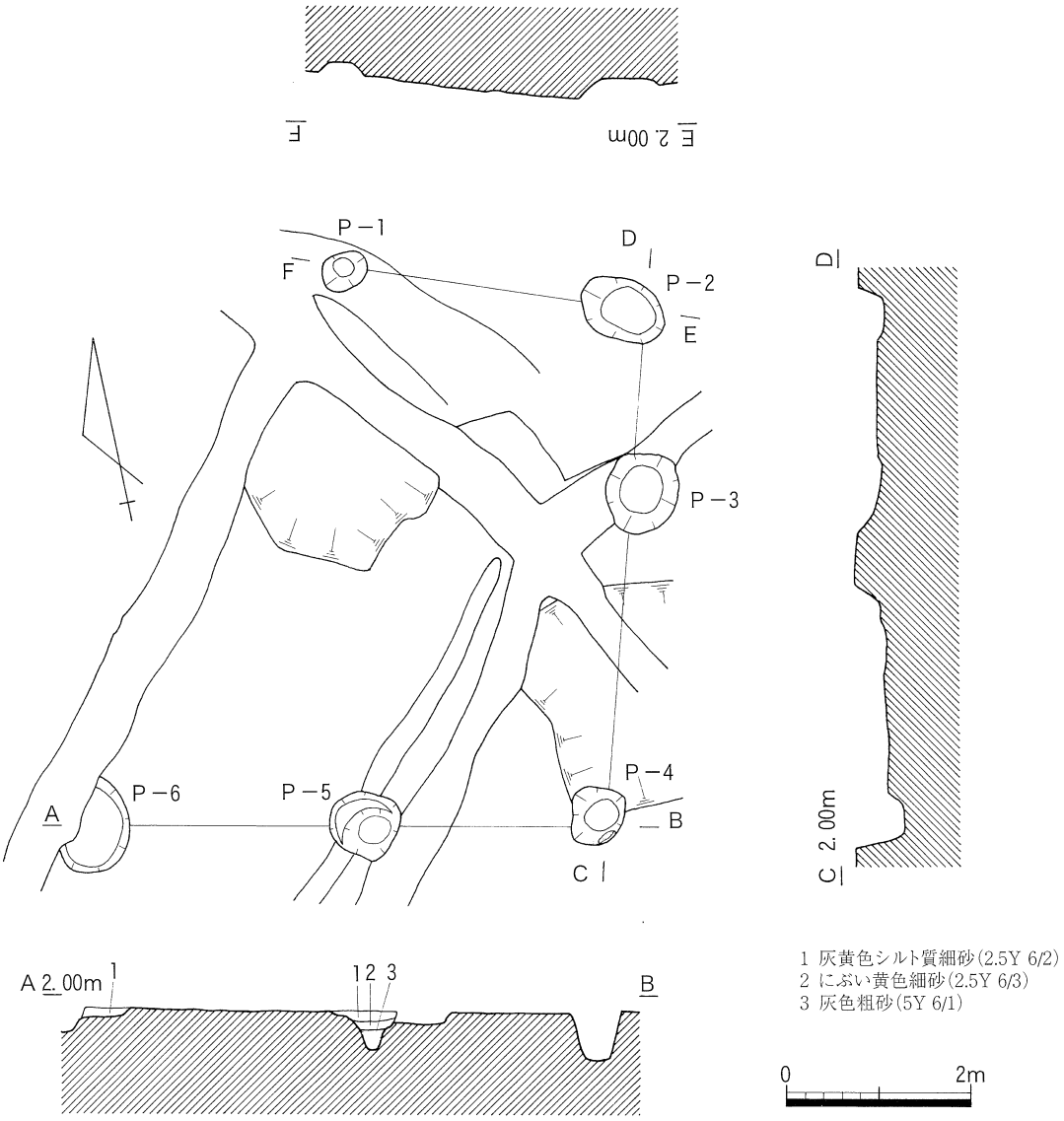

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師質土器 小皿 | 9.6 | | (2.1) | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 灰白10YR8/1 | 粗砂 |
| 2 | 土師質土器 小皿 | 11.2 | 7.6 | 1.5 | 回転ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 粗砂 |
| 3 | 土師質土器 小皿 | 11.0 | | (2.0) | 回転ナデ | 灰白N8/ | | 粗砂 |
| 4 | 土師質土器 小皿 | 10.6 | 8.5 | 2.1 | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 灰白7.5YR8/2 | | 細砂 |
| 5 | 土師質土器　杯 | 12.4 | | (2.0) | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/4 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 粗砂 |
| 6 | 土師質土器　杯 | 12.2 | 7.0 | 3.2 | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 橙7.5YR7/6 | 赤橙10YR6/6 | 微砂 |
| 7 | 土師質土器　杯 | 14.0 | | (1.8) | 口縁部横ナデ　体部ナデ | 浅黄2.5Y8/3 | 浅黄橙10YR8/3 | 粗砂 |
| 8 | 土師質土器　杯 | 16.2 | | (1.8) | 回転ナデ | 橙5YR7/6 | | 粗砂 |
| 9 | 土師質土器　杯 | 16.6 | | (1.7) | 回転ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 粗砂 |
| 10 | 土師質土器　椀 | 11.8 | | (2.7) | 外面回転ナデ　内面篦磨き | 浅黄2.5Y8/3 | 黄灰2.5Y5/1 | 粗砂 |
| 11 | 土師質土器　椀 | 11.8 | | (2.6) | 回転ナデ | 淡赤橙2.5YR7/4 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 粗砂 |
| 12 | 土師質土器　椀 | 13.8 | | (3.3) | 外面ナデ　内面篦磨き　内面黒色 | 灰白10YR8/2 | 黒10YR2/1 | 微砂 |
| 13 | 土師質土器　椀 | 15.0 | | (3.0) | 外面摩滅　内面篦磨き　内面黒色 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 黒褐10YR3/1 | 粗砂 |
| 14 | 土師質土器　椀 | 15.2 | 8.2 | 5.5 | 口縁部横ナデ　外面摩滅　内面篦磨き　内面黒色 | 浅黄橙10YR8/3 | 褐灰10YR4/1 | 密 |
| 15 | 土師質土器　椀 | 14.4 | | (4.0) | 回転ナデ後に篦磨き | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 16 | 土師質土器　椀 | 16.6 | | (4.2) | 回転ナデ　内面篦磨き | 灰白2.5Y8/2 | 黒褐10YR3/1 | 粗砂 |
| 17 | 土師質土器　椀 | 17.9 | | (1.9) | 回転ナデ　内面篦磨き　内面黒色 | 浅黄橙10YR8/3 | 黒褐10YR3/1 | 粗砂 |
| 18 | 瓦器　椀 | 18.0 | | (6.0) | 口縁部ナデ　体部内外面篦磨き | オリーブ黒5Y3/1 | | 粗砂 |
| 19 | 須恵器　椀 | 17.8 | | (3.7) | 回転ナデ | 灰白N8/ | | 密 |
| 20 | 土師質土器　椀 | 19.6 | | (3.3) | 回転ナデ | 黒褐10YR3/1 | 明褐灰5YR7/2 | 粗砂 |
| 21 | 土師質土器　杯 | | 6.5 | (1.0) | 平底　内外面摩滅 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 粗砂 |
| 22 | 土師質土器　杯 | | 7.8 | (1.2) | 平底　回転ナデ | 灰白10YR8/1 | | 粗砂 |
| 23 | 土師質土器　杯 | | 5.8 | (1.3) | 平底　回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 褐灰7.5YR5/1 | 粗砂 |
| 24 | 土師質土器　椀 | | | (2.1) | 回転ナデ | 鈍い黄橙10YR7/4 | 鈍い橙7.5YR7/3 | 粗砂 |
| 25 | 土師質土器　椀 | | 8.8 | (3.1) | 内外面摩滅 | 灰褐7.5YR5/2 | 鈍い黄橙10YR6/3 | 粗砂 |
| 26 | 須恵器　壷 | | | (2.7) | 外面斜行叩目・格子状叩目　内面青海波状叩目 | 灰白N7/ | | 密 |

第225図　ＳＢ5006出土遺物（Ｓ：１／４）

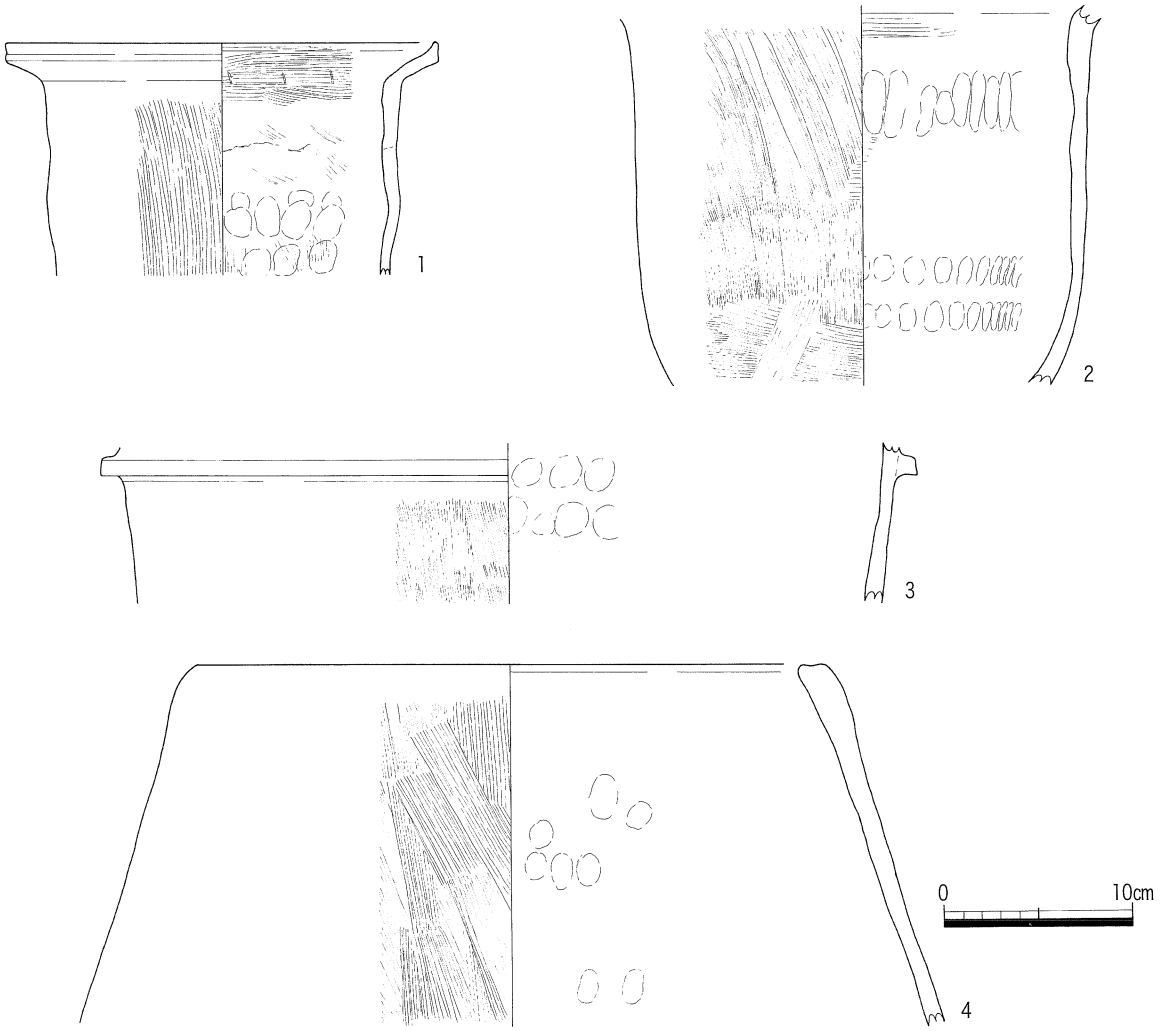
ＳＢ5007　（第226・227図）

調査区中央の北側において検出された掘立柱建物跡であり，ＳＤ5004～5007を切っている。Ｐ－５はＳＢ5010のＰ－４に切られている。

検出面のレベルは標高1.90m前後である。検出できた柱穴は６個のみであり，南側柱列は２間以上で約5.80m，東側柱列は２間で約6.05mを測る。南側の柱穴の距離は芯芯で2.20m，東側は1.90mと3.60mを測る。東側柱列の方位はＮ－17°－Ｅを示す。柱穴は不整円形を呈し，直径は0.55～1.00m，深さは0.10～0.50mを測る。Ｐ－１・２は撹乱のため上面を削平されている。Ｐ－４は側壁に河原石が接した状態で出土し，１～４の土器が出土した。




第226図　ＳＢ5007平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　甕 | 23.2 | | (12.3) | 胴部外面刷毛目　胴部内面刷毛目・指頭圧痕 | 鈍い褐7.5YR6/3 | | 粗砂 |
| 2 | 土師器　甕 | | | (20.0) | 外面刷毛目　内面刷毛目・指頭圧痕 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 浅黄橙10YR8/3 | 細礫 |
| 3 | 土師器　釜 | | | (8.5) | 外面刷毛目　内面指頭圧痕後にナデ | 淡黄2.5Y8/3 | 灰白10YR8/2 | 細礫 |
| 4 | カマド | 33.4 | | (18.9) | 外面刷毛目　内面指頭圧痕・篦ナデ | 鈍い橙5YR6/4 | 鈍い赤褐5YR5/4 | 細礫 |

第227図　ＳＢ5007出土遺物（Ｓ：１／４）

遺物は，土師器甕（１・２），同羽釜（３），同カマド（４）である。

１・２は同型式の長胴甕であり，口縁部が直線的に開き口縁部は摘み上げる。胴部外面は粗い縦方向の刷毛目，内面には指押え，口縁部内面には横方向の粗い刷毛目が施される。３は胴部より直線的に口縁部に至り，外面に断面台形を呈する鍔が付く。１～３は10～11世紀のもの。

４は口径33.4cmを測るカマドであり，外面に粗い縦方向の刷毛目，内面には指押え，ヘラナデが施される。

ＳＢ5008（第228・229図）

調査区北側において検出された掘立柱建物跡であり，柱穴群と数基の土坑と重複する。本遺構の柱穴は土坑に切られている。

検出面のレベルは標高1.86～1.94mである。桁行は８間で8.00m，梁行は３間で3.36mを測る。建物の主軸方位はＮ－70°－Ｗを示す。桁行の柱穴間の芯芯距離は0.80～1.00m，梁行の柱穴間の芯芯距離は0.90～1.00mを測る。検出できた柱穴の総数は24個であり，その中の３個は束柱である。柱穴の平面形は円形・楕円形を呈し，直径は0.20～0.45mを測る。深さは0.16～0.34

cmを測る。P－2・7・13・18は底面に段があり，柱痕の小穴を有する。埋土は灰白色シルト質極細砂と褐灰色シルト質極細砂である。

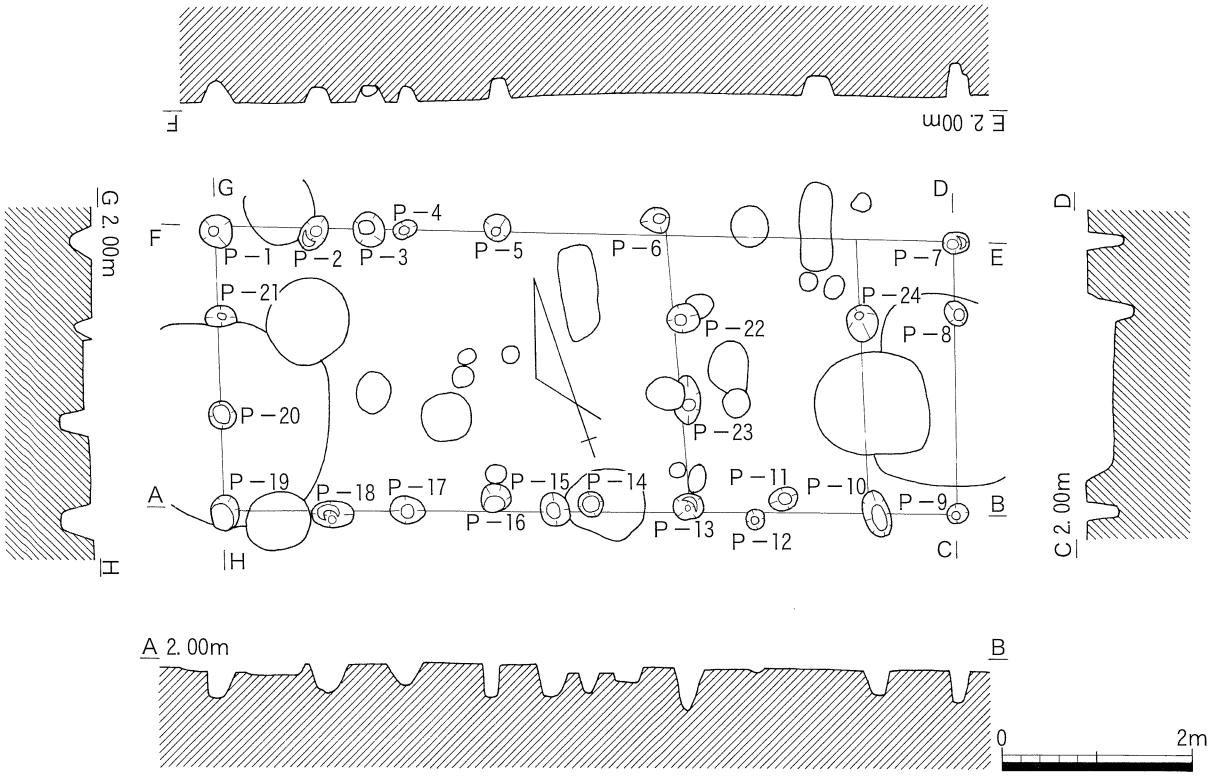
遺物は，瓦器椀（1），土師質土器杯（2），同椀（3・5），須恵質土器椀（4），須恵器杯蓋（6），その他の土師質土器片である。

1は外面に指押え・ナデ，内面にヘラミガキを施す。和泉型で13世紀後半のものである。

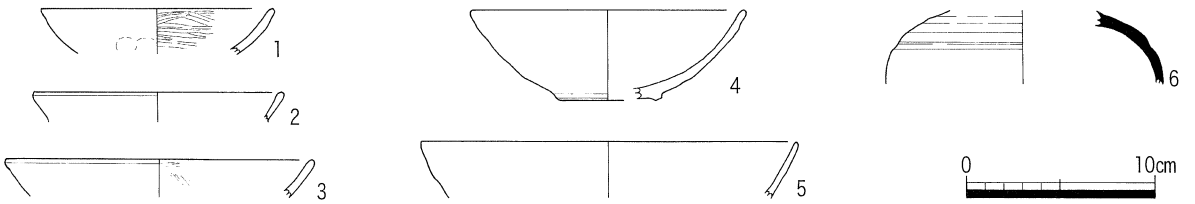
2・3・5は外面に回転ナデの後にナデを施し，3の内面は一部にヘラミガキ・ナデが施される。

4は半球型の体部に断面逆台形の低い高台が付く。口縁内外面に重ね焼き痕がある。高台のつくりが簡略になることより14世紀前半のものである。

6は天井部外面に回転ヘラ削りを施す。




第228図　ＳＢ5008平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 瓦器　椀 | 12.4 | | (2.4) | 口縁部横ナデ　体部外面ナデ　内面篦磨き | 灰N5/ | 灰白N7/ | 細砂 |
| 2 | 土師質土器　杯 | 13.0 | | (1.6) | 回転ナデ | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 3 | 土師質土器　椀 | 16.4 | | (2.0) | 口縁部横ナデ　体部外面ナデ　内面篦磨き | 褐灰10YR6/1 | 褐灰10YR5/1 | 密 |
| 4 | 須恵質土器　椀 | 14.4 | 5.6 | 4.8 | 回転ナデ　口縁部に重ね焼き痕 | 灰白10Y7/1 | 灰白2.5Y8/1 | 密 |
| 5 | 土師質土器　椀 | 10.0 | | (3.0) | 回転ナデ　体部外面ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | 灰白10YR8/2 | 密 |
| 6 | 須恵器　杯蓋 | | | (3.9) | 回転ナデ　天井部外面回転篦削り | 灰白2.5Y7/1 | | 密 |

第229図　ＳＢ5008出土遺物（Ｓ：１／４）

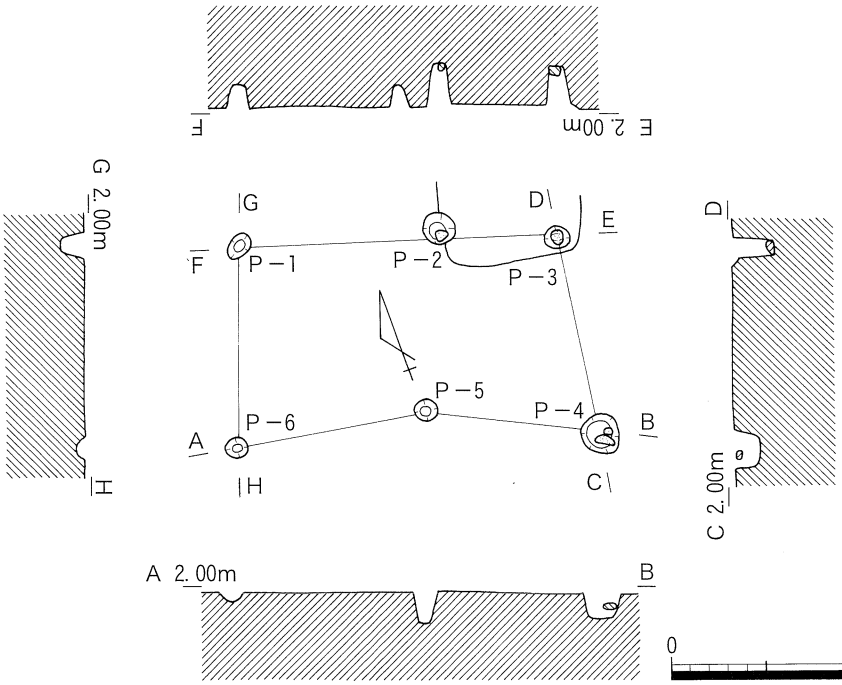
ＳＢ5009　（第230・231図）

調査区北側で検出された掘立柱建物跡であり，ＳＫ5004に切られ，他の柱穴と重複する。

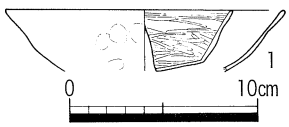
検出面のレベルは標高1.95mである。桁行は２間で3.62m，梁行は１間で2.40mを測る。建物の主軸方位はＮ－73°－Ｗを示す。南側柱列の中央の柱穴が内側に配され，南側柱列が北側柱列より長くなるため，建物の平面形は台形を呈する。桁行の柱穴間の芯芯距離は1.25mと2.10m，梁行の芯芯距離は2.10mを測る。柱穴の平面形は円形を呈し，直径は0.20～0.45mを測る。Ｐ－６の深さは0.10mであるが，他の柱穴の深さは0.25～0.46mを測る。Ｐ－２とＰ－３は底面に根石が残存し，Ｐ－４は詰石が残存する。埋土は褐灰色シルト質極細砂。

遺物は，瓦器椀（１），土師器土器小皿である。

１は内面にヘラミガキを施し，13世紀前半の和泉型椀である。




第230図　ＳＢ5009平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 瓦器　椀 | 14.8 | | (3.3) | 口縁部横ナデ　体部外面指頭圧痕　内面篦磨き | 灰N5/ | | 密 |

第231図　ＳＢ5009出土遺物（Ｓ：１/４）

２　溝

ＳＤ5009　（第232・233図）

調査区中央において検出された溝であり，ＳＤ5002・5003・ＳＢ5005を切っている。

検出面のレベルは標高1.78mと1.86mである。溝の方向はＥ－12°－Ｓを示す。溝の検出全長は19.4m，幅は1.00m，深さは約0.30mを測る。溝の断面は逆台形を呈す。底面のレベルはほぼ平坦であるが，東端より約5.00m西側において底面が約0.15m高くなっている。幅は約0.40mである。埋土は３層に分層でき，自然堆積である。

遺物は，土師器杯（１・２），同椀（３・６），同甕（９），瓦器椀（４），須恵質土器椀（５），須恵器杯身（７），同甕（８），同土錘（10），他の土師器片である。

１・２は口径に対して器高が低い。回転ナデが施され，13世紀前半のものである。

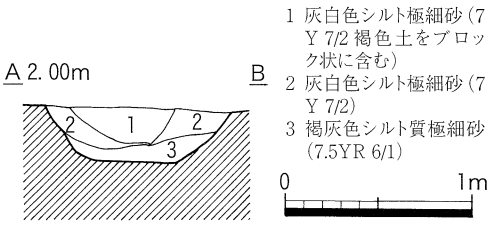
３・６は逆三角形の高台が付き，13世紀前半のものである。

4は和泉型の椀で，13世紀前半のものである。

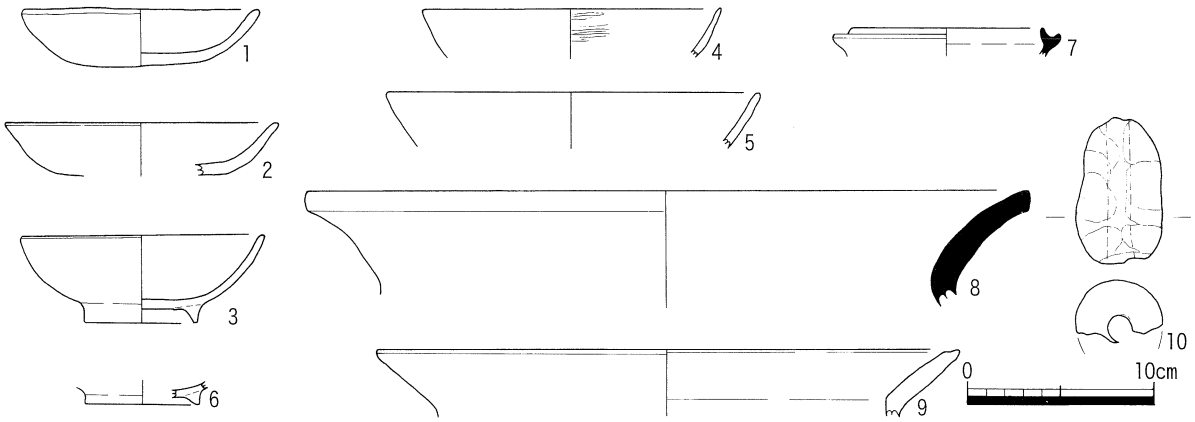
7は斜めに延びる受部から内傾する口縁部である。

8は口径38.4cmを測る大型の甕である。

9は直線的に外反する口縁部で，口縁端部は若干尖がる。




第232図　ＳＤ5009断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師器　杯 | 12.9 | 5.5 | 3.2 | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 微砂 |
| 2 | 土師器　杯 | 14.4 | 9.2 | (2.8) | 回転ナデ | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂 |
| 3 | 土師器　椀 | 13.1 | 6.1 | 4.7 | 内外面摩滅 | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂 |
| 4 | 瓦器　椀 | 15.8 | | (2.6) | 回転ナデ　内面篦磨き | 灰5Y4/1 | | 微砂 |
| 5 | 須恵質土器　椀 | 20.0 | | (3.0) | 回転ナデ　内面ナデ　重ね焼き痕 | 灰白N8/ | | 微砂 |
| 6 | 土師器　椀 | | 6.2 | (1.3) | 回転ナデ | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂 |
| 7 | 須恵器　杯身 | 10.2 | | (1.5) | 回転ナデ | 灰白10Y8/1 | | 微砂 |
| 8 | 須恵器　甕 | 38.4 | | (6.2) | 回転ナデ | 青灰5PB6/1 | | 微砂 |
| 9 | 土師器　甕 | 31.0 | | (3.6) | 内外面摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/4 | | 細砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 土錘 | 7.8 | (径) 4.6 | | 95.4 | | 微砂～細砂　表鈍い橙5YR7/3 |

第233図　ＳＤ5009出土遺物（Ｓ：１/４）

3　柱穴

ＳＰ5006　（第234図）

調査区北西側の円形柱穴で，直径0.35m，深さ0.14mを測る。底面に根石が残存する。

ＳＤ5016　（第234・第235図－１・５）

調査区北側にある楕円形の柱穴である。検出面は標高1.94mである。直径は0.36×0.43m，深さは0.20mを測る。底面に根石が残存する。土師質土器小皿（１），瓦器椀（５）が出土。

ＳＰ5022　（第234図・第235図－４）

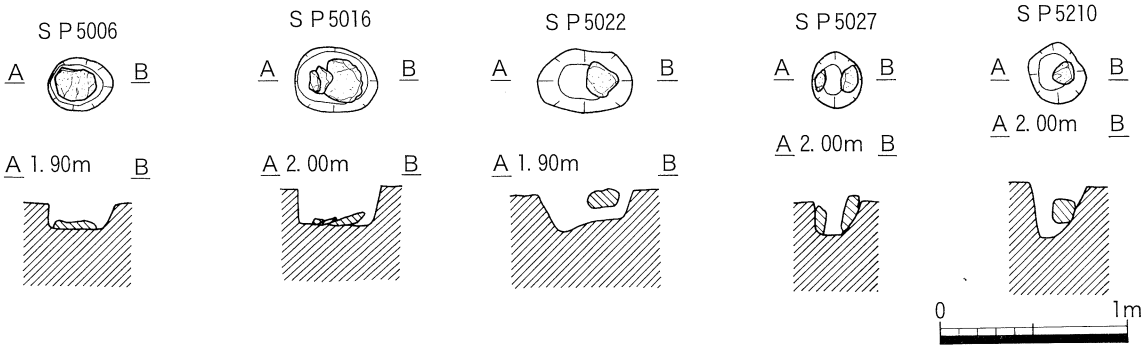
調査区北西側にある楕円形の柱穴で，直径は0.33×0.50m，深さ0.20mを測る。検出面のレベルは標高1.83mである。埋土に詰石が残存する。遺物は土師質土器椀（４）である。

ＳＰ5027　（第234図）

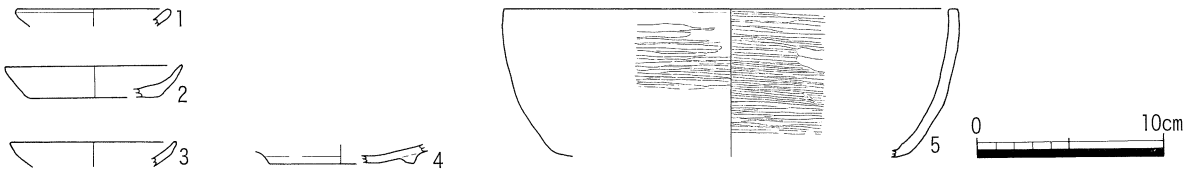
調査区北側にある円形の柱穴で，直径0.26m，深さ0.20mである。詰石２個が残存する。

ＳＰ5210　（第234図・第235図－２・３）

調査区南側の円形柱穴で，直径0.32m，深さ0.28mである。遺物は土師質土器小皿（２・３）。




第234図　５工区ＳＰ平・断面図（Ｓ：１/40）

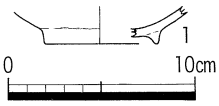



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器 小皿 | 8.0 | | (0.9) | 内外面摩滅 | 灰白10YR8/2 | | 微砂 |
| 2 | 須恵質土器 小皿 | 9.6 | 6.8 | 1.7 | 回転ナデ | 黄灰2.5Y6/1 | | 微砂 |
| 3 | 土師質土器 小皿 | 8.8 | | (1.3) | 回転ナデ | 鈍い橙5YR7/4 | | 微砂 |
| 4 | 土師質土器　椀 | | 7.6 | (1.0) | 内外面摩滅 | 灰白10YR8/1 | 灰白10YR7/1 | 微砂 |
| 5 | 瓦器　鉢 | 24.0 | | (7.9) | 口縁部横ナデ　体部篦磨き･ナデ | 青黒10BG2/1 | 明青灰10BG7/1 | 微砂 |

第235図　５工区ＳＰ出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5032　（第236図）

調査区北側にある柱穴で，検出面は標高1.95mである。直径は0.50m，深さ0.20mを測る。底面に小穴がある。遺物は土師器椀（１）である。

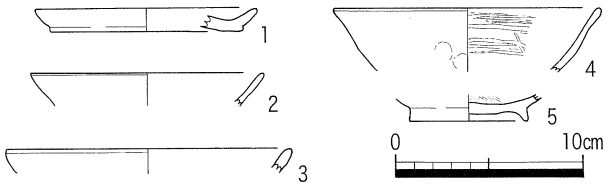



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　椀 | | 6.0 | 2.0 | ナデ | 灰白10YR8/2 | 灰白10YR8/1 | 石英･微砂若干 |

第236図　ＳＰ5032出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5041　（第237図）

調査区北側の円形柱穴で，直径0.40m，深さ0.22mを測る。遺物は土師質土器皿（１），同杯（２・３），土師器杯（５），瓦器（４）である。

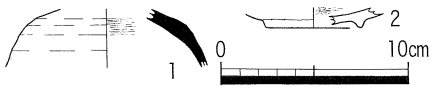



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器 小皿 | 11.8 | 10.2 | 1.2 | 内外面摩滅 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 灰白10YR8/2 | 微砂 |
| 2 | 土師器　杯 | 12.4 | | (1.7) | 回転ナデ | 灰白5Y8/1 | | 粗砂･微砂 |
| 3 | 土師質土器　杯 | 15.2 | | (1.3) | 内外面摩滅 | 鈍い黄橙10YR7/3 | | 密 |
| 4 | 瓦器　椀 | 14.0 | | (3.4) | 体部外面ナデ･指頭圧痕　内面篦磨き | 灰N5/ | | 微～細砂 |
| 5 | 土師器　椀 | | 6.4 | (1.4) | 回転ナデ　内面篦磨き | 浅黄橙7.5YR8/3 | | 粗砂 |

第237図　ＳＰ5041出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5067　（第238図）

調査区北東側の円形柱穴で，直径0.18m，深さ0.21mを測る。遺物は須恵器杯蓋（１），須恵器質土器椀（２）。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 須恵器　杯蓋 | | | (3.1) | 回転ナデ　天井部内面刷毛目 | 灰白5Y8/1 | | 密 |
| 2 | 須恵質土器　椀 | | 5.0 | (1.0) | 回転ナデ　内面刷毛目 | 灰白10YR8/1 | | 密 |

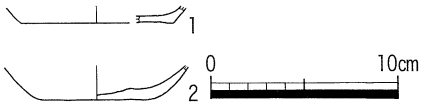
第238図　ＳＰ5067出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5072　（第239図）

調査区北側にある円形の柱穴であり，検出面のレベルは標高1.94ｍである。直径は0.26ｍ，深さは0.24ｍを測る。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。

遺物は，土師質土器杯（１），土師器杯（２）である。

１の底面は回転ヘラ削り，２は回転糸切り後にナデ。

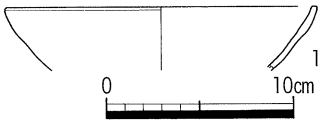



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　杯 | | 8.0 | (0.9) | ナデ　底面回転篦削り | 鈍い黄橙10YR7/3 | | 密　微砂 |
| 2 | 土師器　杯 | | 5.8 | (1.8) | 回転ナデ　底面回転糸切り後にナデ | 灰白N8/ | | 微砂 |

第239図　ＳＰ5072出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5095　（第240図）

調査区中央北寄りにある円形の柱穴であり，検出面のレベルは1.93ｍである。直径は0.25ｍ，深さは0.20ｍを測る。遺物は，土師器椀（１）であり，内面ナデ・ヘラミガキ，外面ナデである。

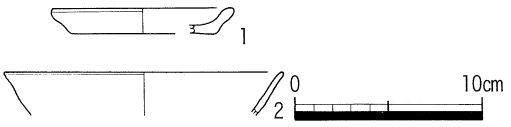



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　椀 | 16.6 | | (3.4) | 回転ナデ　体部外面ナデ　内面ナデ・篦磨き | 灰白10YR8/1 | | 密 |

第240図　ＳＰ5095出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5105　（第241図）

調査区北東側にある円形の柱穴で，ＳＫ5012に切られる。直径は0.25ｍ，深さ0.17ｍを測る。遺物は土師質土器小皿（１），同杯（２）である。

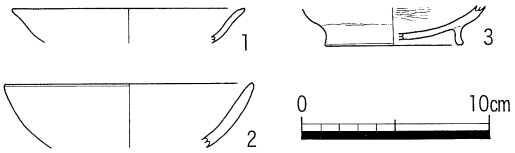



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　小皿 | 9.6 | 7.6 | 1.35 | 回転ナデ | 灰白10YR8/1 | | 細砂 |
| 2 | 土師質土器　杯 | 14.8 | | (2.3) | 摩滅 | 浅黄橙7.5YR8/3 | 灰白10YR8/2 | 微砂 |

第241図　ＳＰ5105出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5135　（第242図）

調査区南西側に検出された円形の柱穴である。検出面のレベルは標高1.70ｍである。直径は0.32ｍ，深さは0.18ｍを測る。遺物は，土師質土器杯（１），同椀（２），瓦器椀（３）である。２は厚手の土器である。３は13世紀前半のものである。

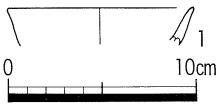



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　杯 | 12.4 | | (1.8) | 摩滅 | 橙2.5YR7/6 | | 微～細砂 |
| 2 | 土師質土器　椀 | 13.2 | | (3.4) | 回転ナデ　体部ナデ | 灰白10YR7/2 | | 細砂 |
| 3 | 瓦器　椀 | | 7.2 | (2.0) | 高台横ナデ　内面篦磨き　底面ナデ | 褐灰10YR5/1 | 褐灰10YR4/1 | 微砂若干 |

第242図　ＳＰ5135出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5146　（第243図）

調査区中央の南東側に検出された円形の柱穴であり，検出面のレベルは標高1.75ｍである。柱穴の直径は0.23ｍ，深さは５cmを測る。遺物は土師質土器椀（１）であり，口縁部が若干外反する。

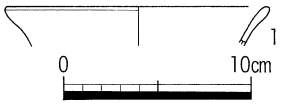



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　椀 | 10.0 | | (2.0) | 摩滅 | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 微砂 |

第243図　ＳＰ5146出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5168　（第244図）

調査区中央南側にある柱穴で，ＳＰ5169を切る。検出面は標高1.77mである。直径は0.30m，深さ0.41m。土師器杯（１）が出土。

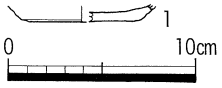



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師器　杯 | 13.8 | | (2.1) | 摩滅 | 浅黄橙10YR8/3 | | 微砂 |

第244図　ＳＰ5168出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5187　（第245図）

調査区中央南東側にある柱穴で，検出面のレベルは標高1.76mである。直径は0.18m，深さは９cmを測る。遺物は土師質土器杯（１）である。

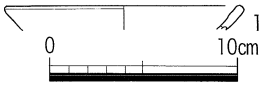



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　杯 | | 6.6 | (0.8) | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 鈍い黄橙10YR7/3 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 微砂 |

第245図　ＳＰ5187出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5191　（第246図）

調査区中央南東側にある円形の柱穴で，調査区外に延びている。検出面のレベルは標高1.76mである。柱穴の直径は0.26m，深さは６cmを測る。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。遺物は，土師質土器杯（１）である。

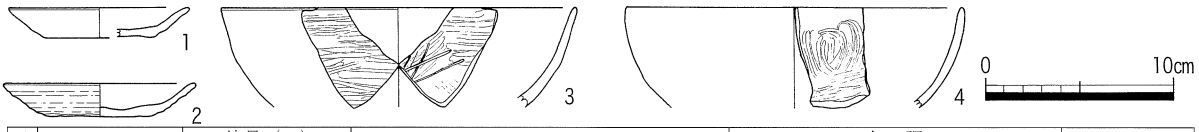



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　杯 | 12.8 | | (1.3) | 回転ナデ | 橙2.5YR6/6 | | 微砂 |

第246図　ＳＰ5191出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5193　（第247図）

調査区中央南東側にある円形の柱穴であり，検出面は1.79mである。柱穴の直径は0.20m，深さは0.17mを測る。遺物は，土師質土器杯（１・２），同椀（４），瓦器椀（３）である。１・２の底面は回転ヘラ切り後にナデ。３は和泉型の椀。４は内面黒色。13世紀前半のもの。

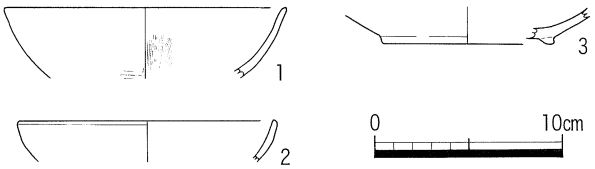



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　杯 | 9.6 | 6.0 | 1.6 | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 灰白7.5YR8/1 | | 細砂 |
| 2 | 土師質土器　杯 | 10.4 | 6.0 | 1.7 | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 橙7.5YR7/6 | 灰白7.5YR8/1 | 微砂 |
| 3 | 瓦器　椀 | 18.8 | | (5.3) | 回転ナデ　体部篦磨き　内面暗文 | 灰N4/ | 暗灰N3/ | 微砂 |
| 4 | 土師質土器　椀 | 17.8 | | (5.4) | 外面摩滅（一部篦磨き）　内面篦磨き　内面黒 | 浅黄橙10YR8/3 | 黒褐10YR3/1 | 微砂 |

第247図　ＳＰ5193出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5204　（第248図）

調査区南東側の円形柱穴で，直径0.26m，深さ0.33mである。遺物は，瓦器椀（１・３），土師質土器椀（２）で，13世紀のもの。

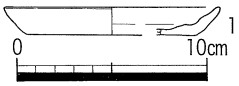



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 瓦器　椀 | 14.8 | | (3.8) | 篦磨き | 黒7.5Y2/1 | | 微砂 |
| 2 | 土師質土器　椀 | 13.6 | | (2.2) | 回転ナデ　内面黒色 | 灰白10YR8/2 | 灰N4/ | 細～粗砂 |
| 3 | 瓦器　椀 | | 9.0 | (2.0) | 摩滅 | 黒褐2.5Y3/1 | 黄灰2.5Y4/1 | 微砂 |

第248図　ＳＰ5204出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5220　（第249図）

調査区南側にある円形の柱穴で，検出面のレベルは標高1.75mである。直径0.40m，深さ0.30mである。遺物は土師質土器小皿（１）である。

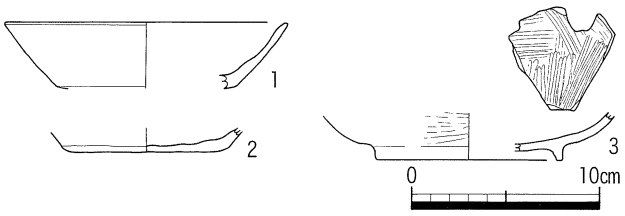



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　小皿 | 11.4 | 8.6 | 1.5 | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 橙7.5YR7/6 | 灰白5Y8/2 | 密 |

第249図　ＳＰ5220出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5222　（第250図）

調査区南側の柱穴で，直径0.56×1.05m深さ0.33mである。底面に柱痕の小穴が検出される。遺物は，土師質土器杯（１），須恵器杯（２），瓦器椀（３）である。



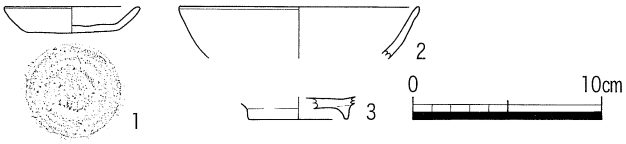

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　杯 | 15.0 | 9.4 | (3.5) | 回転ナデ後にナデ　外面に黒斑 | 灰白10YR8/1 | | 微砂 |
| 2 | 須恵器　杯 | | 8.8 | (1.3) | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 灰白2.5Y7/1 | | 密 |
| 1 | 瓦器　椀 | | 9.8 | | 体部篦磨き　高台横ナデ　底面ナデ | 灰N3/ | | 微～粗砂 |

第250図　ＳＰ5222出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5243　（第251図）

調査区北側にある円形の柱穴であり，直径は0.22m，深さ0.10mを測る。

遺物は，土師質土器小皿（１），同椀（３），土師器杯（２）である。

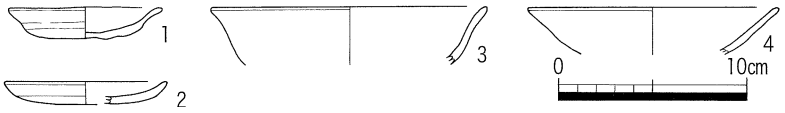



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　小皿 | 7.2 | 4.8 | 1.4 | 回転ナデ　底面篦切り後にナデ | 浅黄橙10YR8/3 | 灰白10YR8/2 | 微砂若干 |
| 2 | 土師器　杯 | 12.6 | | (2.7) | 摩滅 | 浅黄橙10YR8/3 | | 微砂 |
| 3 | 土師質土器　椀 | | 5.2 | (1.2) | 外面回転ナデ　内面ナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 細～粗砂 |

第251図　ＳＰ5243出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5245　（第252図）

調査区北側の円形柱穴であり，南半分は撹乱を受ける。直径は0.50m，深さは0.57mを測る。遺物は，瓦質土器小皿（１），土師質土器小皿（２），同杯（３），土師器杯（４）。

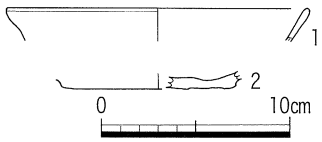



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 瓦質土器　小皿 | 8.1 | 3.8 | 1.7 | 回転ナデ　体部外面指頭圧痕・篦削り　内面ナデ | 灰N5/ | 灰N6/ | 微砂 |
| 2 | 土師質土器　小皿 | 8.4 | 7.4 | 1.2 | 回転ナデ　外面ナデ　底面切り離し後にナデ | 橙7.5YR7/6 | | 微～細砂 |
| 3 | 土師質土器　杯 | 14.4 | | (3.1) | 回転ナデ | 浅黄橙10YR8/4 | 灰白10YR8/2 | 密　微砂を含む |
| 4 | 土師器　杯 | 13.2 | | (2.5) | 口縁部横ナデ　体部ナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 灰白2.5Y8/1 | 細礫 |

第252図　ＳＰ5245出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5276　（第253図）

調査区中央の北西側にある円形柱穴である。検出面のレベルは標高1.92mである。直径は0.20m，深さは0.13mを測る。遺物は，土師質土器杯（１），土師器杯（２）である。２は回転ヘラ切り。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　杯 | 15.8 | | (1.5) | 摩滅 | 鈍い橙7.5YR7/4 | 淡橙5YR8/3 | 微砂 |
| 2 | 土師器　杯 | | 8.2 | (0.9) | 回転ナデ　底面回転篦切り | 灰白2.5Y7/1 | 灰白10YR8/2 | 微砂 |

第253図　ＳＰ5276出土遺物（Ｓ：１／４）

4　性格不明遺構

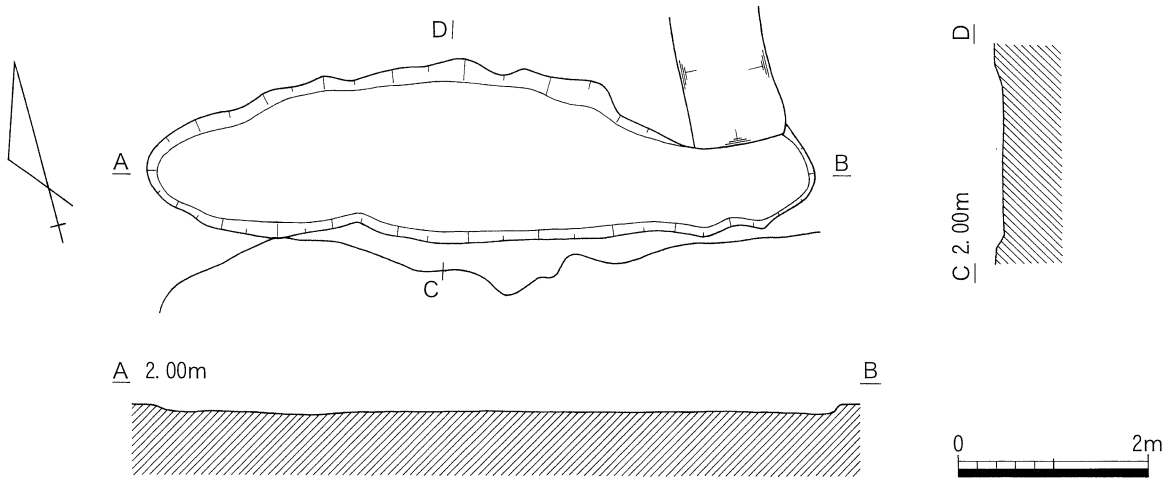
ＳＸ5003　（第254～256図）

調査区南端において検出された遺構であり，東端は試掘調査のトレンチにより削平される。他の土坑と比較して規模が大きいので性格不明遺構とする。

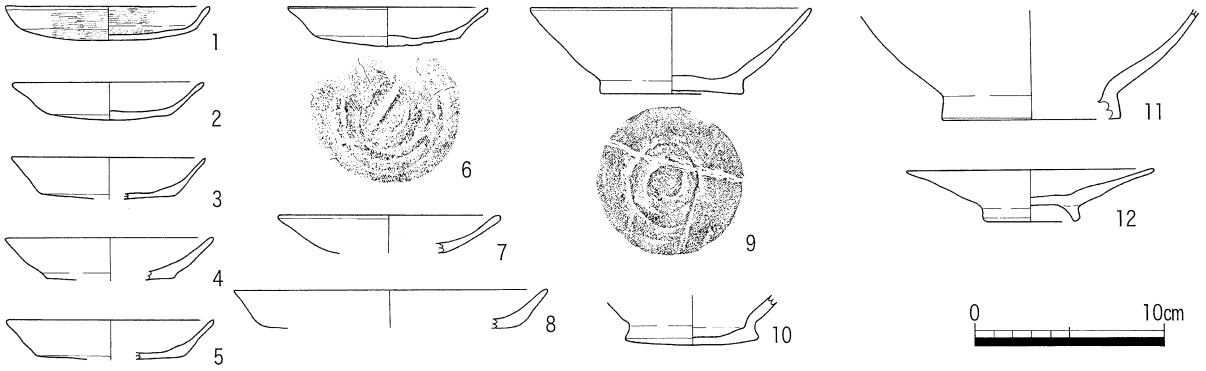
検出面のレベルは標高1.78mである。平面形は細長く不整な楕円形を呈する。東西方向の長軸は7.05m，南北方向の短軸は約1.80mを測る。深さは0.10mであり，断面は浅いＵ字形を呈する。埋土は褐灰色シルト質極細砂である。

遺物は，土師器皿（１・８・12），同杯（２・４・７・９～11・13・15），同椀（19～21），須恵質土器杯（３・５・６），須恵器杯（14），瓦器椀（16～18），土師質土器土鍋（22），土錘（23～25）である。

１は内外面ともヘラミガキ，底部内外面は１方向のヘラミガキが施される。内面黒色である。




第254図　ＳＸ5003平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 黒色土器　小皿 | 10.8 | 9.2 | 1.8 | 篦磨き　底部内外面1方向の篦磨き | オリーブ黒7.5Y3/1 | 灰白7.5Y4/1 | 微砂 |
| 2 | 土師器　杯 | 10.1 | 6.5 | 2.0 | 回転ナデ　底面回転糸切り後にナデ | 浅黄橙7.5YR8/3 | 灰白2.5Y8/1 | 微砂 |
| 3 | 須恵質土器　杯 | 10.2 | 7.0 | (2.2) | 回転ナデ | 灰白7.5Y8/1 | | 細砂若干 |
| 4 | 土師器　杯 | 11.0 | 6.8 | (2.2) | 回転ナデ | 灰白7.5YR8/2 | | 微砂 |
| 5 | 須恵質土器　杯 | 10.8 | 7.8 | (2.1) | 回転ナデ　底面ナデ | 灰白2.5Y8/1 | | 微砂若干 |
| 6 | 須恵質土器　杯 | 10.5 | 7.8 | 2.1 | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ　篦削り | 灰白10Y8/1 | | 微砂 |
| 7 | 土師器　杯 | 11.6 | | (2.0) | 回転ナデ | 灰白2.5Y8/2 | | 微砂 |
| 8 | 土師質土器　皿 | 16.4 | 13.4 | (2.0) | 回転ナデ | 淡赤橙2.5YR7/4 | | 微砂 |
| 9 | 土師器　杯 | 15.0 | 7.6 | 4.6 | 回転ナデ　底部回転篦切り後に静止篦削り | 灰白2.5Y8/1 | | 微砂 |
| 10 | 土師器　杯 | | 7.2 | (2.6) | 摩滅 | 灰白5YR8/2 | | 微砂若干 |
| 11 | 土師器　杯 | | 9.4 | (5.8) | 摩滅 | 浅黄橙10YR8/3 | | 細砂若干 |
| 12 | 土師器　皿 | 13.0 | 5.2 | 2.7 | 回転ナデ | 浅黄橙10YR8/3 | | 微砂若干 |

第255図　ＳＸ5003出土遺物（１）（Ｓ：１/４）

2・4・7は器高の低い杯で，平底である。2の底面は回転糸切り後にナデが施される。9～11は底部が台のように拡張する形態の杯であり，法量は大きくなる。13世紀のものである。9の底面は回転ヘラ切り後に静止ヘラ削りを施す。13・15は器高のやや高い杯であり，15の底面は静止ヘラ削り後に周縁部をヘラナデが施される。3・5・6は器高の低い杯で，6の底面は回転ヘラ切り後にナデ・ヘラ削りが施される。

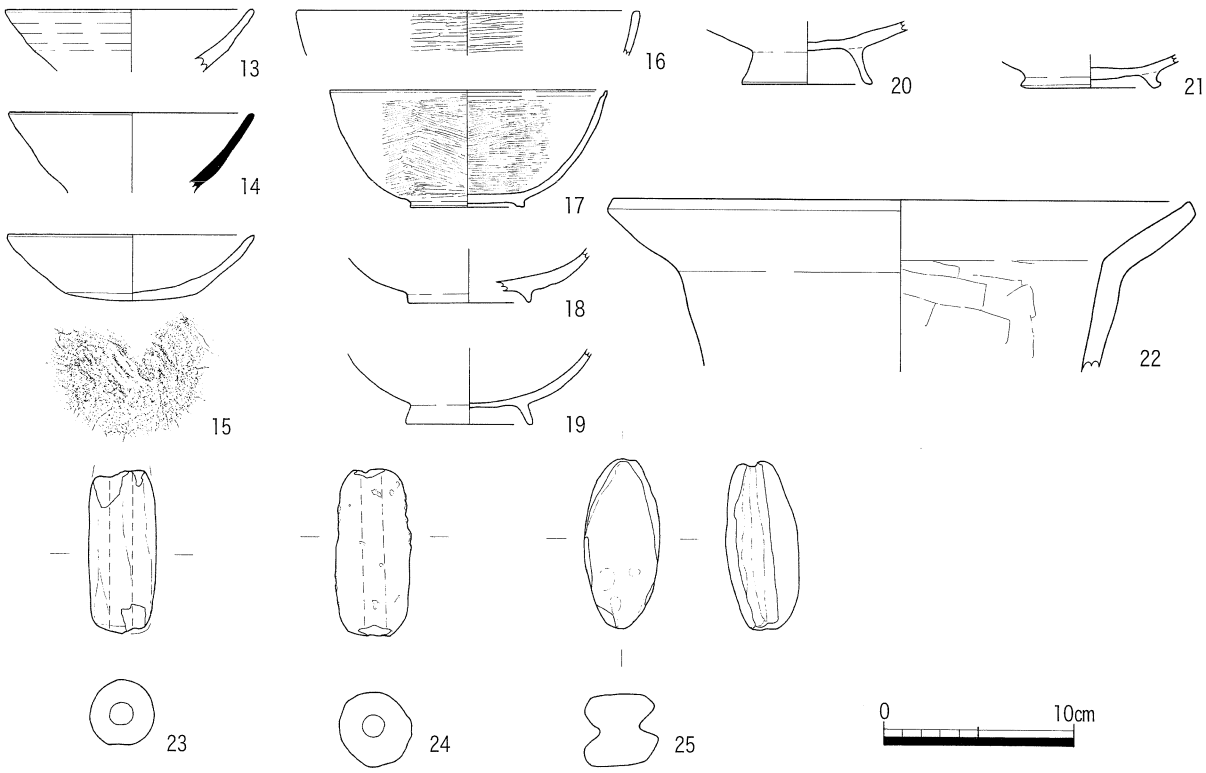
8は器高の低い皿で，12は高台を有し，直線的な体部の皿である。13世紀のものである。

16は内外面ヘラミガキを施す和泉型の椀である。17は内外面にていねいなヘラミガキを施し口縁部内面に段を有する楠葉型の椀である。高台は低い。11世紀のものである。

19・20は高い高台の椀であり，19の底面は回転ヘラ切り後にナデが施される。21は高台を有する椀で，内面はヘラミガキが施される。内面黒色である。

22は口縁部の外反する甕で，外面は指押さえ・ナデ，内面は板ナデが施される。

23・24は中央に孔を有する土錘，25は側面に溝を有する土錘である。




| 番号 | 器種 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 土師器　杯 | 13.0 | | (3.3) | 回転ナデ | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂若干 |
| 14 | 須恵器　杯 | 12.8 | | (4.2) | 摩滅 | 灰白7.5Y8/1 | | 微砂若干 |
| 15 | 土師器　杯 | 12.8 | 6.8 | 3.5 | 回転ナデ　底面静止篦削り後に周辺を篦ナデ | 灰黄2.5Y7/2 | 鈍い黄2.5Y6/3 | 細砂 |
| 16 | 瓦器　椀 | 18.0 | | (2.3) | 篦磨き | 黒5Y2/1 | | 微砂若干 |
| 17 | 瓦器　椀 | 14.6 | 6.0 | 6.2 | 回転ナデ　体部内外面篦磨き　口縁内面に沈線 | 暗灰N3/ | | 密 |
| 18 | 瓦質土器　椀 | | 6.4 | (2.9) | 外面ナデ　内面篦磨き　高台横ナデ | 黒褐2.5Y3/1 | | 微砂 |
| 19 | 土師器　椀 | | 6.8 | (4.1) | 回転ナデ　底面回転篦切り後にナデ | 鈍い橙2.5Y6/3 | 灰白10YR8/1 | 細砂 |
| 20 | 土師器　椀 | | 7.0 | (3.3) | 回転ナデ | 灰白7.5YR8/2 | | 微砂 |
| 21 | 土師器　椀 | | 7.2 | (1.8) | 回転ナデ　内面篦磨き　内面黒色 | 褐灰10YR5/1 | 黒10YR2/1 | 微砂若干 |
| 22 | 土師器　甕 | 30.6 | | (9.1) | 外面指押え・ナデ　内面ナデ・板ナデ | 鈍い赤褐2.5YR4/4 | 灰白2.5Y8/2 | 微～粗砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 23 | 土錘 | 8.6 | (直径) 3.5 | | 108.1 | 土 | 灰白5Y8/1　微砂 |
| 24 | 土錘 | 9.7 | (直径) 3.9 | | 155.6 | 土 | 外面摩滅の為不明　灰白5Y8/2　細砂 |
| 25 | 土錘 | 9.0 | 3.9 | 3.8 | 134.9 | 土 | 外面指頭圧痕　灰オリーブ5Y5/2　微砂 |

第256図　　ＳＸ5003出土遺物（２）（Ｓ：１／４）

4）近世

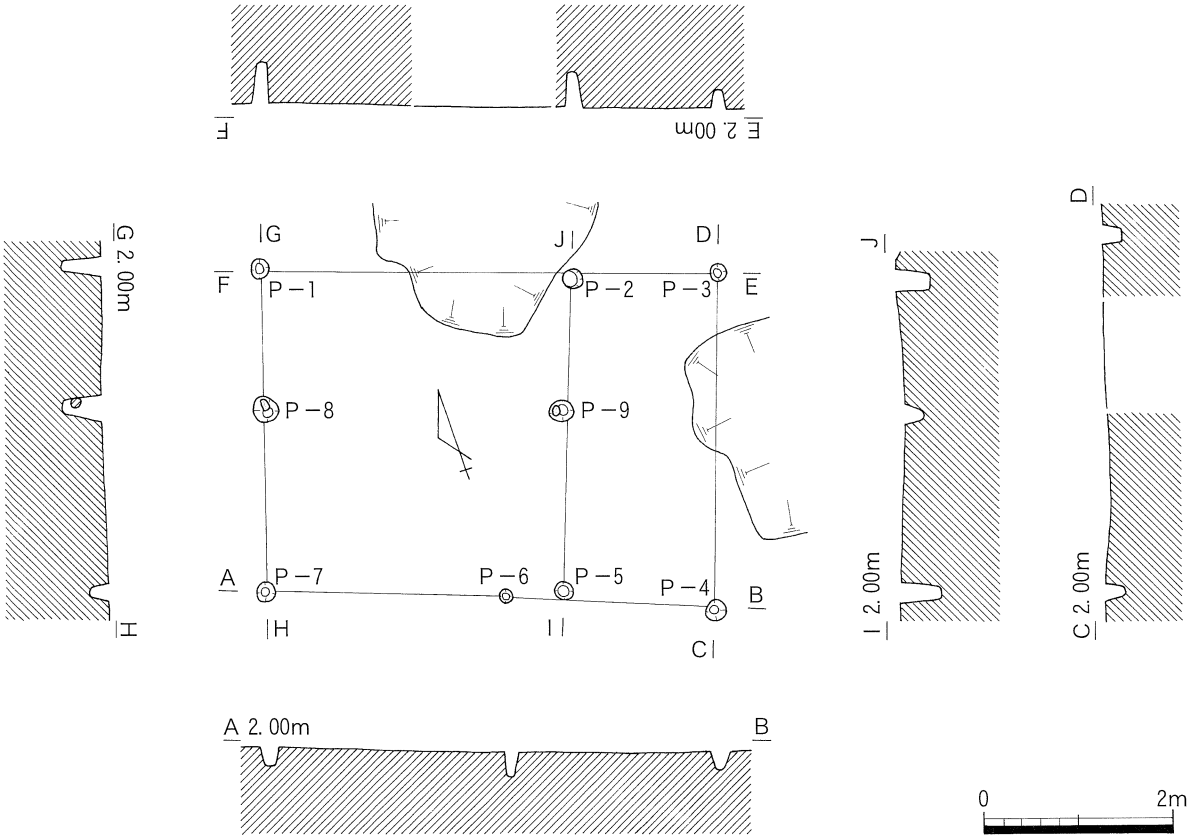
1　掘立柱建物跡

ＳＢ5010　（第257・258図）

調査区中央の北寄りにおいて検出された掘立柱建物跡であり，部分的に撹乱を受ける。

検出面のレベルは標高1.90m前後である。北列側柱と東列側柱は撹乱を受けて，２個の柱穴が消滅する。桁行は３間で，全長5.00mを測る。梁行は２間で，全長は3.60mを測る。建物の主軸方位はＮ－70°－Ｗを示す。検出できた柱穴の総数は９個であり，1個は束柱である。南列側柱は４個であり，中央２個の柱穴間の距離は短い。桁行の柱穴間の芯芯距離は0.60m・1.60m・2.55mを測る。梁行の柱穴間の芯芯距離は1.50m・1.90mを測る。柱穴の平面形は円形を呈する。柱穴の規模は，最も小さなＰ－６が直径0.15mを測り，最も大きいＰ－８の直径は0.28mを測る。深さの最も浅いのはＰ－７であり0.20mを測る。最も深い柱穴はＰ－１であり0.40mを測る。Ｐ－８・Ｐ－９は底面より約10cm浮いた位置に河原石の詰石を残存する。埋土は灰白色・褐灰色シルト質極細砂である。

遺物は，土師質土器椀（１），同甕（２）である。




第257図　ＳＢ5010平・断面図（Ｓ：１/80）

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　椀 | | 5.8 | (1.3) | 外面回転ナデ　内面ナデ | 灰白10YR8/1 | 橙5YR7/6 | 密 |
| 2 | 土師質土器　甕 | | 10.8 | (1.8) | 回転ナデ　底面回転篦削り | 灰白10YR8/2 | 浅黄橙10YR8/3 | 微砂 |

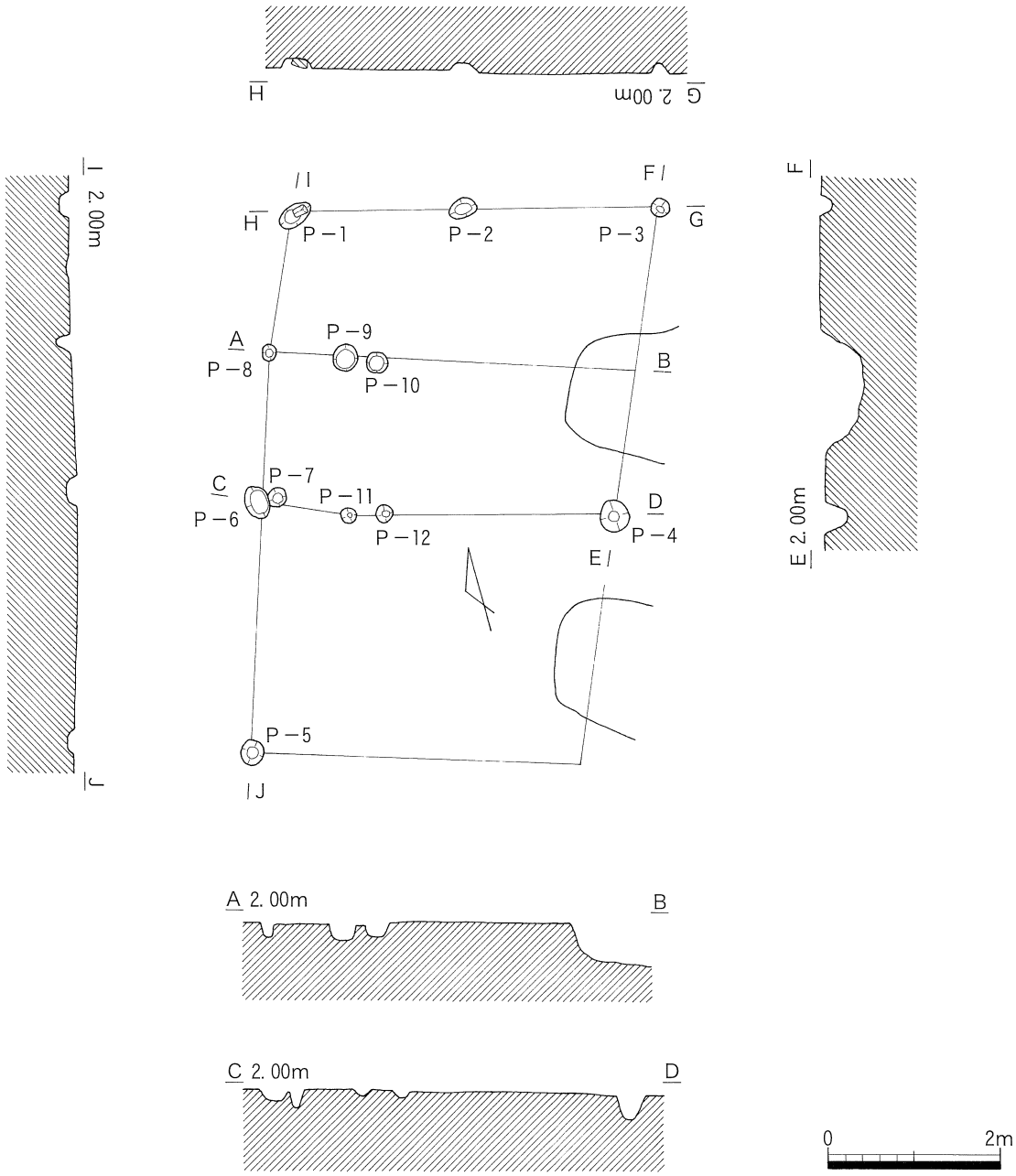
第258図　ＳＢ5010出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＢ5011　（第259図）

調査区中央やや北寄りにおいて検出された掘立柱建物跡であり，ＳＤ5010・5015とＳＸ5001と重複する。本遺構はＳＤ5010・5010に切られ，ＳＸ5001を切っている。

検出面のレベルは標高1.90m前後である。東列側柱に撹乱を受けて柱穴１個が消滅する。東列側柱の南第１穴は未検出である。桁行は３間で6.50mを測る。梁行は２間で4.50mを測る。建物の主軸方位はＮ－20°－Ｅを示す。桁行の柱穴間の芯芯距離は1.60m・1.70m・2.90mを測る。梁行の柱穴間の芯芯距離は2.00m・2.30mを測る。検出できた柱穴の総数は12個であり，Ｐ－９～12は束柱である。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈し，直径は0.17～0.35mをはかる。深さは0.10～0.25mである。Ｐ－１の底面には河原石の根石が残存する。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は出土しなかった。

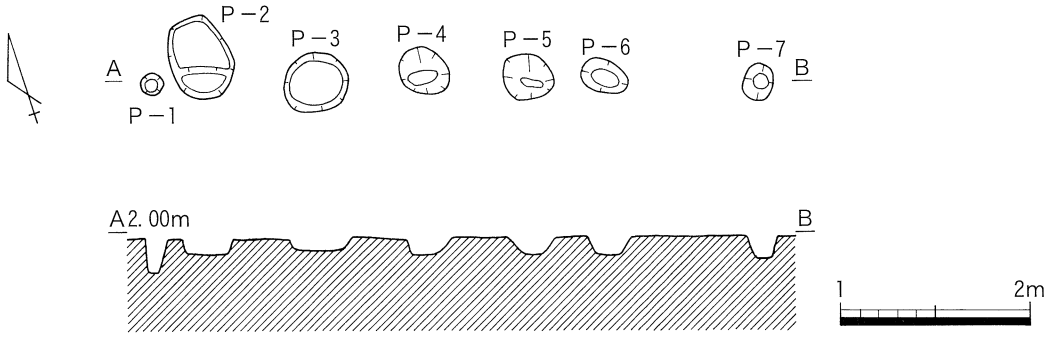



第259図　ＳＢ5011平・断面図（Ｓ：１/80）

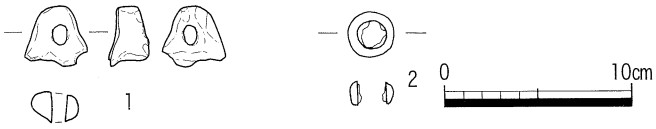
2　柵列

ＳＡ5001　（第260・261図）

調査区北側において検出された柵列であり，東側は撹乱を受ける。検出面のレベルは標高1.94m前後である。検出できた柱穴の総数は７個であり，検出全長は6.70mを測る。柱穴間の芯芯距離は0.60～1.20mを測る。柱穴の平面形は楕円形ないし円形を呈す。直径は0.20～0.90mを測る。深さは0.12～0.35mを測るが，Ｐ－１を除く柱穴の深さは平均0.15mである。




第260図　ＳＡ5001平・断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 飯蛸壷 | | | | ナデ | 鈍い橙7.5YR7/4 | | 微砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 鉄製品 | | (径) 2.4 | 1.3 | | | |

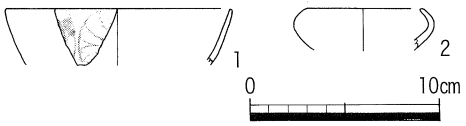
第261図　ＳＡ5001出土遺物図（Ｓ：１/４）

3　溝

ＳＤ5010　（第262図）

調査区中央において検出された溝であり，ＳＢ5011を切っている。検出面のレベルは標高1.91mである。検出全長は2.90m，幅は0.70m，深さは８cmを測る。溝の方位はＥ－20°－Ｓを示す。

遺物は，磁器椀（１），同皿（２）である。



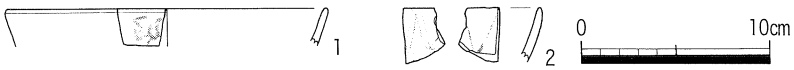

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 12.0 | | (3.0) | 内外面施釉　外面草花文 | 透明 | 灰白N8/ | 密 |
| 2 | 磁器　小皿 | 6.0 | | (2.3) | 内外面施釉 | 白色 | 灰白N8/ | 密 |

第262図　ＳＤ5010出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ5011　（第263図）

調査区中央において検出された溝であり，ＳＢ5004のＰ－２とＳＤ5002を切っている。検出面のレベルは標高1.85m前後である。検出全長は6.06m，幅は1.32m，深さは７cmを測る。方位はＥ－10°－Ｓを示す。

遺物は磁器碗（１・２）。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 16.8 | | (2.0) | 内外面施釉 | 透明 | 灰白2.5GY8/1 | 微砂 |
| 2 | 磁器　碗 | | | (2.9) | 内外面施釉　外面二重網目文 | 透明 | 灰白N8/ | 密 |

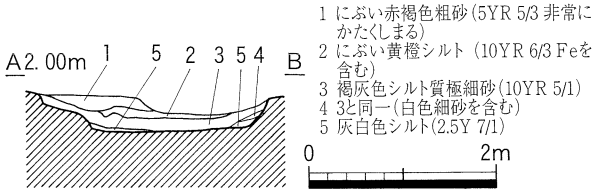
第263図　ＳＤ5011出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ5012　（第264・265図）

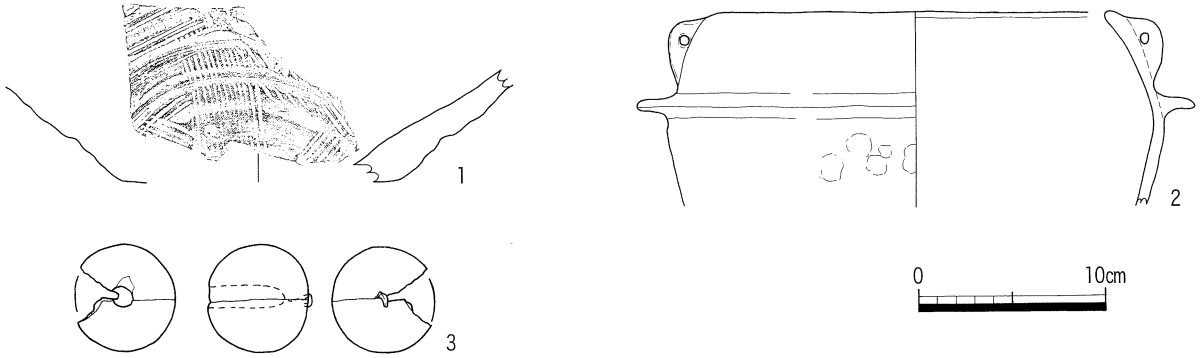
調査区南端において検出された溝であり，東端と西端近くで柱穴に切られている。

検出面のレベルは標高1.79mである。溝の方位はＮ－90°－Ｅを示す。検出できた溝の全長は14.00mを測る。幅は約2.50mを測るが，中央より西側にかけて北方向に拡張し3.88mを測る。検出面からの深さは0.40mを測る。底面のレベルは平坦である。埋土は５層に分層され，上面は非常に固くしまっている。

遺物は，陶器擂鉢（１），瓦質土器羽釜（２），剣玉（３），その他の磁器片である。




第264図　ＳＤ5012断面図（Ｓ：１/80）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外 | 内 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 陶器　擂鉢 | | 14.6 | (6.0) | 回転ナデ　底面篦削り　備前焼 | 赤褐10YR4/3 | | 微砂 |
| 2 | 瓦質土器　羽釜 | 20.8 | | (10.3) | 胴部外面指押え　内面板ナデ・刷毛目 | 褐灰10YR4/1 | | 微砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 剣玉の玉 | 5.6×5.2 | | | | 木 | 釘残存 |

第265図　ＳＤ5012出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＤ5013

調査区中央やや南西側で検出された溝であり，中央部と東側は撹乱により消滅している。

検出面のレベルは標高1.80mである。溝の方位はＥ－15°－Ｓを示す。検出長は5.00m，幅は1.10m，深さは８cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

ＳＤ5014

調査区中央の東端で検出された溝であり，ＳＢ5001・ＳＤ5007・ＳＸ5002を切っている。

検出面のレベルは標高1.87mである。溝の方位はＮ－10°－Ｅを示す。検出全長は一部途切れる部分があるが約10.15mを測る。幅は0.45m，深さは１～14cmを測る。

ＳＤ5015

調査区ほぼ中央において検出された溝であり，ＳＢ5011を切っている。

検出面のレベルは標高1.94mである。溝の方位はＥ－20°－Ｓを示す。検出全長は約9.80m，幅は0.60～1.36m，深さは２cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

ＳＤ5016

調査区中央の北寄りで検出された溝であり，中央部と東側は撹乱により消滅している。

検出面のレベルは標高1.91mである。溝の方位はＥ－15°－Ｓを示す。検出全長は6.30m，幅は1.03m，深さは９cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

ＳＤ5017

調査区北西部で検出された溝であり，土坑を切っている。検出面のレベルは標高1.86mである。検出全長は2.20m，幅0.90m，深さ５cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

４　土坑

ＳＫ5002　（第266図－１）

調査区北西端に検出された土坑であり，ＳＫ5003に切られている。

検出面のレベルは標高1.78mである。土坑の北側は調査区外に延びており，検出できた部分の平面形は楕円形を呈する。東西方向の長軸は約1.60m，南北の残存長は1.20mを測る。深さは0.25mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は灰白色シルト質極細砂が主体をなす。

遺物は，磁器鉢（１）であり，外面に笹文様，内面に牡丹文様が描かれ，蛇の目凹形高台をなす。18～19世紀のものである。

ＳＫ5003　（266図－２）

調査区北西端において検出された土坑であり，ＳＫ5002と西側の土坑を切っている。

検出面のレベルは標高1.80mである。土坑の北側は調査区外に延びており，検出できた部分の平面形は長方形を呈する。東西方向の長さは2.80m，南北の残存長は1.02mを測る。深さは0.48mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。掘り方はほぼ垂直である。

遺物は，磁器蓋（２）であり，底面は回転糸切りを施す。信楽焼である

ＳＫ5004　（第266図－３・４）

調査区北部において検出された土坑であり，ＳＢ5009を切っている。

検出面のレベルは標高1.93m前後である。土坑の平面形は北東隅の丸くなった方形を呈し，１辺は1.50mを測る。検出面からの深さは８cmである。断面は逆台形を呈す。

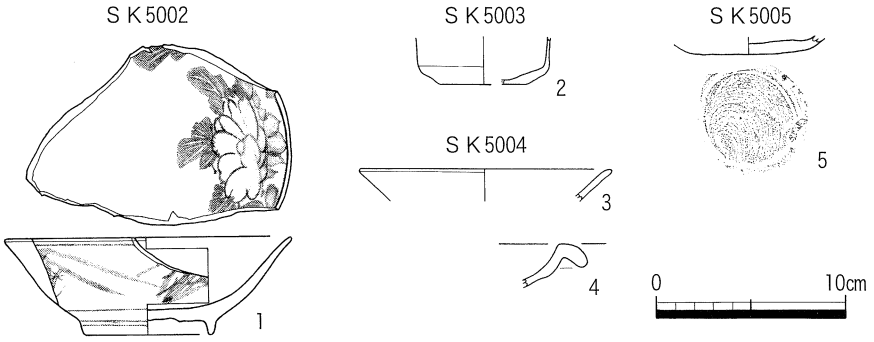
遺物は，土師質土器杯（３），同焙烙（４）である。

ＳＫ5005　（第266図－５）

調査区中央の東端において検出された土坑であり，土坑の東側は調査区外に延びている。

検出面のレベルは標高1.83mである。土坑の平面形は円形を呈し直径1.30m，深さ0.18mを測る。断面は逆台形を呈す。

遺物は，土師質土器杯（４）である。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　鉢 | 15.0 | 6.6 | 5.2 | 高台無釉　蛇ノ目凹形高台　外面笹文　内面牡丹文 | 透明 | 灰白N8/ | 密 |
| 2 | 陶器　蓋 | | 4.6 | (2.5) | 回転ナデ　底面回転糸切り　信楽焼 | 橙2.5YR7/8 | | 密 |
| 3 | 土師質土器　椀 | 13.4 | | (1.7) | 回転ナデ　内面刷毛目 | 浅黄橙10YR8/4 | | 微砂 |
| 4 | 土師質土器　焙烙 | | | (2.3) | 口縁部横ナデ　内面刷毛目 | 黒褐10YR3/1 | | 微砂 |
| 5 | 土師質土器　杯 | | 6.0 | (0.9) | 回転ナデ　底面回転糸切り | 鈍い黄橙10YR7/2 | | 微砂～細砂 |

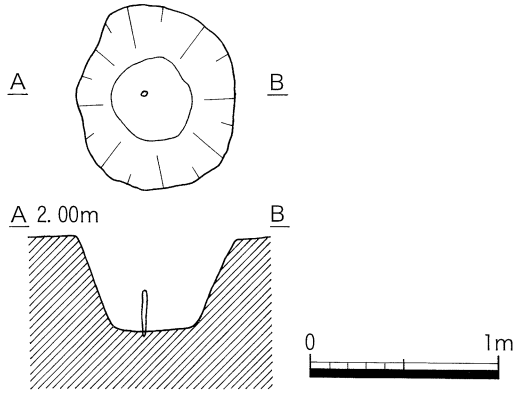
第266図　ＳＫ5002～5005出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＫ5006　（第267・268図）

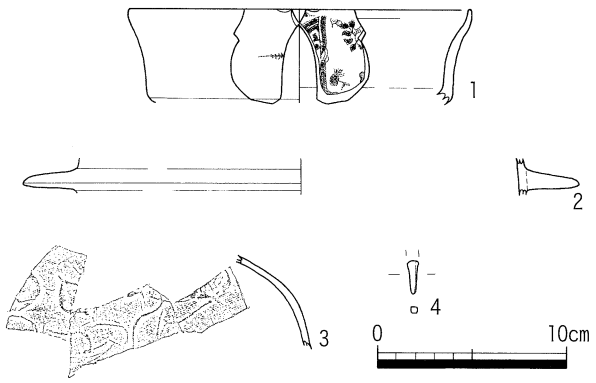
調査区北部において検出された土坑であり，南西側の土坑に切られる。

検出面のレベルは標高1.93mである。土坑の平面形は不整な円形を呈し，直径は0.86×1.00mを測る。検出面からの深さは0.50mである。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。底面の直径は0.44mを測る。底面の中央に長さ0.25mで直径４㎝を測る加工木が直立している。加工木の先端は若干加工している。

遺物は，磁器鉢（１），瓦質土器羽釜（２），同茶釜（３），釘（４）である。




第267図　ＳＫ5006平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　鉢 | 18.0 | | (5.0) | 内外面施釉　内面草花文 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10Y8/1 | 精良 |
| 2 | 瓦質土器　羽釜 | | | (2.0) | 外面横ナデ　内面ナデ | 灰N5/ | 灰白N4/ | 粗砂 |
| 3 | 瓦質土器　茶釜 | | | (5.0) | 外面ナデ　内面板ナデ　外面唐草文のレリーフ | 褐灰10YR4/1 | 灰白N4/ | 微砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 釘 | 1.7 | 0.4 | 0.4 | | | |

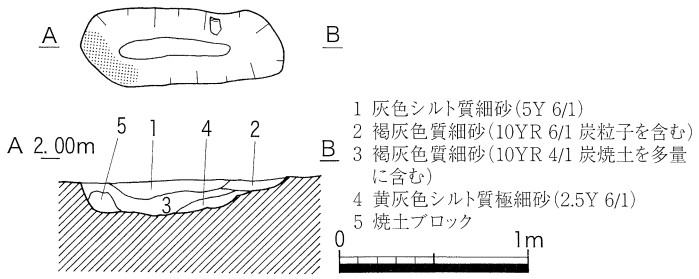
第268図　　ＳＫ5006出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ5007　（第269・270図）

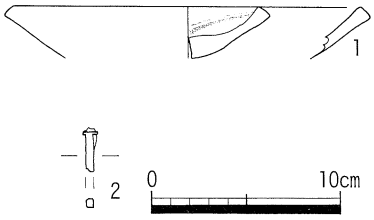
調査区北部において検出された土坑である。

検出面のレベルは標高1.89mである。土坑の平面形は細長い楕円形を呈し，南北方向の長軸は1.10m，短軸は0.40mを測る。深さ0.20mを測る。断面は逆台形を呈し，北側の掘り方は段を有す。埋土中に多量の焼土粒・炭化材が含まれ，底面直上に焼土ブロックが検出される。

遺物は，磁器鉢（１），釘（２），他の磁器片である。




第269図　ＳＫ5007平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　鉢 | 18.2 | | (2.75) | 内外面施釉 | 透明 | 灰白5Y8/2 | 密 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 鉄釘 | 2.2 | 0.5 | 0.5 | | | |

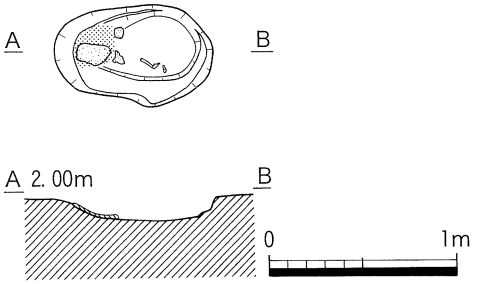
第270図　ＳＫ5007出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ5008　（第271・272図）

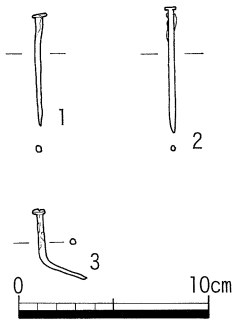
調査区北西部において単独で検出された土坑である。

検出面のレベルは標高1.95mである。土坑の平面形は不整な楕円形を呈し，東西方向の長軸は0.84m，短軸は0.55mを測る。深さは0.12mであり，掘り方はゆるやかな傾斜で段を持つ。土坑の底面は焼けて赤化して，埋土に焼土粒・炭化材を多量に含む。

遺物は，焼けた釘（１～３），用途不明の鉄製品，磁器片である。




第271図　ＳＫ5008平・断面図
（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鉄釘 | 6.0 | (径) 0.3 | | | | 焼けている |
| 2 | 鉄釘 | 6.7 | (径) 0.2 | | | | 焼けている |
| 3 | 鉄釘 | 5.0 | (径) 0.3 | | | | 焼けている |

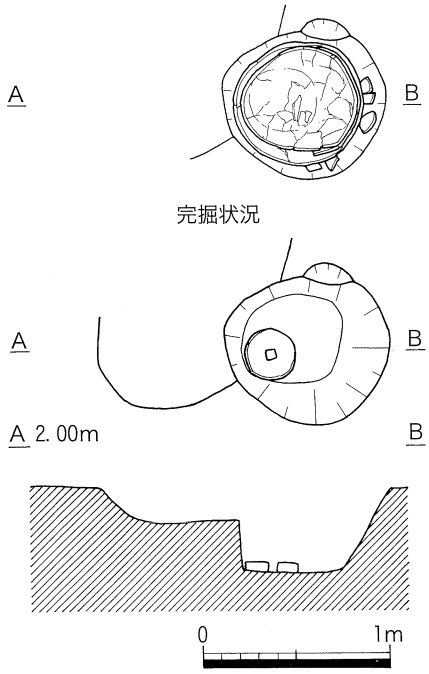
第272図　ＳＫ5008出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ5009　（第273・274図）

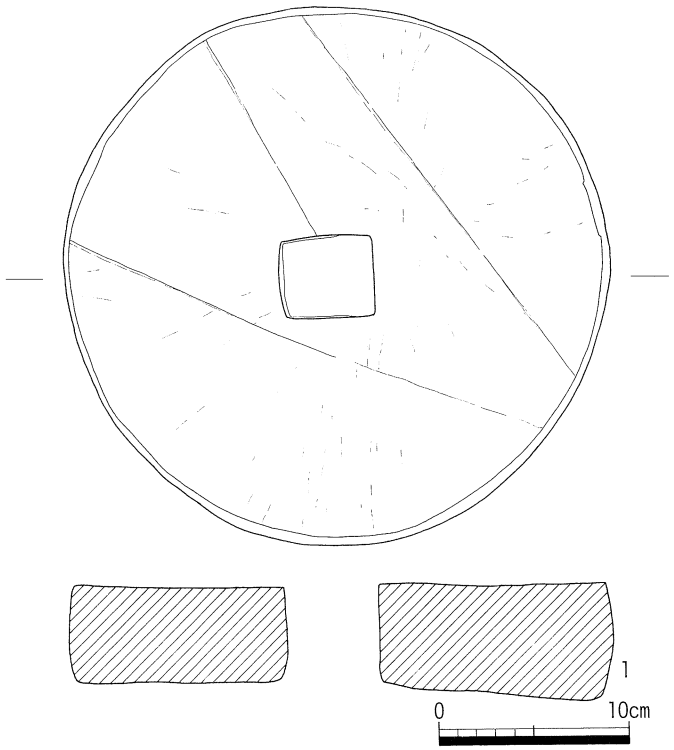
調査区北部において検出された土坑であり，ＳＫ5012を切っている。

検出面のレベルは標高1.82mである。土坑の平面形は不整な円形を呈し，直径は0.80×0.90mを測る。検出面からの深さは0.43mであり，底部は西側に片寄っている。土坑は３個体の土師質土器大甕が重なった状態で出土した。その土器を取り除くと，底部の片寄った位置より一輪車の車輪が出土した。

遺物は，一輪車の車輪（１），土師質土器大甕，他の陶磁器片である。




第273図　ＳＫ5009平・断面図
（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器　種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 一輪車 | | (径) 28.8 | 5.0～6.2 | | 木 | 丸太を使うが，中心は木の芯を外している |

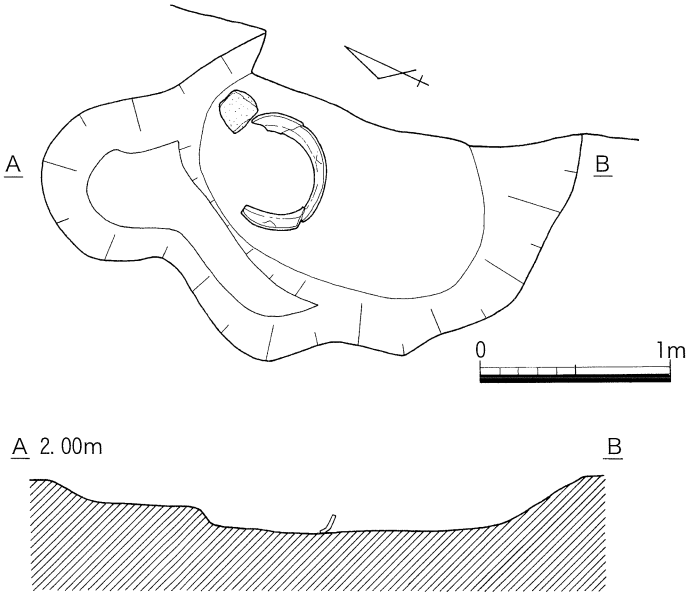
第274図　ＳＫ5009出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ5010　（275～278図）

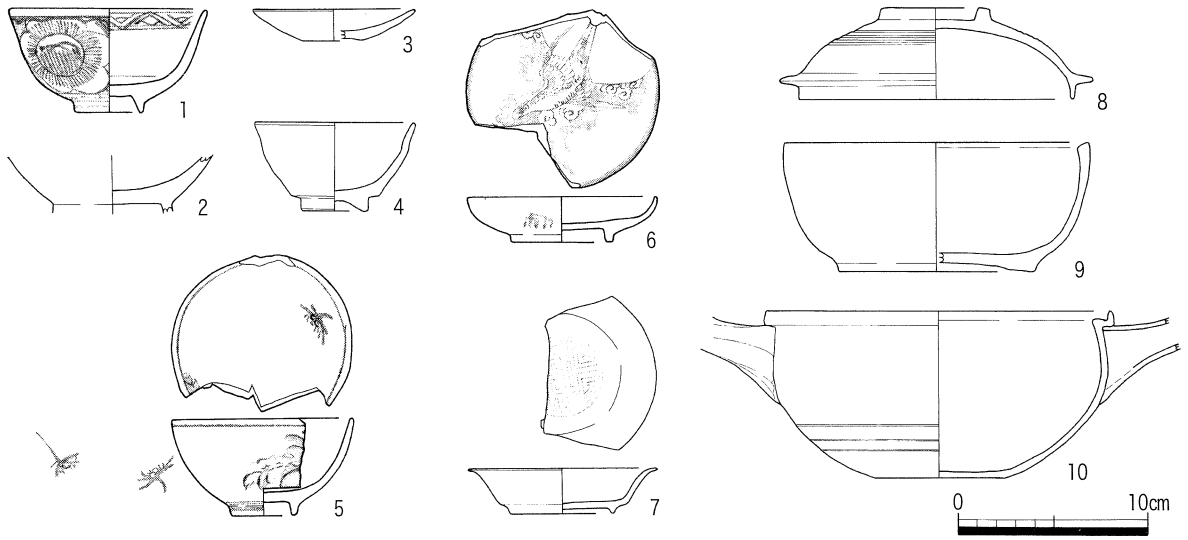
調査区北東部において検出された土坑であり，土坑の東側は調査区外に延びている。

検出面のレベルは標高1.83mである。検出できた部分の平面形は，北側に張り出し部のある不整な円形を呈す。土坑の直径は約2.00mを測り，張り出し部を含めた最も径の長い部分では2.83mを測る。底部までの深さは0.57mであり，張り出し部のテラス状の平坦面は底部より0.22m高い。掘り方はゆるやかな傾斜をなす。埋土中に多量の土器・瓦が出土し，底部直上で第278図－24の風呂釜が出土した。

遺物は，磁器碗（1・4・5），同皿（3・6・7），陶器蓋（8），同鉢（9），同土鍋（10），同徳利（11），陶器擂鉢（12），瓦質土器茶釜（13），同羽釜（14・15），同焙烙(16)，土師質土器火倉（17･18），同火鉢（19・20），同大甕（23），同風呂釜（24），木製椀（2），鳩笛（21），砥石(22)，他の陶磁器片，




第275図　ＳＫ5010平・断面図（Ｓ：１/40）



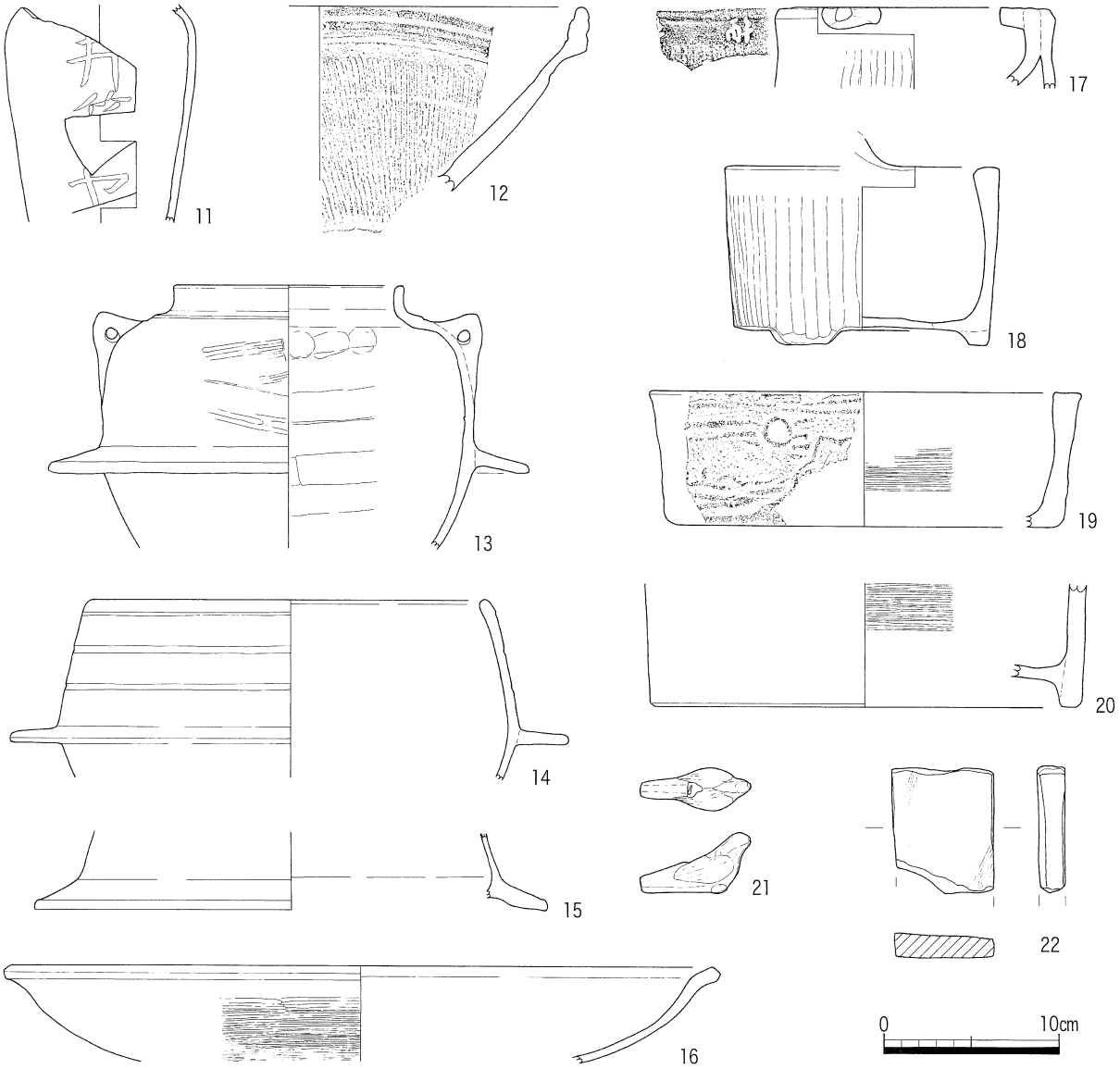

| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 10.3 | 3.6 | 5.5 | 内外面施釉 | 透明 | 灰白N8/ | 密 |
| 2 | 木器　椀 | | | (3.6) | 外面黒漆塗り　内面赤漆塗り | | | |
| 3 | 磁器小皿 | 8.6 | 3.1 | 1.7 | 内外面施釉 | 灰白7.5Y8/1 | 浅黄橙7.5YR8/4 | 密 |
| 4 | 磁器　湯飲み碗 | 8.4 | 3.4 | 4.7 | 高台脇以下無釉 | 白色＋紫色 | 浅黄2.5Y7/3 | 密 |
| 5 | 磁器　碗 | 9.8 | 3.4 | 5.1 | 内外面施釉　外面野菜･トンボ　内面トンボ | 透明 | 灰白N8/ | 密 |
| 6 | 磁器　皿 | 10.0 | 5.4 | 2.4 | 内外面施釉　外面源氏香文　内面鷹 | 透明 | 灰白N8/ | 密 |
| 7 | 磁器　皿 | 10.0 | 5.4 | 2.4 | 内外面施釉　内面線彫り | 透明 | 灰白N8/ | 密 |
| 8 | 陶器　蓋 | 14.6 | 5.8 | 4.8 | 内面無釉 | 黒褐7.5YR2/2 | 橙2.5YR6/8 | 密 |
| 9 | 陶器　鉢 | 16.0 | 10.2 | 6.8 | 口縁端部･高台脇以下無釉　蛇ノ目凹形高台 | 灰オリーブ5GY5/1 | 橙2.5YR6/8 | 密 |
| 10 | 陶器　土鍋 | 18.0 | 6.8 | 8.8 | 内面施釉　胴部外面黒塗り　信楽焼 | 黒5YR1.7/1 | 橙5YR6/8 | 微砂若干 |

第276図　ＳＫ5010出土遺物（１）（Ｓ：１/４）

瓦である。

1は外面に素描き技法による染付，口縁部内面に圏線と山形文を巡らす。18世紀～19世紀のものである。5は内外面にトンボと蕪の文様が描かれている。19世紀前半のものである。4は若干外反する口縁部を有し，体部下半以下は無釉である。

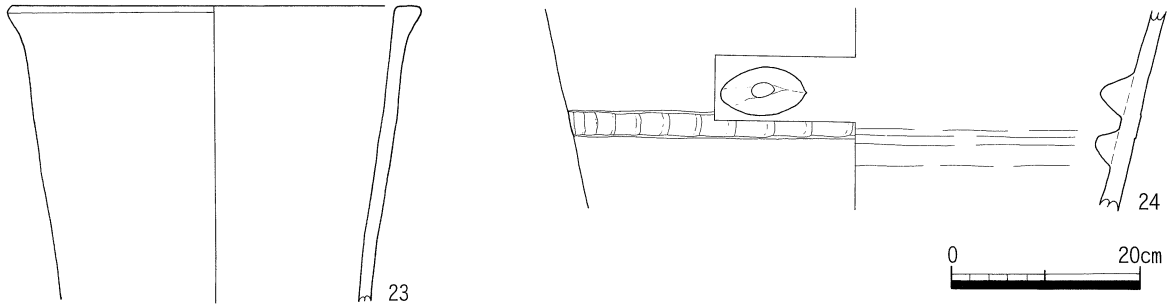
6は外面に源氏香文，内面に鷹を描いている。18世紀後半のものである。7は口縁部が外反




| 番号 | 器種 | 法量（cm） 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 外（釉） | 内（素地） | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | 陶器　徳利 | | | (12.4) | 回転ナデ　外面施釉　「井筒ヤ」 | 極暗赤褐10R2/2 | 赤10R4/6 | 密 |
| 12 | 陶器　擂鉢 | 30.4 | | (10.0) | 回転ナデ　全面卸目　備前焼 | 赤褐5YR4/6 | 赤褐10R4/4 | 細砂・粗砂 |
| 13 | 瓦質土器　茶釜 | 13.3 | | (14.9) | 回転ナデ　胴部外面刷毛目　煤 | 黒2.5Y2/1 | | 細砂 |
| 14 | 瓦質土器　羽釜 | 22.8 | | (10.3) | 回転ナデ　口辺部に3条の沈線　煤 | オリーブ黒5Y3/1 | 灰白N8/ | 微砂 |
| 15 | 瓦質土器　羽釜 | | | (4.4) | 回転ナデ　煤 | 暗青灰5PB3/1 | 青灰5PB6/2 | 微砂若干 |
| 16 | 瓦質土器　焙烙 | 40.0 | | (5.5) | 内面回転ナデ　外面ナデ・刷毛目 | 黒N2/ | 暗灰N3/ | 微～細砂 |
| 17 | 土師質土器　火倉 | 15.4 | | (4.6) | 回転ナデ　外面ナデ・篦ナデ　口縁端部に煤 | 灰白7.5Y8/1 | 浅黄橙10YR8/4 | 微砂若干 |
| 18 | 土師質土器　火倉 | 15.8 | 14.6 | 10.2 | 回転ナデ　口縁部横ナデ　外面篦ナデ | 浅黄2.5Y7/3 | | 微砂 |
| 19 | 土師質土器　火鉢 | 24.8 | 21.4 | 7.7 | 回転ナデ　内面刷毛目　口縁端部・内面に煤 | 灰黄褐10YR6/2 | | 細砂 |
| 20 | 土師質土器　火鉢 | | 24.0 | (7.2) | 回転ナデ　内面刷毛目・ナデ | 黒10YR1.7/1 | | 細砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | はと笛 | 6.3 | | | | | 灰白7.5Y8/2 |
| 22 | 砥石 | (7.2) | 5.8 | 1.4 | | 砂岩 | 2面使用 |

第277図　ＳＫ5010出土遺物（２）（Ｓ：１／４）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 23 | 土師質土器　甕 | 44.0 | | (31.2) | 口縁部横ナデ　胴部外面ナデ　内面板ナデ | 橙5YR6/6 | | 微～細砂多量 |
| 24 | 風呂釜 | | | (21.4) | 内外面板ナデ | 黒褐7.5YR2/2 | 灰白10YR8/1 | 微～細砂 |

第278図　ＳＫ5010出土遺物（３）（Ｓ：１／８）

し，見込みに線彫りがある。

８，９は色調・法量とも同一であり，セット関係にある。10は信楽焼の土鍋である。

11は外面に「井筒ヤ」の線刻がある。

12は備前焼擂鉢であり，18世紀末のものである。

13は直立する口縁部で外耳・鍔を有する。外面は部分的な刷毛目，内面は板ナデが施される。14は鍔より上に３本の沈線を巡らす。14・15は鍔以下に煤が付着する。

17は口縁部外面に「酔」の線刻がある。18は底部に３ヶ所の脚を持ち，口縁部に突起を有する。19は外面にレリーフが施され，内面に煤が付着する。

21は完形の鳩笛である。

22は砂岩製の砥石であり，２面を使用している。

23は土師質土器の大甕であり，口径は44.0cmを測る。外面はナデ，内面は板ナデが施される。

24は風呂釜の底部近くであり，土坑の底面より出土した。

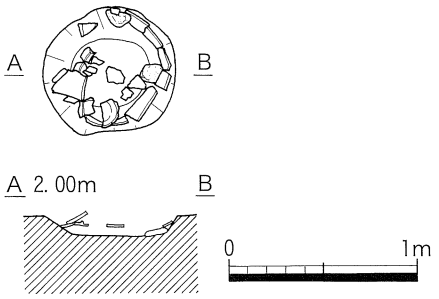
ＳＫ5011　（第279・280図）

調査区北西部において検出された土坑である。

検出面のレベルは標高1.90mである。土坑の平面形は不整な円形を呈し，直径は0.70mを測る。底面までの深さは0.11mであり，底面は平坦である。断面は逆台形を呈する。埋土は灰白色シルト質極細砂である。平瓦が土坑の側面に沿うように並べられ，埋土中に多量の土器・瓦が出土した。

遺物は，磁器碗（１・２），陶器皿（３），同蓋（４），同香炉（５），磁器皿（６・７），火倉（８），瓦質土器（９），同焙烙（10･11），キセル（12），風呂釜，陶磁器片である。

１，２は肥前系の碗であり，外面に山形文の周囲を菱状と波状の文様で埋めており，見込みに環状の松竹梅文を入れる。２の外面はピエロと鱗状の文様，見込みに環状の松竹梅文が描かれる。染付は型紙刷によることから明治前半のものである。




第279図　ＳＫ5011平・断面図（Ｓ：１/40）

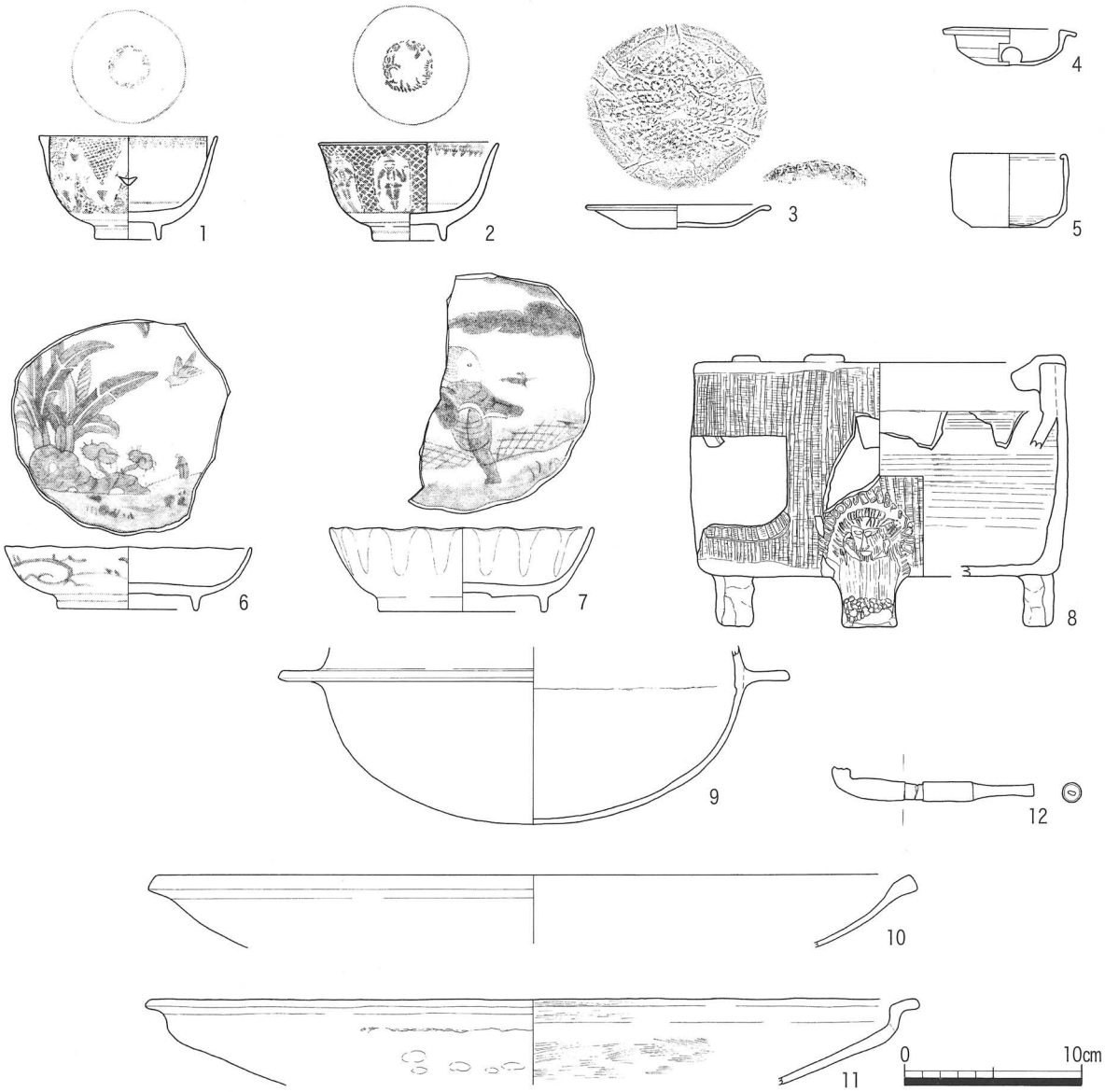
３は楕円形の口縁部で，内面に「松」，「龍□」，

「中庭在氏井―村内□□□」の文字がある。

4は信楽系の蓋で，5は口縁部が内側に丸く拡張することにより18世紀後半以降のもの。

6，7は輪花口縁の皿であり，6は外面に唐草文，内面に草鳥文，7の内面に雲文がある。

8は3ヶ所の脚を有する火倉で，脚外面に獣神の文様がある。胴部の中位に口が開いている。口縁部に3ヶ所の突起が付く。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 10.0 | 3.6 | 5.9 | 内外面施釉　型紙刷　鱗状・菱形　肥前系 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 2 | 磁器　碗 | 10.1 | 4.0 | 5.6 | 内外面施釉　型紙刷　鱗状・ピエロ　肥前系 | 絵付釉濃紺 | 灰白N8/ | 密 |
| 3 | 陶器　皿 | 9.2×10.6 | 5.2 | 1.4 | 「中庭在氏井ー村内□□□」　松　龍口 | 灰褐5YR4/2 | | 密 |
| 4 | 陶器　蓋 | 7.6 | 3.0 | 2.1 | 回転ナデ　底面回転糸切り　外面に煤　信楽焼 | 赤褐2.5YR4/8 | 黒7.5YR2/1 | 微砂 |
| 5 | 陶器　香炉 | | 4.2 | (4.2) | 回転ナデ　底面回転糸切り | 橙5YR6/6 | | 密 |
| 6 | 磁器　皿 | 14.0 | 7.8 | 3.5 | 蛇ノ目凹形高台　外面唐草文　内面草鳥文 | 明緑灰7.5GY8/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 7 | 磁器　皿 | 15.0 | 9.4 | 4.7 | 蛇ノ目凹形高台　輪花口縁　内面雲文 | 明緑灰5BG7/1 | 灰白7.5Y8/1 | 精良 |
| 8 | 土師質土器　火倉 | 21.0 | 20.0 | 15.0 | 外面深い刷毛目　内面掻目　脚3ヶ所 | 灰黄褐10YR6/2 | | 密 |
| 9 | 瓦質土器　羽釜 | | | (10.1) | 外面ナデ　内面板ナデ　外面煤 | 灰N4/ | 灰N5/ | 密 |
| 10 | 瓦質土器　焙烙 | 43.8 | | (4.1) | 口縁部横ナデ　内面板ナデ　外面煤 | 灰白5Y7/1 | 黒10YR1.7/1 | 細砂 |
| 11 | 瓦質土器　焙烙 | 43.2 | | (4.8) | 口縁部横ナデ　外面指押え後篦ナデ　内面刷毛目 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 黒褐10YR3/1 | 細砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12 | キセル | 11.4 | | | | 青銅・木 | |

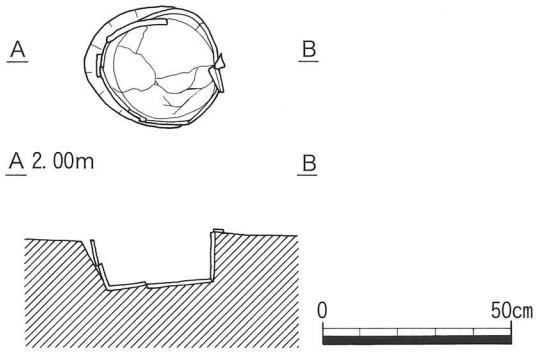
第280図　ＳＫ5011出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＫ5012　（第281・282図）

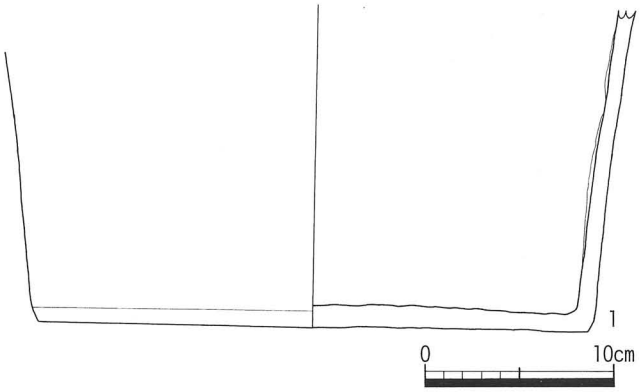
調査区北東部において単独で検出された埋甕土坑である。

検出面のレベルは標高1.84ｍである。土坑の平面形は不整な円形を呈し，直径は0.35ｍ，深さは0.15ｍを測る。掘り込みはほぼ垂直である。土坑の掘り込み面にほぼ密着する状態で土師質土器大甕の底部（282図－１）が出土した。この大甕の内面に石灰質の物質が厚く付着しており，この土坑はトイレとしての用途が考えられる。

遺物は，前述した土師質土器大甕（１）である。




第281図　ＳＫ5012平・断面図（Ｓ：１/20）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　甕 | | 29.0 | (17.1) | 回転ナデ　内面に石灰質がこびりつく | 鈍い橙7.5YR7/4 | 橙7.5YR7/6 | 密 |

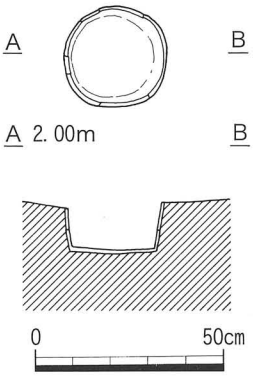
第282図　ＳＫ5012出土遺物（Ｓ：１/４）

ＳＫ5013　（第283・284図）

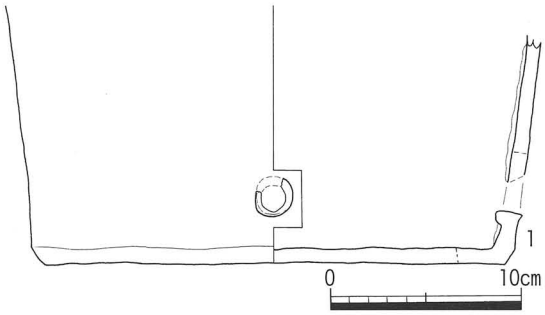
調査区北東部において検出された埋甕土坑である。

検出面のレベルは標高1.85ｍである。土坑の平面形は円形を呈し，直径は0.26ｍ，深さは0.14ｍを測る。土坑の掘り方はほぼ垂直であり，掘り方に密着した状態で土師質土器大甕が出土した。この土器の内面には石灰質の物質が厚く付着しており，この土坑はトイレとしての用途が考えられる。

遺物は，前述の土師質土器大甕（１），寛永通宝（２）である。




第283図　ＳＫ5013平・断面図（Ｓ：１/20）



| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　甕 | | 24.4 | (13.8) | ナデ　1孔を有す　内面に石灰質がこびりつく | 鈍い褐7.5YR6/3 | 鈍い黄橙10YR7/2 | 密 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 銭 | | (直径) 2.4 | 0.2 | | | 寛永通宝 |

第284図　ＳＫ5013出土遺物（Ｓ：１/２，１/４）

5　柱穴

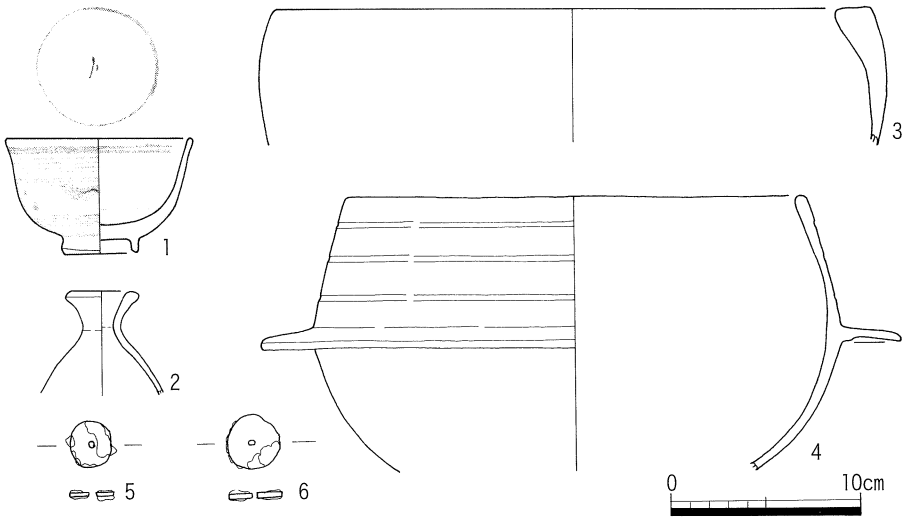
ＳＰ5021　（第285図）

調査区北部において検出した柱穴である。

検出面のレベルは標高1.87mである。柱穴の平面形は楕円形を呈し，直径は0.40×0.60mを測る。底面までの深さは0.27mを測り，底面はやや西側に寄っている。埋土は灰白色シルト質極細砂である。

遺物は，磁器碗（1），同銚子（2），土師質土器甕（3），瓦質土器羽釜（4），鉄製品（5・6）である。

1は内外面に圏線を巡らし，見込みに「二」があり，18世紀後半のものである。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | 9.8 | 3.9 | 6.1 | 内外面施釉　見込みに「二」 | 明緑灰10GY8/1 | 灰白10GY8/1 | 密 |
| 2 | 磁器　銚子 | 3.4 | | (5.5) | 内外面施釉 | 透明 | 灰白5Y8/2 | 密 |
| 3 | 土師質土器　甕 | 31.0 | | (7.3) | 回転ナデ | 鈍い褐7.5YR6/3 | | 密 |
| 4 | 瓦質土器　羽釜 | 24.2 | | (14.5) | 口辺部横ナデ　3条沈線　煤 | 黄灰2.5Y4/1 | オリーブ黒5Y3/1 | 微砂～細砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 鉄製品 | | (直径) 2.2 | 0.25 | | | |
| 6 | 鉄製品 | | (直径) 2.7 | 0.3 | | | |

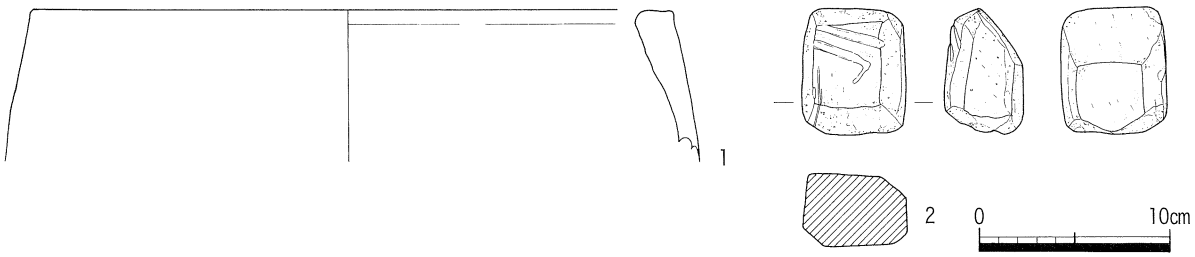
第285図　ＳＰ5021出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5057　（第286図）

調査区北東部に検出された柱穴である。

検出面のレベルは標高1.85mである。柱穴の平面形は楕円形を呈し，直径は0.20×0.30m，深さは0.20mを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

遺物は，土師質土器甕（1），砥石（2）で，2は全面加工し，2条の溝がある。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外 | 内 | |
| 1 | 土師質土器　甕 | 34.0 | | (8.0) | 口縁部横ナデ　外面篦ナデ　内面ナデ | 鈍い橙7.5YR6/4 | 鈍い黄橙10YR7/3 | 粗砂 |

| 番号 | 器種 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 重さ(g) | 材質 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 砥石 | 6.7 | 5.5 | 3.9 | | 砂岩 | 全面使用 |

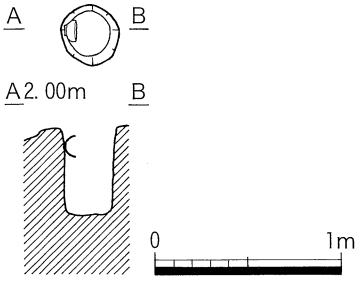
第286図　ＳＰ5057出土遺物（Ｓ：１／４）

ＳＰ5287　（第287・288図）

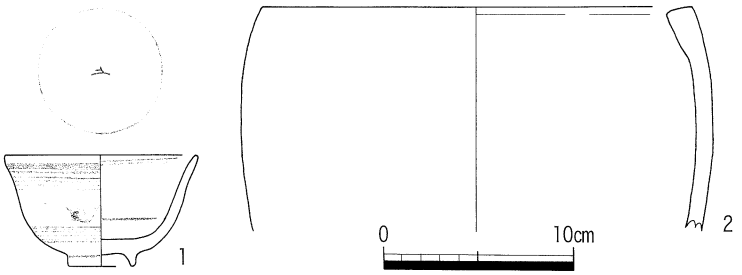
調査区北部の東端において単独で検出された柱穴である。

検出面のレベルは標高1.89mである。柱穴の平面形は円形を呈し，直径は0.29mを測る。底面までの深さは0.48mであり，彫り込みはほぼ垂直である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。側面に密着した状態で磁器碗（第288図－１）が出土した。

遺物は，磁器碗（１），土師質土器甕（２）である。１はＳＰ5021出土の碗と法量・文様が同一である。内外面に圏線を巡らし，見込みに「三」が書かれている。




第287図　ＳＰ5287平・断面図（Ｓ：１/40）




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 磁器　碗 | | 3.6 | (5.9) | 内外面施釉　見込みに「三」 | 灰白5GY8/1 | | 密 |
| 2 | 土師質土器　甕 | 22.8 | | (11.9) | 回転ナデ | 鈍い褐7.5YR6/3 | | 細砂 |

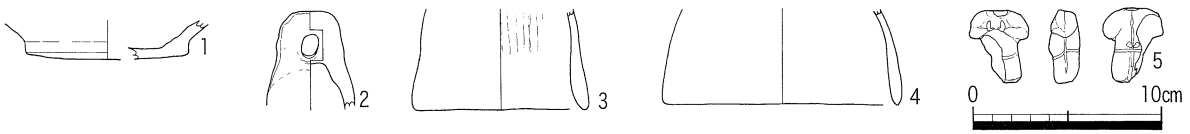
第288図　ＳＰ5287出土遺物（Ｓ：１/４）

５）５工区包含層出土遺物

１は土師器杯であり，底部が拡張する。底面を含めた外面は回転ナデの後にナデを施す。13世紀のものである。

２～４は飯蛸壷である。２は上部であり，孔を有する。３，４は口縁部であり，３の内面はヘラ削り，４は内外面ともナデが施される。

５は相撲取りの土人形であり，頭部と右足部を欠損する。




| 番号 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外（釉） | 内（素地） | |
| 1 | 土師器　杯 | | 8.8 | (2.1) | 回転ナデ　底面ナデ | 明褐灰7.5YR7/2 | 明褐灰7.5YR7/1 | 微砂 |
| 2 | 弥生土器　飯蛸壷 | | | (5.3) | ナデ | 橙7.5YR6/6 | | 微砂～細砂 |
| 3 | 弥生土器　飯蛸壷 | 9.0 | | (5.3) | 外面摩滅　内面篦削り | 橙5YR6/6 | 鈍い黄橙10YR6/3 | 細砂 |
| 4 | 弥生土器　飯蛸壷 | 12.4 | | (5.1) | 内外面ナデ | 鈍い黄橙10YR6/3 | 明赤褐2.5YR5/6 | 微砂～細砂 |
| 5 | 土人形 | | | | 相撲取り | 浅黄橙10YR8/3 | | |

第289図　５工区包含層出土遺物（Ｓ：１/４）

# 第４章　　おわりに

木太中村遺跡では，２次にわたる発掘調査によって弥生時代後期～近代に至るまでの数多くの遺構が全域において検出された。以下，遺構の変遷と注目すべき点について若干記述する。

## １　遺構の変遷について

本遺構に検出された遺構を６期に分類し，遺構の変遷をみることとする。

Ⅰ期（弥生時代後期）

本遺構で明確な遺構が最初に確認できるのがこの時期である。遺構としては，３工区のＳＫ3001，４工区のＳＫ4001・ＳＲ4001，５工区のＳＢ5001～5003の３基の掘立柱建物跡とＳＫ5001である。ＳＫ3001とＳＫ4001は周辺に同時期の遺構がなく単独に存在する遺構であるが，ＳＫ5001はＳＢ5002とＳＢ5003と接して存在する。これらの土坑は，数個の完形の土器をまとめて出土することと土坑の形態から貯蔵穴であると考えられる。掘立柱建物跡は５工区の中央部にのみ検出された。ＳＢ5001は２×３間の規模であり，一般的な掘立柱建物跡である。ＳＢ5002は中央に同じ埋土の柱穴があり，総柱の建物である可能性も考えられる。

Ⅱ期（古墳時代）

５工区においてのみ検出された遺構の時期である。遺構は，ＳＢ5004・5005，ＳＤ5001～5008，ＳＰ5267，ＳＸ5001・5002である。掘立柱建物跡は５工区中央でほぼ平行する位置関係にある。溝は調査区中央より北側において検出された。東西方向に延びるＳＤ5001・5003・5007は東から約30度前後南へ向いている。ＳＤ5002・5004～5008は南北方向に延びる。ＳＤ5002は北から12度東へ向いた方向であり，その他は北から東へ35度前後の角度を測る。これらの溝の中で最も出土遺物の多い溝はＳＤ5007である。ほぼ完形の須恵器壷・甕や土師器鉢を含めた多数の土器が出土し，年代としては７世紀初頭が比定される。ＳＸ5001は，底面の最深部とＳＤ5003・ＳＤ5004がつながっていることから，溝に関する何らかの機能を持つ遺構であると考えられる。出土遺物は溝と同一年代を示す。

Ⅲ期（古代）

遺構は非常に少なく，５工区のＳＢ5007，ＳＸ5003のみである。ＳＢ5007は１辺6.05ｍを測る規模の大型建物であり，その出土遺物から10～11世紀に比定される。

ＳＸ5003は５工区南端において検出された遺構であり，出土土器は土師器杯・皿・椀や須恵器杯・土師器土器・須恵質土器・黒色土器椀・土錘等がある。黒色土器椀は大阪からの搬入品の楠葉型であり，大阪との交流があったと考えられる。

Ⅳ期（中世）

５工区を中心として遺構が検出された時期であり，４工区のＳＫ4002と５工区のＳＢ5006・5008・5009・ＳＤ5009，多数の柱穴が遺構として挙げられる。ただし，４工区のＳＫ4002は埋土が近世のＳＫ4001とほぼ同一であることから出土した土器は混入したものであるという可能性も考えられる。

ＳＢ5006は検出できた南北方向の列柱は約8.40ｍを測る大型の建物であり，北西側に１×２間の張り出し部を有する。出土遺物の中に和泉型の瓦器椀・土師器土器杯等を含むことより13世紀初頭の年代が考えられる。ＳＢ5008は3.36×8.00ｍの規模を測る建物であり，３本の束柱

を有する。出土した土器の特徴から13世紀後半～14世紀前半の年代が考えられる。

ＳＢ5009は，ＳＢ5008と平行した方向に建つ建物であり，13世紀の瓦器椀を出土した。

ＳＤ5009は５工区中央において検出された溝であり，その方位は東から南へ12度の角度を測る。溝は直線的であり，出土遺物から13世紀前半の年代が考えられる。条里型地割に基づく溝である可能性が非常に高い。

Ｖ期（近世）

本遺跡において最も多数の遺構が全工区にわたって構築された時期である。遺構としては，掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑・柱穴・性格不明遺構・自然旧河道である。

掘立柱建物跡は，２工区・４工区・５工区に検出された。２工区と４工区の掘立柱建物跡は整理作業段階において柱穴群の中から根石・詰石や柱材を残存する柱穴を抽出して確認したものであり，これ以外にも建物が存在することも考えられる。５工区のＳＢ5010とＳＢ5011は束柱を有する建物である。

溝は多数検出されたが，最も注目すべき溝は１工区のＳＤ1001・1002・1003と２工区のＳＤ2001・４工区のＳＤ4001・５工区のＳＤ5012の６本である。これらの溝は2.00m以上の幅を測る大規模な溝であること，検出された位置・方向が現存する条里地割と同一であることから，18世紀頃の条里地割に基づく坪界線の溝であると考えられる。

井戸は３種類の構造に分けられる。まず，1工区のＳＥ1002のような素掘りの井戸である。次はＳＥ1001・ＳＥ2001・ＳＥ4001・4002の石組みの井戸である。最後はＳＥ1003・ＳＥ3001の石組みと木枠を併用した井戸である。

多量の遺物を出土した自然旧河道は当時の地形を考える上に重要であるため報告した。旧河道は２工区～４工区にかけて検出された。その流れる方向は，２工区南端では東西方向に流れ，西端でほぼ直角に流れを変え北流する。３工区北端と４工区西端で再び北東方向に曲がっている。つまり，近世の旧河道は蛇行していたのである。現在，本遺跡の東側には詰田川が流れており，この旧河道はその支流の一本であったと考えられる。

Ⅵ期　（明治以降）

２工区のＳＥ2002・2003と５工区のＳＫ5010が検出された。

## ２　本遺跡の成果について

本遺跡の成果としては，次の５点を挙げることができる。まず，第１点は，調査区北端において遺構が検出されたことである。従来，本遺跡の北端付近は寛永14年以前の海岸線であると言われていたが，本遺跡において弥生時代の集落が検出されたことから，弥生時代の海岸線がこの付近まで入り込んでいたとは考えられない。さらに，本遺跡の北端で18世紀の遺構が多数検出されたことより，江戸時代初頭の海岸線は従来考えられていた推定線より北側になることが判明した。海岸線を確定するためには，本遺跡より北側の発掘調査が今後必要である。

第２点目は，弥生時代後期の土坑の検出である。この土坑からは数個の完形土器を含めた多くの土器が出土し，この地域における当該時期の良好な資料を提供することができた。

第３点目は，ＳＸ5003より楠葉型の黒色土器椀が出土したことである。この土器は大阪からの搬入品であり，大阪との交流が考えられる。

第４点目は，18世紀の条里地割に基づく溝を検出したことである。これらの溝は現在まで残存する地割とほぼ同一位置・方向を示している。また，１本のみの検出であるが，13世紀前半の溝（ＳＤ5009）は，現存の条里地割りと若干異なる角度を示しており，この付近の条里地割

を考える上で新たな検討課題を提起した。

第５点目は，弥生時代後期から近代に至る長期間にわたってこの地域が集落域として利用されていたことである。

今回の発掘調査によって，弥生時代～近代までの歴史的景観の変遷が明らかになり，さらに，従来海岸線と考えられていた推定線を改めて考え直す契機となるなど，木太中村遺跡は当地域の歴史を研究する上で貴重な資料となるであろう。

参考文献

木太町郷土誌を作る会　1995年　『木太町郷土誌』

香川県教育委員会　1992年　『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　東山崎・水田遺跡』

香川県教育委員会　1998年　『宮川河川改修に伴う埋藏文化財発掘調査報告　木太本村Ⅱ遺跡』

高松市教育委員会　1999年　『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第１冊　川南・西遺跡』

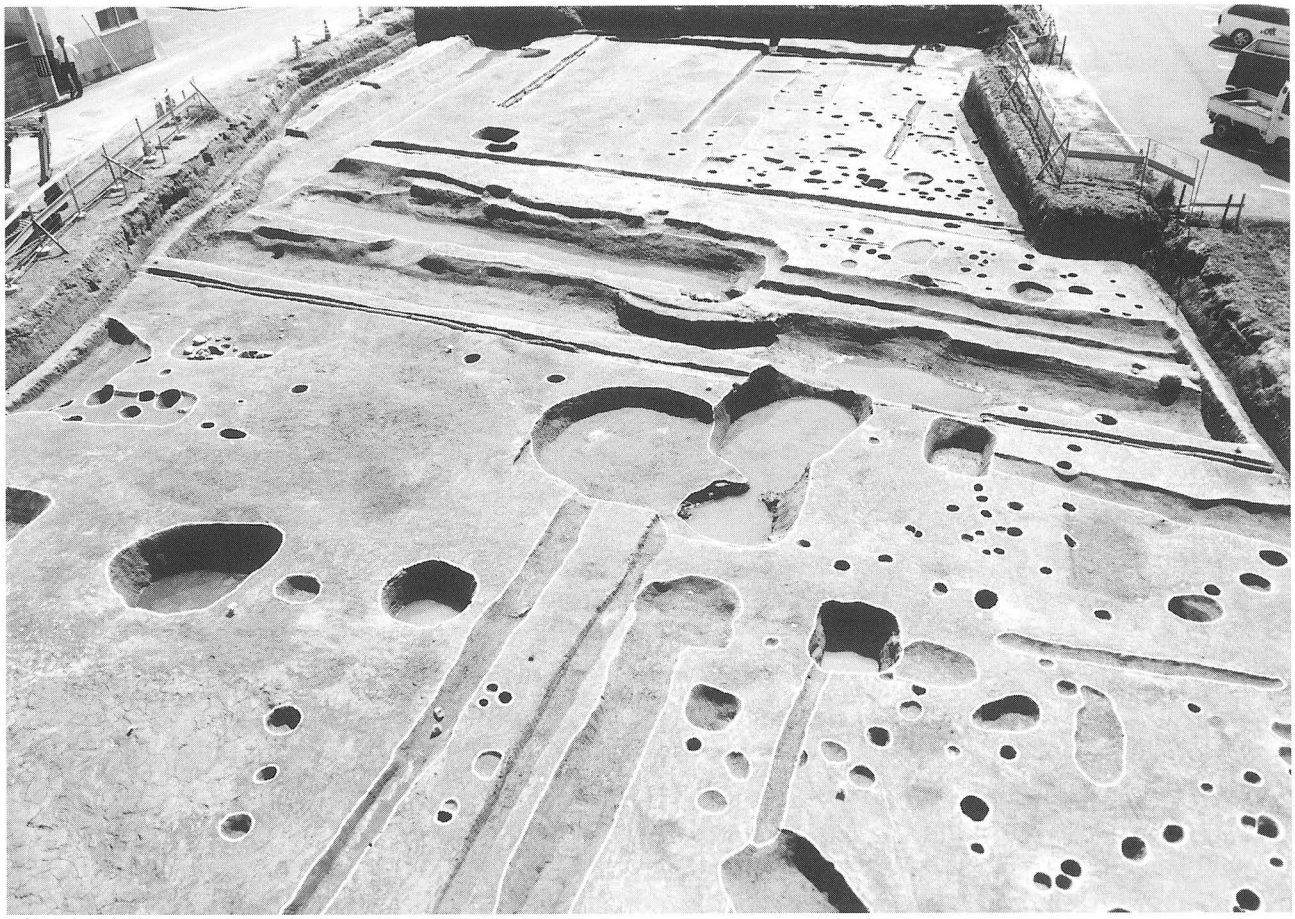
高松市教育委員会　2000年　『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第２冊　川南・東遺跡』

1　1工区空中写真

2　2・3工区空中写真

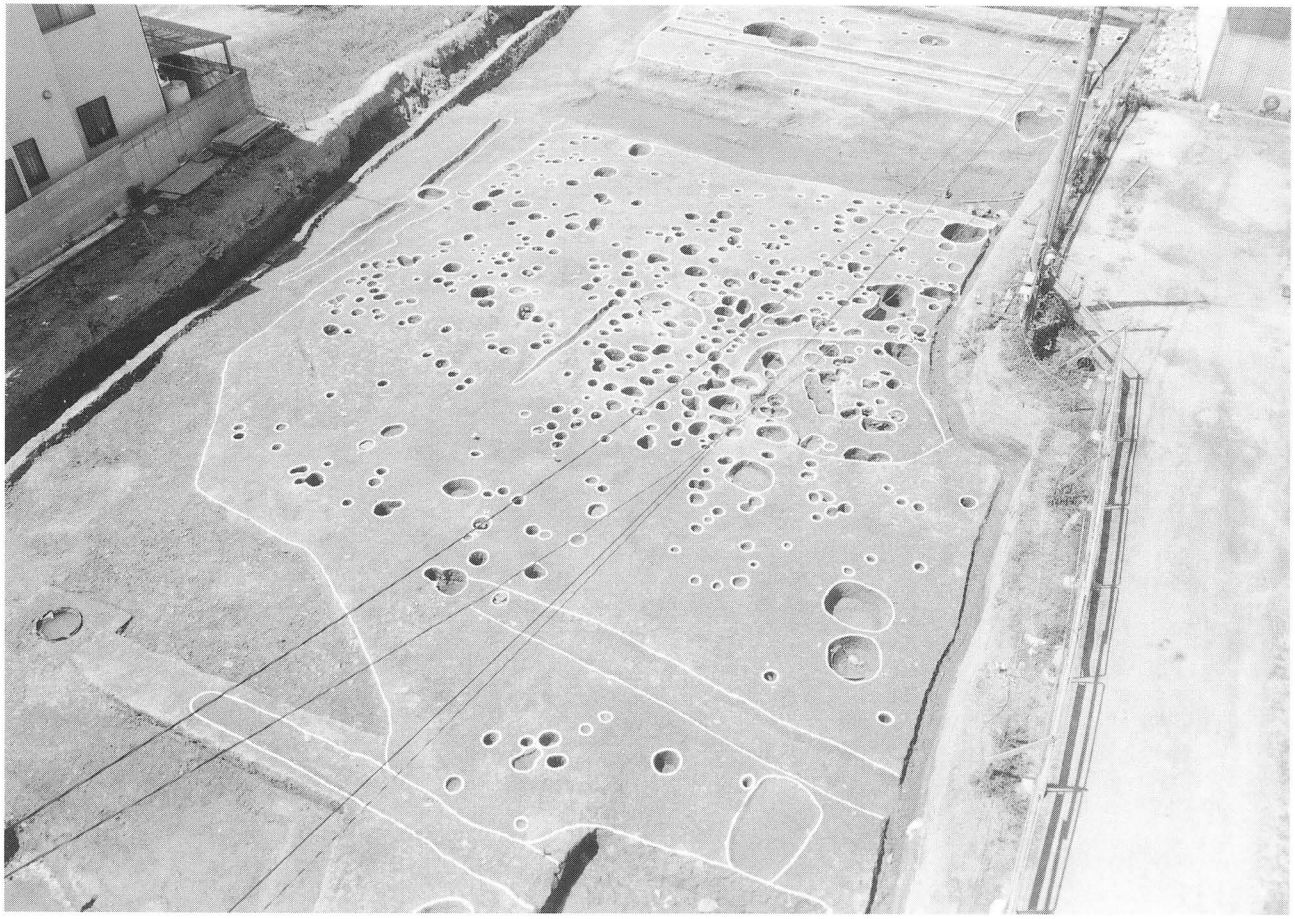
3　5工区空中写真

図版2



1　1工区完掘状況（南から）

2　1工区完掘状況（北から）

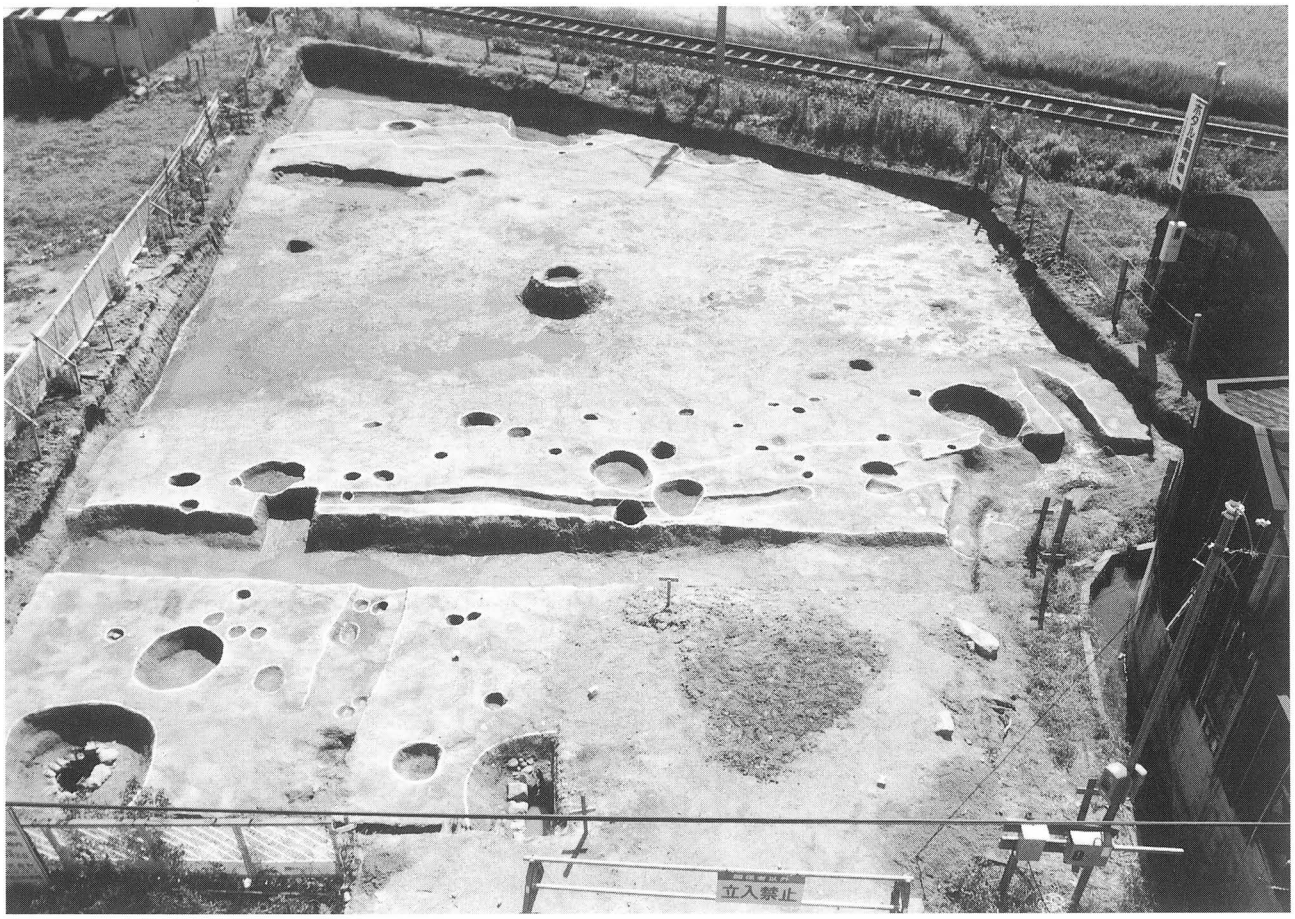


1　2工区完掘状況（南から）

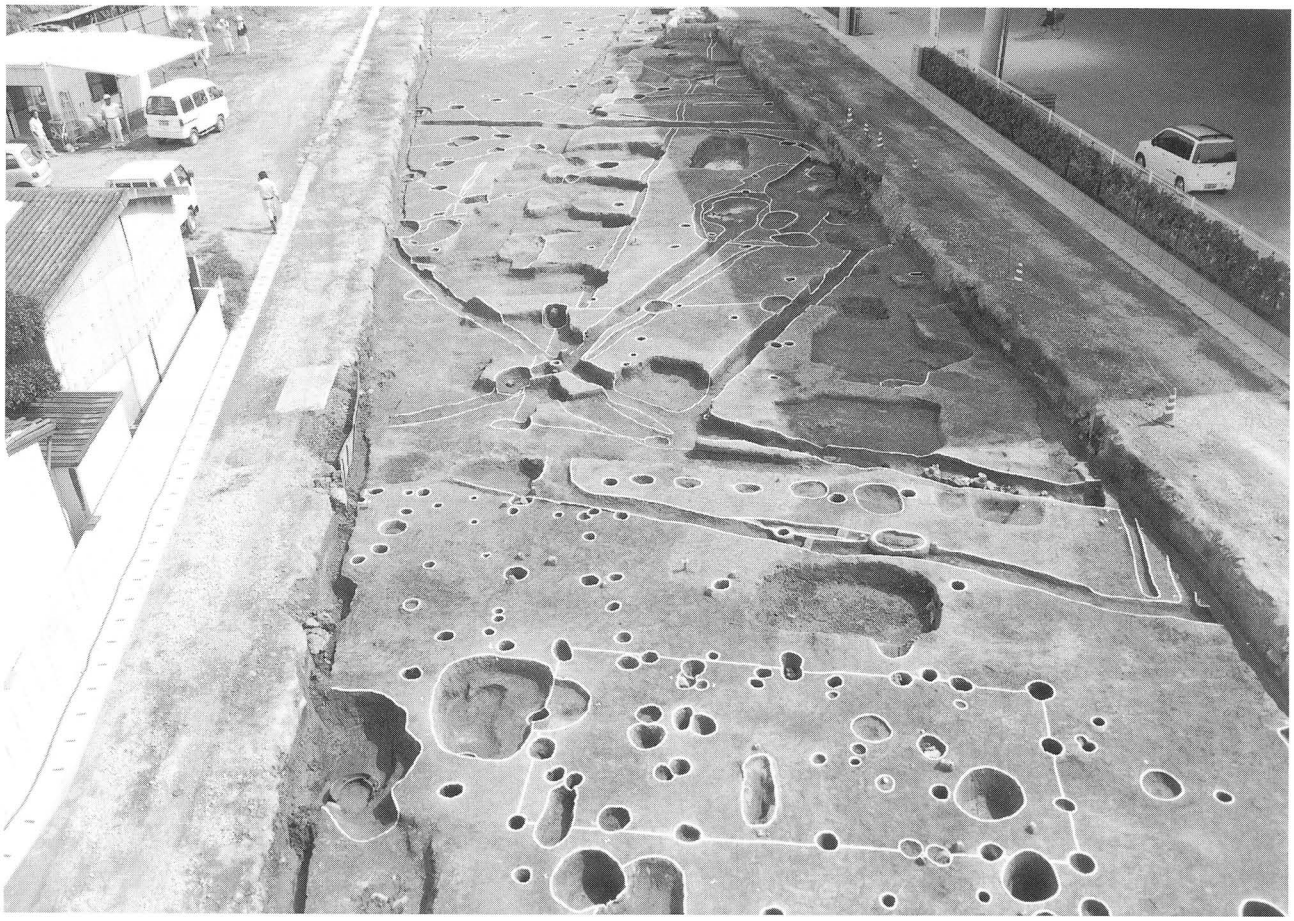
2　3工区完掘状況（南から）

図版4

1　4工区（Ⅰ期）完掘状況



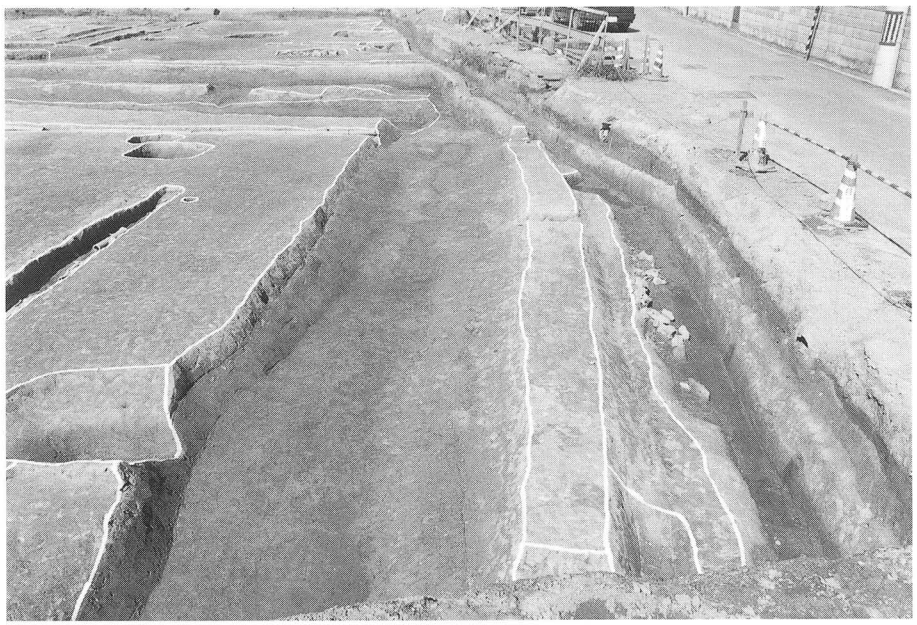

2　4工区（Ⅱ期）完掘状況



1　5工区完掘状況（北から）

2　5工区完掘状況（南から）

図版6



1　ＳＤ1001・1002

2　ＳＤ1003（Ⅰ期）

3　ＳＤ1003（Ⅱ期）

図版7

1　ＳＥ1001

2　ＳＥ1002

3　ＳＥ1003